
紅の装甲竜騎兵

鰐井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の装甲竜騎兵

【Zコード】

Z1505P

【作者名】

鯰井

【あらすじ】

天才少年パイロット山矢健太は突然、異世界に引き込まれる。新たな肉体を得た彼は竜にまたがり大空を駆ける。

1 始まり

その日、街の郊外のその地点から見上げた空は、真っ青に晴れ渡つていた。

本来ならやや濁つて見えるその空も、都心から流れてくる排気ガスが昨日の雨と冬の先触れかと思われる冷気によつて流されてしまつたせいか、その青色の鮮やかさだけが強調されて見えた。まさに「天高く馬肥ゆる秋」などといつ使い古された言葉を実感せざるを得ない、そんな空模様だった。

とは言え、その日の空は気象学で言つところのいわゆる快晴ではなかつた。なぜなら、ほんの2つ、3つではあつたが、白い綿雲が空の片隅から中央へと、時ならぬ寒風に吹かれて漂つっていたからである。

その場所の周囲には、あまり建物が建て込んでいない。電柱のたぐいも少ない。だから、ひとたび空を見上げれば、その視界には吸い込まれそうな青空と雄大な白い雲の見事な競演しか目に入らなくなる。

また、大きな道路からも離れているため、車のエンジン音や、気短な トラック運転手が鳴らすクラクションの音に聴覚を邪魔されることもなかつた。耳に聞こえてくるのは、少し離れたところにある住宅地からの、かすかな生活音だけだった。

いや、違う。

よく耳を澄ますと、「じくじく」だが、どこからか低い唸り声のよ

うな音が聞こえてくる。

しかも、だんだん大きくなつてゆく。

大きくなるにつれ、その音がどこから発されたものであるか、明瞭に知覚されるようになつた。それは、西の方向、しかもやや上方から聞こえてくる音であつた。

ふと西の空に矢をやると、先程まで白い綿雲が陣取つていた空を、一筋の赤い矢のようなものが切り裂いていた。

もちろん、本物の矢ではい。なぜならその赤い一筋は弓から放たれたかのようにまっすぐ的をめがけて飛んでいるわけではなく、むしろ、画家が青いキャンバスに赤い絵の具の付いた筆を走らせるがごとく、複雑な曲線を描いていたからである。

そう、それは、真つ赤な複葉機だつたのである。

「すう……」

言葉を発したのは、高校生と思しき制服姿の少女であつた。

「ほんと……」

相づちを打つたのは、やはり制服姿の少女だつた。

2人はぴつたりと肩を寄せ合つて西の空を見上げてゐる。まるで氣を許すとこの青空に吸い込まれてしまいそつたどでも言わんばかりである。もつとも、片方の少女は背がやや低く、もう片方はむしろ長身なので、肩を寄せ合つてゐると言つよつは肩と肘をくつつけ

合っていると言つべきかもしない。

そんな2人のつぶやきを聞いてますます得意になつたわけでもなからうが、赤い複葉機が描く模様は更に複雑さの度合いを増した。 橢円や8の字は単純な方だつた。少女たちは今まで、飛行機がV字型の軌跡を描くなど想像したこともなかつた。

「ああ、落ちちゃう！」

複葉機が機首を下に向けたまま地面すれすれまで落ちてきたとき、背が低い方の少女は悲鳴を上げ、口に手を当てたまま身をこわばらせてしまつた。背の高い方の少女はすでに喉さえ凍り付いてしまつていた。

と、その途端。

「大丈夫よ」

少女たちの背後から柔らかな女声が響いた。

すると、あたかもその声が合図であつたかのように、複葉機は機首を下に向けたままふわっと浮き上がつたかと思うと、カクンと機首を上に向け、今度は勢いよく、それこそ赤い弾丸のように一気に青空を駆け上がつていつたのだった。

「びっくつしたあ

背の低い少女は自分の感情を素直に言葉で表現した。他方、背の高い少女は手を胸で押さえながら控えめに安堵のため息をついた。

赤い複葉機が東の空の彼方に小さくなり、辺りに再び静かな秋のひとときが戻ってきたことを確認すると、少女たちは、背後にあるはずの、先ほど声の主を求めて振り返った。

そこに立っていたのは、これまた同じ制服を着た少女だった。

肩のあたりで切りそろえられた髪、日焼けした肌、恐らく体育系のクラブ活動をしているのだろう、見るからに活発そうである。

視線を向けられたといつたのに、その少女は依然として小麦色の顔を東の空のほうに向けっていた。

背の低い少女はそんな彼女の様子にはお構いなしに、あくまでも自分のペースで

「ほんと、す『』いんだね、山矢君つて」

と言つた。その大きな瞳は、喜び、楽しさ、興奮、好奇心といつた、すべてのポジティブな感情ではち切れんばかりにきらきら輝いていた。

一方、背の高い少女は

「ほんと。でもちよつとびつべつしたわ

と、口の中でつぶやくつべつした。背の低い少女とは違い、自分の心の中にある弾け出しそうな興奮をビックリ投げてよいか判じかねている様子だった。

そこでやつと小麦色の顔をした少女は視線を天空から地上へと降

るし、

「どうせ」

と軽い、心底嬉しそうに微笑んだ。

背の低い少女は即座に言葉を返した。

「うん。 あたし、山矢君のことと眞直した。 あんなずごっこことが出来るなんて」

背の高い方もそれに続いた。

「あたしも。 だって山矢君って、普段はあんまり田立たないでしょ。いつも教室の窓辺でぼーっと空を見上げてばかりで」

小麦色の顔をした少女はあくびといたずらっぽくそれに応えた。

「田立たない、とかじゃなくて、変な奴って、はつきり言つてくれてもいいんだよ」

背の高い方が「そんなんつもつは」と軽く返す前に、背の低い方が言葉を挟んだ。

「ははは、変な奴か。 でもほんとに変な奴だと思つてた」

「のはは、あきらめたものと同じ方に背の高い少女はいつもはいせりあれている。

しかし、小麦色の顔の少女は、むしろ我が意を得たりといった様

子で

「やつなんだよねえ。なんか不得体の知れないやつなんだよね」

と応えた。「それに顔がとりたてていいわけでもないし、背もあり高くないし」

「なのに」背の高い少女はおしゃるおしゃる口を挟んだ。「なのに『あの人』なの?」

普段口数の少ないこの少女にベースを合わせたつもりなのか、小麦色の顔の少女は少し間をおいてから無言のままゆつくつとうなづいた。

「あ、帰ってきたよ」背の低い少女はそのままついつて東の空を指さした。見ると、やや茜色を帯びてきた陽の光をその機体に反射させながら、赤い複葉機が軽やかに、優雅に舞い降りてきた。

「こい」

小麦色の顔の少女はそう言つて一人の友を促しながら、すでに駆けだしていた。

その間にも複葉機は見る見る高度を下げ、やがて柔らかくなれるよつに滑走路へと滑り込んだ。

小麦色の顔の少女の走るペースは、普段のクラブ活動で鍛えているせいか、はたまた別の理由からか、小走りと言つてはいささか速すぎた。

「ああん、美玖、速い。ちょっと待つてよ」

彼女の2人の友が息も絶え絶えに不平をこぼしているのが、彼女の耳にはもう届かないらしい。彼女の関心は駐機場に入つて行く赤い飛行機を目で追うことのみ注がれている。活発な彼女と、運動がそれほど得意でない2人との間の距離は開く一方だつた。

数分後に追いつくことが出来たのは、彼女が友の要求を聞き入れたからではなく、何か他の理由でぱつたりと足を止めたからである。そこは駐機場のど真ん中だつた。

駐機場と言つても、もちろん旅客機の飛び立つ大空港のそれとは違う。この飛行場にあるのは大きくてもせいぜい個人所有の小型ジエット機にすぎない。それも頻繁に出入りするわけではない。辺りは閑散としていて、プロペラ機が1、2機、エンジン音を響かせてはいるが、案外静かなものだ。

美玖と呼ばれた小麦色の顔の少女が足を止めたのは、先ほど舞い降りた赤い複葉機から30メートルほど離れた場所だつた。

「美玖つたら」

やつと追いついた2人の友は改めて不平をこぼそうとした。しかしすぐにやめた。相手にその不平を受け入れるだけの余地がないことに気づいたからである。そう、美玖という少女の視線は複葉機にと言つよりも複葉機の操縦席横の扉を開けて出てこようとする人物に 釘付けとなつていたのである。

それは、小汚い野球帽をつばを後ろにしてかぶり、ゴーグルを目

ではなく額にかけ、真っ白なTシャツの上に古ぼけた革のジャケットを羽織り、黄土色のゆつたりしたズボンをはいた少年だった。

彼は地面に降り立つや否や周りの様子には目もくれず機体の前に回り、慣れた様子で今し方停止したばかりのプロペラをいじり始めた。

「山矢君」

美玖は声をかけた。そして、山矢と呼ばれたその少年がちらつと自分のほうを見、またすぐに視線をプロペラのほうに戻したのを確認してから、ゆっくりと複葉機のほうへ歩みだした。

美玖の2人の友人には、その様子がまるでビデオのスロー再生のように映った。次の瞬間に何が起こるのか予想がつかなかつたからである。

美玖はどんどん進んでゆき、山矢少年のほんの1メートル手前でやつと足を止めた。

しかし山矢の視線は完全にプロペラに固定されていよいよやつだつた。

「ちいーっす」少し腰をかがめて山矢の顔を覗き込むよつこしながら美玖は言った。「調子どう?」

山矢はそこで再び視線を美玖に向ける

「ああ、いつもどおりだ」

と応えた。

「そつか

美玖はとても嬉しそうにそう言つた。

「ああ

山矢もわざかに口元をほこりぱせながらそう応えた。

その瞬間、美玖の友人たちの心のVTRは、スロー再生から通常の再生へと変わった。

「今日ね、友達連れてきたんだ」

美玖はそう言葉を続け、友人たちのほうに視線をよこした。

「同じクラスの川名理恵と本多智美。知つてるでしょ

すると山矢もつられて視線を向けてきた。ちょっと怪訝そうな顔をしている。

「山矢君、こんにちはーっ」背の低い少女は待つてましたとばかりに複葉機のほうへ駆けだした。

一方背の高い方は小さな声で「こんにちは……」と呟きながら、ためらいがちに飛行機のほうに近づいた。

山矢は一人の挨拶に対しうきうきほほに

「おう

と応え、またすぐに機械いじりに戻った。

アクロバット飛行による緊張の余韻なのか、それとも、先程まで熱く燃えていたエンジンのすぐそばにいるせいか、山矢の額には大粒の汗が光っていた。一心不乱にエンジンを見つめるその眼差しは、普段学校では決して見ることのできないものだった。

しかし、美玖の友人たちをもつと驚かせたのは、山矢の眼差しよりも、むしろそんな山矢を見つめる美玖の眼差しだった。

まるで、持てるすべての感情を、想つ相手にぶつけようとしているかのような……。

彼女たちが機体のそばまでやつてくると、山矢は機械を見つめたまま

「相良、おまえ、部活はいいのか？」

と美玖に尋ねた。

美玖はちょっとばつが悪そつと

「うん……。今日はサボリ

と答えた。

「出なくていいのかよ」

「いい……」とない

「じゃあ出ひよ

「うん……」

さつきから何か言いたくてうずうずしていた背の低い方の友人は、じいじとばかり口を挟んだ。

「ねえ、山矢君、美玖が山矢君の飛行機の練習を見に来たら迷惑なの？」

背の高い方の友人は、あまりにも直接的なその言い方に仰天し小声で「ちょっと、理恵つたら」と囁きながら彼女の制服の袖を引っ張った。

しかし、当の本人はおろか、山矢も美玖もさほど気にしていない様子だった。美玖など逆に、いいことを訊いてくれたと言わんばかりの表情だった。

山矢は答えた。「いや俺のほうは別に構わないんだけどさ、相良が部活続けられなくなつたらやばいじゃないか」

「なるほどね」背の低い少女の応えは意外にも素つ気なかつた。しかしその表情が何かに納得したことを物語つていた。

そこで山矢は機械いじりの手を止め、やにわに歩き出した。「部品が足りない。取つてくる」

彼の姿は、50メートルほど離れたところにある倉庫の中に消えていった。

その途端、背の低い少女は美玖に向かって

「許可します」

と言つた。

美玖は当然「何を?」といぶかつた。

「美玖が山矢君に告白することを、です」

友人はわざとくそまじめな表情を作つてそつ答えた。

美玖は呆れたように肩をすくめて

「理恵、あんたいつからあたしの保護者になったの」と訊いた。

「小学生の頃、あなたと同じクラスになつたあのときからです」

「はいはい、それはどうもありがとう」

「ではもう一人の保護者の許可もいただきましょう」

「はあ?」

背の低い理恵は、背の高い智美を見上げ発言を促した。

「どうですか、保護者その2」

智美はいきなり「メントを求められ、狼狽した。

「え？ いえ、そんな、許可とかそんなのじゃなくて、その……、ただ、美玖が好きな人がどんな人なのか、ちょっと見てみようと思つただけで、別にそんな……」

「そういうこと」美玖はいかにも納得したと言いたげにうんうんとうなずいて見せた。「それで突然、山矢君の飛行機の練習を一緒に見に来たいなんて言いだしたわけね」

「そうです」理恵はまだ保護者口調だった。「それでたつたいま許可を『えてもよい』という決定を下しました」

「はいはいありがたく頂戴いたします」美玖はおどけて、何かを受け取り挿むような仕草をして見せた。

「でも……」智美は申し訳なさそうに、大きな体を縮こめながら言った。「山矢君がどんな人かはわかつた。その……ちゃんとした人だつて。だから……あたしも許可を『えてもいいかな……』

美玖はちょっと嬉しくなつた。口調は依然として「わかりました、保護者様、ありがたく頂戴つかまつります」などとおどけていたが、自分のことを心配してくれる友人たちに感謝したい気持ちで一杯だつた。

「山矢君ね」美玖は語り始めた。「実は帰国子女なんだ。飛行機の操縦もアメリカで覚えたんだつて。山矢君自身はずつとアメリカに住みたかつたらしいんだけど、親に反対されたみたい」

「じゃあ、あんまり喋らないのは……」理恵が美玖を見上げた。

「うん、小さい頃は日本に住んでいたし両親も日本人だから発音は全然普通なんだけど、単語があんまりわからなくて、からかわれたことがあるらしいくて」

「そりだつたの……」智美はまるで我がことを悲しむかのような表情をした。

そこへ、山矢が戻ってきた。山矢は3人がいままで何か真剣な話をしていたらしいことに気づいているふうではあったが、敢えてそれを無視して再びエンジンいじりに取りかかった。

智美は思つた。山矢は決して鈍感ではない。ただ、いま美玖が語つたような事情でぶつきらぼうになつてしまつただけだ。さつきだつて美玖の部活のことを心配してくれたではないか。

一方、理恵は美玖がなさなければならぬある重要な仕事を思い出した。

「ねえ、美玖、あれ、渡さないと」

理恵に肘をこづかれて、美玖もその用件を思い出した。

その用件。それは、その日の昼休み、気の弱い家庭科教師を丸め込んで（脅して）半ば強引に調理実習室を借り切り、こつそり持ち込んであつた食材で作り上げた手作り弁当だった。山矢がいつも飛行機の練習の後、ファーストフードやコンビニのサンドイッチを頬張っているのを見て思い立つた作戦だった。

「そ、そうね、渡さなきや」

美玖はめずらしく緊張氣味だった。料理の腕にそれほど自身があるほつではなかつたからである。

しかし彼女はうじうじとした行動を好まない。何事に付けてもやるときは思い切つてやつてしまつ。それが彼女の持ち味なのである。美玖は覚悟を決め、弁当箱の入つた巾着袋を山矢の目の前に差しだそうとした。

といふがその瞬間。

「やまやくうううん

「だからか、ねばねばと糸を引きそつなほど粘つこべ甘つたるい女の声がした。

美玖とその友人たちは、声の出所を探るべく首をぐるりと一周させた。しかしこなくとも背後には誰の姿も見あたらなかつた。

発見できたのは、首を体と共に360°回転させ、元の向きに戻したときだつた。驚いたことに、いつの間にか美玖と山矢の間の2メートルほどの空間に一人の女が割り込んでいたのである。

美玖たちはあまりの唐突さに、文字通り呆気にとられた。

女は確かに美玖たちと同じ制服を着ている。しかし彼女のことをここで「少女」と表現するのはいささか無理がある。なぜならその制服が描き出すボディーラインがあまりにも成熟したものだからで

ある。いや体だけではない。女の顔立ち自体が、少し日本人離れしているせいもあってか、艶っぽい、大人の色香を醸し出していたのである。

しかし美玖たちを驚かせたのはその登場の仕方や容姿だけではなかった。

女はあるうことが、馴れ馴れしく山矢の腕を取つてその豊満な胸に包み込み、あげくその唇が相手のそれに触れてしまいそうなほど、顔を接近させたのだつた。

「ハーサイ、山矢君。お元気？」

女のなまめかしい唇から甘つたるい吐息とともにそんな言葉が漏れた。

山矢はそれに対し、無表情のまま「おう」と答えただけだつた。

「山矢君たら、相変わらず素つ氣ないんだから」女は不満げだつた。
「ねえ、『ケンタ』つて呼んじゃだめ? 同じ帰国子女同士なんだから、別に構わないでしょ。そしたらもつと親しくなれると思わない?」

「やめろよ」山矢はあくまでもクールだつた。「苗字でいい」

美玖の友人たちによつやく初期の混乱から立ち直りつつあつた。冷静になつた頭でよく考えてみると、あの女には見覚えがあつた。確か彼女はスペイン人だつたかイタリア人だつたかのハーフで、今年の4月に美玖たちの高校へ転校してきたばかりの2年生だつたはず。一応、美玖たちの1年先輩ということになる。

「あの」理恵は、智美よりもさうに10センチ背の高いその女を見上げながら訊いた。「山矢君のお知り合いですか」

女は大袈裟に驚いて見せた。いま初めて美玖たちの存在に気づいた、と言わんばかりに。「山矢君、彼女たちは誰?」

「同じクラスの女子たちだ」

「ふーん」

女は彼女たちを值踏みするような目つきで、美玖、理恵、智美の順に眺めた。そして最後にもう一度美玖の顔を睨み付け、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「わたしはハ木沢ソーニャ。山矢君の最も親しい友達。そしてたぶん……恋人候補」

さつきからずっと固まつたままだつた美玖が体をぴくりとさせた。

「ち、ちがうだろ」さすがの山矢も少し狼狽したようだつた。

ソーニャと名乗つた女は「うふふ」と妖艶な笑みをこぼした。

美玖たち3人はまず理恵がはつきりとした口調で

「川名理恵です」

と名乗り、次に智美が消え入りそうな声で

「本多智美です」と続き、最後に美玖が、彼女にしては珍しく呟く
よつた声で

「相良……美玖です……」

と自己紹介した。

「よろしくね」ソーニャは感情のこもらない口調でそう答えた。も
はや彼女の関心は美玖たちにはないらしい。「ねえ、山矢君」

「なんだ」

ソーニャは手にした小さなバッグの中から何かを取り出し「これ」と言つて山矢に手渡した。「プレゼント」

山矢はそれを手でつまんで目の前に垂らした。それは銀色の鎖に
ぶら下げられた紫色の小さなペンダントだった。

「あなたにあげる

「俺に?」

「もうすぐアクロバット飛行競技会があるでしょ。この紫色の石は
値段は高くないんだけど、わたしの生まれ故郷では幸運と安全のお
守りとして大事にされているものなの。山矢君の実力なら史上最新
少優勝は間違いない。でも万が一つてことがあるから」

山矢は瞬時、黙り込んだ。そして、ペンダントとソーニャの瞳を見比べた。きっとそれは時間にすれば1秒にも満たなかつただろう。しかし、美玖たちにしてみればそれは永遠にも等しい長さだった。

なぜなら山矢が次にとる行動が予想できなかつたから いや、本当は、予想はできていたのだが、その予想通りのことが現実に起つて欲しくないという願望があつたから だつた。

「わかつた。もつとくよ」山矢は無情にも、それを受け取つてしまつた。

理恵の傍らで再び美玖の体がぴくりと動いた。

「あ、あの……、山矢君……」美玖はなんとか声を絞り出した。 「あたしたちそろそろ帰るね……」

山矢は視線を久々に美玖のほうに向けた。

「そつか……」

山矢の反応は相変わらずぶっきらぼうだつた。しかし理恵と智美にはその口調が、いつも通りの素つ気なさにも思えたし、いつもとは違う、何か余韻めいたものを残しているようにも思えた。

「じゃね」美玖はくるりと向きを変え、来たときと同じ勢いで駆けだした。

理恵と智美はその場で一礼をしてから美玖の後を追いかけた。

2人が次に美玖に追いつくことができたのは飛行場にほど近いバス停のベンチ前だつた。1分ぐらい前に到着していたはずの美玖は、すでにベンチに腰掛け、弁当箱入りの巾着袋を手に提げたまま、がっくりと肩をうなだれていた。

そんな彼女を前にして、友人たちはかけるべき言葉を見つけあぐねた。

「ふふつ」突然、美玖が小さな笑い声をあげた。「あたし、何やつてんだる」

「美玖……」

「なんか、バカみたい。一人ではしゃぎまくつて。山矢君はあたしにアクロバット飛行競技会のこと教えてくれてなかつた。でもあのソーニャつて女は知つてた。あたしは山矢君の練習を見に来るようになつてからまだ2ヶ月。きっとあの女はもつとずつと前から山矢君と親しかつたんだよ」

「そんなことわからないじゃない」理恵が言つた。

「だつてあんなに親しそうだつたし」

「彼女は外国育ちなのだから、きっとあれが普通なのよ」智美が反論した。

「いくら外国育ちでもあれは特別だよ。バカみたい、あたしバカみたい。理恵や智美にも迷惑をかけてお弁当作るの手伝わせたりして、ホント、バカみたい」

「つうん、それは違うわ」智美が珍しくきつぱりと言つた。「迷惑なんかじゃない。あたしたちがあなたの世話を焼いたのはそうすることが楽しかつたから。うまく言えないけど、あたしたちはあなたと喜びや楽しみを共有したかったの。決して迷惑なんかじゃないわ」

「でも」

「智美の言つとおりよ」理恵はいつも通りはつきりとものを言った。
「あんたにバカなところがあるとすれば、それは現実を見てないと
こりよ。山矢君、あのソーニャって女に抱きつかれて喜んでた？恋
人候補つて言られて肯定した？美玖、あんたは勝手な想像を膨らま
せてうじうじと思い悩むようタイプじゃないでしょ？」「

「理恵、智美……」美玖は顔を上げ二人の友の目を交互に見つめた。

「きつと大丈夫よ」智美が応えた。

「今日はお弁当渡し損ねたけど、次は必ず、ね」理恵もそう励ました。

「うん……、わかった」

美玖は自嘲に満ちた作り笑いを捨て、やつと本来の晴れやかな笑
顔を取り戻した。

その後、理恵が学校でそれとなく探し出したところによれば、実は山矢はアクロバット飛行競技会のことを美玖にもソーニャにも誰にも言わんいつもりだったのに、山矢が「一チと話すのをソーニャが立ち聞きして知つてしまつたらしい、とのことだった。

もちろん美玖は山矢に、競技会に応援に行くことを申し出た。山

矢は、こちらも当然のごとく難色を示した。競技会の会場が遠くて交通の便が悪いことがその理由だつた。しかし、美玖は持ち前の積極性でなんとか山矢から同意を取り付けた。ただそれと引き替えに美玖が部活をさぼつて飛行場へ練習を見に来るのを控えるよう約束させられた。その結果、先日失敗に終わった弁当作戦に再チャレンジする機会が、競技会の当日まで訪れないこととなつてしまつた。

それから10日後の日曜日、遂にその日が来た。

美玖は朝3時に起きて弁当の支度にかかつた。某県にある競技会会場までは電車バスを乗り継いで2時間半ほどかかる。その上、日本競技会に出るのが初めてである山矢は、新人扱いのため、演技の順番が早いのである。もつともそのおかげで、演技が終わつた後にお昼ご飯としてゆっくり弁当を食べてもいいことができるのだが。

5時に最寄りの駅前で理恵、智美と待ち合わせていつもの路線に乗る。普段はお目にかかることのできない閑散とした都心を抜けるころ、ようやく陽が昇り始めた。某県方面へ向かう電車は対面式クロスシートだつたため美玖と理恵は遠慮なく体を伸ばして居眠りをした。智美も眠くて仕方がなかつたが乗り過ごすことを心配して結局、一睡もしなかつた。

某駅から乗り継いだバスの中で、智美は持参してきた雑誌を拡げて美玖に見せた。そこには『史上最年少で優勝を狙う天才パイロット山矢健太』という記事が小さく掲載されていた。この前ソーニヤが言つていた「山矢君なら優勝間違いなし」という言葉は、決して大袈裟ではなかつたのである。

そのうち美玖と理恵がうつらうつらし始めた。心配性の智美は乗り過ごしはしないかとまたやきもきした。しかしそれは杞憂だつた。

「見て」

理恵が窓の外を指さした。

3人で山矢の練習を見に行つたあの日と同様、いやあの日以上に晴れ渡つている真つ青な空に、セスナ機が一機、ぐるりと輪を描いたのだった。

バスを降りた後も美玖たちは会場までの道のりを迷うこととなかつた。青空の中で優雅に舞踊する飛行機を目指して歩けばよかつたからである。

彼女たちは一般の客席を通り過ぎ、関係者以外立入禁止という看板の前で睨みをきかせている係員に、山矢に昨日渡されていた通行証を見せ、奥へと進んだ。

山矢たちが陣取つている場所はすぐにわかつた。観客にアピールするために派手に塗装された無数の飛行機の群の中にあっても、あの真つ赤な複葉機はひときわ目立つ存在だった。

「山矢君」美玖は機体のそばに立つ山矢の背中に声をかけた。

山矢はすぐに振り向き「おう」と、いつも通りぶっきらぼうな相づちを返してきた。

美玖は彼のそばまで歩み寄り

「頑張つてね」

と言つた。

「おひ

「あの、山矢君」美玖は今度は一瞬もためらわなかつた。「これ、お弁当。演技が終るころちょうどお昼でしょ」

「ああ」山矢は、美玖が差し出した巾着袋をまじまじと見つめた。

「食べてね」

理恵と智美はそのとき初めて見た。あの山矢健太が本当に嬉しそうに微笑むところを。

「ああ、わかつた」

瞬間、山矢と美玖の存在するその空間が、暖かい色で包まれた。理恵と智美にはそう感じられた。それは本当に心地よい空間だつた。本来第3者にすぎない彼女たちにとつてさえそうなのである。美玖本人の感じている喜びが一体どのようなものなのか、彼女たちには想像もつかなかつた。

しかし次の瞬間、その空間の調和は、突然流れ込んできたドギついピンク色によつて乱されてしまつた。

「やまやくうううん

ソーニヤだつた。ド派手なピンク色の超ミニワンピースを着たソーニヤが、その大きな体からは信じられないような敏捷さで、山矢と美玖の間にするつと割り込んだのである。

「ハロー、山矢君」

「お、おう」山矢もびっくりした様子だった。

「頑張つてね。絶対優勝してね」ソーニャは「の前と同様、山矢の腕を取つて胸の谷間に押しつけ、彼の顔から10センチほどのところにまでその唇を近づけて話した。

「ああ、頑張る」

「ねえ、わたしのあげたお守り、持つてる」

「あ？あの紫色の石のついたペンドントか？たぶんどこにあると思つ」

「お願ひ、演技中は必ず首に掛けて。大切なお守りだから

「ああ」

「絶対よ」

「わかったよ」

山矢とソーニャが仲むつまじく話すさまを他人が見れば、まず間違いなく恋人同士だと思つだらう。理恵と智美は心配になつて、恐る恐る美玖のほうに目をやつた。

ところが美玖は、堂々と胸を張つてソーニャを睨み付けていた。

□元に不敵な笑みさえ浮かべている。

理恵と智美は取り敢えず安心した。ただ、ここでもう一つ別の心配事が生じた。美玖のあの挑戦的な視線にソーニャがどう反応するか、ということである。

ソーニャも美玖の視線に気づいた。まさかこんなところで修羅場を演じることになるのだろうか。智美の心配症はその度を極めた。

ソーニャはしかし、その視線を軽い微笑みでいなし、山矢に「じゃあね」と声を掛けてから、出現時と同じ敏捷さで、するりとその場を去つていったのだった。

後に残された4人は呆然とその背中を見送った。

彼らがようやく我に返つたのは「おい健太」といつ、男の人の声がしたときだった。

「「」一チが呼んでる」山矢が言った。「俺、そろそろ準備しなきや」

「うん、わかった」美玖が応えた。「頑張つてね」

「ああ」

「じゃあ、またあとで」美玖はきびすを返そつとした。

「あ、相良」山矢は唐突に美玖を呼び止めた。

美玖はちょっとびっくりした。「何？」

「俺、演技が終わったらお前に言いたいことがある。ずっと前から

言いたいと思っていたことなんだ」いつも伏し目がちに話す山矢が珍しく美玖の目を見つめていた。

美玖は最上の微笑みを返した。「うん

「じゃあな」山矢はくるりと背を向け、複葉機のほうへ歩いていった。

「さて」美玖は友のほうを振り返った。「あたしたちは観客席のほうへ移動しよ」

「うん」理恵と智美はうなずいた。

いよいよ山矢の演技の順番が回ってきた。

「ヒントリーナンバー 3番。山矢健太」

DJふうの場内アナウンスがそう告げると、それほどたくさんはない観客たちの間から控えめなどよめきがわき起じた。山矢健太の名は結構有名らしい。

「山矢君」

美玖は祈るように独り言ひ、弁当箱入りの巾着袋を握りしめた。そして少し離れたところにある飛行場からあの赤い複葉機が飛んでくるのをじっと待った。

ところがどういう訳か、いつまで経っても山矢の機体は現れる気配を見せなかつたのである。

その日、アヴー村近郊のその地点から見上げた空は、真っ青に晴れ渡っていた。

いつもはやや霞がかった見えるその空も、近隣の山々から流れてくる湿気が、真冬の再来かと思われる冷氣によつて流されてしまつたせいか、その青色の鮮やかさだけが強調されて見えた。まさに「春爛漫」などといつて古された言葉を実感せざるを得ない、そんな空模様だった。

とは言え、その日の空は魔道学で言つところのいわゆる快晴ではなかつた。なぜなら、ほんの2つ、3つではあつたが、白い綿雲が空の片隅から中央へと、時ならぬ寒風に吹かれて漂つっていたからである。

その場所の周囲には、あまり樹木が立て込んでいない。立つていたとしてもまだほとんど葉を付けていない。だからひとたび空を見上げれば、その視界には、吸い込まれそうな青空と、雄大な白い雲の見事な競演しか目に入らなくなる。

また、川のせせらぎからも離れているため、水が岩の間を流れ落ちる音や、村の女たちが洗濯がてら発する陽気な話し声に聽覚を邪魔されることもなかつた。耳に聞こえてくるのは、カツコーの巣で小鳥たちがたてる、かすかなさえずり声だけだつた。

いや、違う。

よく耳を澄ますと、「じくじく」だが、どこからか低い唸り声のよ

うな音が聞こえてくる。

しかも、だんだん大きくなつてゆく。

大きくなるにつれ、その音がどこから発されたものであるか、明瞭に知覚されるようになつた。それは、西の方向、しかもやや上方から聞こえてくる音であつた。

ふと西の空に田をやると、先程まで白い綿雲が陣取つていた空を、一筋の赤い矢のようなものが切り裂いていた。

もちろん、本物の矢ではなかつた。なぜならその赤い一筋は弓から放たれたかのようにまっすぐ的をめがけて飛んでいるわけではなく、むしろ、親鳥から飛び方を教わつたばかりの小鳥のように、ふらふらと危なつかしい軌跡を描いていたからである。

「あれは……？」

言葉を発したのは、白魔道士と思しき少女だつた。

「竜騎兵……」

問いに答えたのは、少女自身だつた。と直つより、その場には彼女一人しかいなかつた。

「こんな田舎に竜騎兵が現れるなんて……珍しいわね……」彼女は独り言を続けた。「ここもそのうち戦場になるのかしら……」

やがてその危なつかしい赤い一筋は、ぐにやりとぎこちなく向きを変え、少女の立つている場所へ向かつて降下を始めた。

「」ちへ来る……。アヴー村に用があるのかじり

その途端。

「あつ」

その赤い物体から黒い煙が上がった。よく見ると、その物体は頭と思しき部分を下に向けていないばかりか、むけやけつけに回転しながら高度を下げつつあったのである。

「降下じゃない。墜落しているんだわ！」

さう叫ぶや否や、彼女は脱兎の如く走り出した。

彼女の推測によれば、その物体はおそらく村の向側、マキナスの森の辺りに落ちるはずだった。

彼女は一目散に村へ駆け戻った。

村ではすでに、異常事態を察知した村人たちが多数、広場や街路に出て西の方向を仰ぎ見ていた。

「お父さん！」

少女は、村人の群の中に自分の父親を見つけ、そう叫んだ。

「ルーミアーリー」父親はさう言つて少女に一警をくれたが、すぐに赤い物体のほうへ目を戻した。

ルーミアと呼ばれた少女は「竜騎兵の乗った竜が墜落するわ」と言い残して駆け足のまま父のそばを通過した。

「わかつた、お父さんもすぐ行く。おい、ルーミア、待て、危ないぞ……」ルーミアが足を止めなかつたため、父親の声は背後でフロードアウトしていった。

彼女が反対側の村の出口を出、マキナスの森の入口に達したとき、地響きと共にどーんと大きな音がした。

「泉の近くに落ちたみたいだわ」

アヴ一村の村民にとつて、マキナスの森は食糧の供給源であり、憩いの場であり、子供の遊び場でもあつた。自分の家の裏庭と同じくらいマキナスの森を知つていた。ルーミアの足は、ルーミア自身が知覚するよりも前に泉への最短進路をとつていた。

しかし彼女は、泉があつたはずの場所に彼女の知つてゐる光景を発見することができなかつた。

「すごい火……」

彼女の足は、山のようになに巨大な炎の前で、すくんで動かなくなつてしまつた。

火の周りでは、彼女に先んじていた勇氣ある若者たちが、すでに消防活動を開始していた。ある者は人手の不足を、ある者は泉の水を汲み出す桶の不足を、ある者は森の樹木へ引火することの危険性を叫びながら、まさに決死の覚悟で炎と格闘していた。

そこへ、数人の男たちと共にルーミアの父親が追いついてきた。

「ルーミアー！」父は、身をこわばらせているルーミアの肩を抱き、火から遠ざけようとした。「危ないからルーミアは村へ戻れ」

「お父さん」

「あの火は油が燃えている火だ。きっと敵の城に火をかけるつもりで油をたくさん積んでいたのだろう」

「油？」

「そうだ。油の中には爆発する種類のものもある。そうなつたら辺り一帯は火の海だ。早く戻れ、ルーミア！」

そう言つてはいるうちにもルーミアの父は2歩3歩とルーミアを火から遠ざけていた。

そのときルーミアは見た。炎の中で人の形をした物が、ばさっと崩れ落ちるのを。

「お父さん、人！」

父は炎には一警もくれず、更に5歩6歩と我が娘を後退させた。

「あの竜騎兵には可哀想だがあれだけ炎が強くては骨の髓まで黒焦げになるだらう。もはやおまえが『再生の術』を用いたとしても助からん」

突然、ルーミアは

「だめ！」

と叫んだ。

「あたしが助ける！」

父は文字通りびっくり仰天してしまった。「何を言い出すんだ、ルーミア。爆発するかもしないんだぞ。火の海になるんだぞ。向こうを助けるとか言う前にこっちが助からないかもしないんだぞ」

ルーミアは激しく首を振った。「あたし、お母さんの命を病氣から救つてあげることができなかつた。ずっと悩んでいたの。これじや何のために白魔道士になつたのかわからんいつて。お願ひ、お父さん、助けに行かせて。あたしこれ以上人が死ぬのを見たくない」

「ルーミア……」父親はこれ以上止めても無駄であることを悟つた。「わかつた、ルーミア。一緒に火を消そつ。1分でも1秒でも早く火を消せば、残つた魂のかけらからあの竜騎兵の肉体を再生できるかもしれない」

「ありがとう、お父さん」ルーミアは父親の腕をふりほどき燃えさかる炎へ向かつて駆けだしていった。

父もそのあとに続いた。

魔法が使える彼ら父娘の仕事は、念動力で複数の桶をいつぺんに操つて泉から水をすくい、その一部を若者が腕力で運ぶのに委ね、残りをそのまま念動力で炎にぶちまけることだつた。

父は思つた。我が娘はいつの間にこんなに責任感の強い人間にな

つたのだろう。ついこの間まで、人見知りする、気の弱い小さな子供にすぎないとと思っていたのに。それに引き替え、人の命を救うという本来の仕事を放棄して真っ先に逃げようとした自分は白魔道士失格だ。もし万が一のことがあつたらこの命に代えても娘のことを守つてやう、と。

その後数時間に渡つて、アグニの村民たちは炎との死闘を繰り広げた。

夢には2種類ある。

一つは現実に起つたことを回想する夢、ないしはりふれた日常の光景を見る夢。

もう一つは全く起つりそうにない、非現実的な光景を映す夢である。

山矢健太がそのとき見ていた夢は前者、それも現実に起つたことをVTRのように忠実に再生する夢であった。

夢の中で、彼は愛機である真っ赤な複葉機の操縦席に座っていた。目の前にはコーキの顔、次に誰かが出発の合図をする光景が映し出された。

そうだ。俺はいまアクロバット飛行競技会の演技を始めるところなんだ

彼がペダルを踏み操縦桿を引くと、彼の愛機は軽やかに大空へ舞い上がった。

機体のコンディションは完璧、体調も万全だつた。程良い緊張感が集中力を高める役割を果たしていた。

そしてその精神の真ん中には闘志が、静かに激しく燃えていた。

更にその奥、彼の本能が存在する部分に、もっと根源的な、別の感情が陣取つていた。もちろんその感情が集中力や闘志を邪魔することはなかつた。むしろ彼の心身にエネルギーを注ぎ込んでいるようすら感じられた。

彼は不思議だつた。今までこんな気分になつたことはなかつた。と言つより、このような感情は肉体的にも精神的にも妨げにしかならぬいだらうと想像していた。

ふと、彼は胸に何かがぶら下がつてゐることに気づいた。

ペンドント

そう、複葉機に乗る前に誰かに言われて首に掛けたのだつた。誰に言われたのか今は思い出せない。

彼は演技のための十分な高度を確保するために愛機をどんどん上昇させていった。もちろん上昇と言つても、地上にいる観客や審査員が演技を見られる高度までである。その程度の高さでは、空気が薄くなつて息苦しくなるなどといつともないはずである。

なのにどういふ訳か、彼は息苦しさを覚えていた。

「どうしてこんなに息苦しいのだろう

すると彼の心の奥底から、聞き覚えのあるようないょうな声が囁きかけた。

『ペンダントを外して』

「どうか、息苦しさの原因はこのペンダントか　彼は声の命であるまま、ペンダントを右手でひとつ掴み、首から取り去った。

と、突然。

右手の中でペンダントが紫色の光を強烈に放ち始めた。

なんだこれは？！

次の瞬間、彼の目の前の青空が裂け、どす黒い割れ目が現れた。

彼は身の危険を感じ、その得体の知れない割れ目を避けるため操縦桿を右へ倒そうとした。

操縦桿が動かない！

彼の愛機はすでに前方に進むことをやめていた。右とも左とも上とも下ともわからない方向へ、とてもなく強大な力で引っ張られていたのである。

ぐわああああああああ

割れ目から噴出した真っ黒いもやのような物が彼の体を包み込んだ。やがて彼の肉体から徐々に感覚が失われていった。

もやのような物は、次に彼の精神を浸食し始めた。だんだん意識が遠のいて行く。

彼の脳裏からすべての感覚とすべての記憶とすべての感情が消えつつあった。

意識を完全に失う直前、精神の中に最後に残されていたものが実体となつて見えた。それは見覚えのある顔だった。

相良……美玖……

そこで彼の意識はすっぽりと黒いもやの中に埋没してしまった。

山矢が意識を取り戻したとき、彼はまだ暗闇の中にいた。

一瞬、まだあの黒いもやの中にいるのかと思い、叫びだしそうになつた。彼をパニックに陥る一歩手前で引き戻したのは、遠くから聞こえてくる、朗らかなカツコーの鳴き声だった。

聴覚によって、取り敢えず自分があの忌まわしい黒いもやの中にいるわけではないことを理解すると、彼の関心は視覚のほうへ移つた。

しかし、目を覆っていると思われる何かを取り扱うために本能的に手を動かそうとした瞬間、彼の精神は新たなパニックを引き起こしそうになった。

手が動かない

手だけではなかった。腕も肩も、膝も足も、首も脣も、いやうめき声を上げるために喉や舌を動かすことも息を送り込むこともできなかつたのである。

彼は心中で声にならない叫び声をあげてわめいた。しかし、心をどんなに大きく揺さぶつてみたところで、彼の肉体は1ミリの100分の1すら動かなかつた。ショックのあまり彼の精神は崩壊寸前かと思われるところまで興奮の高みに上り詰めた。

ふと、そのとき。

彼は、鈴を鳴らしたような優しい柔らかい音色を聞いた。

最初それが何の音なのかわからなかつた。やがて落ち着きを取り戻すと、それがどうやら人の声　恐らくは若い女の声　だと理解できるようになつた。

次に女が声を発したとき、山矢はその声が何と言つているのか理解しようと耳を澄ませた。

彼は小さい頃から言葉に苦労させられていた。両親の仕事の関係でアメリカに移り住んだときは英語に悩まされ、帰国してからは日本語に悩まされた。そういう経験があったから、彼は相手の言つて

いることが理解できない場合、それは相手のしゃべり方の問題ではなく、自分の聞き取り能力の欠如によるものだと考える癖がついたのだった。

ところが女の発した音声は、彼の脳裏にあるいかなる単語とも英単語とも日本語の単語とも 符合しなかつたのである。

声のほうはわからなかつたが、彼女の発した足音が彼のすぐそばまで近づいてきたことはわかつた。続いて、彼女が彼に覆い被さるような体勢を取り、体のあちこちをいじつているらしいことも理解できた。幸いにして、感覚神経のほうは手や足の先を除けばほとんどの問題ないらしかつた。

女がまた何か言つた。改めて聴覚を研ぎ澄ませてみたが、やはり理解できなかつた。

そのうち女は彼の目の辺りをさわり始めた。目の周りの皮膚感覚から判断すると、どうやら目の周りに包帯が巻かれているらしかつた。いや、目の周りだけではなかつた。全身の皮膚感覚を最大限に動員して感知したところによれば、彼は頭のてっぺんから足の先まで包帯でぐるぐる巻きにされているようだつた。

そこで女の足音は一旦、彼のそばを離れた。そのときにもう言ふ言喋つたようだつたがもちろん山矢に理解はできなかつた。

山矢はふと考へた。女の話す言葉、よく聞くとポリネシア系の人たちが話す言葉に似ていなこともない。両親と共にハワイを訪れたとき聞いたことがある。もしかしたら自分は何かの事故に巻き込まれて太平洋に墜落し、そのまま南の島にまで流されてしまったのではないか。

その次に聞こえてきた音はカーテンを閉めるような音と、再び女が近づいてくる音だった。引き続き、女の手が彼の目の周りをまさぐる感覚が伝わる。彼女が目を覆う包帯をほどこうとしているのは間違いなかつた。

遂に包帯は解かれた。瞼が周囲のひんやりした空氣に触れた。しかし山矢はそれで見えるようになるとは考へていなかつた。瞼も眼球も自分の思い通りに動いてくれないことは、先ほど嫌と言つほど思い知らされたからである。

ところが、女が手のひらを彼の目に当て、口の中で経文のようなものをぶつぶつ呟くと、だんだん目の周りが温かくなり、こわばつていた神經が、ピザの上のチーズのように、柔らかく溶け出していくのである。

女が何か言つた。恐らく目を開けて見る、という意味なのだろう。言葉ではなく彼女の心が伝わってきた。そんな気がした。

山矢はゆっくり目を開けた。目の前には、ヨーロッパ人ふうの顔をした少女が自分を見つめながら微笑んでいる光景が映し出された。ルーニアが墜落現場で助けた竜騎兵と思しき人物は、順調に回復しているようだつた。

ほとんど完全に肉体が焼け焦げてしまつた状態からわずか1ヶ月

後に意識が回復するまでになつたのは、ひとえにルーミアの父の白魔道治療のたまものだつた。少なくともルーミアはそう考へていた。父は、ルーミアのかけた再生の術が素晴らしかつたからだと珍しくルーミアを褒めた。でもルーミア自身は自分など亡き母の足下にも及ばないと思つていた。

肉体的な回復の順調さとは裏腹に、医術に携わる者のもう一つの務めである患者の精神的なケアのほうは、あまり芳しいとは言えなかつた。なぜならその患者には言葉が全く通じなかつたからである。

ルーミアは、地元のアウスグ語と、魔道学校に通うために3年ほど王都エランに滞在していたとき覚えたエラン語は問題なく理解でき、あと魔道書を読むために習つたギャング語と古代ヒルバニア語なら何とか理解できた。しかしそのいずれの言語で話しかけても、その患者は反応してくれなかつた。もつとも、古代ヒルバニア語などという、とつくる昔に使われなくなつた言葉が通じるとは、最初から思つていなかつたが。

患者が竜騎兵であるとすれば、ルーミアたちと同じエラーニア王国民の兵士か、さもなればその敵対国であるハバリア人の兵士である可能性が高い。エラーニアのいわば「標準語」であるエラン語が全く通じない以上、患者はハバリア人と考えるのが筋だろう。

ルーミアは父に、ハバリア語ができる人が知り合いの中にはないか、さもなければハバリア語の辞書を手に入れる方法はないか尋ねた。

しかし父はルーミアの推論に異を唱えた。回復状況を確かめるために何度も包帯を解いてみたが、顔の皮膚が再生するにつれて、患者の顔立ちが東洋系のものであることがはつきりしてきた。なぜ東

洋人がこんなところを竜で飛行していたのかはわからないが、もしかしたらハバリア帝国では戦力を補うために東洋人の傭兵を雇うこともあるのかもしれない、と。

ルーミアは考えた。意思を疎通させるには、自分が相手の言葉を覚えるか相手に自分の言葉を覚えさせるしかない。自分が相手の言葉を覚えるためには相手に主導権を握つてもらわなければならないが、あの患者はいまそういうことができる状態ではない。とすれば、こちらの言葉を相手に覚えてもらつまつがよいということになる。たとえ寝たきりでも自分や父の話す声、窓の外で誰かが会話している言葉を漏れ聞いているうちに覚えることがあるだろうから、きっとそつちのまづが早いはず。

そう思い立つと、ルーミアはすぐさま身の回りのものを手当たり次第かき集めて例の患者の病室に持ち込み、それらを床に並べた。患者はまだほとんど体を動かすことができなかつたが、ルーミアが何か騒々しい音を立てているのを聞き取つて、目と瞼だけで怪訝そうな表情をした。

ルーミアはまず「これ」「あれ」という最も基本的な単語から始めた。患者は最初戸惑つていた様子だったが、すぐにルーミアの意図を察し、積極的に反応してくれるようになつた。とは言え、相手はまだ声が出せない。反応といつても、ルーミアが身振り手振りで「わかつた?」と尋ねるのに対し、「YES」の合図として瞼を一回閉じる、といつことしかできないのである。

ルーミアの父はその話を娘から聞いて、できるだけ早く患者の喉を再生して、声を出せるように努力しよう、と申し出た。ルーミアはその日が一刻も早く来ることを祈つた。

父の努力の甲斐あって、それからわずか5日後に患者の声が出るようになった。ただその声は、白魔法の力によつて無理矢理繋げた声帯が不安定なため、かすれていふと言つよりは、カエルを踏みつぶしたような奇妙な音声だつた。あまりの奇妙さに、ルーミアは思わず腹を抱えて大笑いしてしまつた。ルーミアの父でさえ笑いをこらえるのに必死だつた。患者はせつかく出せるようになつた声を使わずに目の動きだけで気分を害したこと表現した。父は、声帯を酷使しなければすぐに元通りの声が出せるようになるから、ということを身振り手振りで伝えた。患者はやつと機嫌を直し、最後には、ルーミアを笑わせるためにわざとゲッケ鳴いてあげるほどの余裕を見せるようなつた。結局のところ患者の精神的ケアに一番有効なのは意志疎通なのである。ルーミアの父は改めてそう思つた。

その翌日から、アウスグ語のレッスンは急速にはかどり始めた。やはり、反応をすぐに見ることができるとできないのでは雲泥の差だつた。

ルーミアの生徒はかなり優秀な生徒だつた。レッスン1日目から床に並べてあつた日用品の類を彼女が指さすと、患者は次々とその名をカエル声で呼び上げた。3日後には家中にあるものと病室の窓から見えるものはすべてその名を言えるようになつていた。ルーミアは家の中にまだ何か覚えていない単語はないかとぐるりと見渡してみた。

そのとき彼女はふと、本来最も早く覚えさせるべき単語をまだ教えていないことに気づいた。彼女は自分の愚かさを睨わざにはいられなかつた。

ルーミアは患者から見えやすい位置に立ち、白らを指さして

「わたしはルーニア・クフルツです」

と言つた。

すると患者はたゞたゞしく、しかしあつさつした口調で

「ヤマヤ・ケンタ」

と應えた。

開け放たれた病室の窓から見える青空を、今日も1匹の竜が横切つていつた。

自分を看護してくれている少女 確かルーニアと名乗つた
の説明によると、あの竜は1週間に2度、近隣の町から遠くの町へ
定期的に郵便物を運ぶために往復しているのだという。

あれがヘリコプターでも飛行船でもなく、本当に生きている竜だと知つたとき、山矢健太はそれほど驚かなかつた。なぜなら、アクロバット飛行競技会でのあの「事故」以来身の回りに起つたことを総合的に判断すると、どう考えてみても、現在自分のいる場所が今まで住んでいた世界ではないことは明らかだつたからである。

最初、ルーニアやその父が自分を治療するのに手から緑色の光を出したり、物に手を触れることなく動かしたりするのは、奇術か何

かだと考へることにした。言葉のレッスンの中でルーミアが世界地図だと言つて見せてくれた紙片に、山矢の全く見たことのない形が描かれているのも、この地では、衛星写真から作られた正確な地図ではなく、いまだに何百年も前の古地図を使つてゐるのだろう、と自分自身を説得した。しかし、毎夜、病室の窓から夜空を見上げて、いろいろに気づいた事実は、決定的なものだった。夜空に浮かぶ月が、形は満月のまま欠けることがなく、表面の模様だけが毎日少しずつ変化していたのである。

山矢は覚悟を決めた。というより、他にどうすることもできなかつた。こうなつた以上、一刻も早く体を治し、自分がこの世界に迷い込んでしまつた原因を探り、そしてできるならば元の世界へ帰る方法を見つければならない。

とは言え、24時間ベッドに縛り付けられているといつ今の状況は拷問に近かつた。有り余る時間を少しでも効率よく消費するためには、言葉を覚えることに没頭するしかなかつた。

小さかつた頃、周りの子供たちにからかわれながら英語を習い覚えた経験が、こんなところで役に立つた。幸い、アウスグ語は発音が難しくなかつた。実のところ、彼の英語の発音はあまり流ちょうなものではなく、それがからかわれる主たる原因となつていたのである。しかし今覚えつつあるこの言語は、少なくとも発音の点で彼を悩ませることも、からかいの原因となることもなさそうだった。

しかも昔と違ひ今は周りに自分をからかう者はいない。いつも傍らにいるのは、自分が単語をたつた一つでも覚えるたびに、お世辞ではなく心の底から祝福してくれる、優しい少女だけだった。

山矢は最初、ルーミアは自分よりも年上だと思つた。彼女は責任

感が強く、看護士 山矢はそう思っていた という仕事に対しても勤勉で、また誇りを持っていた。すごく大人びて見えたのである。

かと思えば、とんでもなく幼いことをするときもあった。昨日、山矢が発音練習中に不意に「ゲコゲコ」とした声を出してしまったときなど、彼女は例によつて大笑いしたあげく、何を思つたか突然緑色の服に着替えてきて、カエルのような作り声で「わたしはあなたの妹ガエルよ」と言い出す始末だった。

そこで山矢は、女性に年齢を尋ねるのは失礼かとも思いつつも、まず自分は16になつたばかりだと告げてから、思い切つて彼女に歳を訊いてみた。この世界の1年が彼の世界の1年と同じ長さなんか確信はなかつたが、今までに聞いた話から判断すると、大きな違いはないだろうと思われた。

すると彼女は、自分は15歳だと答えた。

山矢がルーミアは年上だと思っていたことをうち明けると、彼女は自分はそんなにおばさん臭いのかと言つてわざとむくれて見せた。

しかし最後には笑顔に戻り、こう付け加えたのだった。

「あたしは一人っ子で、近所に歳の近い子供もいなかつたから、小さい頃は少し寂しい思いをしていたの。ヤマヤがあたしの兄弟代わりになつてくれたら嬉しいな」

患者が意識を取り戻してから2ヶ月経つた。経過は順調だった。少なくともルーニアや父親の日から見ればそうだった。

しかし、患者は不満だった。いまだに喉と口と頭しか動かすことができず、おまけに声もカエル声のまま元に戻っていないことが患者には納得できぬいらしかった。

ルーニアはまず、声のほうは父の言いつけを守らざる患者に声帯を酷使させた自分の責任だ、と謝罪し、きっと肉体が完治する頃には治るはずだ、と見通しを述べた。次に体が動かない理由を説明するため、エラーニア王国の民なら小学生でも知っているような、白魔道の基礎知識を教えてあげることにした。どうもこの患者の故郷ではあまり魔道学が発達していないらしい、と考えたからである。

男性白魔道士の役割と女性白魔道士の役割には違いがあり、男性のほうの仕事は肉体の再生、女性のほうは魂の再生である。自分のかけた再生の術によつて患者の魂は再生したが、肉体を完全に再生するには、父のような優秀な魔道士でも3ヶ月から半年を必要とする。それまでは『不動の術』をかけて肉体の活動を完全に凍結せなければならぬのだ、と。

患者は一応納得したが、すぐに別の不平を漏らした。3ヶ月も体を動かさなかつたら筋肉が完全に衰えてしまい、歩けるようになるまで更に半年も1年もリハビリしなければならぬだらう、と。

ルーニアは更に説明した。不動の術は肉体を、健康だったときの状態のまま、時間軸を越えて保存する。物理的に拘束しているのは訳が違つ。だから肉体が完治し、術を解きさえすれば、患者は怪我をする前と全く同じように活動することができる、と。

すると患者は、辛うじて動かすことのできるすべての部分を使って喜びを表現した。叫び声の一部は患者の地元の言葉だったためルーミアには何を言っているのかわからなかつたが、とにかく、患者の笑顔を見ることができたことは彼女にとつても無上の喜びであった。

そこでルーミアは、いつものようにアウスグ語のレッスンを始めた。レッスンといつても患者はもうほとんどエラーニア王国の住民と同じように話せるようになつてゐる。数週間前からレッスン内容は、言葉そのものを教えると、言つよりも、雑談を通してアウスグ語の言語習慣 この単語はイメージが悪いので、こういう場面では使つべきではないといったような を身につけさせるものになつていた。

その中で、患者はこんなことを質問してきた。前から思つていたのだが、窓の外で男の子たちが話す声を漏れ聞くと、「わたし」を意味する単語が、ルーミアが使つているのともルーミアの父が使つているのとも違つ。これはなぜなのか、と。

ルーミアは説明した。アウスグ語では「わたし」を表す言葉が何種類もあり、年齢、性別、身分によって、使い分ける必要があるのだ。今まで一つしか教えたかったのは、混乱を避けるためだ、と。

すると患者は言つた。自分の故郷にも同じ言語習慣がある。「わたし」のことを男は『ボク』と言つたり『オレ』と言つたりするが、女は『ワタシ』か『アタシ』と言つ。その他、語尾にも『～デス』、『～ダ』、『～デアル』などがあり、状況によつて使い分けることになつてゐるのだ、と。

ルーミアは応えた。アウスグ語も同じだ。年齢や性別に応じて別の言い回しを使わなければならぬことがあるのだ、と。

患者は少し不安そうに尋ねた。ではいま自分の話しているアウスグ語は、自分の年齢や性別に合っているのか、と。

ルーミアは

「全然大丈夫。あたしがちゃんとあなたの年齢と性別に合った言葉使いを教えてあげたのだから」

と応えた。

「ただ一つ問題があるとすれば、彼女は付け加えた。「ヤマヤっていつ名前は、あたしたちには少し発音しにくいの。ねえ、『マヤ』って呼んでじやだめ?」

患者は少し怪訝そうな顔をし、本当はヤマヤは苗字であつて、ファーストネームではないのだ、とうち明けた。

ルーミアが、ではケンタと呼ぶべきかと尋ねると、患者は、自分はファーストネームで呼ばれるのが嫌いなので苗字の方がいい、「マヤ」は自分の故郷ではどちらかと言つと……の名前だが、ルーミアたちが呼びやすいなら別にそれで構わない、と答えた。

患者の発音が少し乱れたため聞き取れない部分があつたが、構わないと言つているのだから問題ないだろう。ルーミアはそう判断した。

「じゃ、これからは『マヤ』って呼ぶわね

ルーミアがやつぱり「ヤマ」は嬉しそうに田だけの微笑みを返してきた。

それから1ヶ月後、遂に患者の不動の術を解く日がやつてきた。

ルーミアは患者に調子はどうかと尋ねた。すると患者は調子はよい、ただ1点を除いて、と答えた。

その1点とは声のことだつた。ルーミアが聞く限り、もはやカエル声ではなく、あるべき普通の声のように思えたが、本人は依然として違和感を訴えていた。

ルーミアは改めて、声帯を酷使させ完治を遅らせてしまつたことをしまつたことを詫びたが、患者は気にするな、と優しい言葉を返してくれた。

父の指示に従い、ルーミアが、患者の全身をぐるぐる巻きにしている包帯 実はこれは包帯ではなく白魔法の効果を高めるための魔力が込められた魔布だったのだが きりにルーミアに素っ裸を見られるのを恥ずかしがつた。ルーミアは、マヤは意外と恥ずかしがり屋さんなのね、と言いながら、手際よく、しかし丁寧に包帯 魔布を解いた。

続いて、ルーミアと父が声をそろえて呪文を唱え始めた。いよいよ不動の術の解除を始めるのである。患者は、高ぶる興奮を抑える

ためか、じつと皿を閉じたまま呪文が終わるのを待つた。

今まで青白い色だつた患者の全身がピンク色を帯びてきた。やがて手足が小刻みに震え始める。肉体の活動が再開されつつあるのである。呪文を唱えながらルーミアはその様子を見守つた。白魔道士の彼女にとつて、それはもっとも喜ばしい、充実した瞬間だつた。

呪文が終わった。

ルーミアはすぐさま患者のそばに歩み寄り、問題はないか尋ねた。患者が問題ないと答えると、ルーミアの父は、ではなくくつ上半身を起こしてみてくれ、と言つた。

患者は言われたとおり、ゆっくりと起きあがつた。ルーミアは固唾をのんで患者の反応を待つた。

ところが患者が次にとつた行動は、ルーミアはもうりん、経験豊富なルーミアの父にさえ、全く理解できないものだったのである。

患者は、まず自分の胸に手をやり、怪訝そうな顔をして一言何か呴いた。次にその手を下へ滑らせて陰部に当てるや、突然わめきだした。

「マヤ、どうしたのー。」

ルーミアは患者の肩を抱いてやることで精神を沈静化させようと試みた。しかし患者は鬼面ような恐ろしい形相でルーミアを睨み付け、アウスグ語で

「どうしてあたしが女にならせるのーー!?」

と叫んだのだった。

3 儀式

窓の外から子供たちの声が聞こえてくる。ざわざわと戦争についてをしているらしい。

「やあーっ。僕はエラーニア騎士団の聖騎士だ。かかってこい

「なにをーっ。僕は大魔道士ゲーレンだぞ。おまえの剣なんか僕には通用しないぞ」

「わたしは王立竜騎兵団の装甲竜騎兵よ。わたしの乗る竜は剣も魔法も届かないぐらい高いところを飛ぶことができるんだから」

「おー、グナン、おまえは何なんだよ。早く決めろよ

「えつとね、えつとね、僕はね

「早く早く

「じゃあ、僕も竜騎兵にする

「わはははは。おまえ何言ってんだ。竜騎兵は女じゃないとなれないとんだぞ」

「えーっ? ほんとーっ?」

「そりよ、竜操ることができるのは女だけなのよ

「知らなかつたあ

「恥ずかしい奴。そんなの赤ん坊でも知つてゐるぜ」

その様子を、薄手のガウンを肩に掛けた少女が、ベッドの上から呆然と眺めていた。彼女は、子供たちが「敵はあつちだ、行くぞー」と言つて走り去つて行くのを見届けると、ため息を一つついてから、ベッドの傍らに立つ白魔道士父娘にうつろな視線をよこした。

「じめんなさい」ルーニアがその口の言葉を口にした回数は、すでに數十回に及んでいた。「男の竜騎兵がいるなんて知らなかつたの。今にも泣き出しそうな悲痛な表情だつた。

そこでベッドの上の少女はまたため息をついた。

「よく考えてみれば」ルーニアの父は眉間にしわを寄せ、言つた。「ルーニアが君の魂を再生しようとしたとき、魂が示した反応は確かにいつもと異なつていた。炎で長時間焼かれたため魂の力が弱まつていたのだろうと思つていたが……。今にして思えばあれは、男の魂のかけらを無理矢理女の魂として再生しようとしたことによる抵抗反応だつたようだ」

少女はおずおずと尋ねた。「あたしを男に戻す方法は……ないの？」

ルーニアの父は、これが上級白魔道士バーン・クフルツとして患者に答えてあげられる回答のすべてだ、と言わんばかりに、無言のまま首を横に振つた。

しかし少女は引き下がらなかつた。「もう一度あたしを魂のかけらだけの状態にして再生するとかできないの？」

仕方なく、ルーミアの父は口を開いた。「細胞がほんの少しでも残っている限り、肉体は再生前の性別に戻ろうとするし、肉体が100%失われて魂のかけらだけが残っているというののような状態を意図的に作り出すのは不可能だ。仮にできたとしても、魂が壊れてしまう可能性もある。それ以前に、性別がわからなくなるほど小さくなってしまった魂のかけらを元通り再生できたこと 자체、奇跡に近い」

ルーミアが付け加えた。「魂の性別を慎重に見極めてから再生すればよかつたんだけど……時間がなかつたし……竜騎兵は女だつていう先入観があつたから……」

すると少女は、拳を握りしめ肩をわなわなとふるわせた。一度沈静化していた怒りがまた活性化してきたりしい。ルーミアは、彼女の口から放たれるであろう怒号の矢を、的となつて受け止める覚悟をした。

ところが少女は急にがつくりと肩を落とし

「もういいわ」

と言つた。

「クフルツ先生やルーミアを恨んでみても始まらない。先生たちはこの世界の常識に従つて行動しただけだし……」

つづむいていたルーミアは顔を上げた。「マヤ」

少女　　マヤはほんの少しではあつたが口元をほころばせた。「

それにはたしの命を救つてくれたことは確かだしね。命の恩人のことをこれ以上悪く言つたらばちが当たつちゃうわ」

ルーニアの目から遂に涙がこぼれた。「マヤ、あなたつて優しいのね、そんなふうに言つてくれるなんて……。あたし……あなたに何をしてあげたらしいのか……」

「取り敢えず今は……一人にしてくれない?」

「でも、マヤ」

「お願い」

「わかつた」ルーニアの父が言つた。「もしどこか調子の悪いところがあつたらそこ呼び鈴を鳴らしてくれ。わたしかルーニアがすぐ駆けつける」

少女は無言のままうなずいた。

「行こう、ルーニア」父は、まだ名残惜しそうにしている娘の肩を抱き、病室の外へと促した。

病室の扉が閉ざされると、しばらく喧騒が支配していたクフルツ白魔道院の建物の中に、病院本来の静寂が訪れた。

「おめでとう、山矢君」

山矢健太の背後から聞き覚えのある声が聞こえた。振り返つてみると、そこには小麦色に日焼けした相良美玖の顔があつた。

「優勝おめでとう」

美玖はにこやかに微笑みながら、再度祝辞を述べた。

山矢が辺りを見回してみると、そこはアクロバット飛行競技会会場の駐機場だつた。

俺は優勝したのか？ 山矢はいぶかつた そうだつたつ
け？ それ以前に何か重要なことを忘れているような

そう思いつつも、彼は美玖に「ありがとう、美玖」と言葉を返した。いつもは日本語がなかなか口から出でくれず、「おう」などと返すのが精一杯なのに、その時はどういうわけかすんなりと言葉を発することができた。

美玖はその反応がとても嬉しかつたようだ。「ねえ、山矢君」と言いながら彼の腕を取り、まるで別の誰かのように 誰だつたか思い出せないが、唇を山矢の顔の10センチ手前まで近づけてきた。「演技が終わつたらあたしに言いたかつたことつて、なあに？」

そうだ、俺には言わなければいけないことがあつたんだ

山矢は勢いにまかせて、大胆にも美玖の肩を抱いた。そして以前から言おうと思っていたその一言を喉から絞り出そうとした。

ところが美玖は、彼の声が口から出るより前に、笑顔のまま「い

やよ」と言った。「あたしにはそんな趣味ないもの

「そんな趣味？なんのことだ」

山矢が訊き返すと、美玖は山矢の腕をふりほどき、黙つて彼の胸の辺りを指さした。山矢はゴミでもついているのかと思い、視線を下に落とした。

彼はなぜか服を着ていなかつた。しかもその胸にはこほこんもりとした2つの膨らみがあつた。

「うわああああああああ」

夢から覚めたとき最初に目に入ったのは、この3ヶ月間、眠つているとき以外ほとんど見上げっぱなしだつた、あの天井だつた。

しばらくは起きあがろうとしなかつた。目が覚めても体は起こらない（起こせない）ということに慣れてしまつていていたからである。しかしごとに、もう体は動くようになつたことを思い出し、ゆつくりと上半身を起こした。そのとき胸が衣服にこする感覚が伝わつてきたが、努めて無視した。

山矢健太 マヤが体を動かせるようになつてから3日の朝が訪れた。

あの日、衝撃的な事実を知つてしまつたあと、彼、いや彼女は自

由になつた体を動かそうともせず、ベッドの上に座つたまま口が暮れるまで窓の外を眺めていた。

夜、ルーミアが食事を運んできた。もちろん流動食などではなかつた。魔法の力で肉体を健康だつたときの状態のまま保存していたのだから、術を解きさえすればすぐに普通の食事ができるはずだつた 本人にその意思さえあれば。

しかしマヤにその意志は全くなかった。彼女が少しでも手を付けることを期待してか、ルーミアは料理の入つた食器をなかなか片づけに来なかつた。しかしマヤは頑として手を付けようとはしなかつた。数時間後、食器を下げに来たルーミアが病室を去るとき、彼女はいつものようにお休みを言つたが、マヤは応えなかつた。

昨日もマヤは夕方までベッドの上でじつとしていた。朝食も昼食も食べなかつた。

ところが夕方、ルーミアが様子を見に病室を訪れたとき、マヤの腹が大きな音を立てた。あまりにも大きな音だつたため、ルーミアはびっくりしてマヤの顔を覗き込んできた。マヤはちょっと可笑しくなつて、思わず口元をほころばせた。ルーミアが「何か食べる？」と訊いてきたので、マヤは久々に「うん」と言葉を返した。

マヤはルーミアの出した料理を残さず食べた。食事をするのが4ヶ月ぶりだといつこども、この世界の食べ物を食べるのが初めてだといふことも、特別な感慨はわからなかつた。

就寝直前、ルーミアが様子を見に来た。病室を出るときルーミアの言った「お休み」に対し、マヤはその口は「お休み」と思えてあがたのだつた。

いま悪夢から目覚めたばかりしては、気分は悪くなかった。どうやら昨日摂った栄養が、マヤの全身にエネルギーをみなぎらせているようだつた。これ以上じつとしていると、血管がはち切れてしまいそうな、そんな気さえした。

もともと山矢健太は家でじつとしているようなタイプではなかつた。過去2日間に自分がとつた行動をいま振り返つてみると、身の毛がよだつ思いだつた。たとえ脅されたとしても、もうベッドの上に座つているのは「」めんだった。

そのとき彼女は、どうしてもクリアしなければならないある問題の存在に気づいた。いや正確に言つと、その問題は昨日の就寝前から存在していた。それは栄養を摂つてしまつたことによる当然の帰結であつた。彼女はその問題を、衣服と胸の摩擦から生ずる問題と同様、敢えて思考の対象にしないよう努力していたのだつた。しかし、じとここに至つては無視し続けることは不可能だつた。

考えてみればその病室は、彼女がこの世界で知つてゐる唯一の場所だつた。意識を取り戻してからさきほど目が覚めるまでずっとベッドの上にいたのだから無理もない。しかしいま彼女は初めて、病室以外の場所を知ろうとしていた。その場所の位置は、3ヶ月間ベッドに縛り付けられていた間に聞いた足音や物音によつて、大体の見当が付いていた。

案の定、その場所は、彼女の病室のすぐ横にあつた。扉を開いてみると、幸いにしてもといった世界のものとさして変わりはなかつた。

マヤは覚悟を決め、そこに腰掛けた。彼女は　当然のことだが生まれて初めてその感覚を味わつた。それは尿が、長い尿道を

経由することなく、膀胱の近くにある尿口からすぐ排出されると
いう感覚だった。

昨晩から我慢していたその欲求を解消すると、今まで彼女の精神
に重くのしかかっていた何かが、ふつゝと消えてなくなつたような
気がした。もう怖いものはなかつた。

マヤは便座に座つたまま、不動の術を解かれた直後に一度見でし
まつて以来、頑として視界に入れないようにしていた部分に目を向
けることにした。

まず、身につけている薄いガウンのような衣服の前をはだけて自
分の胸を見てみた。よくわからないが、それほど大きい方ではない
ように思えた。次に両手でその膨らみを軽く驚撃みにしてみた。以
前より、その先端付近が敏感になつていてることがわかつた。

そこで一皿目を上げ、側に置いてある紙を右手に取つた。もとい
た世界のものと比べるとかなりごわごわししている。その次に、再
び視線を下へやり、今度は下腹のほうを覗き込んだ。胸のほうは、
言つてみればただ膨らんでいるだけで、男だったときに想像しよう
と思えばできなくはないくらいの変化にすぎなかつた。しかし陰部
の方は違つた。紙を当ててみたが、視覚と、自分の手のほうの触覚
と、その部分が紙に触れる触覚の3つを、一つの事実として脳の中
でうまく結びつけることができなかつた。紙を捨てたあと、今度は
直接、右手を下腹部から陰部に当ててみた。5秒ほどすると、よう
やくその部分に起こつた形状の変化を実感できるよつになつた。す
ると彼女の目から涙が溢れた。

涙が十分乾いてから、マヤはトイレを出た。そこで運悪く、と言
うべきか、ばつたりとルーミアに出くわした。ルーミアはマヤにか

けるべき言葉がすぐには思い浮かばなかつたらしく、一瞬口をぱくぱくさせた。マヤはわざと嬉しそうな顔をして「トイレに行つて来たの」と言つた。ルーミアは更に2、3回ぱくぱくさせたあとで「そ、そ、う。じやあ、腎臓や尿管や膀胱に異常はなさうね。お父さんに報告しておくわ」と、あたかも医学的な問題にしか関心がないかのようなセリフを述べた。

朝食はルーミアの父とルーミアと3人で、白魔道診療院と自宅を兼ねるその建物の、いわばダイニングキッチンにあたる部屋で取つた。食後にルーミアが案内してくれたところによると、その建物は実はそれほど大きなものではなく、一般的の民家に毛が生えた程度のものだつた。白魔道が発達しているため、大抵の病気や怪我は入院せずに直すことができ、入院施設はほとんど必要ない。そもそもこの診療院のあるアグ一村は鄙びた寒村にすぎず、患者がそれほどいないのである。

それからしばらく、ルーミアが父と共に白魔道士の仕事をあれやこれやとこなしている間、マヤは建物の前に出て、そこから見える範囲の村の様子を観察した。途中、村の子供たちが彼女に気づいてそばに寄ってきた。ところがマヤが何か声をかけようとすると、子供たちは逃げてしまつた。子供が見知らぬものに好奇心と恐れを同時に抱くのは、どこの世界でも同じだつた。

そのうち、仕事を終えたルーミアがマヤと話をしたやつて來た。

「ねえ、マヤ。この地方には不動の術を解かれた人が必ずやらなければならぬ儀式のようなものがあるの。マヤもやる?」

マヤがうなずくと、ルーミアは一旦自分の部屋に戻つて、何かが入つた鞄を持ってきた。それからマヤの手を引いて、彼女を村へと

連れ出した。

村の街路や広場を通り、数人の村人と出くわした。村人はみな、ルーミアが連れている東洋人の少女を見渡して一瞬怪訝そうな顔をしたが、すぐに笑顔に戻り、ルーミアだけでなくその少女に対しても「こんにちは」と言った。愛想の良い人たちばかりだった。

マヤとルーミアは村を出、森に入った。森の中には足で踏み固められてできた道がたくさん枝分かれしていたが、ルーミアは全く迷うことなく道を選んでゆき、マヤをどんどん森の奥へと導いた。

不意にマヤの目の前の視界が開けた。

まぶしさに目を細めながら辺りの様子を見渡してみると、そこには、半分はマヤの予想の範囲内、もう半分は予想外という、奇妙な光景があった。すなわち、左手には、磨き上げられたガラスのように透き通った水をたたえる泉、右手には、どす黒く染まった地面と醜く焼けこげた数本の樹木が、異様なコントラストを呈していたのだった。

「ここはマヤの乗った竜が墜落した場所よ。マヤは覚えていないでしょ？」けれどルーミアは、油が地面にしみこんでできた黒い土を指さし、言った。「ねえ、マヤの乗っていた竜は何て言つたの？」お墓に名前を刻んで上げたいの

見ると、焼けこげた樹木の幹に、文字の彫られた小さな木の板が立てかけてあり、その前に花がたむけてある。

マヤは応えた。「あたしは竜に乗っていたわけじゃないの。あたしが乗っていたのは……機械なの。飛行機っていう……」

するとルーミアはとても信じられないといった顔をし、しづらかく間をおいてから「そうだったの。鉄の板がたくさん燃え残っていたから、あたしはきっと装甲竜騎兵なんだと思った」と言った。

「でもよかつた」ルーミアは墓碑の前に供えてあつた花束を拾い上げ、言葉を続けた。「ここで竜が死んだわけじゃなかつたのね。ちよつと後悔していたの。マヤの命を助けるのに必死で竜のことを考えてあげられなかつたつて。同じ命なのに」

そして彼女は花束を半分に分け、片方をマヤに渡し、もう片方を自分の胸に抱きしめたのだった。

それからルーミアはマヤを泉のほうへ案内した。泉はかなりの広さがあり、その中央付近には巨大な岩石がいくつかそびえ立つている。マヤが最終的に連れてこられたのは岩石の陰になつて周囲からは見えにくい場所だった。そこには3メートル四方の平らな岩盤が水面から顔を出していく、岸から簡素な橋で渡つて行くことができた。

「ここに何をするの?」「マヤは尋ねた。

「水浴びをするのよ。体を清めるために。ただそれだけ」ルーミアは応えた。

「あたしがするのよね?」

「もううん」

「服を脱ぐの?」

「そうよ。恥ずかしい？」

「少し。でも……別にいいわ」

マヤはあまり躊躇することもなく、着ていた薄手のガウンのような服と、病室から履いてきたサンダルのような履き物を岩盤の上に脱ぎ捨てた。考えてみれば、下着を付けていなかつた。彼女はいまルーニアの前で素っ裸でいることよりも、下着を付けていない状態で村の中を歩いてきたことを恥ずかしいと思つた。

水面に足をつけてみると、水はやや冷たかつたが、耐えられないほどではなさそうだつた。そこでマヤは思い切つて、ざぶんと全身を水の中に沈めてみた。

4ヶ月ぶりの入浴は、たとえお湯でなくとも気持ちよかつた。山矢健太だつたとき、彼女は取り立てて風呂やシャワーが好きだつたわけではなかつた。しかしいま彼女は切実に、この水がもつと温かかつたらどんなにいいだらうと考えていた。

マヤはしばらく水浴びを楽しんだ。ルーニアはその様子を我がことのよつこ満足げに見守つっていたが、何を思つたか突然

「あたしも水浴びがしたくなつちやつた

と言つて服を脱ぎだした。

マヤは驚いて、ルーニアから田を逸らそうとした。しかしながら思いとどまつた。理由はわからなかつたが、そつしてはいけないような気がしたからである。

ルーミアはマヤの面前で全く憶する」となく白魔道師服を脱ぎ、下着を脱ぎ、履き物を脱ぎ、最後に、長い髪をとめてある髪飾りを取つた。そして足の先で水の温度を確認した後、マヤと同じように一気に水の中へ踊り込んだ。

水中にしゃがんで全身に水を馴染なせるような動作をしたあと、ルーミアは水面へ顔を出した。長い髪が上半身全体に貼り付いてる。彼女が貼り付いた髪を背中の真ん中に束ねようとしたので、マヤは手伝つてあげた。

すると圧抜けに、ルーミアは

「やつあね」めん

と謝つた。

マヤは謝られるようなことをされた心当たりが全然なかつたので、ちよつとびっくりして

「何のこと?」

と訊き返した。

ルーミアは「今朝トイレの前で会つたときのこと」と応えた。

マヤはその日の朝の出来事を思い起にしてみたが、思い当たる節は全くなかつた。「何かあつたかしら」「

「あたし白魔道士失格ね」ルーミアは言つた。「あたし逃げちやつ

た。トインの中できつとあなたは辛い思いをしたはず。それがわかつていたのに、あなたをもつと気遣つてやるべきだったのに、恐くて、逃げちゃったの。『めんね』

マヤはさはさとルーミアが何の話をじてこのかわかった。「あたし全然気にしてないし、みんなの謝るほどいじじやないんじやない?」

「やつはちくれるのは嬉しいわ。でも患者のことを気遣つのが白魔道士の仕事だから。それ」「元へ。」

「それ」「え?」

「マヤは逃げなかつた」

「え?」

「やつはあたしが服を脱いだとき、田を逸りたなかつた」

「やうだつたのか」マヤは思つた。もじあのとき田を逸りしていたら、自分はルーミアの裸体に特別な感情を抱いていることを認めたことになる。やうしたら、ルーミアはもう2度と自分を患者以上の存在として「姉?代わりとして見ゆ」とはできなくなつていただろう。自分の選択は正しかつたのだ。

「あたしね」マヤは打ち明けた。「本当は異世界から来たの。墜落したあの飛行機つていう機械はこの世界のものじゃないのよ」

ルーミアは目を丸くした。「ほんと?」

「うん

「信じられない

「3ヶ月間ベッド上で言葉のレッスンを受けたとき、あたし何度も訊いたわよね、『他の世界地図はないの、他の世界はないの』って。でもルーニアもクフルツ先生も『ない』って答えた。だから、この世界の人たちがあたしの住んでいた世界のことを知らないのはわかつてた。自由に行き来することができるわけじゃないんだってことはわかつてたわ」

「でもじつてそんなこと

「その原因をこれから見つけなければいけないの。そしてできれば……元の世界に帰りたい」

ルーニアは、マヤの心中を窺こやつてか、悲痛な表情だった。「何か手がありはあるの?」

「ううん」マヤは首を振った「あるとすれば紫色の石の付いたペンダンクぐらご。ここへ飛ばされる直前に光ったあの石が何なのとかねばね」

「紫色の石?……あたしにはわからないわ

「どのみち、あたしは長期戦を覚悟してるから。そのためにはまず、この世界でじつを生きて行くか考えないと

ルーニアはぱっと表情を輝かせた。「そつか。マヤは竜騎兵じやなかつたんだ。また戦場に戻つていくわけじゃないんだ」

「マヤはいたずらっぽく応えた。「それビックリ無職で無一文よ、いつかの世界では」

「住むところな……」「ひたすらばいこじやなー。部屋も空いてるし

「ありがとう、せう言つてくれて。もしだめだつて言われていたら、今日から早速野宿しないといけなことこうだつたわ。でもそれ以前にあたしの体を治してくれた治療代だつて払わなきゃいけないでしょ

「治療代なんて別に」

「うう、そういうわけにはいかないわ。どうこう形になるかわからないけど、いつか必ず払つから」

「でも……」

その時不意に、マヤの背中に寒気が走った。「くしょん

「あ、ごめん。マヤの体、冷え切っちゃつたわね」ルーミアは水から上がるよつマヤを促した。

マヤに引き続いて、ルーミアは自らも岩盤の上に上がり、すぐさま持参していた鞄から大きなタオルを2枚取り出した。そして、その一方をマヤの肩に掛け、もう一方を自分が羽織つてから、目を閉じてぶつぶつと呪文を唱えると、彼女の胸の前に青い炎が現れた。

魔法で作られたその炎は、見かけ以上に温かかった。炎のそばに

立つてタオルで肌の表面に付いた水分を拭つてこりうらへ、すぐに体が元の体温を取り戻した。

するとルーミアはとても嬉しそうな表情で「実は『儀式』には続きがあるの」と言った。

マヤが「続き?」と聞き返している間に、ルーミアは鞄の中から襟の付いた長袖シャツと長袖のズボンと下着のパンティとブラジャーを取り出した。「おうじ立ての新しい服を着ることよ」

「この服、あたしのために?」

「うん。と言つても、別によそ行きの一張羅なんかじゃないわよ。新しければ普段着でも何でもいいの」

「ありがと。着てみるわ」

マヤはまずパンティを手に取つた。山矢健太だったときブリーフ派だったの、彼女はそれほど違いはないだろうと思い、あまり深く考えずにパンティに足を通し腰まで上げた。ところが、布が股間の部分に貼り付くようなその感触は、想像以上に違和感のあるものだった。

そう思い始めると、マヤは「女物の服を身につけること」を必要以上に意識しだした。しかも次に身につけなければいけないのは、衣類の中で最も男女差の激しい（というか男用の存在しない）ものだった。ルーミアが差し出すブラジャーを前に、マヤは2の足を踏んだ。

ルーミアは今度は「逃げ」なかつた。「付けたくなかったら付け

なくてモニィわよ。付けるのならあたしが手伝ひわ

実際のところ、何かをためらっている人に決断を促す、一番効果的な方法は、はつきりとものを言つてあげることである。ルーミアの言葉はマヤの背中を後押しするに十分であった。

「じゃあ、付ける」

ルーミアはマヤの後ろに回り、コツなど解説しながら、付けるの手伝ってくれた。付け終わってみると、マヤは、布が膨らみを優しく包み込んで持ち上げてくれるその快感に舌を巻いた。ルーミアは「今日のために、寝つきりだったマヤの胸のサイズを測つておいたの」と、ブラがぴったりフィットしている理由を説明した。そう言われば、測られた記憶がある。何かの検査の一環だらうと思い、マヤは全く気にかけなかつたのである。

あとは長袖のシャツを着、長ズボンをはくだけだつた。シャツのボタンのかけ方が右が前になつていても、ズボンを引き上げるとき大きく張つた尻が邪魔になつたのも、先ほどのブラジャーの衝撃に比べれば取るに足りないことだつた。

ルーミアは、マヤが服を着るのを手伝ひ合間に、できぱきと自分の服を着た。

「これで儀式終了」マヤのいでたけをしげしげと眺めながらルーミアは満足げに微笑んだ。「よく似合つてゐるわよ、マヤ」

マヤはいたずらっぽい表情で「16才の女の子に見える?」と尋ねた。

「どこから見ても立派な女の子よ」ルーニアもおどけてみせた。「外見も、それに言葉遣いもね」

するとマヤは怪訝そうな顔をした。「もしかして、今あたしが喋っているアウスグ語は女言葉なの?」

「もちろん」ルーニアはくすくす笑いながら答えた。「あたしが、10代の女の子が話すような言葉をあなたに教えてあげたんだものだつたとき、ルーニアが教えてくれる言葉が、ルーニア自身の話す言葉と似ているな、とは思つてたんだけど、でもそれは、アウスグ語では10代の人の言葉使いに男女差がないからなんだろうって思った

「じゃあ、男の子の言葉も教えてあげよつか?」

「そのうちだね。でも、教えてもらつたとしても、使うべきかどうかわからない」

ルーニアはマヤの複雑な心中を察し、それ以上その話題に触れるのを避けた。

別の話題を探すために、ルーニアはぐるりと辺りを見回した。すると彼女は、恰好の「話題」を見つけた、とばかり、ある方向を指さした。

「見て、マヤ」

マヤはルーニアの指し示す方向に目をやつた。水浴び場を取り囲

むようにしてそびえ立つてゐる岩の隙間から、さきほど訪れた墜落現場が垣間見えた。しかし先ほどとは何か様子が違う。

ルーニアはマヤに「ねえ、マヤの住んでいた世界にも竜はいるの？」と尋ねた。

そう言られて初めて、マヤは黒ずんだ地面の上に何か巨大なもののが鎮座しているのに気づいた。

「あれが竜……」

マヤは一瞬言葉を失つた。以前、ベッドの上から空を見上げたとき、何度か空高く飛ぶ竜を見たことはあったが、その時は、暇つぶしに時々プレイするTVゲームや、小さい頃見たファンタジー映画に登場した竜と、外見的にはさして変わりないという印象を受けただけだつた。しかし実際に目の前で見てみると、その巨大さは彼女を圧倒せずにはおかなかつた。翼を広げればおそらく彼の複葉機の2倍にはなるだらう。むしろ、外見が見慣れたものであることが、巨大であることの異様さ、迫力を却つて際だたせていた。

ルーニアは「きっと、このマキナスの森の奥に住む、竜の子供だと思つ」と説明した。

「あれで子供なの？ あんなに大きいのに」

「つうん、体の大きさはあれ以上成長しないわ。子供つて言つても、人間で言えばあたしたちぐらいの年齢だから」

「やうなんだ」

そのうひ、竜は今までじつとせっていた体を右へ左へ揺さぶるよう動かし始めた。ログラフィックでも3Dポリゴンでもない本物の竜が動くときは、マヤの心に新たな感動を呼び起した。

そのうち竜は首を下へ伸ばし、何を思ったか醜く黒ずんだ地面をペロペロと舐め始めた。

「そんなものの舐めちやだめ!」マヤは叫んだ。「地面にしみこでいるのは『ガソリン』なのよ。」

ルーミアはびっくりして「『ガソリン』って毒なの?」と聞き返した。

マヤは答えた。「そりよ。あんなものの舐めたら、死んでしまうかもしれない」

すると突然、ルーミアは何も言わずに走り出した。

マヤは「どうしたの」と言いつてそのあとを追いかけた。

ルーミアは足を止める「やめさせなきゃ」と叫んだ。

彼女は泉のほとりをひた走り、竜からわずか10メートルしかはなれない地点で足を止めた。

竜は彼女の存在に気づいていないのか、いまだ地面を舐めるのをやめようとしなかった。

マヤはルーミアに追いつくと、彼女の背後から恐る恐る竜を見上げた。その威容には筆舌に尽くしがたいものがあった。

ルーミアは竜に向かつて「地面を舐めちやだめ。毒がしみこんでいるの」と叫んだ。

すると竜はゆっくり首をもたげ、不思議そうな顔をしてルーミアを見つめた。

恐ろしそうな姿をしている割に性格は案外おとなしいものなんだな そう判断したマヤは、小さくため息をついて胸の高鳴りを鎮めようとした。しかし彼女の認識は誤りだつた。

竜の表情は次第に険しいものとなつた。そしてその巨大なしっぽを持ち上げ、目の前のルーミアを威嚇するかのようにぶんぶん振り回し始めた。

ルーミアは一步も引き下がらず、逆に「食べ物を横取りされると思つてゐるみたい」と解説する余裕さえ見せた。

勇氣があるのか単に竜に馴れているだけのかはともかくルーミアに任せておけば大丈夫だろう マヤはそう考え、臆病にも彼女の背後に身を隠そうとした。

その時マヤは気づいた。ルーミアの肩が小刻みに震えている。しかも、背後から見える限りの彼女の頬は蒼白色になつていて。彼女は竜を助けたい一心で精一杯の虚勢を張つていたのである。

もはや女の背後に隠れている場合ではなかつた。仮にも 文字通り「仮にも」だが 自分は男なのである。保守的な考え方かもしないが、ここは自分が前に出ていかねばならない。

「マヤは、ルーミアを半ば押しのけるよつとして、怒れる竜の面前へと躍り出た。『よく聞いて。あなたがいま舐めたものは『ガソリン』って言って、この世界のものじゃないの。たぶんこの世界に存在してはいけないものなの。お願い。触れないで。あなたはそれに触れちゃいけない！』

マヤの叫び声は、悠久の時を刻んできたマキナスの木々の間を響き渡った後、森の彼方へと消えていった。

暫時の静寂が訪れた。

次に聞こえてきたのは、竜が振り上げていた尻尾を地面に降ろす音だった。その表情に怒りの色は見られなかつた。

「よかつた」マヤは胸元に手をやり、今度こそ安堵のため息をついた。胸の膨らみがちょっと邪魔だつた。

ルーミアはいつの間にか、マヤの背後でへたへたと地面に座り込んでいた。マヤは立ち上がりとする彼女に手を貸してあげた。

そこへ突然、竜がいままでたゞげていた首をマヤたちのほうへ伸ばしてきた。マヤとルーミアは、強力な頭突きが繰り出されたものと思ふ、可能な限りの防御姿勢をとつた。

ところが竜は、頭部をマヤに接触させる直前で停止させ、口から舌を出してペロペロとマヤの頬を舐め始めたのだった。

「あたし、気に入られちゃつたみたい

マヤはそう言つてルーミアと顔を見合させた。ルーミアはさも可

笑しそうにくすくすと笑つた。

マヤとルーミアは、マヤにとつてこの世界で一番目の友達となつたその竜に別れを告げ、村への帰途についた。

別れ際、マヤはルーミアのすすめに従つて、竜に「ピム（Pi-m）」という名前を付けてあげた。ピムはその名がよほど気に入つたらしく、マヤやルーミアが「ピム」という言葉を口にしただけで、嬉しそうに体を左右に揺さぶるのだった。ルーミアによると、それは竜が人間に示す反応の中でもっとも好意的なものだとのことだった。

太陽はすでに真南の空高くに昇りつめていた。昼食の時間はもう過ぎている。きっとルーミアの父はお腹をすかせて自分たちの帰りを待つていることだろう、などと話ながら、二人は、永遠の静けさをたたえるマキナスの森を出、村に至る街道へと足を踏み入れた。

ところが、一人が村の入口近くまで来てみると、昼食後特有の怠惰に満ちていると思われたアヴニ村は、意外にも喧騒に支配されていた。

「何かあつたのかしら」

ルーミアはそう言つてマヤと顔を見合させた。二人は様子をつかがいながら、喧騒の源と思しき村の広場の方向へと歩を進めた。

広場には50人ほどの村人たちが集まつて人垣の輪を作つていた。ルーミアは、50人という人数は、アヴニ村の人口から子供を除いたほとんどすべてに相当すると説明した。祭でもないのに一体どうしたことだらう。

よく見ると、広場の一角には馬が三頭繋がれていた。それも農耕用の瘦せ馬とは明らかに違う、装飾付きの馬具で着飾った立派な軍馬だった。

二人は更に、人々の話す声がはっきりと聞こえる地点まで近づいてみると、した。

「男の竜騎兵？」

「男が竜を操るなんてことできるのか？」

「操るどいいか、竜は男がそばに近寄つただけで機嫌が悪くなるぞ」
どうやら村の男たちが、人垣の輪の中心に立つ人物に向かって口々に声を上げているらしかった。

「静まれ」輪の中からひときわ大きな男声が響いた。「四ヶ月も前の話だ。よく思い出して欲しい。不審な装甲竜を見かけなかつたか、怪しい男と出くわさなかつたか」

ルーミアはその声を聞いてマヤに「フラン語だわ。アウスグ語とは少しアクセントが違うでしょ」と囁いた。

輪の中の声は言葉を続けた。「あるいは、男の乗つた装甲竜が墜落した可能性もある。皆の者、心当たりはないか」

「そう言えば」村人の誰かが言つた。「四ヶ月前にマキナスの森に竜が墜落したよな」

「ああ、そうそう、そうだった」別の誰かが言った。「そのとき確かに瀕死の竜騎兵が、ルーミアに命を助けられてクフルツ先生のところに運び込まれたんだったよな」

輪の中の男は一層大きな声で尋ねた。「その者はいまどつしている」

尋ねられた村人は「もう退院したみたいだぜ。さつきルーミアと歩いているところを見かけたから」と答えた。

そのとき、人垣の一番外側にいた村人のうちの一人がマヤとルーミアの存在に気づいた。すると村人たちは、ドミニノ倒しのドミニノのよじに、次々とマヤたちのほうを振り向いた。

輪の中心にいた男は村人たちの様子から、ルーミアの傍らにいる東洋人が問題の人物だと察したようだった。彼は人垣をかき分け、つかつかとマヤのほうへ歩み寄った。

今まで人垣に隠れてマヤの目には見えなかつたその男の姿があらわになつた。彼は装飾の付いた白い衣装をさらりと着こなした背の高い男だった。

男は「わたしはエラーニア第4騎士団所属の白騎士バンク・ベルである」と名乗り、うやうやしく一礼した。それが騎士の作法なのだろう。「初めてお目にかかる御婦人に對したいそう無礼な物言いであるとは存するが、拝見いたしたところ、貴殿はこのアウスゲント地方の者ではないようと思われる。どのようなご身分のお方が

マヤは言葉に詰まつた。異世界から来たなどといつても信じてはもらえないだろうし、それ以前に、その騎士がマヤに対し向ける目

は、言葉の丁寧さとは裏腹に、お世辞にも好意的なものとは言えなかつた。下手なことを言つと今すぐにでも連行されそつな、そんな雰囲气があつたのである。

「ブンゴリア人です」応えてくれたのはルーミアだつた。「彼女はブンゴリア人です。東洋からはるばる見聞を広めるために旅をして、不慮の事故で墜落したのです。竜騎兵なんかじやありません」

騎士は怪訝そうな表情でルーミアに「貴殿はどなたか?」と尋ねた。

ルーミアは気丈にも騎士を睨み付け「彼女を助けた白魔道師のルーミアです」と答えた。

すると、人垣の陰から

「こま言つたことは本当かな、ルーミア

という別の声が響いた。

ルーミアは「え?」と驚きの声を上げた。

人垣の向こうからゆっくりとした足取りで現れたのは、またも騎士装束をまとつた若い男だつた。ただし最初の騎士ほどは背が高くなく、衣装の着こなしもルーズだつた。襟元のボタンも、わざとなのか不注意なのか、外れている。

「いま言つたことは本当かと尋ねたんだ」

その若い男が再びそう訊くと、ルーミアは手を口元に当てて呆然

と彼を見つめ

「ジユート……」

と呟いたのだった。

「久しぶりだな、ルーミア」男は、何が可笑しいのか、にやにやと
にやけながら言った。「再会を喜びあいたいのは山々だが、いまは
ご覧の通り、任務中なんだな。取り敢えず質問に答えてくれないか
な、ルーミア」

ルーミアは、男の言ったことが理解できなかつたわけでもなかろ
うに、いまだ呆然としている。

マヤは仕方なく、自分自身がその間に答えることにした。「ルー
ミアの言つたことは本当です。間違いありません」

男はにやにや顔をマヤに向け、意外そうに「ほひ、おまえ、言葉
はちゃんとしゃべれるんだな」と言いながら近づいてきた。「じゃ
あ、これは何だ」「

彼は手にしていた平らな物体をマヤの前に放り投げた。片面に赤
い塗料の塗られた鉄の板らしい。マヤにはそのが何なのかすぐわか
つた。どうやらそれは彼の愛機だつた複葉機の機体の破片にちがい
なかつた。

「さつきこの村の鍛冶屋の仕事場から押借してきた」男は言葉を続
けた。「そこにはこれと同じような鉄の板が山ほど積んであつた。
これはどこから仕入れてきた鉄板なのかな、鍛冶屋の爺さん」

人垣の中にいままでボーッと突っ立っていたその老人は、いきなりその男に話を振られ、それこそ鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。「そ、それはじやな……どじじやったかいのう……そうじや、マキナスの森じや。この間龍が墜落した場所じや。火を消したあとも鉄の板があくさん燃え残つておつたので、村の若い者に手伝つてもらつて、ワシンちに持つてきたのじや」

「ということは」男はにやけ顔を再びマヤに向けてきた。「あんたが乗つっていた龍は装甲龍だつたことになるな。東洋から旅をするのにどうしてわざわざ装甲龍に乗つてくる必要があるのかな?それとも東洋には龍にわざと重たい装甲をしょわせていたぶつて楽しむ風習でもあるのかな、お嬢さん」

マヤはその男のしゃべり方も態度も何もかも気にくわなかつた。まして「お嬢さん」などと呼ばれてしまつたことは、彼女にとつて屈辱以外の何ものでもなかつた。しかし、悲しいことに、彼女には有効な反論が思いつかなかつた。

そこでやつと正気を取り戻したルーミアが彼女に助け船を出した。「ジユート、お願ひ。彼女はあたしの友達なの。怪しい人なんかじゃない」

ジユートと呼ばれたそのにやけ男は「ほつ」と感情のこもらない相づちを打つて見せた。

「装甲は……そう、じちりで戦をじしているらしげって聞いて、用心のために装備してきたのよ。だいたい、あなたたちが探しているのは男の竜騎兵じゃなかつたの?彼女はれつきとした女の子なのよ」ルーミアは必死になつて訴えかけた。

するヒジュー^トはにせけ顔を一層にたにたと引きつらせ、あわて事かマヤの胸に手を伸ばし、その膨らみを驚撃みこしたのだった。

マヤは「わやつ」「ひやつ」と驚きの声を上げ、反射的に両手で胸を覆つて体をくねらせた。そのとき口をついて出てきたのは

「Sexual harassment!」

ところ英語だった。日本語以外の言葉を話さなければ思つあまり、英語を叫んでしまったのである。

「ジュー^ト、あなた！」ルーニアはすゞい剣幕でジュー^トを睨み付けた。

村人たちの間からもどよめきが起つた。皆「ひどい」とか「やります」などといつた非難の言葉を口にした。

しかし、ジュー^トは全く意に介した様子もなく、にやにや顔のまま「こいつが本当に女なのかどうか確かめただけさ」と言つてのけたのだった。

そこへ、ルーニアの父がつかつかと歩み寄つてきた。今まで人垣に加わらずに広場の隅のほうでやりとりを見守つていたらしく。

「ではわかつてもらえたことだろ」「彼は言った。「彼女は、マヤは間違いなく女性だ。わたしが保証する。このアヴィー村には男の竜騎兵など滞在してもいいし、かくまわれてもいい。そんなことをしてもわたしたちには何の利益もない」

「しかし」最初にマヤに話しかけてきた慇懃な騎士が言った。「我

々はもう四ヶ月も捜査を続いている。残念なことではあるが、ここにおられる御婦人は実に疑わしい。疑わしい者の存在を知りながら精査することなく王都エランに帰還したとあっては、我々は愚か者のそしりを免れぬ

「よほど重要な任務らしいな」ルーミアの父は言った。

騎士は黙つて懐から巻紙を取り出し、それを広げて父に見せた。

ルーミアの父はそれを読み上げた。「『アウスゲント地方のどこに降り立つたはずの男の竜騎兵を生け捕りにせよ。手段は問わぬか。それも国王陛下の御名御璽（署名と印）付きとせ……』

マヤは「生け捕り」という言葉を聞いて愕然となつた。それまで心のどこかに、もしかしたら正直に異世界から来たことを話しても構わないのでは、という思いがあつた。しかしそんな考えはたつたいま吹つ飛んだ。

「ハバリア帝国が絡んでいることなのか」ルーミアの父は更に質問した。「今度の戦^{じくせん}と何か関係があるのか

騎士は「答えられるわけなかろう」と言つただけだった。

「そういうことね」ジユートは依然にやけていた。「とにかく、俺たちはこの娘を『精査』しなければならないんだ。任務なんでな」

ルーミアはジユートの口調に引っかかるものがあった。「ジユート、まさか『精査』って、マヤを辱^{はずがし}めるようなことじゃないでしょうね」

ジューートはその日ルーミアたちの面前に現れて以来、最も下品なにやけ顔で「任務なんでな」と繰り返した。

マヤの耳に、村人の何人が「裸にでもされるんだろうが」「などと囁きあつていてるのが聞こえた。マヤは、確かに裸にされるのは恥ずかしいがそれで生け捕りを逃れることができるならやむをえまい、と思つた。

ところがルーミアの顔に目をやると、彼女の顔はいまや完熟トマトのような色になつていていた。ルーミアの父も何か複雑な表情をしていた。どうやらこの白魔道師父娘は「精査」が意味する本当のところを知つていているらしかつた。

「そんなことしなくとも」ルーミアは叫び声をあげた。「彼女の体を見ればわかるでしょう? 誰か、そう、竜騎兵か女性の魔道師でも連れてきて確認すれば……」

ジューートは突き放すように言った。「最近はオカマ連中が受ける性転換手術も巧妙になつてきているからな。それに東洋には『宦官』とか言って、皇后に仕える男たちはアノ部分を切り取つてしまつ習慣があるらしいしな」

ルーミアはほとんど泣き出しそうな表情で「マヤはそんなのじゃないわ」と叫んだ。

「いざれにせよこの」婦人の身柄は拘束させていただく「慇懃な騎士は言った。「我々としても辛いのだ。結婚前の御婦人にそのような辱めを受けさせるのは。しかし心配はこの無用。無実と判明せる場合には、最高水準の白魔術によつて彼女の体についた傷を完全に修復し、将来の御結婚に差し支えなきよう取りはからう所存である」

マヤは文字通り我が耳を疑つた。もしかしたら自分がそのアウスグ語の意味を勘違いしているだけかもしれない。確認のために、彼女はルーニアのほうに顔を向け、おそるおそる尋ねてみた。

「まさか……やつこいつとをやられちゃうで」と？

ルーニアは無言のままうなづくのがやつとだつた。

代わりにジユートがにやにやしながら説明してくれた。「俺もよくはわからないんだが、ソノときに女の体が示す反応を暗黒魔法で見れば、確実に判定できるんだとか。そつだつたな、ゾイグ」

ジユートは広場の片隅に立つ木の根元に目をやつた。よく見るとそこには、長いマントを身にまとい、フードを田深に下ろした、身長が一メートルセンチぐらいしかない人物が立つていた。手にした杖からすると、じつやじ魔道師らしい。

その人物はジユートに視線を向けられると、何も言わずにうなづいた。

「じょ、『冗談じゃないわ！』」マヤは叫びだした。「な、なんであったしがそんなことやられなきゃいけないの？そ、そんなことしなくて、男か女かを見分ける方法ぐらい他にもあるでしょう？ほり、何だつたつけ、そう、『染色体検査』とか！」

もちろん『染色体検査』などといつ日本語が相手に通じるはずもなかつた。

村人たちも、これからマヤの身に起ることを理解したらしく、

“わざわざわめきました。

ジューートは、いまにも飛びかかってきた勢いのマヤと、口々にマヤへの同情の言葉をこぼす村人たちに、少し恐れを感じたらし。そこで彼はさきほど魔道師に田で合図を送った。すると魔道師は短い呪文と同時に魔法の杖を繰り出した。

「さやつ

マヤはその声を最後に、じっと動かなくなってしまった。何かの魔法をかけられたのは明らかだった。

「マヤー。」

ルーミアせせつ囁び、足下にずくめるマヤを介抱しようとした。ところがその前に魔道師が念動力で彼女の体を、広場の一角に繋がれていた軍馬の背中に運び去った。

騎士とジューートと魔道師は、村人たちの放つ敵意に満ちた視線をものとせず、そそくさと馬の背に飛び乗った。ジューートはマヤの載せられている馬にまたがり、彼女の体を抱きかかえるように支えた。

ルーミアは、ジューートの馬のそばにまで近寄り、なおも「マヤ、マヤ」と叫び続けた。ジューートは「安心しちゃひどいことはしない」とルーミアをなだめた。

女性に乱暴をはたらくこと以上にひどことが他にあるの?

ルーミアはそう言ってジューートにくつてかかろうとしたが、彼女の父が彼女の肩を抱いて引き下がらせた。

騎士は馬上から「皆の者、お騒がせした。「協力に感謝する」と言つた後、魔道師の乗つた馬を従えて村の出口へと去つていった。ジューートはルーニアに「じゃ、またな」と声をかけてから、先に行つた2頭を追いかけた。

ルーニアや彼女の父や他のアグー村の村民たちにできる限りは、その後ろ姿を呆然と見守ることだけだった

ジューートは馬上で、これからマヤはアウスゲント地方の中心都市ファクティムにあるファクティム城に連行されると告げた。

連行される途中、マヤは2日前に得たばかりの体の自由をまたも奪われてしまつたことを嘆きながらも、繰り返し、冷静にならなければ、と自らに言い聞かせた。

考えてみれば、アクロバット飛行競技会での「事故」以来、彼女はパニック続きだった。得体の知れない黒いもやに包まれたり、異世界に飛ばされたり、女なつてしまつたりしたことに比べれば、今回の一件は一番ましなほうだとさえ言えた。それらの経験が彼女に事態を冷静に見つめる余裕を与えていたのだった。

彼女は誓つた。最後の瞬間まで絶対に諦めるものか、と。

一行がファクティムに入城する頃にはすっかり日も暮れて東の空から今日も満月が顔を覗かせていた。

同行していたあの背の低い魔道師は、マヤを念動力で動かすのが面倒だったのか、馬から降りる段になつて、マヤの体を麻痺させる魔法を解き、自分で降りると田で合図してきた。マヤはその隙をついて、馬から飛び降りるや否や脱兎の如く城門を目指して走り出した。しかし、魔道師の魔法によつてすぐにまた体の自由を奪われ、あつたりと連れ戻されてしまった。

その後、マヤはすぐに魔法を解かれたが、もう逃げ出そつとまじなかつた。この魔道師がそばにいる限り逃げ出すことはまず無理だと悟つたからである。

彼女は牢屋にでもぶち込まれるのかと思いきや、意外にも普通の個室に案内された。そもそもこの世界の城などというものに入るのが初めてなのだから詳しく述べははずもなかつたが、調度品などの様子からして女性のための個室のように思われた。先ほど廊下でお城勤めの女官らしき女性数人とすれ違つた。もしかしたらそういう人たちのための個室なのかもしれない。もちろん、部屋の一角にはベッドがしつらえてある。これから自分の身に起ころるかもしれないことを考へると、マヤはベッドを正視する気になれなかつた。

ほどなくジューートが夕食を運んできた。それも2人分。彼はそれらの料理をテーブルに置き、例のにやにや顔で「どちらか好きな方を選べ」と言つた。マヤが手近な方を選ぶと、ジューートは彼女の選ばなかつた方から一皿につき一口ずつ食べて見せた。毒が入つてゐるわけでも眠り薬が仕込んでゐるわけでもないことをマヤに示したかったのだろう。その上で、彼は

「お食事を一緒にしてもいいかい、お嬢さん？」

とマヤに訊いてきた。

マヤは「お嬢さん」と呼ばれるのが我慢ならなかつたので、皮肉つぽじ口調で

「せつかくのお誘いですが、今は一人で食べたい気分なのでお断りします。それとあたしにはマヤとこいつ目前があります。『お嬢さん』はやめてください」

と言つた。

すねビジュー特肩をすべめ

「じゃあ、またあとでな、マヤ」

と言つてから、自分の料理の入つた盆を持って部屋を出でていつた。

マヤは食事を取り始めた。先ほビジューが毒味をしてくれたとはいえ、少し不安ではあつた。しかし、いかんせんルーミアたちと朝食を取つて以来、何も食べていないのである。いつでも逃げ出せるよう腹八分にとどめなければといふ想いとは裏腹に、口に匙を運ぶ手を制止することはできず、結局、すべての料理を平らげてしまつた。

果たして、料理には毒も眠り薬も入つていなかつた。食後特有の眠気はあつたものの、マヤはそれから数時間、どうにかして「最悪の事態」を避ける手だてをあれこれ考え続けた。その中で彼女は相手の男　どんな男なのかわからないが　を色仕掛けでたぶらかすことも考えた。しかし下手をすると逆にその気をさせてしまつ可能性もある、と思い至り、その案を諦めた。

何度か、部屋の扉を開けて外の廊下を見渡してみた。片隅には常にあの魔道師が立つて睨みをきかせており、廊下を通りては到底逃げ出せそうにない。かといって、窓は小さく、おまけに鉄格子がはめてある。鉄格子はどうやらかといふと、よこしまな男たちがこの部屋にたたずむ女性を狙つて闖入するのを防ぐためのものに思われたが、人一人出入りすることができそうにないのは確かだった。

冷静さを失わないよう心がけてきたマヤも、ここへ来て焦燥感に駆られ始めた。緊張のあまり、部屋にしつらえてあるトイレに2度も行くはめになった。今朝のようにその違和感に浸る余裕もなかつた。

夜も更けた頃、部屋の扉が開いた。遂に相手の男がマヤのもとを訪れたのである。扉を背にして安楽椅子に腰掛けていた彼女は恐る恐る、戸口に立つ男のまゝへ目をやった。

「よう。マヤ

なんと、その男はジユートだった。

「まあ、そういうことになつちまつたみたいだから、宜しく頼むわ」

彼はいつもにやにや顔で、いつもの口調でそう言つた。

マヤは驚くと同時に、心中で苦笑いをした。相手の男が見るからに恐ろしげな風貌だつたらどうしよう、などと考えていたさつきまでの自分と、ジユートならまだマシか、などと考えている今の自分が滑稽に思えたからである。

ジューートは小さなテーブルを挟んでマヤの向かい側に腰掛けた。マヤの見る限り、彼はまったく落ち着き払っていた。おそらくこういつことに馴れきっているのだろう。男だったときも含めてこういうことの経験が全くないマヤは、何か自分が小さくてか弱い存在のようを感じられた。

マヤの緊張をすこしでもほぐしてあげようと考えたのか、ジューートはいつもにやけ顔を、可能な限り優しい笑顔に見せようと努力しながら

「ルーミアって、いい娘だろ」

と話しかけてきた。

マヤは自分の体の緊張が少し薄らいだの覚えながら

「うん。そう思つ

と応えた。「ジューートは……彼女とはどうして知り合いなの？」

「初めてジューートと呼んでくれたな」ジューートは子供のように無邪氣に喜んだ。「ルーミアは、去年まで3年間、王都エランの魔道学校に通っていた。俺はそこで彼女と知り合つたんだ」

「ジューートはエランの人よね？」

「ああ。最初にルーミアに会つたときは別にどうないことない田舎娘つて感じだつたんだけどな。知り合つてゆくうちに、何つて言つか、輝きみたいなものが彼女には宿つてゐつて思えるよくなつてな」

「なんとなくわかる気がする」

「それがどういうわけか、ルーニアのまつも俺にそういう輝きみた
いるものを見るようになつちまつて」ジユートはそこで少し寂しげ
な表情になつた。「でも俺には彼女の輝きはまぶしそぎたよ。受け
入れるだけの余裕はなかつた。だから彼女が故郷に帰つてしまつま
で、俺は彼女をはぐらかし続けた。故郷に帰つてしまえば俺のこと
なんか忘れてくれると思ったから。でも今日会つた限りではそうで
もなかつたみたいだな」

マヤは、ジユートに興味が沸きつつある自分自身に驚きを感じて
いた。その興味が一体どういう種類のものなのか、彼女にはわから
なかつたし考える暇もなかつた。しかしこれだけは言えた。自分は
いま最悪の気分ではない、と。

ジユートは寂しさの余韻のよつなものを引きずりながら「もうこ
の話はよそう」と言つた。マヤは何も答えなかつた。

その部屋には窓が一つしかない。それもごく小さな窓に過ぎない。
おそらく真南に向いているのであるが、その窓から、いまほんの一握
りほどの月明かりが差し込んだ。

ジユートは椅子からまづくつ立ち上がり、マヤのもとへ歩み寄つ
た。マヤはわざと目を逸らし、ジユートのまづを見ないよつにした。
しかし、ジユートがすぐそばまでやつて来て彼女の肩に手をかけた
とき、彼女はその目でしつかりとジユートの顔を見据えた。相変わ
らずにやけていたが、不快な表情には思えなかつた。

そんな二人の様子を見守るのは静かに南天を通り過ぎよつとする

月だけだった。

ふと。

マヤの耳に、ごく小さい、低いうなり声のような音が聞こえた。不思議に思つて耳を澄ましてみると、その音は少しずつではあったが、大きくなりつつあった。

「何の音?」

マヤはジューートに訊いた。しかしジューートは何も答えず、代わりに月明かりの漏れる窓のほうを見上げた。

やがてその音は、うなり声と言つよつは耳をつんざく叫声のような大きさとなつた。それに伴い、その発生源もいまマヤたちのいる場所のすぐ上の辺りだと知覚できるよつになつた。

「何? 何なの」

マヤがジューートに尋ねる声も半ばかき消してしまつた。

次の瞬間、窓から漏れる月明かりが何かに遮られた。その直後、どしんといつ巨大な音と共に、地響きが伝わってきた。

マヤはバランスを失つてジューートのほうに倒れ込んでしまつた。ジューートは彼女を受け止めながら、なおも窓の外へ視線を向けていた。

するといきなり轟音と共に、窓のある側の壁が崩れ落ちた。ジューートはマヤを胸の中に抱いて、飛び散る壁の破片から彼女を守りう

とした。

マヤがそつと田を開けてみると、さっきまで壁だったところに壁はなく、代わりに何にか大きな物体が、壁がなくなつてできた穴をふさぐように鎮座していた。

彼女は田を凝らしてみた。それは竜の頭だった。それも彼女には見覚えのある竜だった。

「ピム……？」

竜はマヤの声に反応して、嬉しそうな表情をした。

マヤは驚きのあまり一瞬、言葉を失つた。

しかも彼女を驚かしたのはそれだけではなかつた。

「マヤー。」

ピムの頭の向こうから聞こえてきたその声はルーニアの声だった。

そこでピムは一田頭を引っ込めた。竜の頭によつて開けられた穴から建物の外を見てみるとピムの背中でルーニアが手を振つているのがわかつた。

「なんてこいつた」ジユートはマヤを胸に抱いたまま嘆いた。「これ
はえらいこ醜きになるぞ」

マヤはやつと、こま自分が何をなさねばならないか思い出した。
「お願ひ、ジユート。あたしを逃がして。あたしは男……の竜騎兵

なんかじゃない。誓つてもいい

ジユートはいつもの姿にや顔で「俺は最初からおまえに乱暴するつもりなんてなかつたさ」と応えた。

「え？」

「俺はそこまで人で無じじゃない。ただバンクつていつ俺たちの隊長がくそまじめで融通が利かねえやつだから、一応、形だけでも調べたことにしてなけりやならなかつたんだ」

「でも調べるのはあの魔道師なんじゃ……」

「ゾイグはああ見えて博打好きでな。俺に50万ベクも借金があるもんだから頭が上がらないのさ」

「そうだったの」

「それに俺は、おまえがヤグソフの異呪で異世界から召還された男だ、なんて思つちゃいない」

「ヤグ……何？」

「しまつた。よけいなことしゃべつちまつた。まあ、とにかく、おまえが女だつてことはアヴィー村でのあの『検査』で十分わかつてたよ

マヤは彼の言つ『検査』が、彼が自分の胸を触つてきたりとを意味しているのだと気づき

「バカ」

と囁つてふくれて見せた。

セレーナ、ピムが再び頭をマヤたちのまくへ伸ばして来た。

「マヤ、早く乗つて」

壁の向こうから聞こえてくるルーニアの声もマヤを促した。

するビジュー＝トはマヤをひょいと抱き上げた。いわゆる「お姫様だっこ」といひつである。マヤは恥ずかしかったので抵抗しようとしたが、ジュー＝トは有無を言わさず彼女をピムの頭に乗つけてしまつた。

「騒ぎがここまで大きくなつた以上、今はこの竜で逃げた方がいい。この城にも3人ほど竜騎兵が駐屯しているから追つかれることになるかもしねないが、大丈夫、俺とゾイグがおまえは女だつたと隊長に報告すれば、追撃は中止されるだろ」

「わかつたわ」

「マヤにはまたいづれ会うこともあるかな」ジュー＝トはワインクして見せた。「ルーニアに宣じぐ。それと……今日の続き、おまえさえよければ俺はいつでもいいぜ」

「バカ」マヤはまたふくれつ面をした。

ピムは首をひねつて自分の背中近くに頭を持つていつた。マヤが頭の上から背中に飛び降り、ルーニアに抱きとめられると、ピムは

翼を大きく広げ、夜空へと舞い上がった。

ルーニアはピムの首の根もと付近にまだがり、マヤも自分の後ろにまたがるよつとつた。そこには突起よつなものがいくつか付いていて体がある程度固定することができるのだといつ。マヤは言われたとおりにした後、最後にもう一度、城の壁に開いた穴に手をやつた。しかしそこにジユートの姿を確認することはできなかつた。

ファクティム城が小さなミニチュアのよつと見える高さにまでピムが達したとき、ルーニアは「遅くなつてごめん」と謝つた。「マキナスの森の奥でピムを見つけるのに手間取つちゃつた。日が沈んでからやつと会えたんだけど、それからここまで飛んでくるのにも、あたし、竜の操縦なんてやつたことなかつたから、上手くいかなくて」

マヤは心の底から「ありがと」と言つた。「あたしのためにそこまでしてくれるなんて。あたし、ルーニアには一生かかつても返しきくせないほどの恩を受けちやつたわね」

ルーニアは首を振り「あたしは自分にやれる」とをやつただけ。やつてあげたいと思ったことをやつただけよ」と応えた。

「でも、よくわかつたわね、あたしのいる場所が」

「それはピムのお陰よ。竜には、ある程度の範囲内なら遠く離れた人の位置を感知できる能力があるの。もっとも相手が気に入つた人でないと、そこへ向かつてはくれないでしょ」つねび

「やうなんだ」

マヤはそこで、ジユートがさつき言つたことを思い出し、今やマチ箱ほどの大さになつてしまつたファクティム城の方を振り返つた。案の定、ファクティム城から3匹の竜が舞い上がるのが見えた。

ルーニアもすぐ「それに気づき、ピムに「もっと速く飛んで」と声をかけた。しかしピムにはその声が通じないのか、いつにいつ速度を上げようとしなかつた。

追っ手の3匹は「とも簡単にピムに追いつき、とも簡単に包囲してしまつた。そのうちの1匹の背中から投降を促す竜騎兵の声が聞こえる。もちろん女の声である。

ルーニアは何度も「ピム、ピム」と呼びかけたが、ピムの反応は鈍かつた。

その間にも追っ手たちの包囲の輪は狭まりつつあった。竜騎兵の一人が弓を構えこむらを狙つてゐる。

業を煮やしたマヤはルーニアの真似をして

「ピム、お願い。もっと速く飛んで」

と頬を張り上げた。

するとどうだろ。

今まで「」バイクほどだつたピムの飛行速度が突如、軽飛行機なみの速度に上昇したのである。マヤとルーニアは首もとの突起につかまつて振り落とされないようにするのに必死だつた。

追っ手の竜は、当然の如くはるか後方に置いてきぼりにされた。

加速による衝撃が収まった後、マヤはルーミアと顔を見合させた。もしかしたらピムはマヤの言つことならよく聞くのかも知れない。あるいは、マヤには竜を操る天賦の才があるのか。

彼女たちが驚いている間に、追っ手の竜が速度を上げ、すぐにまた追いついてきた。竜騎兵は竜を操るプロなのだからそれぐらい造作もないことなのだろう。

マヤはルーミアに「代わって」と言つてまたがる場所を彼女と交代した。竜の「操縦席」から前方の夜空を見渡すと、久々に彼女のパイロット魂が呼び起された。「とまれ」「右へ曲がれ」「左へ曲がれ」「上昇しろ」などといふ基本的な命令を2、3度試しただけで、彼女はすぐにそのタイミングとコツを掴んだ。

その後はピムの独壇場だった。

ピムはまず、小さな宙返りをして追っ手の一匹の背後を取つた。ピムがその翼に噛みついた途端、その竜は悲鳴を上げ、ファクティム城方向に撤退していった。

次にピムは、残りの2匹が挟み撃ちを敢行すべく迫つてくるところを見計らつて、突然、高度を下げた。竜騎兵たちがピムを見失っている隙に、マヤはピムに、片方の竜の腹へ尻尾のむちをお見舞いするよう命じた。腹に一撃を食らつた竜は苦痛に耐えきれず、操縦する竜騎兵の制止を無視してその場から逃げ出してしまつた。

一人残された竜騎兵は形勢不利と見たのか単に怖じ氣づいたのか、

戦わずして竜の頭をファクティム方向へ向けてしまった。

「やったわ！」

マヤの喜びようは、言葉こそ女言葉だつたが、彼女の取つたガツツポーズには、少年と言つよりむしろやんちゃ坊主のような無邪気さがあった。

5 娘として姉として

その長い一日はマヤ　　山矢健太にとって生涯忘れ得ぬ一日となつた。

追つ手の竜を撃退した後、彼女はルーミアを送り届けるため取り敢えずアヴィー村へ向かうことにした。マヤの操縦するピムがアヴィー村に到達するにはわずか30分ほどしかかからなかつた。時速百キロを越える速度で一直線に飛んできたのだから当然と言えば当然である。逆の見方をすると、ルーミアがファクティムまで飛んでくる際、いかに遅い速度で、いかに右往左往したのかがわかる。

アヴィー村では、深夜にもかかわらずルーミアの父と数名の村の男たちが彼女たちの無事の帰還を歓迎した。父の口振りから、ルーミアが彼の反対を押し切つてマヤを助けに来たのは明らかだつた。マヤは今一度ルーミアに礼を言い、アヴィー村の村民に迷惑をかけたことを謝罪した後、ピムとともにマキナスの森の奥へ飛び去ろうとした。お尋ね者の自分が村に滞在しては村の人々に更に迷惑をかけることになると考えたからである。

しかしルーミアの父を始めその場にいた他の村民たちはみな、マヤが身を隠す必要はないと主張した。そもそも今回の一件については、マヤを男の竜騎兵だなどと疑い、あまつさえ非道い方法でそれを確かめようとしたジューートたち調査隊が一方的に悪いのだ、と。

マヤはそれを聞いて、ますます自責の念に駆られた。調査隊の疑惑は全く的外れというわけではないのである。彼女は村民たちに身を隠すことの妥当性を説明するため、もと男だったという事実を打ち明けようとした。

そのときルーミアの父が言った。マヤに一体何の罪があるのか、と。彼はマヤが元は男だったことを知っている。その言葉には、たとえマヤが男だったことが事実だとしても「生け捕り」にされるようないわれはないのだ、といふ意味が込められているようだった。

マヤはそれ以上反論しなかった。元は男だったことも村民たちには言わないことにした。ルーミアの父が、言うべきではないと田で訴えてきたからである。

彼女はピムに森の奥へ帰るよう命じ、村民たちに出迎えてくれたことへの礼を述べた後、ルーミアと父と共にクフルツ白魔道診療院へ帰った。ルーミアはマヤの表情に疲れの色を見て取ったのだろう、すぐさまマヤを、ひと月も前から彼女のために用意しておいたという部屋へ案内した。マヤが部屋を見渡してみると、ピンク地に水玉模様のカーテンが窓にかけられ、それと同じ柄のベッドカバーがベッドを覆い、リボン付きのかわいらしいワンピースが壁に掛かっているのが目に付いた。ルーミアは2日前までマヤを正真正銘の女だと思っていたのだから無理からぬことではあった。

マヤはルーミアにお休みを言ってから、念のためトイレに行くことにした。眠気によつて感覚が鈍つているだけなのか、早くも神経が肉体に適応しつつあるのかはわからなかつたが、今朝のような違和感はあまり感じられなかつた。

彼女は部屋に戻り、ベッドに倒れ込むや否や眠りに落ちた。こうしてその長い一日は終わりを告げたのだった。

それからの半月は「マヤ」にとってもつとも幸福な時間だったかもしれない。

彼女はじく普通の村人として生活した。居候させてもらひのと引き替えに、診療院の家事一切を引き受けたことにしたのである。ルーミアも父も白魔道士としての仕事があるため、急病人が出たりするなどどうしても家事がおざなりになる。そういう意味で、マヤの存在は彼らにとってありがたいものだった。マヤのほうも、自分が必要とされていふと思うと肩身の狭い思いをせずにすんだ。

マヤは、料理は全くやったことがなかつたので、ルーミアや近所のおばさんたちに教えてもらひながら少しづつ覚えてゆくしかなかつたが、掃除や洗濯は、こちらの世界のやり方に戸惑いながらも、元来綺麗好きだったこともあってすぐにマスターすることができた。一度、川で洗濯をしている時に村の女たちに「これならいつでも嫁に行ける」と太鼓判を押されてしまい、返答に困つたこともあつた。

暇なときには、マキナスの森に出かけてゆき、ピムとの親交を深めた。ルーミアも手が空いているときには同行した。その背中に乗つて空を飛ぶこともあつたが、あまりあちこち飛び回るとファクティム城の兵を刺激する恐れがあつたため、マキナスの森付近から出ることはなかつた。

とはいゝ、空を飛ぶのは気持ちがよかつた。生活習慣はおろか肉体まで別の中に変化してしまつたマヤにとって、ピムを操縦している間だけが、元の自分をわずかでも取り戻せる瞬間だつた。彼女は山矢健太だつたときアクロバット飛行競技会で優勝を期待されたほどの飛行テクニックを持っていた。飛行機という無機物から竜と

いう有機的なものへと飛行手段を乗り換えた今、彼女のテクニックはその飛行ぶりに、よりダイレクトに現れた。ピムは彼女と一緒になった。言葉で命令されなくても、首の根元にまたがる彼女の体重のかけ具合から彼女の意図を察知することさえできるようになった。それはもやは飛行する竜というより、優雅に空中を舞い踊るバレリーナながらであった。

あるとき、マヤはルーミアに言つた。自分はこの飛行テクニックを生かして竜騎兵になつてしまおうか、そうしてお金を稼げばルーミアたちに治療代を返すことができるし、住むところも確保できて治療院に居候せずにする、と。

しかしルーミアは言下に反対した。マヤを戦場になど行かせたくないし、またいまマヤがうちに家事をしてくれていることがある意味で治療費の返済になつていて、と。

「それに、あたしはマヤを居候だなんて思つていなかから

彼女は最後にそう付け加えたのだった。

ファクティム城でのような事件を起こした以上、当然、アヴィー村に対し何らかの反応があることが予想された。早ければ事件後一両日以内にファクティムから使いが来てもよさそうなものだったが、意外にも一番最初の反応は一週間後のことだった。

クフルツ治療院の扉を叩いたのは、ファクティム城に駐在する騎士隊の指揮官と称する男だった。彼は一つの用件を述べた。一つ目は、マヤにあらぬ疑いをかけ、無礼きわまりない扱いをした先日の調査隊の件であった。

彼は何度も何度もマヤに謝罪したうえで「我々も調査隊のやり方に疑問を持っていたものの、彼らは国王陛下の勅書を持っていたため抗うことはできなかつたのだ。本来であれば、調査隊の隊長をここへ連れてきて直接謝らせるべきなのだが、彼らは調査を続けるためにもう次の地区へ向かつてしまつた」と述べた。

クフルツ先生とマヤと共にその話を聞いていたルーミアは、指揮官の言葉の最後の部分にがつかりした様子だつた。もしかしたらまたジコートに会えるのでは、と期待していたのかもしれない。

指揮官は次にマヤの体のことを気遣つた。マヤは乱暴されたのだと彼は信じているのだつた。マヤがわざと不機嫌そうな顔をして「大丈夫です」と答えると、指揮官はほつと胸をなで下ろした後、一件の用件を切り出した。

「君、竜騎兵にならなか?」

その一言はマヤたちを驚かせるのに十分だつた。

指揮官は先日、マヤが追つ手を振り切つたときの状況を竜騎兵たちから聞かされて彼女の飛行技術に惚れ込み、ぜひスカウトしたくなつたのだと理由を述べた。

マヤはその話に関心を抱き、待遇などについて指揮官に説明を求めるよつとした。ところがルーミアが

「ダメよ、マヤ!」

と言つてまたも頑強に反対した。彼女はよほど戦^{たたか}が嫌いらしい。

結局、その話はルーミアの反対によってお流れとなつた。

その夜、クフルツ先生がマヤに持かけたのは、嬉しい話だつた。自分の養女にならないか、というのである。少なくともこの世界では、マヤは誰一人身寄りがないことになる。身分を問われたときいちいち東洋から来た云々と言い訳するよりも、白魔道士バーン・クフルツの娘だと答える方が手っ取り早いだろう、と。

今度はルーミアも反対しなかつたのは言つまでもない。それどころかマヤと同じく、いやマヤ以上に大喜びした。彼女が前からほしいと思つていた姉が本当にできるとこだらう。

マヤが承諾すると、クフルツ先生は「では公主のところに届けを出しておこう」と言つた後で、これからは自分のことを父と呼ぶよつこマヤに命じた。そのうえで

「おまえはわたしの子供なのだから、この家にいて当然なのだ。一度と自分は居候だ、などと言わぬよう」

と言ひ足した。マヤが常口頭、この家に置いてもらつてこる」とを申し訳ないと言つてゐることに対する、彼なりの配慮だつた。

マヤは本当に嬉しかつた。どうやつたらこの恩返しができるだらうか、もう一生かかつても無理かもしけない、と思つた。今までることは、クフルツ先生に對してはその子供として、ルーミアに對しては兄弟?として、普通に振る舞つてあげることだけだ、とも思えた。

それからの一週間はまた平穀無事に過ぎ去つた。

クフルツ先生は村人に、マヤは自分の娘になつたと紹介した。マヤもクフルツ先生のことを「お父さん」と呼ぶようにした。村人たちもマヤが東洋人であることなど全く意に介することなく、ごく自然にクフルツ家の娘として扱つた。

ルーミアもマヤを「お姉ちゃん」と呼んでよいかと訊いてきた。しかしマヤは、これに関してはいささか抵抗がなくもなかつた。実際のところ、彼女はそれまで毎日ズボンをはいて過ごしていたし、トイレも馴れてしまえばそれほど気にはならなかつたので、着替えたり入浴したりするときを除けば、自分が女なんだと意識させられることは、それほどなかつたのである。

ルーミアはマヤの怪訝そうな顔を見て、いつものように「嫌ならやめるけど」とはつきりと断つた。ルーミアのマヤに対する態度はあの「儀式」の日以来一貫している。ルーミアはマヤをありのまま受け入れていた。マヤを男としても女としても扱わなかつた。どちらかとして扱わなければならぬときは明快な選択肢を与えた。

マヤはちょっと迷つた末、ルーミアに自分を「お姉ちゃん」と呼ぶことを許可した。クフルツ先生や村人たちが自分を「クフルツ家の娘」「ルーミアの姉妹」として受け入れてくれたのに、自分だけ裏切るわけにはいかないと思つたからである。

そのときのルーミアの喜びよつは、まさに、ほしい玩具をやつと与えてもらえた子供のよつなあどけなさで一杯だつた。マヤはルーミアの笑顔を見ていると、彼女は本当の妹で、自分は本当の姉兄ではなく　　のような気がしてきた。

しかし　　マヤはある夜、部屋で一人呴いたのだった。

俺はいま男なんだろうか、女なんだろうか

彼女は突然、立ち上がり、壁に掛かっているワンピースを手に取った。ルーミアは言っていた。このワンピースは本来、「儀式」のときマヤに着せるつもりだったのだが、マヤが実は男だったことを知り、その心情を察してこれの代わりにズボンをはかせたのだ、と。この半月の間、マヤはやはり着る気にはなれず、壁に掛けたまま放置してあつたのである。

初めてスカートをはくのは、さすがに恥ずかしかった。自分がこんなものをはいていいのだろうか、という後ろめたい気持ちもあつた。しかし着終わって、部屋の壁に付いている大きな鏡に全身を映してみると、そこには故郷の街でもよく見かけたような、ごくごく普通の日本人の少女の姿があつた。あまりにも違和感がなかつたので、後ろめたさなど感じた自分が滑稽にさえ思えた。

彼女はワンピースを着たまま、ベッドに仰向けになつた。もしいつか元の世界へ帰る方法が見つかり、無事に帰ることに成功したとして、そのとき俺はどうしたらいのだろう。父や母は自分が山矢健太だと信じてくれるかもしないかもしないし、信じてくれないかもしない。信じてくれた場合は、病院で「男に性転換」してもらい、ある程度もとの生活を取り戻すことができるかもしれない。信じてくれなかつた場合、俺は戸籍のない不法入国者のような存在となり、一生、日陰者として暮らすことになる。それも女のまま。もちろん再び飛行機の操縦桿を握るなどということはできないだろう

彼女はそこで寝返りを打つた。窓からは今日も満月が顔を覗かせている。もつとも、ウサギの餅つきに見えるという表面の模様は完全に姿を隠していた。その状態をこの世界の人々は「新月」と呼んでいるのだった。あるいはこの世界で男に戻る方法を見つける

とこう手もある。コンピューター・ネットワークに覆い尽くされるいる元の世界とは違い、この世界では地球の裏側がどうなっているのかさえよく知られていない。この世界の隅々まで探せば男に戻る魔法か何かを発見できるかもしれない。しかしそれは雲を掴むような話だ

彼女はベッドから起きあがり、もう一度鏡の前に立つて最初の質問を繰り返した。俺はいま男なんだろうか、女なんだろうか

目を閉じて、通っていた高校の風景を思い起こしてみると、そこには日に焼けた相良美玖の顔があった。彼女に対する想いは今も変わっていない。俺はまだ完全に女になってしまったわけじゃない

次に目を開けて鏡の中の少女を見つめながら、半月前、一緒に水浴びをしたときのルーニアを思い出してみた。透き通るような白い肌、スレンダーなボディに豊満なバスト。いま考へてもうひとつする。でも……でも、本来の俺ならついつりするだけじゃないはずなんだ

マヤは慌てたようにワンピースを脱ぎ始めた。自分の精神的变化がこれから行き着くであろう結末を想像すると、恐ろしくなってきだからである。クフルツ先生は言っていた。俺は白魔法で再生されたとき、魂も肉体も女となつた、と。肉体には当然、脳も含まれている。俺はいつの日か、脳に宿る女の本能に命じられるまま、男を求めるようになるのだろうか

彼女は恐る恐る、女になつてから今までに出会いた若い男たちを頭に思い描いてみた。幸いにして、と言つべきか、アヴィー村にはそういう男はあまりいなかつた。いたとしても家が離れていてあまり

会つたことがなかつたため、具体的なイメージが沸かなかつた。はつきりとイメージできる若い男といえば……

ジユート……

半月前、ジユートに抱かれることを強制されそうになつたとき、彼女は確かに、彼を受け入れてもいいような気がした。しかしそれは避ける方法が他になかつたからそうなつてもやむをえないと思つたのであつて、積極的に望んだわけではない。

「でも、もしごく先に会つたとき彼に求められたら、あたしは……」

そこから先を考える勇氣は、彼女にはなかつた。

ふとそのとや。

半月の間、記憶の彼方に忘れられていたその一言、もしかしたら彼女の運命を動かすことになるかもしれないその一言が彼女の頭をよぎつたのである。

『それに俺は、おまえがヤグソフの異^{いじゆ}呪^ので異世界から召還された男だ、なんて思つちやいなー』

それはファクティム城からの去り際、ジユートの口から漏れ出した言葉だった。

マヤはすぐさま居間へ向かつた。今や彼女の養父となつたクフルツ先生はこの時間、居間に佇んでことが多い。行つてみると、案の定、彼はそこにいた。疲れているのか、やや表情が硬かつたが、話を聞いてくれる余裕がないほどではないよう思えたので、マヤ

は用件を切り出さ」とした。

「ねえ、お父さん、『ヤグソフの異呪』って何?」

養父バーン・クフルツは「ヤグソフとは、ハバリア帝国を陰で操っていると言われる怪僧の名前であり、異呪とは怪僧ヤグソフの使い、得体の知れぬ魔法のことだ」と応えた。

つまり話を総合するとこうなる。1.怪僧ヤグソフとやうは異呪を用いて何らかの理由で男を異世界から召還したらしく。2.国王陛下の勅命を帯びたジューートの口からその言葉を聞かされたといふことは、ハラーニア王国の中枢部もそのことを察知しているらしい。そして、3.マヤはその異呪とやらで召還された可能性が高い。

養父は言った。「ということは、ハバリア帝国に行けば、マヤが異世界から飛ばされた原因を突き止めることができるかもしない。しかしいまこのホラーニアとハバリアは戦争の真っ最中だ。そうでなくとも閉鎖的といわれるハバリアに、マヤが侵入できる見込みは少ない」

マヤは訊き返した。「じゃあ、ハラーニアのまつは・ハラーニアの中核に近づく方がまだ簡単なんじゃないの」

養父は「いざれにせよ容易なことではない」と応えたきり黙ってしまった。

マヤはもつと情報を引き出したかったがそれ以上は無理だと判断し、諦めた。と言つより、養父がやはり元氣がないよつて見えたため、そひひのまづが心配になつた。

「お父さん、何かあつたの？あたし、お父さんの娘なのよ。心配事があるなら遠慮なく相談してよ」

マヤにそう言われて、養父は少しためらつた後、一枚の書類を取り出してマヤに見せた。マヤは最近よつやく読めるよつになつたエラン文字を一つ一つ目で追つていつた。

「召集……令状？」

養父は説明した。「アヴィー村を含めた近隣3か村のうちから誰か一人、戦場に赴かなければならぬことになつていて。もつすべ、騎士として出征していた隣村の男が帰つてくるようだ。代わりにこのアヴィー村からわたしが野戦医務要員として戦場に行かなければならぬ。これは順番で決まつていことなのだ」

「でもそつしたら誰がこの診療院を守るの？誰がアヴィー村の人たちの病気や怪我を治すの？」

「わたしもそれが心配だ。この近くの村には他に診療院はないからね。だが、決まりは決まりだ。従わなくてはならない」

「他人と代わつてもうつわけにはいかないの？」

「誰が好きこのんで戦場に赴くだらう？それに、これはクフルツ家に割り当てられた義務なんだ。他家の者に代わつてもうつことはできない」

いつの間にか、傍らにルーミアが立つていて、マヤたちの声を聞きつけて話に加わりに来たらしく。

「お父さん、戦場に赴くつじでひこひーとへ。」

開口一番ルーミアはそう言った。口振りからすると彼女も召集令状の話を知らなかつたようである。

父はルーミアに、今し方マヤにしたのと同じ話をした。すると、戦嫌いのルーミアは泣き出さんばかりの表情で父の出征に異を唱えた。父は、ルーミアがいくら反対したところで決まりなのだからどうしようもないと言つて彼女をなだめた。それからしばらくの間、父娘は虚しく悲しい堂々巡りの議論を続けた。

しかしマヤは胸に期するものがあつた。それは現在、彼女が抱えている諸問題をいつぺんに解決する可能性をはらんだ妙薬 あるいは劇薬 のようなものだつた。たとえ今の平穏な生活に終止符が打たれることになるとしても、彼女は敢えてそれを飲み干す必要があつた。

「儀式」からちょうど半月後のその日、マヤは午前中からどこかへ出かけてしまつた。ルーミアは「お姉ちゃん」が家事をさぼつてしまで出かけてしまつたことを少し不審に思いながらも、白魔道師としての日常の仕事を淡々とこなしていった。

しかし昼食時「お姉ちゃん」がルーミアと父に打ち明けた話は、不審どころか、まさに青天の霹靂だった。

「あたし、やつをファクトリーム城に行つて竜騎兵隊への入隊手続きをしてきた」

ルーミアは驚くと同時に、とてつもなく腹を立てた。「お姉ちゃん、どうして！？あたしがあれだけ反対したのに！」

マヤは妹のその反応を折り込み済みだつたので、動搖することもなく話を続けた。「よく聞いて、ルーミア。あたしは入隊に同意する代わりに一つの条件を出したの。それはあたしが入隊することで、クフルツ家に割り当てられた出征義務を果たしたことにしてほしい、チャラにしてほしにっていうことなの」

今度は彼女の養父が驚きの声を上げた。「なんてことを…前にも言つただろう、おまえはわたしの娘なんだ。わたしは父として、おまえを危険な戦場へ行かせるわけにはいかんのだ」

しかしマヤは引き下がらなかつた。「あたしがもといた世界に帰るには少しでもヤグソフに近づかなければいけない。ここでじつとしていても始まらないわ。それにクフルツ先生…お父さんは優秀な白魔道師で、この村の人たちに必要とされてる。お父さんこそ戦場になんか行つちゃいけない」

父は表情に苦渋の色をにじませながら、しかし有効な反論を思いつくわけでもなく黙り込んでしまつた。一方、ルーミアは完全にへそを曲げてしまい、ふくれつ面のままそっぽを向いた。

しばらく沈黙が続いた。

それは重苦しい沈黙だつた。しかし、マヤにとつては自分が前進するために乗り越えなければならない障害の一つなのである。彼女

は敢然と胸を張り、前を見据えて自分の決意が固いことを示した。

ところが。

沈黙を破ったのは意外にも、マヤでもルーミアでも父でもなく、空から聞こえてくる低いうなり声のよくな音だった。

「竜の飛ぶ音……？」

マヤはそう呟いた。彼女を始めルーミアも父もだんだん大きくなりつつあるその音に、ただならぬ気配を感じていた。アヴィー村の近辺では、たまに野生の竜が飛び回ることもあるし、荷物を運ぶ運送竜が悪天候を避けてこの上空を飛ぶこともあるが、いずれにせよ単独かせいぜい2匹編隊に過ぎない。しかし、今聞こえてくる音は……

「これは……少なくとも5匹以上の編隊だわ！」

叫ぶや否や、マヤは居間から玄関を経て家の外へ飛び出し、空を見上げた。推測通り、5匹の竜が悠々と旋回している姿が目にに入った。

彼女はすぐさまマキナスの森へと走った。理由はわからなかつたが、あの5匹の竜は良い目的でここに来たわけではないような気がしたからである。

泉のほとりに辿り着いたとき、彼女の目に予想外の光景が飛び込んできた。森のずっと奥を住処としているピムが、彼女が来るのが最初からわかつていたかのように、人里に近いこんなところにまで出てきていたのである。もしかしたらピムもあの5匹の竜に何か良からぬものを感じ取っていたのかもしれない。

「マヤは驚く間も惜しんで素早くペームの背に飛び乗り、「上昇つ！」と命じた。たちまちマキナスの森は眼下に広がる箱庭となる。もつとも彼女がいま田を向けなければならぬのは下の景色ではなく上空である。

上空を漂っていた竜たちは、ペームが上昇してきたのに気づき、そのうち3匹がペームを取り囲むように体を寄せってきた。見ると、竜たちはいずれも胴体と翼の一部、それと頭部全体を鉄の板で覆っている。いままで何度か話には聞いていた装甲竜に違ひなかつた。

その背にまたがる女たちはみな黒っぽい衣装を身につけていた。しかしマヤの前方に立ちはだかった竜だけは、薄緑色の派手な衣装に身を包んだ竜騎兵に操られていた。雰囲気からして彼女がこの編隊の隊長らしい。

彼女は鷹のような鋭い目つきでマヤを睨み付け

「おまえは何者だ？」

と声を張り上げた。その発音には少し訛りがあつたが、声のトーンから判断する限り、マヤとそれほど歳の変わらない少女ではないかと思われた。

マヤは憶することなく「人に名前を尋ねるとさまず自分から名乗りなさいー」と言い返した。

「これは失礼」少女は不敵な笑みを浮かべながら応えた。「我はヤグソフ四姉妹の末妹、ニーナ。あるお方をお迎えするために、ハバリア帝国の帝都ドゥムホルクからわざわざこんな田舎にまで出向い

てきた。Hラーーーアのへなちょこ防空網を突破してな

「ヤグソフ……ですってー？」

「見たところおまえは東洋人のようだが、あいにく我らが探しているのはおまえのような女ではなく、男の東洋人だ。おまえになど用はない。引っ込め」

「Hのアグニ村には男の東洋人なんていないわ！帰つて！」

「ほう、我らにたてつくというのか。しかし我らは、男の東洋人がこの近辺に降り立つたという確かな情報を握っている。隠し立てしても無駄なことだ」

「知らないものは知らない！」

「そうか。では誰かが本当の話をしてくれるまで忍耐強く待つとしよう。それまでに何軒の家が燃えることになるのかな」

——ナと名乗ったその少女が竜騎兵の一人に目配せすると、その竜騎兵は高度を下げ、火矢の付いた弓をアグニ村の民家に向けて構えた。脅しではなく、今にも本当に火矢を放つてしまいそうに見えた。

マヤは「ピム、下降！」と叫んだ。するとピムは、火矢を構える竜騎兵めがけて弾丸のごとく一直線に下降してゆき、マヤの「体当たり！」の声と共に相手の装甲竜の横つ腹、装甲の薄い部分に自らの体をぶつけた。予想外のダメージを受けた装甲竜は制御不能となり、苦しそうにつめきながら高空へ逃亡してしまった。

ルーニアは家の前で父と共に、ピムが5匹もの装甲竜相手に互角の空中戦を演ずるさまを眺めた。他の村人たちとは、先ほど火矢で家を狙われたことから上空の竜騎兵が招かれざる客であることを悟り、森への避難に大わらわだった。しかしルーニアと父だけは逃げようとしなかつた。マヤが負ける気がしなかつたからである。

それから30分後のアヴニ村上空の光景は、ルーニアたちの予想した通りのものだった。4匹の装甲竜はすでに撤退したか戦闘不能に陥つており、二ーナ隊長を乗せた一匹も、その場に踏みとどまつていたものの、翼から血を流していた。

「おのれ」二ーナは悔しさに顔を引きつらせた。「おまえごときにしてやられるとは、何たる不覚。だが覚えておれ、今度会つたときは今日のようにはゆかぬぞ」

彼女はその言葉をマヤに言い捨てると、ハバリア語と思われる単語を叫んで竜に向きを変えさせ、北の方向へ去つていった。

3日後、竜騎兵隊への入隊のためにマヤがアヴニ村を去る日が来た。

村人全員が彼女を見送るために広場に集まつてきた。中には涙を流して別れを惜しむ者もいた。もちろん養父バーン・クフルツの姿もその中にあつた。彼は3日前の空中戦の後、すぐにマヤの決心に理解を示したのだった。

しかしルーニアの姿はなかつた。彼女はあれ以来ずっと口を聞いてくれない。この世界で一番理解し合えると思っていた義妹とこんな形で別れることになるのは、マヤにとって身を切られるほどつらいことだった。

別れ際、養父は「この世界では、この村があまえの故郷だ。クフルツ診療院があまえの帰るべき家なのだ。帰りたくなつたらいつでも帰つてこい」という言葉をマヤにたむけた。

マヤは今一度村人たちにほうを振り返つて別れを告げた後、アヴィ村を後にした。

ファクティムにはピムも同行することになつてゐる。竜騎兵の乗る竜は通常、竜騎兵隊側で用意してくれるのだが、竜を飼い慣らしている者は自分の竜に乗つてきても構わないのである。マヤは出発前にあらかじめピムをマキナスの森の泉のあたりに待機させておいた。

ところが、彼女が泉のほとりにまで来てみると、やいじなピムの他に一人に人物が待ちかまえていた。

「お姉ちゃん」

そのうちの一人はルーニアだった。彼女は嬉しそうに微笑みながら

「見て、これはあたしからのプレゼント」

と、ピムの頭を指さした。

ピムはその頭に赤い帽子のようなものをかぶつていた。よく見る

と、それは帽子ではなく、頭部を覆う鉄の装甲だったのである。

「……で、ルーニアの傍らにいたもう一人の人物も口を開いた。「いやあ、大変じゃったわい」

マヤはその人物が誰なのかよつとへ思い出した。彼は確か、鍛冶屋をやつているお爺さんだつたはず。

彼はマイペースで話し続けた。「ルーニアが3日前いきなりウチを訪ねてきたんじや。竜の墜落現場から集めたあの鉄板を加工して竜の装甲を作つてくれ、なんて言われたときはどうじようかと思つたわい」

ルーニアが彼の言葉を補足した。「残念だわ。やつぱり3日では短すぎた。お爺さんにだいぶ無理してもらつたんだけど、それでも頭の部分しか完成しなかつた」

「ルーニア……」

マヤは感激のあまり言葉に詰まつた。あの装甲は彼女が山矢健太だつたとき乗つっていた複葉機の破片でできている。彼女がいつまでも愛機と一緒にいられるようこの、ルーニアの心配りだったのである。

「ありがとうございます、ルーニア。あの装甲をあなただと思つていつまでも大切にするわ」

彼女はさう言つて「妹」の手を取り、別れを惜しんだ。

しかしルーニアは「姉」のその言葉を聞いて、おかしなことを言

いだしたのだつた。

「装甲だけ？ あたしは大切にしてくれないの？」

マヤは意味がよくわからなかつたので、怪訝そうな表情でルーミアの顔を見返した。するとルーミアはいたずらっぽい笑みを浮かべ、そそくさとピームの背中に乗り込んでしまつた。

なおも納得できなこマヤはピームのそばまで歩み寄り、そのいたずらな妹に

「どうこいつ」とへ。

と尋ねた。

ルーミアは答えた。『3日前、お姉ちゃんはお父さんに言つたわよね、『お父さんは優秀な白魔道師で、この村の人たちに必要とされている』つて。あたし考えたの。あたしは誰に必要とされているんだろうつて。あたしは女性白魔道師だから魂を再生するほかは、せいぜい怪我の応急処置ぐらいしかできない。魂の再生つて言つても本来の寿命が延ばせるわけじゃない。不慮の事故や病氣で死にかかる人の魂を呼び戻すことができるだけ。アヴィー村では不慮の事故なんて滅多に起こらなこいし、起こつたとしても女性白魔道師はあたしの他にもいる。だからあたしはあたしを必要としてくれる人がたくさんいる場所 戰場へお姉ちゃんと一緒に行く決心をした。出征する騎士や竜騎兵には従者が一人ついていてもよいことになつてゐるから』

「でも……ルーミアは戦が嫌いだつたんじやなかつたの？」

「あたしは白魔道師としての仕事に誇りと責任を持っているつもり。自分の好き嫌いを優先させようとしたのは間違いだったわ」

「お父さん……クワールツ先生はいることを知ってるの？」

「わざわざ聞いた。反対してたけど、お父さんはあたしのことわかつてくれてると思う」

「やつ……」

マヤはもつ一度妹の田を見つめた。彼女の決心は固そうだ。それに自分自身も反対を押し切った手前、ルーニアに強くは気が引けた。

「じゃ、一緒に行こ」

彼女はやつてペムの背中に飛び乗り、首の根元にまたがった。ルーニアもその後ろに腰を下ろし、じつかりと姉の体につかまつて飛び立つ際の衝撃に備えた。

マヤは鍛冶屋のお爺さんに「ありがとうございます。さよなら」と声をかけてから、ペムに上昇を命じた。

ペムは翼を大きく広げ、ゅうくっと、しかし力強く大空へと舞い上がった。その日の空は雲一つない快晴だった。

6 ファクティム

妹ルーミアと共にファクティムにやってきたマヤ・クフルツが、一人前の竜騎兵なるまでには、いくつかの「試練」を乗り越える必要があった。

実際のところ、マヤは山矢健太だつたとき一介の高校生でしかなかつたわけだし、また、竜騎兵への入隊も、竜の操縦テクニックが生かせそうだという安易な動機と、何となくヤグソフとやらに近づけそうだという漠然とした目的があつたからに過ぎない。しかし言うまでもなく、彼女はこれから軍隊に入隊しようとしているのである。アクロバット飛行競技選手だつたころは、飛行テクニックを磨きさえすれば「一チや周りの人間が「ちやほや」してくれた、といふ面がないではなかつた。そのうえ、彼女はそれまでアルバイトすらやつたことがなかつた。やや大袈裟な言い方かもしれないが、彼女の前には竜騎兵以前に、軍隊以前に、「世間」という壁が立ちはだかつたのだつた。それが彼女にとつての第一の試練だつた。

上空からファクティム城を見下るすと、城壁の内側にだだつ広い空き地のような場所があつた。マヤはそれがいわば「竜のためのヘリポート」なのだろうと判断し、ピムをそこへ降下させた（後で聞いたことだが、そのような場所のことをこの世界では単に飛行場と言つらしい）。すぐさま背の低い、恐ろしく無愛想な中年男がやってきて、竜を待機させておくスペース 駐竜場 を指さし、ピムを移動するよう命じた。マヤは言われた通りにした後、これから自分はどこへゆけばよいのかとその男に尋ねた。ところが男はあからさまに面倒臭そうな顔をして城の建物の入口を顎で指し示しただけだつた。マヤとルーミアは小声で礼を述べてから、不安をうち消し合つようになつたりとお互の肩を寄せて入口のほうへ歩いてい

つた。

入口の前に立つ兵士には入口横の詰め所へ行くよう言われ、詰め所では文官と思しき男に入隊書類の提出を求められた。書類を提出した後、今度は椅子以外何もない個室に案内され、しばらく待つよう言われた。一時間近く経つてからやつと、これまた愛想のない中年の女官が現れた。彼女は自分の仕事の忙しさについてぶつぶつと不平をこぼしながら、二人を城のずっと奥のほうにある部屋へ連れてきた。部屋は一段ベッドが一つ置かれただけの粗末な二人部屋だつた。女官は「この部屋があんたたちの部屋だ」と言つて、しかめつ面のまま足早に去つていた。

マヤは不安で一杯の胸をおさえながらルーミアと顔を見合させた。するとルーミアはちょっと苦笑いをして肩をすくめて見せた。「世間」つてこんなものよ マヤは妹のその仕草がそんな意味合いを帯びているような気がした。ルーミアはすでに白魔道師として働いているのだから、たとえ年下でも、社会人としてはマヤより先輩ということになる。マヤはようやく、自分はクラブ活動のためにここに来たわけではないのだということを思い知つた。

第一の試練 それを試練と呼ぶべきかどうかは別として はそのあとすぐに訪れた。先ほどの女官が一抱えほどの大きさの箱を持つて戻つてきて「これからすぐに入隊式がある。この箱の中に制服が一着入っているからそれに着替えて中庭へ向かえ」と言つたのである。

マヤは息つく暇さえない慌ただしさを嘆きながらも、受け取った箱を開き、中に入っている服を広げてみた。

「これが制服……」

彼女はしばし絶句した。それは確かに、軍人が公式の場で着るような制服だった。かつてアメリカに住んでいたとき、ニュースや、軍隊を舞台にした映画の中で何度も見たことがある。問題なのはその制服のうち、^は上半身に着るブレザーの腰の部分がくびれていることと、下半身に穿くものが一股に分かれていないと、つまりズボンではない。ということだった。そう、それはれつきとした文物の制服だったのである。当然と言えば当然なのが。

とはいっても絶句しているわけにはいかなかつた。何事も初めが肝心、入隊式に遅刻するなどもつてのほかである。女官が「サイズは大丈夫そうだね」と言つて部屋を出て行つた後、マヤは意を決してその制服を身につけ始めた。

ルーミアの手助けもあつて、予想外に手際よく身につけることができたことはできたのだが、いかんせんマヤはスカートを穿き慣れていない。ましてやそれは、以前一度だけ着てみたワンピースと違ひ、丈が膝上までしかないタイトスカートなのである。そのうえ靴までパンプスとくれば、マヤにしてみれば、わざと自分を歩きにくくさせて面白がつているのではないか、などと思つてみたくなる。

幸いにして、靴のヒールはそれほど高くなかった。マヤはルーミアに支えながら部屋を出、足取りを確かめるように一歩一歩、廊下を踏みしめた。タイトスカートに邪魔をされて今までのようには大股には歩けなかつたものの、歩いているうちに、一步を小さく取り足を素早く動かして歩くというコツを、すぐにつかむことができた。実際、それまでのマヤは、肉体や言葉遣いの女っぽさとは対照的に、仕草や振舞いはお世辞にも女性的とは言えなかつた。しかしいまタイトスカートとパンプスをはいて小股に歩くマヤは、ルーミアが見る限り、ごく普通の、女性らしい女性だつた。ちなみにルー

ニアには制服は与えられなかつた。彼女はマヤの従者としてファクト��に来たに過ぎないのだから、正規の兵士と異なる扱いを受けるのはやむをえないことだつた。

二人は廊下で人と出会つたびに道案内を乞いつつ、二十分もの時間費やして、やつとの思いで中庭に辿り着いた。そこに待ち受けた第三の試練は、マヤも今までに何度か経験したことのある、比較的ありふれた試練　　すなわち人間関係　　だつた。

意外にも、中庭には数名の人間がたたずんでいただけだつた。「入隊式」と聞いて学校の入学式のような規模を想像していたマヤは、拍子抜けすると同時に、心中にわだかまつていた不安感が少し薄らぐのを覚えた。

中庭の中央に突つ立つていた三名はマヤと同じ制服を着た女性だつた。一人は背が高くて肌の浅黒い女、一人は色白でほつそりした女、もう一人はやや背の低い女だつた。マヤは彼女たちに見覚えがあつた。なぜなら彼女たちは、半月前、マヤがファクト��城から脱出した際にピムを追いかけてきた竜騎兵たちだつたからである。一時的にせよ敵だつた者たちを同僚としなければならないとは皮肉なものだが、マヤは意を決して彼女たちのほうへ歩み寄り、できるだけ愛想の良い笑顔で話しかけようとした。

しかし、マヤが近づいてくるのに気づいた途端、竜騎兵たちのうちの一人、背の高い女がいきなり

「整列せよーつ！」

と叫んだのだった。ハスキーダがとてもよく通る声だった。

すると、色白の女と背の低い女がマヤのほうを向いて横一列に並び、直立不動の姿勢をとった。一方、いま叫んだ背の高い女はマヤに背を向け、並んだ二名の前に立つてこれまで直立のまま微動だにしなくなつた。

突然のことだつたので、マヤは驚きのあまり足を止めてしまった。マヤに背を向けている女は、目が後ろについているかのように、振り向くことなくマヤの様子を察知し

「見習い竜騎兵マヤ・クフルツ、直ちに整列せよ」

と言つた。今度は静かな口調だつた。

マヤは不安で不安で仕方なかつたが、取り敢えず言われたとおり、すでに並んでいる二名の横に立つて「気をつけ」をした。

「入隊式」はまず隊長 状況から判断して背の高い女が隊長であることは間違いなさそうだつた に対する敬礼で始まつた。次に隊長が、本日付で新たな隊員が着任する旨を、たつた二人、マヤを含めて二人しかいない隊員たちに報告した。続いて隊長は新入隊員マヤに自己紹介を命じてきた。マヤはぎこちなく簡単な自己紹介をしたが、隊員たちはみな、とても無愛想だつた。

マヤは不安の極致に達していた。もしかしたら東洋人の自分はあまり歓迎されていないのだろうかと思った。それともこの間、ピムに撃墜されたことを恨んでいるのだろうか。中庭の隅で入隊式の様子を見守っているルーニアのほうに目をやると、彼女も心配そうにこちらを見つめている。マヤは、安易に軍隊への入隊を決めてしまつたことを、すでに後悔し始めていた。

隊長は最後に「以上で入隊式を終わる」と言った。マヤはその場に居づらかったので、とにかくルーミアのもとへ向かうことにした。彼女なら自分のこの不安を少しでも和らげてくれるだらうと思つたからである。

ところが。

マヤが足を一步踏み出そうとした途端、三人の竜騎兵たちは声を上げて笑い出した。マヤは自分が何かとんでもない間違いを犯したような気がして、不安げな表情で彼女たちの顔色をうかがつた。

するとだしぬけに、隊長が馴れ馴れしくマヤの肩を抱きしめ

「いやあ、すまんすまん

と言つたのだった。

「新入隊員をこうやって『歓迎』するのがこのファクティム竜騎兵隊のしきたりなんだよ

「びっくりした?」背の低い竜騎兵が言葉を続けた。「あたしも一年前に入隊したときは不安で不安で泣きそうになつたわ

「心配しなくても大丈夫ですよ」色白でほつそりした竜騎兵が言ひ足した。「わたくしたち歳は離れておりますけど、いつも友達みたいに和気あいあいとやつておりますから

再び隊長が言つた。「軍隊つて言つても、竜を自由に操れる能力を持つた女なんてそうたくさんはないから、それなりに戦果さえ挙げていれば、軍のお偉いさんたちも、あたしたちに規律だとか秩

序だとかそんなものを求めたりはしないのね。気楽なもんだぜ」「

マヤさんは「ようやく笑顔を取り戻すことができた。

隊長はマヤの笑顔を確認すると

「あたしはラウラ・アガリカ。ラウラって呼べよ。『隊長』なんて堅つ苦しい呼び方で呼びやがつたら承知しねえからな」「

と自己紹介し、ガハガハ笑いながらマヤの体をぎゅうぎゅう抱きしめた。彼女はたぶんマヤより十オは年上だろう。姉御肌という言葉がぴったりの女性だった。

次に背の低い女が「あたしはサーラ・フイングステンよ」と、あどけない笑顔で言った。よく見ると彼女は、マヤよりも一つほど年下と思しき、幼い顔立ちをした少女だった。

続いて色白の女が「わたくしはオクタヴィ・アドレアーヌと申します」と言つて、こちらは上品で清楚な微笑みをたたえた。口調がおつとりしていたため彼女が何歳ぐらいなのかわかりづらかったが、おそらく二十才前後だろうと思われた。

「さて」隊長は大きな手でマヤの背中をどんどん叩き、言った。「こんなしゃつちよこばつた制服なんかとつと脱いじまつて、早いとこ飛行服に着替えようぜ。着替え終わつたらすぐに飛行訓練だ。この間、あたしたちプロの竜騎兵を撃墜したあの飛行テクニック、さつそく見せてくれよ」

それから一週間、マヤは毎日、竜騎兵としての訓練に明け暮れた。

彼女の飛行技術が他の隊員と比べてもずば抜けているのは確かだつたが、彼女の乗る竜が軍隊の一部として機能するには、やはり習得しなければならないことがいくつもあった。城から上がる狼煙の意味、同僚の竜騎兵が竜の体を使って送る合図の意味、編隊の基本的な陣形、所属不明の竜が飛行している場合どう扱うか、などなど。またラウラ隊長は、マヤに弓や剣術の訓練も課した。竜騎兵は竜を武器として使うだけでなく、自分自身が武器を持つて戦わなければならぬときもあるのだという。お陰でマヤは朝起きてから夜寝るまでほとんど休む間もなかつた。

もつとも、それは彼女も覚悟の上だったので、辛くて耐えられないと想うようなことはなかつた。むしろ彼女を悩ませたのは、竜で飛行する時に必ず着用することになつていての飛行服だつた。なぜなら飛行服は、いわゆる全身レオタードのように、布が体にぴつたり張り付くデザインだつたからである。最初のうち、男性兵士たちがすれ違ひざまに彼女の体のラインをなめまわすように見つめるたびに、彼女はそこそ顔から火が出そうなほど恥ずかしい思いをしたのだった。とは言え、空中で余分な布が風の抵抗を受けないという意味では、確かに飛行するのに最も適したデザインではあった。

一方、ルーミアはあまりやることがなかつた。実戦に出ない限り、彼女の白魔法が威力を發揮することはないのだから無理からぬことではあつた。彼女は仕方なく、マヤの身の回りの世話をしたりして過ごした。たまには魔法で他の竜騎兵や城に勤務する者たちの軽い怪我や病気を治療してあげたりすることもあつた。

「マヤはまだの隊員ともうまくつきあっていたが、一番仲良くなれたのは、サーラといふ名の背の低い竜騎兵だつた。彼女に親しみを覚えたのは、やはり彼女がまだ十四才といふことで、歳が比較的近かつたからである。彼女は毎夜、マヤにとつて唯一の自由時間と言える就寝直前の時刻に、マヤの部屋におしゃべりをしに来た。そうしているうちに、サーラはマヤだけではなくルーミアとも仲が良くなつた。ルーミアも彼女を妹のように可愛がつた。

サーラはおしゃべりが大好きな娘だつた。本当にいろいろな話をしてくれた。いまエラーニア王国はハバリア帝国竜騎兵隊に制空権を奪われており窮地に立たれてゐる、といった軍事情勢から、自分はもうすぐ一年間の出征義務を終え故郷に帰ることができる、故郷で自分を待つてゐる彼氏と再会できるのが楽しみだ、といったプライベートなことまで、やつぱりと話した。

「ねえ、ママ、ルーミア。あなたたちにも彼氏はいるんでしょ？彼氏とはどこまで進んでこらの？あたしの彼なんか、出征前、キスしかしてくれなかつたのよ」

「マヤとルーミアはびつべつして異口同音に「それって一年前の話でしょ？」と訊き返した。

「ええ、さうよ。十一才の時の話

それを聞いて、マヤは相良美玖との関係を、ルーミアはジュークの関係を思い起こし、自分がいかに奥手だつたか反省するはめになつた。

マヤにとつての次なる試練は「予兆」と「本番」という二つの部分から成り立つていた。その「予兆」が訪れたのは、入隊してから

一週間後の朝のことだった。

「いつものよ、マヤが訓練のために、『飛行場』に顔を出すと、そこの背の高いラウラ隊長と背の低いサーラの姿はあったが、もう一人、色白でほつそりしたオクタヴィイという隊員が来ていなかつた。

折り正しく几帳面な性格の彼女が単に寝坊して遅刻するとは思えなかつたので、マヤはサーラに

「オクタヴィイはどうしたの？」

と尋ねた。

するとサーラは珍しげぶつめりぬつて

「たぶん女の子の口」

と答えた。

そのアウスグ語の意味が全く分からなかつたマヤは、しばらく考えた後、サーラにその意味を訊き返そうとした。ところが、その日またまたマヤと一緒に飛行場に来ていたルーミアが、慌ててマヤとサーラの間に割り込んだ。マヤはますます訳がわからなくなつてしまつたが、ちょうどそのときラウラ隊長の「訓練を始めるぞ」という声がしたため、ルーミアにもサーラにも説明を求めることができなかつた。

ルーミアのその行動の意味が理解できたのは、その日の夜だった。おしゃべりに来ていたサーラがマヤたちの部屋を去つた後、ベッドに潜り込もうとしたマヤをルーミアが、話があると言つて呼び止めた。

たのである。

「お姉ちゃん、最近、体の調子がどこかおかしい、なんてことはない? 特にお腹のあたりとか……」

マヤはやう言われてやつと、かつて学校の保健の授業で習つた、女性特有の現象のことを探し出した。

ルーミアは、マヤは生理についての漠然とした知識を持っているようだと判断し、敢えてやや医学的な側面から説明してあげることにした。

「月経周期は普通、二十八日から三十五日ぐらい、そして周期の長い短いに關係なく、次回月経開始予定日の約一週前に排卵がある。つまり月経周期が長い人は月経開始日から次の排卵までの期間が長く、短い人はその逆つてことになるわけね。もちろん女の体は機械じやないから、周期が長くなつたり短くなつたりすることもあるわ。

それと、何か重要なことが予定されている日と月経日が重ならないうつに魔法である程度遅らせることはできる。もつともあまりやりすぎると体に良くないけど。

でね、お姉ちゃんは不動の術を解かれてからそろそろ一ヶ月経つでしょ? 男の魂から女の体を再生したお姉ちゃんのような場合、どうなるのかよくわからないけど……いろいろ精神的なストレスもあつたから多少遅れても不思議はないと思つ

マヤはその話を聞いてやるせない気持ちになつた。とはい、それは女である以上避けることのできない運命なのである。ルーミアだつてサーラだつてオクタヴィイだつて、おそらくラウラ隊長だつて

みんな経験していることなのである。マヤは覚悟を決め、すでに何回も経験しているであろう妹に、実際にそれが起こった場合どうすればよいのか尋ねた。するとルーニアは生理用ナップキンの使い方を懇切丁寧に教えてくれた。もちろんこの世界では吸水性ポリマーなどという化学物質の合成方法は発見されていない。ナップキンは当然、布製であり、それを煮沸消毒して何度も使うのだといつ。

その次の試練は、先ほどの試練の「本番」と渾然一体となつて現れた。マヤがファクティムに着任してからちょうど一週間後に訪れたその試練は、彼女の人生の中で最も重苦しい記憶の一つとして残ることになる、重大な試練だった。

それまでの間、マヤたちファクティム竜騎兵隊は相変わらず訓練の毎日だった。そもそもこの竜騎兵隊は前線から遠く離れたところに駐留する、いわば予備部隊に過ぎない。いくらエラーニアの防空網が弱体化して穴だらけだとしても、こんな南の地方にまで敵の竜騎兵が飛んでくることはさすがに困難だし、またそんな危険を冒すメリットも通常はなかつたのである。

「もつとも」ラウラ隊長は言った。「またヤグソフ四姉妹の二ーナがこの間のように防空網を突破してくる可能性はあるな」

彼女をはじめ竜騎兵隊の面々は、先日、二ーナたちがアヴィー村上空に来襲した際、自分たちが駆けつける前に、当時民間人だったマヤが撃退してしまったことも、二ーナたちの目的が男の竜騎兵を見つけることだったということも、マヤからの報告を受けて知つてい

た。しかしラウラ隊長にも他の竜騎兵隊員にも、マヤが一番知りたいと思つてゐること、二ーナたちが男の竜騎兵を見つけてどうするつもりなのか、はわからんいらしかつた。

「試練」が訪れる事になるその日の朝、ラウラ隊長は訓練の開始時刻に飛行服姿ではなく、ゆつたりとしたズボンをはいて飛行場に現れた。マヤはもうその理由を誰かに尋ねたりはしなかつた。全身レオタードのようなあの飛行服の下にナップキンを付けるのは無理がある。仮にできたとしても、激しく体を動かさなければならぬ飛行訓練に参加するのは困難だろう。

案の定、隊長はその日の訓練では竜に乗らず、地上から指示を下さるだけだつた。

空中で、サー^フは自分の竜を、マヤの操るピムに寄せ

「なんか訓練に身が入らないわね」

と言つて苦笑した。

隊長みずからが陣頭で指揮を執るのと執らないのとでは、士氣に差が生じるものやむをえない、とマヤは思つた。

「ラウラあつてのファクティム竜騎兵隊だもんね」

マヤがそう応えると、オクタヴィイも竜を近づけてきて「冗談交じりに

「これが実戦でなく訓練でよかつたですわね。もしいま敵が攻めてきたりしたら、なんて思つとぞつとしますわ」

と言つた。

ところが、オクタヴィのその悲観的な推測は見事に現実のものになつてしまつたのである。

「所属不明の竜の編隊を発見！」

物見の塔の頂上で上空を監視していた兵の叫び声と共に、ファクトイム城に臨戦態勢がしかれ、ただちに竜騎兵隊にスクランブル指令が下された。

このよつた非常事態においては、たとえ生理中であつてもラウラ隊長が指揮を執らねばならないのだが、そのとき彼女はたまたま飛行場にいなかつた。自室のトイレスでどこかでナップキンを換えているのかもしれない。そこで竜騎兵隊の指揮は一時的に年長のオクタヴィの手に委ねられることになつた。

「いきますわよ」

彼女のかけ声を合図に、ファクトイム竜騎兵隊は、所属不明の竜の編隊が発見されたという東の方向へと飛び立つた。

ファクトイム東方の上空を漂つっていたのは、七匹からなる編隊だつた。マヤはすぐ、それらの竜が、先日アグニー村上空で接触した竜と同じ装甲を身にまとつてゐることに気づいた。操縦する竜騎兵たちもそのときと同じ飛行服を着てゐる。しかも編隊の指揮官と思しき人物もまた、先日と同様、薄緑色の派手な飛行服に身を包んでいた。ヤグソフ四姉妹の末妹、少女竜騎兵二一ナに間違ひなかつた。

前回と違つていたのは、マヤが近づいてくるのを察知しても、相

手の竜騎兵たちはわざわざ包囲して身分を確かめたりはしなかった、という点である。つまり、いきなり攻撃態勢をとったのだった。今回、マヤの乗るピムはエラーニア王国軍の紋章を首に付けている。しかも同じ紋章を付けた竜を二匹従えている。相手から見ればマヤたちが敵国エラーニアの正規軍であることは一目瞭然だったのである。

空中戦が始まった。とはいえた相手は精銳装甲竜騎兵、こちらは実戦の機会の少ない予備部隊、数的にも半分以下で、おまけに隊長不在。これでは最初から勝負にならなかつた。

臨時指揮官オクタヴィはすぐさま撤退を指示した。こちらは装甲を付けていないぶん身軽なので逃げ切れると思ふんだのである。しかし相手の竜たちは重い装甲を背負つていては思えない速度でマヤたちの編隊に追いつき、一番後方を飛んでいたサーラの乗る竜にいっせいに襲いかかつたのだった。

「サーラー。」

マヤは叫び声をあげながら、直ちにピムの体を、サーラの竜に取り付こうとしている敵の竜にぶつけた。ダメージこそ与えられなかつたが、サーラを危機から救うのには十分だった。

「ありがと、マヤ」

サーラは竜の背中でそう叫び、小さく手を振つた。

その後もピムは健闘した。敵の放つた矢が一本、体に突き刺さつたのにもかかわらず、マヤの制御を失わなかつたばかりか、敵の竜三匹にダメージを与えた、うち一匹を戦闘不能に陥らせた。マヤの活

躍に勇氣づけられて、サーラとオクタヴィも反撃に転じ、マヤがダメージを「えた一匹を戦闘不能にまで至らしめるという戦果を挙げた。

「いまファクティム城からリカラ隊長の龍が遅ればせながら飛び立つのが見えた。これで四対四の互角となる。マヤたちは逃亡をやめて竜の向きを変えた。

相手の装甲竜たちはそれでもひるむことなくマヤたちの前に立ちはだかった。二ーナに至ってはマヤに話しかけるほどの余裕を見せた。

「おまえは、この間アヴニ村上空で我らと戦った女だな。竜騎兵隊に入っていたとはな」

マヤは彼女を睨み付け

「あなたたち、また男の竜騎兵を捜しているのね。男の竜騎兵を見つけて一体どうするつもりなのーー？」

と声を張り上げた。

二ーナは応えた。「敵であるおまえにそんなことを喋つてしまつほど我はお人好しではない。が、今日のところはひきあげることとしよう。戦力を失いすぎた。もつとも……」彼女はそこで不敵な笑みを浮かべ、部下の竜騎兵たちに田配せをした。「手ぶらで帰るわけにも行かないので、一つだけ戦果を挙げさせていただく

その言葉が終わるか終わらない「、」敵の装甲竜たちは一いつせいに散開した。

「しまつた！」

マヤがそう思つたときにはもう遅かった。一旦散開した四匹の装甲竜たちはあつという間にサーラの乗つた竜を上下左右から取り囲み、同時に攻撃を加えたのだった。

「きやーっ！」

サーラの口から金属を切り裂いたような声があがつた。

その次の瞬間の光景は、マヤの目にはスローモーションのように映つた。敵の竜のふるつた尻尾がサーラを直撃する。彼女は気を失い、空中に投げ出される。そしてダメージを受けた彼女の竜もろとも、彼女の体は重力に任せて落下を始める

「サーラー…」

マヤは叫び声をあげたがその声はサーラに届かなかつた。

すぐさまピムに、落下するサーラの体を追いかけるよう命じた。とはこえピムにはジエットエンジンがついているわけではない。自由落体以上の速度が出るはずないのである。マヤの視界の中でサーラの体はどんどん小さくなつてゆき、やがてファクティム城近くの森の中へと消えた。

そのときには、すでに二ーナたちは北の空へ飛び去つており、またラウラ隊長の乗つた竜もマヤたちのいた空域に到達していたが、マヤはそんなことには田もくれず、ピムにファクティム城へ帰還するよう命じた。そしてピムから飛び降りるや否や、自室にたたずむ

ルーミアのもとを訪れ、乱暴にその手を引いてファクティムの城門を出、森へ向かい、サーラの落下地点まで彼女を連れてきた。マヤに命じられるまま、ルーミアは冷たくなったサーラの体の前で再生の術の呪文を唱えた。だが彼女の魂はすでにこの世になかった。

マヤはその場でがっくりと膝をついた。悲しいのになぜか涙は出なかつた。

その日の晩以降、マヤは自室に閉じこもつた。サーラの死にショックを受けたのはもちろんだが、それに追い打ちをかけるように、彼女にとって初めての生理が始まつたからである。夜、ルーミアは再生の術で魔力を使いすぎたためいつもより早くベッドに入つてしまつた。マヤは同僚を失つた心の痛みと生理による下腹部の痛み、その両方に、たつた一人で耐えなければならなかつた。

マヤが竜騎兵として一人前になるために乗り越えなければならなかつた最後の試練、それは先ほどの試練と密接な関連があつた。いや、マヤ自身が関連づけた、と言つてもよいかもしれない。

ファクティムに来てから一ヶ月が経つていた。マヤはその日、正式に「竜騎兵」としての辞令を受けた。それまでの「見習い竜騎兵」という身分から昇進したのである。もちろん通常は一ヶ月で正規隊員になるなどということはできない。彼女の飛行技術が桁外れだったことに加え、慢性的な竜騎兵不足を補うための戦時特例措置による、例外的な昇進であつた。

エラン文字で書かれた辞令交付書を見つめているうちに、マヤは心がちくちくと痛むのを感じ始めた。本来なら自分が正規の竜騎兵に昇進するのと入れ替えに、サーラが出征義務を解かれ、故郷に帰ることができたのである。その心の痛みは悲しみによる痛みであったが、同時に、同僚を救えなかつたことに対する自責の痛みでもあり、同僚を死に追いやつた敵に対する、張り裂けそうな憎悪の痛みでもあつた。

日々の生活は、相変わらず飛行訓練の繰り返しだった。暇を持て余したルーミアは、一日間だけだつたが、アヴィー村に帰省した。ファクティムからアヴィー村までは馬なら六時間、歩いても十一時間ほどの距離でしかない。彼女がマヤへの土産話を持つて嬉しそうにファクティムに帰つて来たのを見ると、マヤも養父が恋しくなつた。アヴィー村へはピムにのつてゆけばわずか三十分しかかからない。竜騎兵としての仕事に慣れたらそのうち休みを取つて自分も一度帰省しよう、などと考え始めた。

そんなある日、またも所属不明の竜の編隊が、ファクティム城を中心とするアウスゲント地方上空に姿を見せた、という報告が入つた。

当然の如く、ファクティム竜騎兵隊にスクランブル命令が下つた。今回はラウラ隊長もオクタヴィイ隊員もいつでも出撃できる体勢にあつた。

「出撃！」

隊長の号令一下、三匹の竜は大空へと舞い上がつた。

頬をなでる風が冷たかつた。季節は初秋から中秋へと向かおうと

している。マヤはこちらの世界に来て初めて、季節の移り変わりを意識した。エラーニア王国は緯度の高い地域に位置し、しかもこのアウスゲント地方が高原になっているため、夏の間、さほど暑くなかったのである。もちろん、女になってしまつたり竜騎兵隊に入隊したりと、矢継ぎ早にいろいろな事件が起つたため季節など感じている暇がなかつた、というのが一番大きな理由ではあつた。

やがて、前方の空に、握り飯の上にふつた黒ゴマのようなものが見えてきた。その数は前回と同じ、七つ。

ラウラはそこでマヤとオクタヴィイに一回、竜の速度を落とすよう命じた。もし相手がこの前と同様、ニーナ率いる精銳装甲竜騎兵だつとしたら、数的にも質的にもこちらが劣つてゐることになる。隊長としてしかるべき判断だつた。

マヤたちはしばらぐの間、相手の出方をうかがつた。しかし相手はこひらに向かつてくることも、逆に遠ざかることもなく、マヤたちから見て左から右方向へ、ゆっくりとしたペースで飛行を続けてゐる。目的地に向かつてゐるといつよりは、そこを飛行すること自体が目的のよう見える。例えは何かを探してゐるときのように……。

マヤは思った。あれがもしニーナたちだつたとして、その目的が「男の竜騎兵」を探すことだつたして、彼女たちは上空からどうやって一人の人間を見つけるつもりなのだろう。上空からでも特定の人物が見つけだせる何か特別な方法が彼女たちにはあるのだろうか。

そのとき突然、マヤの視界の中で「黒ゴマ」の動きが慌ただしくなつた。

「来るぞー！」

ファクティム竜騎兵隊の中で一番視力のよいラウラが、真っ先に敵の動きの意味を察知し、そう呟んだ。

先程まで黒ゴマほどの大きさだったものがあつて、つい間に碁石ほどになつた。大きくなるにつれ、マヤの目にもその一つ一つが、細部にいたるまで認識できるようになつた。翼と胴体の一部、それと頭部全体を覆う装甲の形状は、やはり彼女にとって見覚えのあるものだつた。そして横一列に並んだ七匹編隊の真ん中に位置する竜の背には、ひときわ田立つ薄緑色の衣装を身にまとつた竜騎兵の姿があつた。

「一ー九……」

マヤは歯ぎしりをしながらそりつけた。たちまち彼女の全身が憎悪ではちきれそうになる。

オクタヴィイはマヤの様子にいち早く気づき

「マヤ、冷静にならなくてはいけませんわよー！」

と声を張り上げた。

マヤは何か自制心を保とうとした。しかし、敵編隊の中央で二一ナがにたにたとにやけているのが田に入つた途端、彼女の憎悪は遂に爆発してしまつたのだった。

「マヤ、よー！」

ラウラの制止する声は、もう彼女の耳には届かなかつた。

ピムは立て続けに三匹の敵を蹴散らした。これには敵だけではなく、味方であるラウラとオクタヴィイさえも、驚愕せざるを得なかつた。いや、驚愕というより恐怖と言つたほうがよいかもしれない。

勢いづいたマヤは更に、ラウラとオクタヴィイと共に、残りの四匹の敵のうち三匹に手傷を負わせた。それでも精銳装甲竜騎兵たちは、苦痛を訴えもがく竜を巧みに操つて、自ら楯となるべく、二一ナ隊長の乗る竜の周りにぴったり貼り付いた。しかしもはや大勢は決していた。

ラウラ隊長の放つた矢が敵の一匹の竜の腹に一本ずつ命中した。腹にダメージを喰らつた一匹は撤退し、ついに隊長を守る「楯」は一枚となつた。

ラウラはマヤとオクタヴィイに、残る一匹の敵竜をがっちり包囲させた後、二一ナともう一人の敵竜騎兵に捕虜になるよう勧告した。さすがの一一ナも悔しさを表情ににじませた。

と、その途端。

いきなりもう一人の敵竜騎兵が、手負いの竜の背中からピムの背中へと飛び移つてきた。

敵兵がこのような行動に出る」となど予想だにしていなかつたマヤは、完全に不意を突かれた。敵兵はハバリア語で何か叫びながら、世にも恐ろしい形相でマヤの体に掴み掛かってきた。マヤは恐怖にかられ、それこそ無我夢中で敵の腕を降りほどこうとした。

マヤが体を激しく揺さぶった拍子に、彼女を組み止めていた敵兵の腕がすっぽと外れた。敵兵はバランスを失ってピムの背中から転がり落ちた。

「あっ

マヤはそのとき初めて気づいた。敵の竜騎兵が、サーラとそれほど歳の違わない、あとけない少女だということに。

敵兵の体は風にあおられたのか、一瞬ふわっと浮き上がったように見えたが、次の瞬間には自由落下を開始した。数秒後、その体が地面に激しくたきつけられるのが、上空からでもはっきりと見てとれた。

気が付くと、辺りにはラ・ウラ隊長とオクタヴィイの乗った竜と主を失った竜の姿しか見当たらなかつた。一ーナはマヤが格闘している間にピムが制御不能になつたのを見計らつて包囲の輪を抜け、飛び去つたのだった。

今、一陣の秋風が、さつきまで戦闘空域だった空を吹き抜け、激戦で火照ったマヤの体を撫でた。冷たかつた。しかしマヤは、その秋風よりももっと冷たい、もっと空虚な何かが、自分の心の中にいるのを感じた。

7 ギール

「あ、雪」

ルーミアは窓の外を見つめながら、マヤとともに、独り言ともなくそう言った。

マヤは、部屋に設えられた粗末なベッドに腰かけたまま、今まで往復させていた腕の動きを止め、ルーミアの言葉に誘われるよう目を上げて、窓際に立つルーミアの肩越しにガラスの向こうの灰色の空を見上げ

「ほんと。ビオラで寒いと思つたわ」

と応えた。

今は陽はさしていないが、晴れた日に太陽が南へ昇った時の高さから推測して、エラーニア王国が故郷の街に比べるといくぶん高緯度にあることは確かだつた。しかし、マヤが体感する限り、寒さはそれほど厳しくなかつた。ほんの一瞬、この世界のこの地球が全体的に温暖なのだろうか、それともエラーニア地域だけが特別に暖かいのだろうか、という疑問が頭に浮かんだものの、彼女の関心はすぐ、科学の未発達なこの世界の住人は誰も答えられないようなそんな疑問から離れ、自分のひざの上に横たわつて鈍い光を放つている一振りの小剣のほうに戻つた。

十秒ほどのあいだ途絶えていた乾いた音色が、また一定のリズムを刻み始めた。ルーミアが横目でちらつとマヤのほうを伺つと、案の定、マヤは砥石を小剣に擦り付ける作業を再開していた。

ファクティム城駐留軍が最前線の町、ギールへの配置転換を命ぜられてから、まもなく一ヶ月が過ぎようとしていた。

ファクティム上空において敵精銳竜騎兵を一度も撃退したことが軍上層部に評価された結果だということだったが、ルーミアはそれは別の噂話も耳にしていた。曰く「後方に予備部隊を置いておけるだけの余裕が、エラーニア軍にはもつないのだ」と。そして、得してそのような噂話のほうが信ぴょう性が高いといふことも彼女は心得ていた。

この一ヶ月の間に、ルーミアがもう何度白魔法を使つたか知れない。もちろん名目上、彼女はマヤの従者という身分なので、マヤ以外の兵士の命を助ける義務はない。しかしそこは責任感の強い彼女のこと、死にかけている兵士を放つておくはずはなかつた。そもそも従者などという制度は、古き良き騎士時代の名残りでしかなく、事実上、徴兵制が敷かれているに等しい現状ではそれほど意味はない。それ以前に、軍からもらえるなけなしの給料でわざわざ従者の食い扶持^{ぶち}の面倒まで見てやろうなどと考える物好きは、上級将校はともかく、一般兵の中にはそう多くはない。そのうえ彼女は、制服を着ていなことを除けば正規の軍属白魔導士と全く同じように振舞つた。そのため、ギール城の兵士のほとんどは彼女が実は従者に過ぎないのだという事実を知らずにさえいた。

ルーミアがこの前線の町の現実に戸惑いを見せたのは、着任早々、両腕と両脚が剣で切られたのではなく明かにもぎ取られた兵士がギール城に運ばれてきたのを見かけたその一瞬だけだった。次の瞬間にはもう、どこか遠足気分の抜けていなかつたファクティム城での日々に別れを告げ、白魔導士としての職務を全うする覚悟ができる

いた。

実際、彼女に命を救われて、その後戦闘に復帰できるまでにいた兵士も数多くいた。生来、献身的な気質の持ち主である彼女のような人間にとつて、そんな兵士たちの「ありがとう」の言葉こそが何にも代えがたい報酬だった。ファクティム城で暇を持て余し、マヤの従者になつたことを少し後悔していたあの頃の自分が、ひどく怠惰な、愚かしい人間のように思えた。

とは言え、辛いことも多かつた。一般的の患者と違い、兵士は命が助かるとまた戦場へ命をすり減らしに行つてしまふのである。「今日から戦列に復帰なんだ。ありがとう」と言つて出撃した兵士が、その日の夕方、魂を完全に失つた冷たい遺体となって帰つて来た、などといふこともあつた。

それに、白魔力の使い過ぎからくる恒常的な疲労にも苛まれた。精神的にも緊張状態が続き、たいした怪我でもないのに我れ先に応急処置を求めてくる若い男性兵士に対し、何度も大声を張り上げそくにもなつた。それでも彼女が笑顔を保つことができたのは、彼女の精神力と、職務への責任感のなせる技としか言いようがなかつた。

しかしそんな彼女にも克服しきれない問題が一つだけあつた。自分自身のことなら我慢すればよい。全くの他人のことなら無視するか、適当にあしらえればよい。厄介なのはそのどちらにも属さない問題である。

ルーミアはそこで、もう一度マヤのほうを振り返つた。ギール城の片隅にあるこの薄暗く力ビ臭い小部屋で、マヤの瞳と、彼女が研ぐ小剣の刃だけが異様な光を放つていた。

一ヶ月前、マヤがファクティム城上空でヤグソフ四姉妹の末妹、ニーナの一度めの襲撃を撃退してルーミアの元に帰還した時、開口一番放つた言葉は「敵兵を殺した」だった。さすがにそれからしばらく、マヤは少し元気がなかつたが、一、二日後にはもう本来の彼女 同僚の竜騎兵だったサーラが死ぬより前の彼女 に戻つたように見えた。少なくともそのように振舞つていた。ルーミアはとりあえず安心すると同時に、姉が自分一人の力で困難を乗り越えられる強さを持つていることを心密かに賞賛していた。

その後のギールへの配置転換により、マヤは度重なる出撃、自分は白魔法治療に追われることが多くなり、じつくり自分たちのことを話す余裕がなくなつた。マヤたちファクティム竜騎兵隊に数日一度の割りで夜間のスクランブル・ローテーション 敵竜騎兵の襲来に備え待機する当番 が回つてくる一方、城が夜襲を受けた時などは逆にルーミアが夜通し白魔法治療の仕事をこなすこともあつたので、生活のペースもすれ違ひがちだった。

ところが最近、そんな毎日の中でふとマヤのほうに目をやると、彼女はいつも、今やつているように剣の刃を磨いたり、弓の手入れをしたりしているのだった。もちろん彼女が竜騎兵である以上、敵襲もなく待機当番でもない今のような空き時間に念入りに武具の手入れを行うのは当然のことである。ルーミアが心配したのはむしろ、マヤが武器を見つめる瞳が、ほの暗い光を宿していることだつた。

本当は辛いんじゃないの？ 本当は恐いんじゃないの？ ルーミアはそう尋ねようとしたが、思いどおりだった。姉はああ見えて纖細なところがある。自分が心配していることを打ち明ければ、却つて心配されることになりかねない。だからこそ、四ヶ月前、自分の魔法のせいで彼女が女になってしまったことが判明した時にも、

謝罪した以外、敢えて彼女を氣づかう言葉をかけなかつたのである。

やうする代わりに、ルーニアは姉にもつと別の質問をすることを思ついた。

「ねえ、お姉ちゃん、今日は十一月七日よね？」

マヤは、妹がちょっとこだすらつぽこ笑みを浮かべながら顔を覗き込むよつこしてやう話しかけてきたのをちらりと見せつ

「そうね」

と応えただけで、すぐに視線を手もとの小剣に戻してしまつた。それでもルーニアは笑顔を崩すことなく、更に

「じゃあ、ちよつと一週間後の十一月十四日が何の日だか知つてる？」

と尋ねてきた。

「なんだっけ」

「あたしの十六回目の誕生日」

マヤはまつと、砥石を往復させていた手を止め

「ああ、そうだったわね」

と応えた。「確かまつと前、言葉のレッスンの中で一度、そんな話をしたわよね」

「うふ、お姉ちゃんが十六歳になつたばかりだつて言つから、じゃああたしのより半年年上ねつていう話になつたのよね。それであたしはマヤがお姉ちゃんになつてくれたら嬉しいなつて思ったの」

「あたしはお兄さんのつもりだつたんだけどな」

「マヤはもう言つて、ちょっと口元をほころばせた。ルーニアは、姉の笑顔を見るのはずいぶん久しぶりのような気がした。」

「お姉ちゃんの誕生日は六月の何日なの？」

「あたしの誕生日は日付けの上では十一月四日よ。」

「え? ど? こ? う? 」

「ほらの世界と、あたしが元いた世界では、どうも日付けが半年ずれてるみたいなの。だから向こうでは、今は多分六月。あたしの誕生日の十一月四日は半年前といつことになるわ」

「へえ、やうなの」

その時不意に、マヤの脳裏にアクロバット飛行競技会の時の記憶がよみがえつた。美玖の笑顔、弁当箱の入つた巾着袋、赤い複葉機、青い秋空、そしてあの得体の知れないどす黒いもや。墜落してルーニアたちに助けられ、目を覚ましたのは一ヶ月後。更にそれから二ヶ月たつて体の自由を得た時にはもう夏だったことから、日付けが半年ずれていいるのだろうという推論を導き出していたのである。それにしても、あの競技会の日がなんと昔に感じられることか。

一年生になつた美玖は今、ぐりしているのだろうか、ちゃんと部活に出ていけるだろうかな?と思ひを巡らせたい衝動をぐつといふ、マヤはルーミアとの会話を続ける」とした。

「ルーミアが十六歳になるついとせ、あたしはもうルーミアのお姉ちゃんじやなくなつてしまつついとよね」

「だめ」ルーミアはわざとだだつ子のように首を振つた。「誕生日が半年しか違わなくてもでもお姉ちゃんはお姉ちゃん」

「わづ、ルーミアつたら。びつしてもあたしをお姉ちゃんにしたいのね」マヤは笑いながら、大げさに肩をすくめてみせた。「年上の女人なら、同じ隊のラウラ隊長もいるし、オクタヴィイだつて、ほりの間、ファクティム城で二十歳の誕生日を迎えたでしょ」

やう、ここのギールへ配置転換になる前、まだサーラが生きていた頃、ファクティム城でささやかながらオクタヴィイの誕生日パーティーが開かれたのである。マヤは「ここの世界にもケーキを作つたり、プレゼントを渡したりしてお祝いする習慣があるのでね」などと驚きつつも、とても楽しそうにしていたのだった。

ルーミアは

「お姉ちゃんはちやんとあたしのお父さんの養女になつたんだから名実共にあたしのお姉ちゃんでしょ。それに、もしそうでなかつたとしても、やっぱりあたしのお姉ちゃんはマヤじやないどだめ」

と応えながら、のどかだつたファクティム城での日々と、誕生日パーティーなど望むべくもないこのギールでの生活とのギャップを、改めて実感した。そして半年後、姉が次に誕生日を迎える時には、

誕生パーティーを開いてあげられるような状況下に自分たちがいられればいいなと思った。

しかし、目の前の現実は過酷だつた。

マヤが次に「ねえ、ルーミア……」と言いかけた瞬間、城内にけたたましい鐘の音とともに

「敵襲！ 敵襲！」

といつ怒鳴り声が響いたのである。

マヤはもうほとんど反射運動のよひに、鐘が鳴り始めた次の瞬間に立ち上がり、壁にかけてある防寒着を手にとり、その次の瞬間には袖に腕を通し終え、部屋の扉を開いていた。そして、小剣を素早く、しかし丁寧に腰の鞘に納めた後、ルーミアに一警もくれることなく廊下を走り去つた。

ルーミアはそれを見届けてから、今までこの部屋を支配していた暖かい雰囲気が消えゆくのを惜しみつつ、てきぱきと身支度をし、自らの持ち場である医務室へ向かうため、部屋をあとにした。

ラウラ隊長の号令の下、マヤがギール城の駐屯場から、雪のちらつく灰色の空へとピュムを上昇させた後、辺りを見回してみると、ギール北側の平原とその上空はまだならぬ気配に満ち溢れていた。ギールに着任して間もない頃、敵の大軍が押し寄せてきて城壁の一部

が破壊されるほどのかつての苦戦を強いられたことがあつたが、今、目の前にいる敵の数は、どう見てもその時の倍近いと思われたからである。

数だけではなかつた。ひときわ視力のよいラウラ隊長が、腕信号旗を使わない手旗信号のようなもので伝えてきたところによれば、敵の主力部隊はハバリア皇帝直属である近衛師団の団旗を掲げており、さらにその先鋒隊はヤグソフ四姉妹の一人、モーラに率いられた精銳アマゾネス（女怪力兵）の一隊らしいというのである。敵がギールを本気で陥落^{おち}とし入れるつもりなのは明らかだつた。

ギールを守るエラーニア側の兵は誰もが戦慄を禁じ得なかつた。

しかしだからと言つて、敵がこちらの戦慄がおさまるのをじつと待つていてくれるはずはなかつた。敵竜騎兵隊がギール側の警戒空域に突入してきたのを合図に、激戦の火蓋が切つて落とされた。

戦いの焦点は、制空権にあつた。いくら敵が大軍といえど、何百年もの間、敵国の兵や蛮族の攻撃を跳ね返してきたこの堅牢なギール城は、包囲されてもそう簡単に攻めとられるのではない。だがもし制空権を奪われれば、水や食料などの補給物資を空から供給することができなくなつてしまふのである。

当然、敵はかなりの数の竜騎兵を投入してきた。マヤたちはそれこそ死に物狂いで応戦したが、それにも限界があつた。同じ隊のオクタヴィイをはじめ、多くの竜騎兵が手傷を負つて戦列からの離脱を余儀なくされた。気が付けば、まともに戦えるのはマヤと、ラウラと、ギールに配属されているただ一つの装甲竜騎兵隊、エメンツ装甲竜騎兵隊だけになつていた。

ありがたいことに、エメンツ隊が獅子奮迅の活躍をして敵の主力

装甲竜騎兵隊に大ダメージを『えてくれ、またエラーニア王宮にある軍上層部が、王都エランの守りが手薄になることを承知で、最精銳装甲竜騎兵の一隊を一時的にギール戦線に回す』という大英断をしてくれたため、寸でのところで制空権を奪われずにすんだ。

制空権の奪取に失敗した敵軍は、力押しによる迅速なギール城攻略を一旦諦め、長期的な攻城戦へ移行すべしと判断したらしい。昼夜を問わずほとんどひつきりなしに続いた敵の総攻撃は、五日後、ようやく停止した。

その夜、マヤとルーニアに割り当てられているギール城の一室をオクタヴィイが訪ねていた。

「そうなのですか、ルーニアはもうお休みになってしまったのですか。わたくしの怪我を治してくれたお礼を言おうと思つたのですが」

オクタヴィイがいつもどおり丁寧すぎる口調でそう言つと、マヤは、ベッドの上ですやすやすと少かな寝息を立てて、ルーニアの寝顔を眺めながら

「白魔力の使い過ぎで、疲れがたまつて『いるみたい』この娘、仕事のことになると頑張り過ぎちゃつといふことがあるから」と応えた。

「確かにそうですね。敵の攻撃がいつまた再開されるかわかりませんけど、それまではできるだけゆっくり休ませて差し上げましょう」

「そうもいかないの。明日、デイン艦に白魔法治療をしに行くように言われたんだって。死にかけている人がたくさんいるからって」

「まあ、大変ですね。でも、もちろん誰かに籠でつれて行つてもらつとでしょ？ 城は包囲されてるのですから……」

「だからあたしがつれて行くことにしたの。さつきウツワ隊長の許可を取つたわ」

「それは『苦労様』では、マヤも早めにお休みにならないといけませんわね。わたくし、これでおないとませせていただきますわ」

オクタヴィはそう言い残し、戦下のこの城塞の雰囲気に全く似つかわしくない優雅な身のこなしで、バレリーナのような細身の体をするりと部屋の出口へ滑り込ませようとした。が、そこで

「あ、そういう、つかり忘れるところでしたわ」

と叫んで、また部屋の中に戻つて來た。

「これ。マヤに頼まれていた例のものですね」

彼女は、飛行服の腰にぶら下げるポシショットから、手のひらに包むことができるくらいの大きさのものを取り出し、マヤに手渡した。

するとマヤは、せも嬉しそうに「間にあつたのね。よかつた」と応えた。「ありがとう、オクタヴィイ」

「どういたしまして」

「本当に助かつたわ。あたしこいつことを相談できる人がルーミアしかいなくて、でも今度ばかりはルーミアに相談する」ことができなかつたから

「喜んでいただけるかしら」

「オクタヴィイの見立てだもの、きっと大丈夫よ」

「やつなることを祈つておりますわ。……では、失礼をせいでいただきます。おやすみなさい」

「おやすみ」

翌朝、マヤとルーミアはまだ暗いうちに、といつても、緯度の高いこの地域で十一月に日が昇るのは午前九時頃だが、ペムの背中に乗り込み、城を取り囲んでいる敵の警戒網を縫うようにして、一旦、比較的安全な南東の空域に出た。そこで進路を北東に向け、哨戒飛行中の敵竜騎兵に見つからないよう、山の稜線に身を隠しながらティン箭を目標するのである。

ルーミアは体をマヤの背中に密着させ、自分の口をマヤの耳のす

ぐわばにむつて来て

「どれぐひこかかる？」

と訊いてきた。風を切る音がつるつるして声が聞こえにくいため、どうつと囁いたからである。

マヤは顔をほんの少しルーミアのほうへ向けて応えた。「本当なら、ギール城からデイン醜までは三十分もかかるないわ。でもこんなふうに迂回しながら、それも、上昇気流に乗れないこんな低空を飛ぶとなると、一時間半ぐらいはかかるちやうんじやないかな

「アハ」

「寒くない？」

「風が少し冷たい」

「じゃ、少し速度を落とすわ」

「ううん、それじゃ、着くのが遅くなる

「大丈夫。その代わり少し近回つするから」

マヤはピュムの速度をやや落としてから、山沿いを離れて森の上空を横切るルートをとることにした。

ところが、この判断が結果的に思わぬ災難を引き起しこととなってしまった。

ディンapseの物見櫓が遠くに見え始めるところまでたどり着いた時、眼下に絨毯のように広がる森の樹木の間から、突然、握り拳ほどの大きさの火の玉のよつよつなものが飛んできて、ピムの翼を直撃したのである。

ピムは叫び声を上げ、激しく体を揺さぶった。

「ピム！」

マヤは必死になつてピムをなだめ、なんとかしてコントロールを取り戻そうとしたが、ピムはどんどん降下してゆき、遂に森の中へ墜落した。

幸いにも、ピムが完全に我を失うことはなく、最小限のコントロールを受け入れてくれたため、マヤはピムに安全な着陸態勢をとらせることができた。おかげでマヤもルーミアも、かすり傷一つ負わずにすんだ。

しかしピムの怪我のほつは深刻だった。火の玉が直撃した部分の皮膚は直径三十センチほどの大きさにわたつて完全にはがれ落ち、むき出しになつた内皮から絶えまなく鮮血が吹き出しているのだった。

ルーミアは白魔法治療を試みた。止血には成功したものの、はがれ落ちた皮膚を完全に再生することはできなかつた。女性白魔導士である彼女は、魂の再生は得意でも、肉体の欠損部位を再生する能力は持ちあわせていないのである。

マヤは一応、ピムに翼を動かすよう言つてみた。予想どおり、ピムは苦しそうにさうに喘ぎ声を上げ、すぐに動かすのをやめてしま

つた。

彼女は「無理をさせてごめん」と謝りながら、赤い装甲に覆われたピムの頭部を撫でた。そしてやるせない表情で天を仰ぎ、

「もひ、最悪」

じぼやいた。

「なんなの、あの火の玉みたいなの？ 敵があんな武器を持つてるなんて聞いてないわよ」

ルーニアも、彼女にしては珍しく不快感をあらわにして

「あれは敵じゃなくて、サハラカン 竜落としとも呼ばれているモンスターが撃った火の玉よ。そんな危ないモンスターがいるなら、出発前に一言忠告してくれればよかつたのに」

と、彼女にデイン皓に行くよう要請してきたギール城駐留軍のお偉さんを暗に批判した。

とは言え、いつまでもこのような場所で悪態をついているわけにはいかなかつた。まずはこれから行動計画を練り直さなければならぬ。

最初、ルーニアは

「デイン皓であたしの到着を待つている人たちのことが心配なの。ここから皓まで歩いても二時間ぐらいだから、あたし一人でデイン皓に行くわ。マヤはピムがモンスターに襲われたりしないようにそ

ばにいてあげて。あたしは皆で白魔法治療をした後で、ピム傷を治す薬を手に入れるか、それができなければ男性白魔導士をつれて戻つてくれる」

と主張したが、マヤはこんな危険な森でルーミアに一人歩きをさせるわけにはいかないと反対した。

そこでルーミアは、この森の中でピムの傷につけるペペという薬草を探すこと提案した。ペペは森の中にわりとよく生えている植物なので、手負いのピムをひとりぼっちにしないように付近を探せばすぐに見つかるだろうとこうのである。

二人はその提案をすぐに実行に移した。

しかし、ルーミアの予想に反し、ペペはなかなか見つからなかつた。マキナスの森より北にあるこの森では、気候が少し違うのかもしれない。

仕方なく、二人は捜索範囲を広げることにした。

そうしているうちにマヤは、高さ三メートルくらいの崖の上に出た。ペペは日陰に生えていることが多いというルーミアの話を思い出し、マヤは崖の下を覗き込んでみた。

すると、

崖の下には、一人の人間が立つていた。

一人は薄緑色の派手な色の衣装を身に付けた、マヤと同じ歳ぐらいの少女。

もう一人は、これまた派手な黄色い衣装を身にまとつた大柄な人物だつた。身長は百九十センチ、体重も百キロぐらいあるのではないか。

そのそばでは、彼らが乗つてきたと思しき馬が一匹、足下の草をは食んでいた。同じ向きではなく、睨み合つように立つてゐることから、その馬の主たちは別の方向からやつてきてここに落ち合つたのではないかと思われた。

彼らは何やら熱心に話をしている。マヤは耳を澄ましてその会話を聞き取ろうとしてみたが、どうも、彼らの話している言葉は彼女の知らない言葉のようだつた。

いつの間にか、ルーミアもマヤの傍らで同じようこ崖の下をじつと覗き込んでいた。別の場所で薬草を探しているうちこマヤの様子に気付き、何があると想つてこちらに来ていたらし。

崖下の一人をよく見ると、マヤは薄緑色の服を着た少女に覚えがあつた。あれは確か、ヤグソフ四姉妹の末妹、ニーナではないか。

マヤの胸は一瞬、サーラを殺された怒りで張り裂けそうになつた。しかし、マヤは深呼吸をして気持ちを落ち着け、自分の感情をコントロールした。一か月前、敵兵と組み合つて結果的に敵兵を転落死させてしまつて以来、マヤはもう一度と、怒りで我を忘れて敵と戦うようなことはするまいと心に誓つたのだった。

そのうち、ニーナと思しき少女は、ふとこりから何かを取り出し、黄色い服をまとつた人物に手渡した。そして、更に二言、三言、言葉を交わしてから、馬にまたがり、風のようにつつていった。

残された黄色い服の人物は、それを見届けた後、いま手渡されたものを目の前にぶら下げてしげしげと眺めた。それは銀色の鎖の環に紫色の宝石が付いたペンダントだったのである。

「あれは…」

そう、あのペンダント、あれは、マヤがこちらの世界に引き込まれる直前、マヤの手の中で光輝いた、あの不思議なペンダントとそつくりではないか！

「あのペンダントだ！」

マヤは思わず小さな声で叫んでしまった。

ところが、マヤがあくまで小声で上げたつもりの叫び声は、しつかり眼下の人物の耳に届いていたのだった。

その人物はマヤたちのほうを振り返り、マヤたちには分らない言葉で一言、何か言った。それがマヤたちに通じていないとわかると、今度はマヤたちに分かる言葉で

「誰だー！」

と叫んだ。

その人物がさきほどまで横を向いていたためわからなかつたのが、いまマヤたちの方へ向けられたその胸には、防寒着の上からでもわかるほどの大きな一つの膨らみが付いていた。どうやらその人物は女らしい。

彼女は、崖の上のマヤがエラーニア王国軍の飛行服を着ていることにすぐに気が付いた。すると、馬の腹に結わえ付けられていた長い槍を手に取り、無言のまま、その切つ先をマヤの方に掛けた。マヤは機敏に身を翻してその切つ先をかわすことができた。しかし隣にいたルーミアの方は、よけようとした拍子に崖下へ転落してしまった。

「きやつ！」

崖の高さが三メートルほどだったため、ルーミアはそれほどダメージを受けなかつた。とは言え、崖を背にした今のルーミアは、槍を手にした大女にとつては格好の槍の的だった。ルーミアは文字どおり窮地に立たされた。

「ルーミア！」

躊躇している暇はなさそうだった。マヤは防寒着を脱ぎ捨てて、いわゆる全身レオタードに似た、飛行服のみの姿となり、腰の革ベルトにぶら下がっている小剣を抜いた。そしてその刃を大女に向けて、崖下へ勢い良く飛び込んだ。

しかし大女は、マヤが渾身の力を込めてくり出した剣をいとも簡単によけてしまった。

崖下に降り立つたマヤはそれでも必死になつて剣をくり出し続けた。ルーミアを守りたい一心だった。だが大女は、その大きな体のどこにそんな敏捷性が備わっているのか不思議なぐらい、やすやす

とマヤの剣をかわした。

マヤが剣を振り回し疲れた頃を見計らつて、大女はマヤの胸目掛けて槍の一撃を放つた。マヤはぎりぎりよけるのが精いっぱいだった。マヤの飛行服は胸の辺りで切り裂かれ、そこから血が滲み出した。彼女は万事休したと思った。

ところが大女は何を思ったのか、突然、槍を捨て、マヤの方へ歩み寄つた。マヤが剣で抵抗しようとするとその腕を鷲掴みにして動きを止め、手から剣を取り上げた。そしていきなり、彼女の飛行服の胸の部分の布を、乱暴に破つて取り去つたのだった。

マヤの胸の二つの膨らみは、鮮血に染まつて真つ赤になつていた。

「な、何するの！」

マヤは四か月前、ジューートの相手をさせられそうになつた時以来の貞操の危機を感じた。

彼女が自分の勘違いに気付いたのは、大女がポケットから小瓶を取り出し、その中のペースト状のものをマヤの胸の傷口に塗つてくれた時だった。

大女は

「これは俺の姉貴が作つてくれた薬だ。よく効くぞ。姉貴は故郷では結構有名な魔道士なんだぜ」

と、訛りのあるエラン語で話した。数カ月前、二ーナがマヤと話したときにもこれと同じ訛りがあった。おそらくこれがハバリア訛

りなのだろう。

マヤはどう応えてよいかわからずただ黙つて薬を塗られるままにしていた。

薬を塗り終えた大女はマヤに

と尋ねてきた。マヤはそのとき大女の顔を間近で見て初めて、その大女が、実はマヤたちよりも一つか三つ年上にすぎない、若い女性だということを知った。

マヤが名乗ると、大女は微笑んで

「マヤか。それは東洋ではよくある名前なのかな？」

と言つた。マヤは何も答えかつたが大女は気にも止めず

「俺の名はモーラだ」と言葉を続けた。「おまえ、東洋から来た傭兵だろ。おまえみたいな小娘が何もこんなどころまで戦なんかやりにこなくたつて、ほかに稼ぎ口ぐらいあるだろうが

それでも黙り続けるマヤを半ば無視して、モーラと並んで乗ったその女は独り言のようだ

「おまえがあの白魔道士を守ろうと必死になつて戦つた、その頑張りに免じて見逃してやるよ」

と言い、少し離れたところに立つてゐるホールニアを、あいだ指し

示した。

それまで恐怖で足がすくんで動けなかつたルーミアは、その時、やつと我に帰り、崖の上から落ちてきたマヤの防寒着を拾つて、マヤのところに駆け寄つた。そして、防寒着を彼女の肩にかけてやつた。

と、その時。

ルーミアの顔が蒼白になつた。

マヤとモーラは、こわばつて動かなくなつてしまつたルーミアの視線の先を、目で追いかけた。五十メートルほど離れたところに立つている高さ十メートルほどの一一本の木の幹の間に、二階建ての建物ぐらいの大きさの巨大なこんにゃくのようなものが挟まつているのが見えた。

三人とも、しばし言葉を失つた。

よく見ると、その物体は挟まつて止まつてゐるわけではなく、木々の幹に引っかかりながらも、その柔軟性のある体を幹のあいだの幅に適応させつつ、じちらへ向かつて少しづつ前進してきているのだった。

「サハラカンだ！」

モーラがやつと声を絞り出した。

その物体 サハラカン はそこで一旦停止した。マヤとルーミアは次に何が起るのか全く予想できず、口を半ば開いたまま、

ただただ呆然とその物体を見つめていた。やがてその物体の上部が濃いピンク色を帯び始め、次にその中心部が深紅から赤褐色へと変化していった。

一方、モーラの方は次に何が起こるか予測がついたらしい。いきなりその大きな手で一人の頭を抑え、

「伏せろ！」

と叫んだ。

二人は訳が分からぬまま言われた通り地面に突つ伏した。その次の瞬間、サハラカンの赤褐色に染まった部分から、野球のボールほどの大きさの火の玉が撃ち出されたのだった。

幸い、火の玉はマヤたちのいる地点から二十メートル以上離れた地面に命中した。

サハラカンは命中確率を上げる必要を感じたのだろう、再びその柔軟な体をぶよぶよと動かしてマヤたちのいる方へ前進を始めた。

マヤは素早く立ち上がり、傍らでうつぶせになっているルーミアが立ち上がるうとするのに手を貸した。そしてその手を引っ張つて、モーラとともに近くの大きな木の幹の陰に逃げ込んだ。幹の陰から様子を伺うと、サハラカンはまだ三十メートル以上離れたところにごめいでいた。どうやら動きはかなり緩慢のようだ。

「きつヒピムにとじめを刺しこきたのよ」ルーミアが言った。「サハラカンは火の玉で竜を撃ち落として、動けなくなつたところをあの体で包み込んで溶かして食べちゃうて。書物で読んだことがある

「どうすればいい？」マヤが言った。「あのモンスターには何か弱点とかはないの？」

応えたのはルーニアではなくモーラだった。「上方に目が一つついていてその間に脳がある。そこにダメージを『さればいい』

マヤは、その言葉の真意を測るために、モーラの目を見た。そこに偽りの光がないとわかる

「田のあいだね。わかつたわ」

と応え、走り出した。そして、先ほど小剣を落とした地点で剣を拾い上げてから、一旦、手近な木の幹に隠れ、腰のベルトに付いている鞘に剣を納めた。

するとモーラは、どうこうつもりか、いきなり木の陰から飛び出して、サハラカンの前に立ちふさがり
「俺が囮になつてあいつの注意を引く。マヤは木の上からやつの弱点を狙え」

と叫んだ。

マヤは一瞬、無関係のモーラに協力してもうう筋合はないと断りううと思ったが、やはりどうしても囮役は必要だと考え直し、何も言わず彼女の指示に従つこととした。

ルーニアは木の陰から囮役をのんびり見守つた。

マヤは、モンスターの視界に入らないよう注意しながら、立ち並ぶ樹木伝いにモンスターの方へ二十メートルほど近付き、様子を伺つた。サハラカンはどうやら、前に立ちふさがるモーラに攻撃の矛先を向けることにしたらしく、前進を停止して、その巨体の上部をピンク色に染め、今までに火の玉を打ち出せつとしていた。

数秒後、火の玉がモーラ目掛けて飛んでいった。

モーラは先ほどマヤと戦つた時に見せた敏捷性を、今度も如何なく発揮し、鮮やかな身のこなしで火の玉をかわした。

それを見て安堵したマヤは、更に樹木一本分、サハラカンの方へ近付いた。

数メートルほどしか離れていない場所からモンスターを見上げてみると、改めてその巨大さに圧倒された。モーラの言つていいた目の在り処を見極めようとしたが、五メートルにも及ぶと思われるその体の上部の様子は、下からでは伺い知ることができなかつた。

彼女はモーラに指示されていだとおり、木の幹をよじ上り始めた。都会で生まれ育つた彼女は木登りなどやつたことがなかつたが、幸い、その木の幹には多数の突起がついていたため、そんな彼女でもどうにか登つてゆくことができなかつた。

ところがその時、サハラカンの動きに変化が現れた。サハラカンは次の火の玉の準備をするために体の上部をピンク色を染め始めていたのだが、射出口となるはず赤褐色の部分は、モーラの方ではなくマヤの方を向いていたのである。

すでに木の中腹まで登り終えていたマヤは、下に降りることもで

さす、木の幹にへばりついたまま可能な限りの防御姿勢をとった。

火の玉が撃ち出された。火の玉はマヤがつかまっている幹をかすめ、背後にある木に直撃した。振り返ってみると、その木は根の部分を残して跡形もなく消え去っていた。彼女は背筋が凍り付くのを感じた。

モーラは少し離れたところで大声を上げ、モンスターの気を引こうとした。サハラカンの注意は再びモーラの方へ逸れた。

その間を利用して、マヤは木登りを再開した。やがて建物の二階ぐらいの高さまでたどり着いた時、ちょうどそこに太い枝がせり出しているのが見つかったので、彼女はそこに立って見下ろしてみることにした。

モンスターの体の上部に赤いひし形が一つ、モーラのいる方向を睨んでいた。どうやらあれが目らしい。

マヤは腰の鞘から小剣を抜いた。モンスターの弱点である目の間の部分は、マヤの立っているところから一メートル以上離れていた。腕を伸ばして刺し貫くには距離があり過ぎる。

そのうちサハラカンは再び火の玉を打ち出す準備を始めた。体の上部がピンク色に染まる。しかもそのひし形の目は、モーラのほうからマヤのほうへと、見据える方向を再び変えつつあった。一刻の猶予も許されなかった。

マヤは、先ほど崖の上からモーラに對してやつたのと同じよう、モンスターめがけて身を投げ出した。

「や———ひー」

今度こそ、彼女は小剣の刃を突き立てることに成功した。目の間の部分を刺されたモンスターは激しく体を揺さぶり、マヤを振り落とそうとした。そのためマヤは手を剣から離してしまい、雪山のようなモンスターの巨体の上を、じろじろと転がり落ちた。

柔軟性のあるサハラカンの体がクッシュョンのような役割を果たしたため、マヤは地面に激しく叩き付けられることはないなかつた。

サハラカンはしばらぐの間、ぶよぶよと体を揺さぶり続けたが、やがて力尽き、その場ごどりと崩れ落ちた。

マヤのもとに、モーラとルーニアが駆け寄ってきた。

モーラとルーニアは異口同音に「やつたな」「やつたわね」と言った。

マヤは「ええ」とだけ応え、とびきりの笑顔を二人に返した。

するとモーラは、またポケットから、今度は何やら紐のようなものを取り出し、それをマヤの首にかけた。それは先ほどモーラが二ナから受け取ったあのペンダントだった。

「そのペンダントはシカの腹の中から見つかったものだ。俺の妹を何か月間もあちこち飛び回らせた厄介物だ。もう魔力も消えているから俺たちには不要だが、珍しいものなので金にはなる。お前はそれを売つて東洋へ帰れ」

彼女はそう言って、マヤの肩をポンとたたいた。そして先ほどマ

ヤと戦った場所まで歩いてゆき、地面に捨ててあった長槍を拾って馬の腹に結わえ付けてから、派手な黄色い衣装をひるがえして馬にまたがった。

マヤはモーラに聞こえるよう大声で

「あらがとう」

と叫んだ。

馬上のモーラはマヤたちの方を振り返つて微笑んだ後、前を向き直り、馬の尻に鞭を当てた。彼女を乗せた馬は一目散にその場を走り去った。

その後、マヤたちは無事に薬草ペペを見つけることができた。ペペをすり潰してピムの傷口につけると、その鎮痛効果により、ピムは翼を動かすことができるようになった。

デイン醜に着いた頃には日没時間の午後三時をだいぶ過ぎていたため、辺りは真っ暗だった。

ルーミアはすぐさま、死にかけている患者を死の淵から救う白魔法治療を開始したが、治療を必要としている患者はかなりの数にのぼっていたので、全ての治療を終えたのは、夜中の十一時半だった。

ルーミアはくたくたになつた体を休めるために、彼女とマヤのた

めに割り当てられた寝室へと向かった。毎晩、モーラやモンスターと戦ったマヤもきっと疲れて寝ているだらう想い、寝室の扉はそつと開いた。

ところが意外なことに、部屋の中ではマヤがまだ起きて彼女を待つていた。

マヤは腰のポショットから何かを取り出し、ルーミアの手のひらにのせた。それは貝殻の形をかたどった、小さなイヤリングだった。

「お誕生日おめでとう」マヤは満面の笑みを浮かべ、言った。「本當は朝、起きてから渡そうかとも考えたんだけど、待ちきれなくて、いま渡そうって思って、待つてたの」

しかしルーミアは不思議そう

「でも、こんなイヤリング、いったいどうやって……？」一ヶ月、ずつとあの最前線の町、ギールに駐留していたのに

と尋ねた。

「オクタヴィイのお父さんがファクティムで銀細工師をしているって知ってるでしょ？ あたしたちがギールに配置転換になってしまってから、オクタヴィイのお父さん、届けるのに苦労したみたい。注文したのは、もう三か月近く前かな、ファクティムにいた頃にやつたオクタヴィイのお誕生パーティー。あの後すぐよ」

「そんなに前？」

「そう。ルーミアには誕生日当日まで内緒にして、驚かせるつもり

だつたの。だから先週、ルーミアが誕生日の話をした時も、あたし、とぼけてルーミアの誕生日なんか覚えてなかつたふりをしたのよ。本当は、言葉のレッスンの中で教えてもらつたあの時から、一日たりとも忘れたことはなかつたわ」

「もひー！意地悪ー！」ルーミアはそう言ひながら、マヤに抱きついてきた。「でもありがと、お姉ちゃん」

ギール攻城戦は二か月に及んだ。

ハバリア軍は第一次攻撃の後も、制空権を奪わんと、次々とギール戦線で竜騎兵戦を仕掛けてきた。しかしそのたびごとに、彼らの前にエメンツ装甲竜騎兵隊とファクティム竜騎兵隊が立ちはだかり、鬼神のような戦いぶりでハバリア竜騎兵を蹴散らした。そのため、制空権を得て、ギールを孤立させ奪取するというハバリア側の目論見はもろくも崩れ去つた。

その中でもファクティム竜騎兵隊所属のマヤ・クフルツ竜騎兵の活躍は目覚ましいものがあつた。それまで飛行技術は優れているものの、竜騎兵としてはあまり評価の高くなかった彼女が、ある日を境に、重しがとれたかのように軽快な動きを見せるようになつたのだった。その「ある日」がルーミアの誕生日であったことは、無論、誰の知る由もない。

結局、ハバリア軍は、ヤグソフ四姉妹の一人、モーラの率いるアマゾネス隊がまたも城壁に大ダメージを与えた以外、得るものもなく、二月初頭、包囲を解いて撤退した。

開戦以来、連戦連勝を続けていたハバリア軍が勝利を逃したのは、この戦いが初めてであった。

マヤは、日本にいたころ国語の授業で習つた「蝴蝶の夢」「の話を思い出していた。蝶になつて飛ぶ夢を見ていた男が田を覚ましたとき、ふと、人間の姿をした今の自分は、本当は蝶の見ている夢に過ぎないのではないかと考えるという、有名な中国の古典である。

アメリカで育つたため日本語の知識が不足し、結果、国語の授業がどうしても好きになれなかつた彼女が、そんな古くさい逸話のことを考えたのは、その話に出てくる男が何となく今の自分に似ているような気がしたからである。すなわち　自分はもともとマヤ・クフルツという女の子であり、異世界で男として暮らしていた時の記憶は、クフルツ診療院で田覚める前に見た夢にすぎないのではないか

女としての生活を始めて半年が過ぎていた。今では自分の肉体に違和感を感じることもなくなり、また他人から女として扱われることにもすっかり慣れていった。言葉に関しても、最初はルーミアから教わつたのが女言葉だとは知らずに使つていたが、今ではつきりと意識して女っぽく話していた。それに、今さら男言葉を覚える気にもなれなかつた。仕草や振る舞いはといえば、こちらの方はまだまだ男っぽかつたものの、この軍隊生活の中では、それが周りの人々の目に奇異と映ることはなく、むしろ女性兵士としての頼もしさ、凛々しさを醸し出していた。しかも彼女の話す言葉がルーミア仕込みのやや少女っぽいアウスグ語であつたため、仕草や振る舞いとのギャップが、却つて彼女の神秘的な魅力を高める役割を果たしていた。お陰で何度か男性兵士から言い寄られたこともあつたが、そのたびに彼女は「故郷に好きな人がいるから」と、その申し出を断つたのだった。故郷の街に、かつて告白しようとした相良美玖という

人がいるのは事実なので、嘘は言つていません。

実際、彼女は今でも美玖が好きだった。客観的に見ればまるで同性愛のようだが、もちろんそうではない。なぜなら、故郷の街のことを思い出す時、夢を見る時、彼女はまだ山矢健太だつたからである。そして山矢健太はアクロバット飛行競技会の日、美玖との別れ際にした約束 「演技が終わつたらお前に言いたいことがある」 というあの約束をまだ果たしていないのである。

だから、俺は元の世界に帰らなければならない 彼女は思つていた これほどまでにこちらの世界での女としての生活に馴染んでいても、帰らなければならないのだ。そう、たとえ男に戻れなかつたしても。たとえルーミアやピムと永遠に別れることになるとしても！ しかし、それは彼女にとつてあまりに辛い別れである 果たして俺にそれができるのか？ いや、やらなければならぬ。俺はこの世界では異分子だ。ピムと出会つた時だつて、ピムはあやうくガソリンを舐めるところだつた。やはり向こうの世界のものはこの世界にあつてはならない。 いとはならない。 「胡蝶の夢」 の話でいうと、現実の自分は山矢健太でなくてはならず、マヤ・クフルツは、山矢健太の夢の中に出てきた女の子でなければならぬのだ

竜騎兵隊入隊当初は漠然としたものでしかなかつたそんな願いが、ここへ来て少しづつ目に見える形となつて現れ始めた。 いま彼女の手の中には、デイン皆近くの森でモーラという大女からもらつたペンダントがある。このペンダントが、こちらの世界に引き込まれる直前に手の中で光つたあのペンダントと同一のものだという確証はない。しかしモーラが去り際、このペンダントは珍しいものだと言つていたことからすると、その確率は高い。 仮にそうでなかつたとしても重要な手がかりであることには変わりない。

またモーラは、このペンドントのせいでの妹が何か月間もあちこち飛び回るはめになつたとも言つていた。いろいろな話を総合した結果、あの大女がヤグソフ四姉妹のモーラであることは間違いないと思われたが、だとすると、その妹二一ナが数カ月前、アヴィー村周辺やファクティム近郊をうろついていたことと何か関係があるのだろうか？

モーラは確か、このペンドントはシカの腹の中から見つかつたとも言つっていた。このペンドントが例のペンドントと同一だと仮定した場合、これは本来、山矢健太が持つていてるべきものということになる。マヤ自身、クフルツ診療院を退院した後、これが重要な手がかりであることを認識し、一応、墜落現場やその周囲を探してみたが、どこにも見つからなかつた。そのため、飛行機とともに燃えて灰になつてしまつたか、墜落の際、どこか遠くに落としてしまつたのだろうと判断し、捜索を断念していったのである。だがもしも後者の推測が正しいとすれば、森のどこかに落ちたペンドントをシカが誤つて飲み込んでしまうことは十分考えられる。そしてもしもこのペンドントに、いわば発信器のような機能があつたとしたら、二一ナはこのペンドントを頼りに山矢健太を見つけだそうとして、結果的に、森の中を移動する習性を持つシカの一群を追いかけていたとも推測できる。

もちろんマヤはこのペンドントを手に入れてすぐ、ルーミアや、ギール城に駐在する物知り魔道士たちに調べてもらつた。彼らが異口同音に「このペンドントに付いている宝石は見たことないものなのでよくわからないが、少なくとも現在、この宝石から魔法の気配は感じられない」と言つたことから、とりあえず今この瞬間にこのペンドントの「発信器機能」によつて誰かが彼女の居場所を監視しているなどということはなさそうだった。それ以前に、このペンド

ントを受け取った時の状況からして、モーラがそのような田舎でマヤにこれを渡したとも思えなかつた。

いざれにせよ、これらはマヤの推測に過ぎない。このペンドントは彼女がこちらの世界に引き込まれたこととは何の関係もないのかかもしれないし、関係があつたとしても、このペンドントからその原因を探り出してゆくことは不可能なかも知れない。それともともと、彼女はこのペンドントを見つけることを切望していたわけではない。彼女が竜騎兵隊に入った第一の目的は、彼女がこちらの世界へ引き込まれた原因を作つたハバリア帝国や、その事実を把握していると思われるエラーニア王宮へ少しでも近付くことにある。

もしこの世に神がいるとすれば、マヤを異世界へ放り出した向こうの世界の神は、彼女にあまり優しくなかつたといえるかも知れない。しかしこちらの世界の神は決して彼女を見放さなかつた。ギール攻城戦の後、軍上層部は、ファクティム竜騎兵隊に対し、エラーニア王宮のある王都エランへの配置転換を通達してきたのである。

「舞踏会？」

マヤはいかにも怪訝そつた顔をしてラウラにそう訊き返した。

ファクティム竜騎兵隊の面々とともに、王都エランのはずれにある竜騎兵基地に到着した彼女が兵舎に手荷物を置いた途端、隊長のラウラが「エランでの最初の任務」を伝えると言つてきたのだった。

「舞踏会つて、みんなで集まってダンスを踊るあの舞踏会?」

ラウラは笑いながら答えた。「そうだ。ついさっき軍上層部のほうから命令があった。『ファクトティム竜騎兵隊は今夜の舞踏会に参加のこと』ってな」

マヤは困惑した。「そんな、いきなり言われても……。だいたいエランつて、エラーニア王国の王都だけど、今は最前線のすぐそばにあって、いつ敵の攻撃を受けてもおかしくないんじゃなかつたの? 舞踏会を開く余裕なんてあるの?」

「確かに、戦の始まつたおととしには、ハバリア軍は怒濤の進撃でエランのすぐ近くまで迫つた。しかしそれ以降は、ハバリア側の戦力が不足してきたことと、こちらの防衛体制が整い始めたことから、この戦線はずつと膠着している。避難していた住民が戻ってきて普通の生活を始めるぐらいだからな。つまり、同じ最前線でもギールとは状況が全く違うつてことだ。ギール攻城戦に勝利した今、お偉いさんたちが舞踏会を開くのは、逆に余裕のあるところを敵に見せつけてやりたいつていうことなんだろう」

「でもあたし、ダンスなんか踊れないし、それに、そんなおおやけど振舞つたらいいのか……」

「ああ、大丈夫だ。あたしもオクタヴィイも舞踏会は始めてなんだから。ルーニアだって、そつだろ?」

マヤとともに話を聞いていたルーニアは、ラウラにやう訝かれて、こくりとうなずいた。

ラウラはそれを見届けた後、言葉を続けた。「舞踏会に出る王族

やら貴族やら軍のお偉いさんだつて、あたしたちのダンスが見たくて呼び出すわけじゃない。彼らが見たいのは、ギール戦線で装甲も付けてないくせに装甲竜騎兵隊と互角に渡り合つたファクティム竜騎兵隊の隊員が、どんな面つらしてゐるのかつてことや。とにかく、さつきも言つたように、これはれつととした任務だからな。エラーニア王宮への出撃だと思えば、向こうが攻撃してこないぶん氣も楽だろ？」

「え？ エラーニア王宮？」 マヤは隊長の言葉の最後の部分に敏感に反応した。「舞踏会は王宮で開かれるの？」

「ああ、そうだよ」

今まで乗り気でなかつたマヤは、態度を一変させた。「そ、そ？ 王宮で開かれるの？ 王宮なんて普通なら絶対に入れないとこりうよね。何となく興味が湧いてきたわ」

「ウラはマヤの変化を別に気に止めることなく続けた。「それは結構。では今すぐ支度を調べてくれ。まだ三時過ぎだけど、いろいろ準備があるから、すぐにここを発たないと間に合わないんだ」

「わかつたわ」

マヤはそつと、手早く飛行服を脱ぎ、制服に着替えた。

戦い続きだつたギールでは寝る時以外ずっと飛行服姿だったので、制服を着るのはファクティム離任式典以来四か月ぶりである。当然、履き慣れないパンプスが彼女の歩行をぎこちないものにしたが、例によつてルーミアが杖代わりとなつてくれた。マヤはルーミアの魔道マントにつかまりながらなんとか兵舎を出、ラウラとオクタヴィ

とともに、王宮側が用意してくれたといつ馬車に慌ただしく乗り込んだ。

馬車は一路、王都Hランの中心部を田描して大通りを走り始めた。窓から外の景色を眺めてみると、整然と整備されたその町並みは、たとえ自動車や四階建て以上の建物が見当たらなくとも、マヤに故郷の都会の街角を思い出せりせずにはおかなかつた。

このままこの街角を通り抜けて王宮へ直行するのだろうとマヤの予想に反し、馬車が止まつたのは、意外にも一軒の店の前だつた。他の三人が当然のような顔をしてそそくさと馬車を降りてしまつたので、マヤも慌ててそのあとについて車外へ出た。彼女の目の前には、Hラン文字で「貸し衣装屋」と書かれた看板と、華やかなドレスに彩られたショーウィンドーがあつた。

更に驚いたのは、今まで「頼もしい同僚の兵士」だと思っていたラウラとオクタヴィイが、店に入るや否や、故郷の街でもよく見かけたような普通の女の子に豹変してしまつたことだ。次々とドレスを手に取つては色や柄がどうのと言つて元のところに掛け直し、こつちもかわいいと言つてはまた別のドレスを手に取るのである。ルーミアまでもがマヤのことをほつたらかしにしてドレスの物色に没頭している。彼女は今まで、マヤに対する気遣いを忘れたことは一度もなかつたのに……。

半年間、女として生活してきたといつても、そのほとんどを戦場で過ごしたマヤには、彼女たちのそういうした行動はやや理解しがたいものに感じられた。マヤは心密かに「やっぱり俺は今でも男なんだな」と日本語で独り言つた。

といふが、である。マヤの存在をよつやく想い出したルーミアが

ドレスを一着持つてマヤのところにやって来た。そしてそのドレスをマヤの前で広げ、彼女の体に合わせるようにして「お姉ちゃん、これ、どう?」と言った。胸の部分が大きく開いたそのピンクのドレスには小さなフリルがたくさんついていて、とても愛らしかった。もし自分がこれを着たらどうなるのだろう そう思った瞬間、マヤの心の奥底から、今まで経験したことのない感情が溢れ出してきたのである。

マヤの口から無意識のつづこ「あ……、このドレス、いい」という言葉が漏れた。

それから三十分ほど之間、貸し衣装屋の店内では、女たちの上げる楽しそうな声が絶えることはなかった。もちろんその中にはマヤの声も含まれていた。彼女たちはいつまでもドレス選びに興じていたかつたが、ラウラが「そろそろ決めないと舞踏会に遅れるな」と言い始めたためやむを得ず三十分で打ち切ったのだった。

結局、マヤは白地にとこりんごりんの深紅をあしらつたドレスを選んだ。胸の部分が大きく開いている。ルーニアによると、胸がそれほど大きく開いていた方が見栄えがいいのだという。当のルーニアの選んだドレスはといえば、ピンクを基調にしたもので、彼女のやや大きめの胸を、フリルをちりばめた布で覆うことによってせり気なく強調している。オクタヴィイのドレスは薄緑色のわりとシンプルなものだったが、不思議なことに、彼女の細身の体にはよく似合っていた。一方、ラウラは落ち着いたベージュ色のドレスを選んでいた。二十八歳という年齢にふさわしいシックなデザインだった。背の高い彼女には大人っぽいドレスがひときわよく似合つのだ。

マヤは胸の高鳴りを抑えることができなかった。ドレスにコーデ

イネートした真っ赤な靴が制服のパンプスに比べヒールの高いものだつたので、着替える前よりも更に歩きにくくなつてしまつたが、ドレス姿の淑女は、誰もがスカートの裾を持ち上げてゆっくりと歩くものである。マヤだけが歩くのが遅くて置いてけぼりにされる心配はもうなかつた。彼女たちの乗つてきた馬車の御者も、軍服姿の彼女たちには見向きもしなかつたといつのに、ドレス姿で店の前に出てきた「淑女たち」には、打つて変わつて優しい態度を取つた。彼女たちが馬車に乗り込もうとする際、一人一人にうやうやしく手を差し伸べてくれたのである。

マヤの興奮は、次に彼女たちが向かつた先の美容院でその度を極めた。ギール駐留の間にぼさぼさに痛んだ髪は、きれいに切りそろえられた上につややかにトリー・メントされ、汗と泥がしみついた顔も、きれいに洗われた上に化粧が施された。夢見心地とはまさにこのことだつた。鏡の中で変わつてゆく自分を見つめながら、マヤは心密かに「やつぱり今のあたしは女の子なのかな」とアウスグ語で独り言ちた。

興奮冷めやらぬマヤたち一行を乗せた馬車は、遂にエラーニア王宮前に到着した。白亜の壁をまとつた王宮は、日も沈んですっかり暗くなつた王都の空に多数のかがり火で照らし出され、その偉容を誇示していた。

洒落な制服を着た若い男性の従僕が、彼女たちを王宮の中へと導いた。入り口から大広間へと続く長い廊下を、普段の五分の一ぐらいいの速度でしずしずと歩いてゆく間、マヤの胸は、先ほどから続いている興奮に加え、この廊下の先に待ち受けているものに対する期待感で一杯になつた。

果たして、大広間への扉が開かれた時に彼女の目に飛び込んでき

た光景は、彼女の期待を裏切らなかつた。天井には豪華なシャンデリアが三つ吊るされていて、そのガラスの装飾には無数の光の粒がきらきらと輝いていた。そして、広間にたたずむたくさんの紳士淑女たちが、それら光を、その身にまとう宝石や貴金属で反射し、更に、鏡のようになめらかに磨きあげられた大理石の床が、それらの光と、紳士淑女たちの姿と、天井のシャンデリアを映し出していた。

今朝まで戦場の町にいたマヤたちにとつて、そこはまさに別世界だつた。あまりの美しさ、きらびやかさに声も出なかつた。

「マヤたちの目が光のまばゆさに慣れ始めた頃、大広間の一番奥、樂団が陣取つてゐる一角に、妙に愛想の良い小男が現れ、その体の大きさからは想像できないほどの大声を張り上げた。

「紳士淑女の皆様、今宵は、当エランニア王宮における舞踏会にお集まり頂き、誠にありがとうございます。ご存じの通り、この王都エランはいまだ、門前から敵軍の掲げる軍旗が望める状況下にあります。しかし、我らが王国軍は、先日のギール戦で見せた武勇を必ずやこのエランで、ひいては王国全土で鳴り響かせ、野蛮なる敵の将兵どもを残らず蹴散らさんものと信じております……」

その小男の口上は、マヤの耳には少し気取つた言葉のように聞こえた。それは、その男の話し方自体のせいでもあつたが、それ以上に、エランの人たちが話すエラン語のアクセントが、マヤたちアウスグ語を話す者たちには氣取つた口調に聞こえる性質を持っているからだつた。

小男が「さあ皆様、今宵は楽しみましょう。そして、記念すべき偉大なる勝利を祝いましょう」と口上を終え、樂団の指揮者に目配せすると、樂団は華やかなワルツを奏で始めた。それを合図に、

フロアにたたずんでいた紳士淑女たちは、一部が男女ペアになつて踊り始め、他の者たちは邪魔にならないよう壁際へ退散した。

マヤは他の三人とともに大広間の隅へ移動した後、じばらぐの間、踊り手たちの華麗なステップに見とれた。そこには何か言葉に尽くせない、調和のとれた美しさがあった。指で弾けばすぐにも壊れてしまいそうな、そんな纖細な美しさにも見えた。マヤはこの調和を壊したくなかった。ダンスなどやつとことない自分は、間違つてもこの踊りの輪の中に参加できそつにないと思つた。

そのうち、軍服姿の中年男性が彼女たちの方へ歩み寄つてきた。背はそれほど高くないものの、歳の割には脂肪の少ない、精悍な体つきの男だった。彼はラウラに微笑みかけると、友人とでも会話するように親しげに話し始めた。

言葉がいくつか交わされた後、ラウラはマヤたちのほうを向き、「この方が、今度あたしたちの上官になつたアイリゲン大佐だ」と言つた。

マヤは慌てて、背筋を正して敬礼しようとしたが、敬礼は軍服を着ている時だけの表敬動作であつて平服を着ている時にはやつてはならないということを思い出し、オクタヴィヤルーミアに習つて、スカートを両手で持ち上げ、ひざを少し折る仕草をした。

アイリゲン大佐は言つた。「ファクティム竜騎兵隊のギールでの活躍は本当に素晴らしい。エランへの配置転換を上層部に頼んだのは実はこの私なんだ。ラウラの率いこの優秀な部隊を、ぜひ私の指揮下に入れて使わせてほしい、とね。今後の活躍にも期待しているよ」

マヤは、オクタヴィーとともにその言葉に会釈で応えながら、彼の言葉にはアウスグ語訛りがある、きっとルーニアたちと同じアウスゲント地方の人なんだと考えた。

大佐はそこでマヤに手を止め、ほんの少しではあったが怪訝そうな顔をした。「君がマヤ・クフルツか。ラウラから聞いている。ファクティム竜騎兵隊の中でも飛び抜けて優秀だそうだが」

マヤは一応、型通りの謙遜をした。「それほどでも

「とにかく頑張ってくれたまえ。これからもまた大変な戦いが続くかもしれないが」

大佐はそう言って、最後に再びラウラに微笑みかけてから、その場を後にした。

やがて、一曲目のワルツが終わった。人々は踊り手たちに惜しみない拍手を送った。拍手が鳴り終わると、男たちは、楽団が次の曲の準備をしている間を利用して、新たなパートナーとなる女性を探し始めた。

ところが、新たなペアが配置につき、楽団が今までに次の曲を奏で始めようとした時、先ほどの小男が再び現れ、楽団の指揮者に演奏をやめさせたのだった。

小男は人々に向かつてまた大声を張り上げた。「皆様にお知らせしたいことがあります。先のギール攻城戦を勝利に導く原動力となつた、勇猛なる竜騎兵のお三方が、今宵、この舞踏会に、来ておられます」

彼は芝居がかつた大げさな仕草で、広間の片隅に突っ立つて、マヤたちの方を指し示した。すると、広間にたたずんでいるすべての人々の目が一斉にマヤたちへ向けられた。

あまりに唐突なことだったので、マヤは面食らつた。

人々は、次第に賞賛の言葉を口にし始めた。マヤたちの近くに立つていた者は直接、ねぎらいと激励の言葉をかけてきた。引き続き小男が「ファクティム竜騎兵隊のお三方、どうか広間の中央へ」と促してきたので、マヤは、ラウラとオクタヴィとともにフロアの真ん中付近へゆっくりと歩み出た。人々は暖かい拍手で彼女たちを迎えてくれたが、マヤはそれでもどきどきするばかりだった。

しかも、マヤの驚きはそれだけでは終わらなかつた。小男が更に「皆様、エラーニアの誇りである彼女たちに、より一層の拍手を。特に、我らが王国のエース竜騎兵、マヤ・クフルツには最大級の拍手を！」と言つて、また大げさな身ぶりで彼女を指し示したのである。

「マヤはようやく声を絞り出した。「あ、あたしがエース竜騎兵？」
嘘……」

ラウラは娘を思う母のような笑顔をマヤに向け、言つた。「撃墜した竜の数ぐらい数えとけつて言つただる。おまえの撃墜数は、ファクティムから通算六十四匹だ。あたしがちゃんと数えて上層部に申告しておいた。おまえは間違えなくエース竜騎兵だよ。おめでとう」

オクタヴィも拍手をしながら「おめでとうございます、マヤ」と言つた。

今や大広間では拍手と賛辞が大きな渦となつて、マヤたちを飲み込んでいた。マヤはもうどうしてよいかわからず、ラウラとオクタヴィイがスカートを両手でつまみ上げてひざを少し折る例の仕草で拍手に応えるのを、ただただ真似るしかできなかつた。

しばらくして彼女たちが広間の片隅へ戻つてきた後も、人々は彼女たちへの賞賛の言葉を口にし続けた。中には賞賛というよりはむしろ、下心みえみえでラウラやオクタヴィイに言い寄つてくる男性もいた。マヤはそれでも半ば呆然としていたが、ルーミアに「おめでとう、お姉ちゃん」と声をかけられて、やつと我に帰り、人々の賞賛の言葉にまともに受け答えできるようになつた。

その後、ワルツが何曲か奏でられるうちに、ラウラとオクタヴィイはパートナーを見つけて踊りの輪に参加するようになつた。ダンスなんかやつたことがないと言つていたくせに、二人とも結構、上手だつた。相手の男のリードが良いのかもしれない。よく見ると、ラウラのパートナーはアイリゲン大佐だつた。先ほどもそうだつたが、二人がお互いを見つめ合う時の目は、単なる上官部下ではなくもつと親しい人間同士が見つめ合う時の目のように見えた。マヤは、もしかしたら二人は大人の関係なのかもしれないと思った。ひょつとしたら大佐は、ラウラをそばに置いておきたいためにファクティム竜騎兵隊をエランへ呼んだのかもしれないとも思った。

その次のワルツが始まつた時には、ラウラたちに加えて、遂にルーミアにまでダンスへの誘いが舞い込んだ。ルーミアは、マヤに対する気遣いからその誘いを断ろうとした。しかし、マヤが「ルーミアのダンスがぜひ見てみたいから」と言つて誘いを受けることを勧めたため、ルーミアはしぶしぶ承知して、相手の男とフロアの中央へ出て行つた。

ルーミアがたどたどしくも懸命にステップを踏んでいるさまを見つめているうちに、マヤは何となく疎外感を感じ始めた。よく考えてみると、先ほど人々が自分を賞賛してくれた時も、表面上は愛想の良い笑顔だつたが、どことなく、奇異なものに対する恐れや好奇心が混ざつた表情だつたような気がする。単にエース竜騎兵の自分に畏怖を感じたからなのか。それともやはり、自分が東洋人だからなのか。ファクティムやギールでも、そのような目で見られたことはなくはなかつたが、ここではそれがより顕著に感じられた。王都という土地柄のせいなのかもしれない。

次にワルツが終わつた時、例の小男がまた現れ「国王陛下、王妃陛下のお出まし」と言つた。広間の一一番奥の壁に付いているバルコニーに、人影が一つ現れると、人々は拍手と「国王陛下万歳、王妃陛下万歳」というかけ声でそれを迎えた。マヤはこれほど国民に慕われている国王夫妻がどのような人物なのか知りたくて目を凝らしたが、彼女の立つている場所からはバルコニーの中をはつきり見通すことはできなかつた。

遠い　マヤは思った　エラーニア王宮の中核部はあまりにも遠い。今まで漠然と「王宮に近付けば、自分がこの世界に飛ばされた理由と、元の世界へ帰る方法がわかるかもしれない」と考えてきた自分は、あさはかだつた。東洋人の自分が簡単に近付くことができない場所だということは、ちょっと考えればわかつたろうに

華やかなドレスときらびやかな大広間がマヤにかけた陶酔という名の魔法は、解けつつあつた。国王夫妻臨席の下、樂団が次のワルツの準備を始めると、ラウラもオクタヴィイも、それにルーミアさえも、新たなパートナーとともにフロアの中央へ出ていつてしまつた。

「マヤは、自分はやはり「調和」していないと感じた。これ以上ここにいる意味も目的もない、もう帰りたいと思った。いま抜け出したところで誰も文句は言わないだろうし、仮に咎められても気分が悪いことでも言えよいのだ。彼女は、未だまばゆい光を放つシャンティアに背を向けて、出口の方へ足を一步踏み出した。

すると。

彼女の前に誰かが立ちふさがった。うつむいていた彼女の目にはその下半身しか見えなかつた。それが軍服のズボンらしいとわかると、彼女は顔を上げ、道をあけてくださいと言おうとした。

そのとき彼女の目に映つたのは、見覚えのある顔だつた。

「お嬢さん、僕と一緒に踊つていただけますか？」

「ジューート……？」

ジューートは以前と変わらないにやけた笑みをこぼしながら、マヤに手を差し伸べていた。

それから四日後、マヤはエラーニア王国最大の魔道研究機関、王立エラン魔道学校を訪れていた。

この学校で教鞭を執る最上級女性白魔道師ホトは、一年前までルーニアがここに通っていた時の恩師である。ルーニアがマヤに、も

しHランへ行くことがあつたらホト師のもとを訪れよつと提案したのは、数ヶ月前、ギール城でマヤが例のペンダントをルーニアに見せた時だつた。一人はエランに配置転換になつた時、いの一番にこを訪れるつもりだつたのだが、舞踏会といつ任務を『えらべてしまつたため、実際に訪問の機会を得たのはその翌日だつた。ホト師は、間もなく重要な実験を始めるところだが、それまではいさかの暇がある、ほかならぬルーニアと、その姉の頼みとあらば、このペンドントについてできる限り手を煩くして調べてみよう、と言つてくれた。ただし、実験が始まつたら、ルーニアは軍務に差し支えない範囲で実験の手伝いをしに来るよう、といつ条件付きだつた。

マヤが期待に胸を膨らませながら二日、ぶりに「ホト研究室」を訪れると、ホト師はマヤを来客用のソファに座らせ、自分自身は身長百三十三センチほどしかないその体を別のソファに預けた。

「残念ながら、なんにもわからんかった」師は、九十歳という年齢を感じさせないハキハキした口調で言つた。「図書館でも調べたが、どの書物にもこの宝石に関する記述は見つからんかった。魔宝石が専門の魔道士たちにも聞いてみたが、こんな宝石は見たこともないと言つておつた」

マヤはがつぐつと肩を落とした。「どうですか。ホト先生や専門家の先生がたにも……」

ホト師は、鎖の環に紫色の宝石のついた例のペンダントをマヤに差出した。「このH立エラン魔道学校にはこの世界のありとあらゆる魔道学的知識が貯えられておる。ここで調べてわからないものは、他のどこに行つてもまずわかるまい」

マヤはペンドントを受け取つて手のひらに乗せ、独り言のよう

「本当なら、そのような珍しい宝石は研究のためにせひこのHラン魔道学校に譲つていただきたいと申つべきところじやが、それはマヤにひととども大切なもののじやう？」

「ええ」

ホト師は、そのしわくちゃの顔に暖かい笑みを浮かべた。「では、無理は言わぬ。私は、どんなものにもあるべき場所が『えられて』いると思つておる。マヤがその宝石をどこで手に入れたのかは知らぬが、それがいまマヤの手の中にあるとこりとは、そこがその宝石のあるべき場所なのじや」

「すみません。無理申つて調べてもういたゞく、元からかりは何もお返しとなるじうなことができなくて」

「お返しなど必要ない。私はルーニアを本当の孫娘のよひに可愛がつてきた。マヤがルーニアのお姉ちゃんになつたのなら、私にひとつても孫のよひなものじや。孫の頼みに見返りを求める祖母などおりぬ」

「わう言えば」マヤは研究室の中をぐるりと見回し、言つた。「ルーニアはどこにいるんですか。今日から実験が始まることつて、朝早く基地を出でていったのですが」

「ルーニアはわざわざ倉庫に薬草を取りに行つた。もつたるわざ……

わづびその時、研究室の扉が開いた。

ホト師は「おお、『尊をすすめば』じゅ」と言った。

ルーニアは研究室に足を踏み入れるや否や、姉の存在に気付いた。そして胸の前に抱えていた薬草の箱を机の上に置いてから、マヤのもとへ歩み寄り

「残念だつたわね」

と囁つた。口振りからすると、ホト師からすでにペンダントの調査結果を知らされていたようだ。

マヤは悲しげな表情でつなづいた。

ホト師はソファから立ち上がつた、ところより、飛び下りて床に着地した。「では、マヤ、私はこれから実験の準備を始めさせてもらうよ。魔道学のことでまた何かわからないうことがあつたら、遠慮なく訪ねておこで」

マヤも席を立ち、「ありがとうございます」と囁いた。

ところがルーニアは、立ち上がつたマヤのいでたちを見て目を丸くした。マヤは何と、腿の大部分があらわになつた超ミニスカートをはいていたのである。「お姉ちゃん、どうしたの? その格好?」

マヤはまじゅうと照れながら、「変かしう」と囁いた。

「ううん、とてもよく似合つた。似合つたナビ……」

「同じ基地の竜騎兵隊の女子に訊いたり、ファッショソン雑誌で研究したの。今のHランではどんなのが流行つてゐるのかつて。でね、

ミニスカートが流行つてるらしいってわかつたから、ここに来る前にこれを買つて着てきたってわけ

「そう言えば、二日前にエランの中心街 カスリン通りとかスレーダー公園の方に案内してあげた時も、お姉ちゃん、お店で服とかアクセサリーとか熱心に見てたわよね。あ、確かその時リップスティック買わなかつた？」

「つけてるわよ、ほら」マヤはルーニアの方に顔を突き出して見せた。リップスティックとつても、結構、濃いピンク色だ。「『郷に入つては郷に従え』だもん。しばらくはエランに駐留するわけだから、ファッションもエラン風じゃないとね。それに、聞いた？ ファクティム竜騎兵隊が装甲竜騎兵隊に改編されるつていう話」

「今朝、基地でオクタヴィに偶然会つて、そのとき聞いたわ。竜の装甲を新しく作るのに一週間ほどかかるので、その間はよほどのことがない限り出撃は無しだつて」

「だからあたしも、空き時間が増えてエランの街に出ることもが多くなるんじゃないかなって思つたから、ますますエランのファッションを勉強しどかなきやつてね」

「あたしとしてはお姉ちゃんがきれいになつてくれるなら、それはそれで嬉しいんだけど……、でも……」

マヤは冗談めかして高飛車に「なによ、何か不満？」と言つた。

ルーニアも冗談で返すことつた。「いいえ、何の不満もございませんことよ、お・ね・え・さ・せ」

「ならば結構です。聞き分けの良い妹でよかったですわ」

「わたくしも、理解ある姉が持てて幸せですわ。……そういう、流行といえば、お姉様、いまエランでは、リップスティックの色はピンクよりも緑色ですわよ」

「え？ ほんと？」

「嘘に決まってるじゃない

「」

その時、今まで横で面白がって聞いていたホト師が「ルーミア、そろそろ始めたいんじゃが」と言つた。

ルーミアはマヤに微笑んで「じゃあ、あたし、今から実験にかかるから」と言つた。

マヤも微笑み返し、「じゃあね」と言つた。そして傍らに置いてあつたジャケットを羽織り、ホト師に会釈をした後、短いスカートの裾が万が一にも捲れ上がつていなかどうか確認しつつ、研究室を出た。

マヤはその後、乗り合い馬車でエラン中心部へと向かつた。

窓の外を流れる夕暮れ時の街角を眺めながら、マヤは先ほどのルーミアとの会話を思い出していた。ルーミアはあの時、しきりにマヤがあしゃれすることが納得いかない素振りを見せていたが、マヤにはその理由がわかつていた。女言葉でしゃべつたり女として扱わることに慣れていたとは言え、マヤが仕草まで女っぽくしようと

したり、女しかやらないようなことを敢えてやろうとしたことは今まで一度もなかつた。それは、彼女が男に戻る希望を捨てていない証だつた。そんな彼女が自らの意志でミニスカートなど穿いたとなると、その希望を捨ててしまつたのではないかとルーミアが心配するのには無理からぬことだつた。

乗り合い馬車は、終点のカスリン通りに到着した。カスリン通りは比較的若者向けの店が立ち並ぶ一角で、その中心には竜の銅像が立つており、いつも待ち合わせの人でじつた返している、そんな場所だつた。

マヤが竜の銅像の前に着いた時、近くの時計塔の時計がちょうど夕方六時を告げた。周囲を見回すと、若い女性の多くはミニスカート姿だつた。マヤは事前に行つたファッショն・リサーチが正しかつたことを安堵しつつ、今一度、自らのジャケットやスカートにしわなどないかチェックした。

彼女が今日、このような格好をしたのは、先ほどルーミアに述べた理由もあつたし、先日の舞踏会でドレスを着たことで着飾ることに「味をしめた」という理由もなくはなかつた。しかし、一番の理由は他にあつた。

そのとき彼女は、四日前の舞踏会のことを考えていた。

お嬢さん、僕と一緒に踊つていただけますか？

ジユート……？

ほり、音楽が始まつた。わあ、このひびき

ちよつと、ジュー^ト、そんなに強引に手を引っ張らないで

おや、これは失礼

もつ、ジュー^トつたら

僕が元来、強引なたちだと「う」と存じでしょ、お嬢さん

お嬢さんって呼ぶのはやめて

ははは、君が僕にそのセリフを言つたのは二度目ですね、マヤ・クフルツ嬢

その妙に丁寧な口調もやめて

ちえつ、せつかくこの俺様が舞踏会の雰囲氣に合わせて、騎^ナ士みたいなしゃべりかたで話してやつたつてのに

ジュー^トが自分のことを『僕』なんて言つのは気持ち悪い。それに『ナイトみたいな』じゃなくて、あなたはナイトそのものでしちうが

やつと笑つてくれたな、マヤ。さあ、踊りつ

あたし、ダンスなんかやつたことない

大丈夫だ。俺の動きに合わせてステップを踏めばそれでいい

ジューートと一緒に踊つたあの数分間にマヤの胸に去来した想いが一体どういう種類のものだつたのか、マヤ自身にもよくわからない。ひとりぼっちだつた自分に手を差し伸べてくれた彼の優しさが単に嬉しかつただけのような気もするし、下手なダンスを彼に見らるるこどが恥ずかしくてドキドキしていただけのような気もする。わかっているのは、あの時、自分はこちらの世界に飛ばされて以来、もつとも幸せな気分だつたということ、それと、彼がたつた一曲一緒に踊つただけで大広間を去つてしまつた時、ものすごく寂しい気分だつたということである。そして、あの時の想いがどういうものだつたかを確かめるには、別れぎわ彼が口にした言葉 四日後の夕方六時、カスリン通りの竜の像の前で会おうといふ、あの誘惑の言葉に乗つてみるしかないといふことである。

そうこうしているうちに、時計塔の時計の針が六時二十分を回つてしまつた。マヤは携帯電話がないことをもどかしく感じた。しかし冷静に考えてみれば、この世界には携帯電話どころか、普通の電話どころか、腕時計すらないのである。当然、時間の感覚も元いた世界とは違い、ルーズなのだろう。彼女はそう思い直し、辺りの景色でも眺めながら気長にジューートを待とうと思つた。

ふとマヤは、三メートルほど離れたところに立つてゐる女性に目を止めた。髪はショートカット。服装は、今のエランの流行に背を向けるかのようにパンツルック、上半身には水色の薄手のジャケットを羽織つてゐる。身長は、エラーニアの人間にしては低め、百六十センチ弱と言つたところか。体つきは、ジャケットの上から判別できる限り、どちらかといふと筋肉が多めで脂肪分の少ないスポーツマン体型に見えたが、だからといつてたくましくすぎて男と見間違えるほどではなく、むしろ適度な筋肉がプロポーションを引き締めている。ただ、もう口が沈んでいたために、街灯の明かりだけではその顔つきまでは見て取ることはできなかつた。

その女性は、先ほどからしきりに時計塔の方を伺っている。マヤと同様、誰かと待ち合わせをしているのは明らかだった。マヤはその女性のことを横目で観察しているうちに、何となくその女性が気になり始めた。なぜならその女性の体つきが、相良美玖を連想させたからである。

更に三十分が経った。竜の像前広場ではひつきりなしに人がやつてきでは待ち合わせの相手と去つてゆく。中には十五分待たされたことに対し不満を述べながら広場を後にする者もいる。どうやらHランの人々は決して時間にルーズではないらしい。なのに、マヤと美玖似のあの女性だけは相変わらず時計塔とにらめっこである。マヤはその女性に、美玖似ということに加え待たされている者同士ということからも、妙に親近感を覚え、心の中で、お互い頑張りましょと激励した。

するとその女性も、マヤが自分と同様一時間近く待ちぼうけていることに気づき、親近感のようなものを感じたらしい。微笑みながらマヤのほうへ歩み寄ってきたのだった。

近づくにつれその女性の顔立ちがはつきりと見えるようになつた。マヤは驚いた。その女性は、体つきだけではなく顔つきまでもが美玖に似ていたのである。いや、正確にいって、美玖の四、五年後の顔に似ていた。つまり年齢はマヤより四、五歳上のように見えたのである。

しかも、マヤを驚かせたのはそれだけではなかつた。すぐそばまでやつてきたその女性が苦笑いしをして

「お互い、待ちぼうけね」

と聞いた時、マヤはその女性の胸に、紫色の宝石をはめ込んだペンダントがぶら下がっているのを発見したのである。

マヤは思わず、「そのペンダント…」と叫んでしまった。

女性はきょとんとした表情で「え？」と詫せ返した？

マヤはその女性の表情に、驚きとともに困惑が混じつていることを見て取り、「あ、『めんなさ』、こきなり変なこと言つてしまつて」と謝った。

女性は「いえ、別に気にしてないわ」と言つて元の愛想の良い表情に戻つた。「それで、このペンダントがどうかしたの？」

マヤはしどりもどりこ「あ、いえ、きれいだなと思つて」と応えたが、直後に、そんな応答をしてしまつたことを後悔した。きれいだと思つたぐらいで叫び声を上げるなどどう考へてみても不自然だ。

しかし女性は「うう…ありがとうございます」と言つただけだった。

マヤは考え直し、正直に事実　といつても事実のすべてではないが　を話すことにした。「いえ、本当のことを言つと、そのペンダントに興味があるんです。あたし、竜騎兵なんですが、任務中に偶然、そのペンダントにそつくりなのを手に入れたんです。でね、変わつた宝石が付いているなつて思つたから、知り合ひのつてでエラン魔道学校の先生に会つて、その宝石について調べてもらつたんですよ。そしたら、魔道学校にも知つている人が一人もいないぐらー、すつぐ珍しい宝石だつて言われたんです」

「へえ、この墨石、そんなに珍しいものなんだ

「あの、あなたはどうで手に入れたんですか

「ビリだけ？誰からもらつたんだだけ？ええと……確か……

マヤは、その女性の口から次の一言葉が出てくるのを、今か今かと待つた。

と、その時。

背後から

「ま、待たせたな、マヤ

といつ聞き覚えのある声がした。

振り返ると、セーリングコースターのせけ顔があった。

「あ、ジユート……

マヤは一瞬、言葉に詰まった。胸の中に彼に対するこうこうな感情が込み上げてきて、言葉にならなかつたのである。

ジユートのまほほ相変わらずの口調だった。「ま、マースカートをはいて来たのか。こりや脱がせやすくていいかもな

マヤはむくれて見せた。「遅れた言い訳、ぐううしたじ

ジユートに悪びれる様子はなかつた。「遅れたって言つてもたつ

た一時間じゃないか。マヤは知らないかもしれないけど、リハビリでは一時間、ぐらいは遅刻のうちに入らないんだぜ」

マヤは信用できなかつたので、例のペンドントをした女性に尋ねた。「って言つたね、本当？」

女性は首を振つた。「ここに住むよつこなつて二年以上経つたで、そんな話聞いたことない」

ジューはとぼけた。「でも、マヤにも納得してもらえたよつたんで……」

マヤはすかさず、「納得してない。全然してない」とジックコリを入られた。

やいでペンドントの女性が、「じゃあ、あたしはこれで」と言つて立ち去つとした。

「待つてください」マヤは引き止めた。「あたし、ペンドントのこどがどうしても知りたいんです。もし差し支えなければ、ペンドントの話を聞かせてくれませんか。……いえ、今すぐじゃなくて、後

「田

「別に構わないけど」

「じゃあ、いつがいいですか？ あたし、しばらく仕事が忙しくないので、夕方以降ならいつでも空いています」

「じゃあ、せつそく明日、夕方の六時にしてお待ちするわ」

「わかりました」

「じゃあね」

女性はそう言つて、またマヤから三メートル離れたところに戻つていった。

するとジユートは「今のは誰?」と訊いてきた。

マヤは応えた。「うん、ちょっととした知り合い」

「彼女、少し訛つてたな。ビーチの訛りだる?ギーラントのまづかな?それともハバリアに近いホールデラントかな?」

「彼女のことが気になるの?」

ジユートはマヤの言葉にほんの少し嫉妬が含まれてこることを感じ取り、意地悪を言つた。「そりやあ、大人の女性だからなあ。誰かさんと違つて」

マヤはまた膨れつ面をした。「どうせあたしはガキですよーだ」

ジユートはそれでも「全然大丈夫。俺、守備範囲広いから」と言つてのけた。「じゃあ、そろそろ、飯でも食いに行くか」

「うん」

二人は竜の銅像前広場をあとにした。

ジユートと肩を並べて歩きながら、マヤは思つた。先ほど、あの

女性がペンドントをどこで手に入れたかを思い出しかけている。うどその時にジューートがやつてきた。あの場面で自分は、ジューートを待たせておいてその場ですぐに女性から話を聞き出すこともできたはず。なのにそうしなかった。無意識のうちに、元の世界へ帰る手がかりを得ることよりも、ジューートと早く一人きりになることを優先してしまったのだ。今まで一番大切なことは元の世界へ帰ることだと思っていたのに。舞踏会で彼と一緒に踊った時に胸の中に溢れた想いが何だったのか、これではつきりした……

その夜のデートは、マヤにとつて舞踏会以上に楽しいひとときだつた。

翌日、マヤは約束どおり夕方六時に竜の像前でペンドントの女性と落ち合ひことができたが、その時ちょっとした出来事があった。

マヤが六時ちょうどに待ち合わせ場所に着いた時、例の女性は竜の像前でうずくまるようにしてしゃがんでいたのである。マヤは、女性が気分でも悪くなつて立つていられないのかと思い、彼女の横に自分もしゃがんで介抱してあげようとした。見ると、女性は確かに痛々しそうな顔をしていた。しかしそれは自分の体の痛みに対してではなかつた。彼女の目の前の地面には白い子犬がちょっと座つており、その前脚にぱっくり開いた傷口から血を流していたのだつた。

マヤがやつて來たことに気付いた女性は、マヤに、この子犬は野良犬のようだ、怪我の手当をしてあげたいが、自分の家はここから

歩いて数分のところなので、マヤにも一緒に来て欲しい、話は家でしよう、と言つてきた。マヤが承諾すると、女性は子犬を抱き上げ、竜の像前広場から四方へ伸びる街路の一つの一本へとマヤを導いた。

女性の家は二階建ての古ぼけた小さな共同住宅の中についた。マヤの元いた世界で言えばワンルームマンションのよつた感じだろうか。女性は家の鍵を開け、マヤの中にに入るよつた。入つてみたところ、部屋は八畳ぐらいの広さで、家具やカーテンの色が水色で統一されていた。水色が好きなのだろう。彼女は、まずマヤに手近な椅子に座るよう勧め、次に暖炉に火をおこしてそこにやかんを掛けた。そして棚から布切れを取り出し、子犬の脚に巻いた。子犬は、脚に布が結わえ付けられる間、痛そうに小さな悲鳴を上げたが、結わえ終わつた時には嬉しそうに尻尾を振つて応えてくれた。

女性は濡れ手ぬぐいで手を拭つた後、暖炉のやかんから一つのカップに湯を注いでマヤの前のテーブルに置き、その一つをマヤに勧めた。それから、マヤの向かい側の椅子に自らも腰掛け、話を始めた。

「まずは自己紹介。あたしはナターシャ・リュコー」

「マヤ・クフルツです」

「このペンドントは、ナターシャと名乗つた女性は胸元のペンドントを首に掛けたまま手のひらに乗せ、言つた。「妹からもうつたものなの。あたしがこのランで働くために故郷を出ることになった時、プレゼントしてくれたのよ」

「お姉さんからですか……。あの、お姉さんがそれをどこから手に入れたかわかりませんか」

「つーん、そんな話はしてなかつたな。……いや、聞いたような気もするけど、もう二年も前の話だから。つーの姉はね、魔道士なの。昔からいろいろなところへ旅をして珍しいものを手に入れっては、故郷に持つて帰つて来てたわ。あたしもたくさんもの物をもらつてそのたびにいろいろな話を聞いたから、その一つ一つまでは、ちよつと思ひ出せない」

「お姉さんは今どうじでる？」

「相変わらず旅をしてるわ。今はずっと遠い国でる」

「ナツですか……。あ、見せてもうひとつまいませんか」

ナターシャは、首からペンドントを外しマヤに手渡した。マヤはハンドバッグから自分のペンドントを取り出し、手のひらの中二つを並べて見比べた。どちらの宝石も怪しげな光を放つていて。専門家でないマヤにはつきしことはわからなかつたが、こいつを見て見る限り、二つの宝石は全く同じもののように思えた。

ナターシャは言った。「エラン魔道学校で調べてもなんにもわからなかつたって言つてたわよね？不思議よねえ。そんなことってあるのかしら。なんか、あたしまで興味が湧いて来ちゃつた。……ねえ、クフルツさん、あたしもこのペンドントのことを調べるお手伝いをしちゃだめ？」

「手伝ってくれるんですか？」マヤはナターシャから借りたペンドントを返し、言つた。「それは嬉しいんですけど、何か当てがあるんですか？魔道学校の先生たちにお手上げだつて言われたぐらいの」

「当ひつて言つぱどじやないけど、魔道学校つて、結局は魔道学の権威みたいな人たちの集まりでしょ？」のヒランには正式な魔道学の知識から外れた、そう、『裏の魔道学』つていうのかな、そういうのに精通した人がたくさん住んでるわ。たとえばミエンテ小路つていうところにはそういう人たちがやつているまじない小屋が立ち並んでるの。そんなところで聞いてみるつていう手もあるんじゃない？」

「『裏の魔道学』か……」マヤは思った。確かにそういう場所は、『表の魔道学』の王道を歩いて来たルーミアには考えの及ばないところかもしれない。「そうですね。それはいい手かもしれませんね」

「でしょ？ じゃあ、一緒にに行こうよ。あたしが案内してあげる」

「いいんですか」

「ええ。さつきも言つたけど、あたし自身も興味が湧いて来たの。それに、面白そうじやない。ミステリー小説みたいで」

「助かります。あたし、エランには不案内だし、ここには知り合ひもあまりいないし」

「じゃあ、今から、つて言いたいところだけど、ワンちゃんを放つておく訳にはいかないから、今日はちょっとダメね。明日、朝一番に白魔導師に診せにゆくけど、それまではずっと一緒にいてあげたいもの」

「それにあたしのほうも、あんまり夜遅くなるわけにはいかないんです。一応、軍人ですから、門限があります」

「やつか。本當は、まじない小屋のよつなどいろは夜中が一番、営業が盛んなんだけど、そういう事情なら仕方がないわね。じゃあ、いつに行こうか？」

「あたしの仕事が暇のはあと一週間ぐらいなので、できるだけ早いほうがいいんです。リコマーさんとワシントンちゃんの都合がつくなら、明日の夕方にでも」

「ナターシャって呼んでいいわよ。あたし、明日は仕事が夜遅くまで入ってるの。あわてての土曜日は？」

「じゃあ、あたしもマヤって呼んでください。あの、あわててはちよつと」マヤは顔を少し赤らめた。「あたしのほうが都合が悪いんですけど」

ナターシャはいたずらっぽく「もしかして昨日の彼氏と？」と尋ねた。

「え？」マヤは一瞬、絶句した。彼氏ところ響きは彼女ことってあまりにも刺激的だったのである。「ええ……まあ……そんなんすね……」

「あ、気を悪くした？」めぐなさこ、いきなり立ち入ったことを訝りてしまつて

「こえ……、ちよつと照れくさかつただけです

「じゃあ、その次の日、日曜日ね

「ええ」

「お昼の一時に、竜の銅像前で」

「わかりました」マヤは椅子から立ち上がった。「では、今日はこれで失礼します」

「それじゃ」

ナターシャがそう言つて席を立ち、マヤを玄関まで送つて「こうとした時、先ほどの子犬が駆け寄つて来て彼女の足にぶつかった。

彼女は子犬を抱き上げ、「ダメじゃない。あなたは怪我人なんだから、おとなしくしてなきゃ」と言つた。

マヤはナターシャの腕に抱かれている子犬を撫でてあげながら言った。「明日、白魔導師に診せた後、この子どうします? ここ、アパートだから、本当は動物を持ち込んじゃダメなんでしょう?」

ナターシャは「とりあえず怪我が完治するまではここに置いてあげるつもりよ。もちろんこのアパートはペット禁止だけど、怪我が治るまでの間だけなら、きっとばれやしないわ」と言つて微笑んだ。

マヤは思った。ナターシャは笑顔の時が一番美玖に似ている。

それから十日間、マヤはナターシャとともにたびたびまじない小

屋や市井の魔道研究家のもとを訪れたが、ペンドントに付いている宝石のことを知っているという者は一人もいなかった。

十日後の毎下がり、マヤは駐留している龍騎兵基地の兵舎でラウラとオクタヴィに呼ばれた。龍の装甲が完成し、装着が終わったらしいので、龍のための駐機場 駐竜場に様子を見に行こうといふのである。

ファクティム隊のために割当てられている駐竜スペースに着いた時、濃く明るい赤色、いわゆる緋色の色彩がマヤの目に飛び込んで来た。ピムをはじめとするファクティム隊の龍たちが、体に緋色をまとっていたのだった。

ラウラは

「知っているとは思うが、装甲龍騎兵隊は、同じ隊の龍の位置を確認しやすいように装甲に隊固有の色を塗ることになっている。ファクティム装甲龍騎兵隊のシンボルカラーは、隊長権限で緋色に決めさせてもらつたよ。マヤの乗るピムは以前から頭部にだけ緋色の装甲を付けてただろ？それに合わせたんだよ。エース龍騎兵、マヤ・クフルツ殿に敬意を表してね」

と言つてマヤにワインクしてみせた。

マヤはピムのすぐそばまで歩み寄り、改めてその勇姿を見上げた。装甲は、ピムの頭部と胴体の大半と翼の一部を覆い、その表面に塗られたばかりの赤い塗料の光沢によつてらつらと輝いてた。ただどういうわけか、頭部の装甲だけは、光沢がないばかりか、塗料がところどころはげ落ち、表面に小さな傷がたくさん付いていた。よく見てみるとそれは、アヴィニ村を経つときルーミアが鍛冶屋のお爺

さんに頼んで作ってもらつたあの装甲のまゝ、新しいものと交換されていなかつたのである。

そのうち、ルーミアも駐龍場に姿を見せた。おそらく彼女も装甲完成の話をどこからか聞き付けて、様子を見に来たのだらう。

マヤは歩み寄つてくるルーミアに尋ねた。「もしかして、頭の装甲を新しいものに交換しないように手配してくれたのは、ルーミア？」

ルーミアはマヤのすぐ隣に立ち、ピムを引き見ながら答えた。「うん。だって、あれはお姉ちゃんの大切な『ひいつき』の一部でしょ。それに、あたしにとつてもアグニ村の思い出の一部だもん」

「やつか。そうよね」マヤはルーミアの肩を抱いた。「ありがとうございます」ルーミア

ルーミアは微笑みでそれに応えてから、言った。「ねえ、お姉ちゃん、ここにとこり毎日、ペンドントの調査に出かけてるわよね。調査は進んでるの？」

「全然」

「そりなの……。あーあ、あたしもホト先生のお手伝いするのを断つて、お姉ちゃんと一緒にペンドント調査のほうに加わるつかな」

「それじゃホト先生が困るでしょ」

「それはそうだけど……。でも、魔道学の実験よりもお姉ちゃんが元の世界へ帰る手がかりを見つけることのほうが重要だと思つ。調

査に加わる人の数は一人でも多いに超したことはないでしょ？それに……」

「それに？」

「なんか、調査に出かける時のお姉ちゃん、いつもひとつでも楽しそうだから」

「や、そりゃ」

「ねえ、一緒に調べてくれる女の人が、どんな人なの？」

「故郷から出て来てエランで一人暮らししてる二十歳の人。喫茶店の店員をやつてるって言つてたかな」

ルーミアは「へえ」と相づちを打つたが、その表情はなぜか怪訝そうだった。

マヤは言葉を続けた。「彼女は……ナターシャはいい人よ。この間、怪我をした子犬を拾つてきてね、住んでるのがペット禁止のアパートだから傷を治す間だけ面倒を見てあげるとか言つてたのに、結局そのまま飼つちゃったの。ほら、動物好きの人には悪い人はいないつて……」しつちの世界では言わなかつたかな」

「ふーん……」

「それにナターシャはね、あたしが向こうの世界にいた時、告白しようと思つてた女の子に似ているのよ。顔とか体つきとか、それに性格もどことなく。それで親しみが湧いたっていうか」

するとルーミアは、怪訝そうなどうよつ、何か恐ろしこものを見るような目でマヤを見つめた。

マヤはその時、妹のその表情の意味をよりやく理解し、苦笑いをした。「あ、もしかして変な意味に誤解したでしょ?」

「え?」

「あのね、ルーミア、あたしは確かに元は男の子だったから女の子を好きになつたことはあるし、そのとき好きになつた娘は今でも好きよ。でも女の子になつてから出会つた娘は、同性としてしか見れないわ」

「そ、そんなふうに思つたわけじゃないけど……」

「別にいいのよ。ルーミアがそう思つるのは無理もないことだから」

ルーミアはたとえ一瞬にせよ妙な考えにとらわれてしまつたことを恥じ、正直に「「ごめん」と謝つた。

マヤも妹に余計な心配をさせてしまつたことを反省しつつ、「じゃあ、ルーミアにもそのうちナターシャを紹介してあげる。きっとルーミアも気に入つてくれると思う。三人で一緒にペンダントの手がかりを探しましょ」と言つた。

ルーミアはやつと納得の表情になつた。「うん

「ただし!ホト先生の実験の手伝いが終わつたら、ね」

「はーい」

「マヤは今一度、ルーミアの肩を抱いた。

ルーミアもマヤの腕にすがりついた。「そっか。お姉ちゃん、向いの世界に好きな人がいたんだ」

「向いの世界の話はほとんどしてあげたことがないものね」

「やうね……」

「これからはもっと話すよ」と話すよ

うん。でも話せる範囲でかまわないから

「ルーミア、本当は聞きたかったんでしょう？でも、あたしが異世界から飛ばされてくるときに味わった恐怖とか女になってしまったシヨックをあたしに思い出させないために、聞かないようにしてくれたのよね。ルーミアはいつも優しいから。けどあれからもう一年近く経っているもの。あたしもこっちの世界でいろいろな経験をして、もうほとんど吹っ切れたわ」

マヤはやう言つて、晴れやかな笑顔を見せた。

「やう。それはよかつた」ルーミアは姉のそんな表情を見ていると嬉しくなった。何があつたのかは知らないが、姉は本当に吹っ切れたのだろう。「そういうえば、あたしもお姉ちゃんにのそばにずっといながら、プライベートなことはあまり話さなかつたわよね。じゃあ、あたしも意を決して、誰にも言つたことのない秘密をお姉ちゃんに打ち明けるね」

マヤは好奇心に満ちた瞳を妹に向け「え？ 何？ 何？」と言った。

ルーミアは少し恥ずかしそうに「あたしの好きな人のこと」と言った。

「好きな……人？」

その瞬間、マヤの脳裏に、ある言葉がよぎった。

それがどういうわけか、ルーミアのほうも俺にそういう輝きみたいなものを見るようになっちゃってな

それは去年の夏、ファクティム城に拉致されてジューートの相手をさせられそうになつた時、彼の口から聞かされた言葉だった。

ルーミアは続けた。「あたしが好きなのは」

マヤは心の中で言わないでと叫んだ。

しかしルーミアは無情にもその言葉を発してしまつた。「ジュー
トって人」

マヤの顔色がみるみる青ざめた。まるで街を歩いていたときにいきなり通り魔に脇腹を刺されたかのように。

ルーミアは更に言葉を続けた。「お姉ちゃんがうちの診療所を退院した日、お姉ちゃんをファクティム城にさらつて行つた三人組の一人よ。覚えてる……わよね？ お姉ちゃんにひどいことしようとした人だから」

マヤは心がちくちく痛むのを感じた。

先日の舞踏会の折、ジュークはマヤと一緒に踊つただけで大広間を去つてしまつた。だからルーニアは、彼が舞踏会に来ていたことを知らない。ましてや彼がマヤと一緒に踊つしたことなど知る由もない。また、先ほどルーニアは、ペンドント調査に出かけるときのマヤが楽しそうに見えると言つた。それは、マヤがペンドント調査と称して出かけたうちの何回かは、実はジュークとのデートだつたからである。そんなことなど、ルーニアは露ほども知らないのである。

ルーニアはマヤは、ルーニアがジュークのこと好きだといつ事實を、今までずっと忘れていたわけではない。現にこの十日間、マヤの意識の表層に何度も現れそうになつた。だがそのたびに、彼女はその事實を記憶の奥底へ沈めることで問題を先送りにしてしまつたのである。

ルーニアはマヤの様子がおかしいことに気付いた。「う、うめん。嫌なことを思つてはいけないのに、なぜかじやなかつたわ」

マヤの心は更に痛んだ。ルーニアはきっと、せらわれた時のことをマヤが思ひ出さないで済むようにとの気遣いから、ジュークの話をいつさい口にしなじむことにしてきたのだ。実際は嫌な思いどころか、あの時すでに、彼への恋心とは言わないうまでも、好意のようなものが芽生え始めていたところの。

しかし、マヤの口からはその場じの言葉しか出でこなかつた。「ううん、大丈夫よ。ジュークはあのとき結婚、あたしにひどいことは何一つしなかったから……」

「わう？」

「うん。それに彼、結構いい人だったと思つし……」

「よかつた、そう言つてもらえて。あのね、この間、知り合いから聞いたんだけど、彼、いまエランにいるんだって。ほら、アウスゲント地方で男の竜騎兵を探す任務に就いてたでしょ？たぶん、あれが打ち切りになつたんだと思つ」

「へえ……」

「いま」「ひづりしてゐるんだる」ルーミアはとても寂しそうに言つた。「今は戦時下でしょ。軍人がどこでどうしてゐる情報は、場合によつては機密事項になるから、軍のほうに問い合わせても絶対に教えてくれないわ。だから、噂で聞くが、本人にばつたり会える偶然を期待するしかないの」

マヤはその時、もはやルーミアにすべてを打ち明ける以外ないと思つた。

「ルーミア……」

ところが、マヤの喉はまるで十ヶ月前にクフルツ診療院で目覚めた時のようにこわばり、どうしても真実の言葉を発することができなかつた。それは無論、不動の術のせいではなかつた。喉をこわばらせたのは、妹の憧れている人を横取りしてしまつた罪悪感と、それを今まで隠してきたことに対する後ろめたさだつた。

ルーミアは「ペンドント調査のときにもシジゴートに会つたらうろしくね」と言つた。

マヤは「わかつたわ……」と応えるのが精いっぱいだった。

見るとルーニアは、さつき一瞬見せた寂しげな表情を、早くも笑顔に作り替えていた。

彼女のその作り笑顔は、マヤの心に痛かった。マヤはこれ以上妹と一緒にいるのが辛かった。いますぐその場を逃げ出したいと思つた。

その時。

マヤに意外な「救いの手」が差し伸べられた。

カンカンカンカンカン……

それは竜騎兵基地に鳴り響くけたたましい鐘の音だつた。

「敵襲？」

マヤとルーニア、それに少し離れたところで自分の竜の世話をしていたラウラとオクタヴィたちも、その表情に緊張感をみなぎらせた。つい半月前まで駐留していたギールでは、このような警報が鳴るのは日常茶飯事だつた。しかし、エランに配置転換となつてから今まで、このような警報は一度も聞いたことがなかつたのである。

それまで静かだつた駐竜場の動きがにわかに慌ただしくなつた。ファクティム隊の隣に駐竜スペースを割り当てられていたエラン第二竜騎兵隊は、おそらくスクランブル・ローテーションに当たつていたのだろう、警報が鳴り始めて一分と経たないうちに、三匹の竜がそれぞれ竜騎兵を背に乗せ、次々と基地を飛び立つた。更にそ

これから十五分ほどの間に、休暇中の一隊を除いて、すべての隊がいつでも飛び立てる態勢を整えた。

もしそこで警戒態勢が解除されていたなら、警報の原因は、敵の偵察竜がエラーニア側の警戒空域にたまたま迷い込んだだけということで片付けられていたらうが、事態はその逆の方向へと進み始めた。指揮のために駐竜場に現れたアイリゲン大佐が、指令塔から伝声管で送られてくる指示の下、一隊、また一隊と発進を命じていったのである。

臨戦態勢にあつた最後の隊が遂に飛び立つた後、大佐はマヤたちファクティム隊のところにやつて来て、言つた。「ヤグソフ四姉妹のモーラ率いるアマゾネス隊が単独で戦線を突破して来た。いま友軍の騎士隊と魔道士隊が竜騎兵隊とともに応戦中だが、敵はエラニア王宮へ迫る勢いだ。王宮から、この基地の竜騎兵隊を全部投人してでも阻止せよとの指示があつた。君たちの竜は装甲を付けたばかりだ。本当なら少なくとも一、二日、馴らし飛行が必要なことは重々承知している。が、これは非常事態だ。悪いが、今すぐに出撃の準備を始めてほしい」

マヤたちはすぐさま兵舎に戻つて飛行服に着替え、武具を装備した。彼女たちが駐竜場に戻つて来て竜の背中に飛び乗るや否や、アイリゲン大佐は待つっていましたとばかり直ちに出撃を命じた。

ラウラの「ファクティム装甲竜騎兵隊、出撃せよ」とのかけ声が駐竜場に響き渡ると、緋色の装甲をまとつた三匹の竜は、アイリゲン大佐たち地上スタッフとルーニアを残して一斉に王都の空へと飛び立つた。

前線の状況は、五キロ離れた基地上空からでも一目瞭然だつた。

エラン市街北部に広がる麦畑は現在、両軍が睨み合つ最前線となつてゐるため耕作が行われておらず、単なる平原となつてゐる。うつすらと雪の積もつたその平原を、装束や甲冑を黄色に統一したアマゾネス隊が一つの黄色い塊となつて、行く手を塞ぐエランニア軍の騎士たちを蹴散らしながら猛進してゐるのが見える。その様子は、さながら鋭利な黄色いナイフが白布を切り裂くさまに似ていた。

王宮方面への飛行を続けている最中、マヤはふと眼下に広がるエラン中心街、特にその中のカスリン通りに目を止めた。自分はつい数日前にも、あそこでジューートと会い、楽しいひとときを過ごした。その時も心の奥底に、もしルーミアにばつたり出くわしたらどうしようかという思いがないではなかつた。しかし、ジューートの笑顔を見ているうちにそんな懸念は消し飛んでしまつた。いや、自分で消し去つたのだ。そうやつて問題を先送りにして田先の快樂へと逃げ込んでいるうちに、先ほどのような事態が起つてしまつた。これからいつたゞうすればいいのだろう。ルーミアにどう接したらいいのだろう。もしジューートの口から自分との関係をルーミアにばらされたら、ルーミアに何と言つてあげたらいいのだろう……

それに、今日はピムの動きがどうも重じようつに感じられる。装甲のせい?いや、今までにもこの装甲よりずっと重い荷物を運んだことがあるが、操縦テクニックで難なくカバーできた。もしかするとこれは、ピムの動きではなく、自分の心の重さに原因があるのでないか。相手はあのモーラだというのに、このような精神状態でうまく戦うことはできるのだろうか……

やがて、ファクティム装甲竜騎兵隊はエランニア王宮上空に到着した。モーラ隊の勢いはさすがに当初と比べると鈍くなつていたが、すでにエラン市街北側に侵入を開始しており、このまま大通りを進撃して王宮の北門に到達するのは時間の問題のように思えた。王宮

で働いている人たちのてんやわんやしている様子が上空からでもはつきりと見て取れた。

ラウラはマヤとオクタヴィに対地攻撃を命じた。まずは油の入った革袋に火をつけ、上空から敵兵目掛けて落下させるのである。この攻撃は命中率も悪く、当たったとしてもそれほどダメージがないことから、攻撃と言うよりは、敵の足留めという意味合いが強い。それに、このような敵味方入り交じつての乱戦では味方に被害を与えてしまつことも考慮する必要があつた。油袋が底をつくと、次は弓矢による攻撃である。当然、ある程度高度を下げねばならず、そのためには相手からも矢で狙われる可能性が出てくる。投擲用の槍を投げ付けられる場合もある。弓矢が得意なマヤにとつては、これも足留めに毛が生えた程度でしかなかつたが、得意なオクタヴィにとつては、ここが彼女の見せ場だつた。彼女の放つ矢は次々とアマゾネスたちに命中した。ところが、身長が百八センチから一メートル近くある彼女たちがまとう黄色い甲冑は、常人なら重くて動けなくなるほど分厚い鉄板でできていた。そのため、オクタヴィの繰り出した矢はことごとく跳ね返され、アマゾネスたちの進撃速度を下げるにはならなかつた。ラウラは早々に弓矢戦をあきらめ、近接戦闘への移行を指示した。剣、槍、および竜の爪、牙による地上すれすれの高度からの攻撃である。マヤは小剣を、ラウラは普通の長剣を腰の鞘から抜き、オクタヴィは槍を構えた。

ラウラの号令一下、三匹の竜は一糸乱れぬ見事なコンビネーションでアマゾネス隊の隊列の先頭に突入し、そのうちの数人にダメージを与えることに成功した。弓矢や投擲槍による敵の反撃は、装備したばかりの装甲が弾いてくれた。敵の足並みがわずかではあつたが乱れ始めた。

そのときマヤは、敵の黄色い隊列の中にモーラの姿を発見した。

敵の指揮官を狙うのは戦の定石である。数カ月前、デイン砦近郊の森で彼女に助けてもらつた恩があるものの、この場面ではそうも言つてられない。いまモーラをガードしているアマゾネスたちは、地上の敵に気を取られている。一方、ラウラとオクタヴィイの乗る緋色の竜は、先ほどの突入の影響でピムから少し離れた位置にある。陣形を組み直している暇はない。単独でもいますぐに攻撃をかけないと！

マヤの様子に気づいたラウラとオクタヴィイが身ぶりでマヤに自重するよう求めたが、無駄だった。マヤは、数カ月前、崖の上からやつたのと同じように小剣を構え、モーラに掛けてピムを突入させた。

果たして、モーラはマヤの小剣を寸でのところでかわしてしまつた。そればかりか、ピムが自分のすぐそばを通り過ぎた時、振り向きざまに愛用の長槍を投げ付けてきたのである。普通なら、装甲に覆われているピムの体を槍で刺し貫くことは容易ではない。しかしモーラは、マヤより一、二歳年上に過ぎないのに一隊の隊長を任されるほどの女戦士である。そんな彼女にとって、槍を装甲の隙間に命中させるのはさほど難しいことではなかつた。

ピムの受けたダメージは甚大だつた。マヤのコントロールを全く受け付けてくれなくなつたのである。ピムは大通りの路面に激しく墜落し、その拍子にマヤはピムの背中から振り落とされた。彼女にとつて幸いだつたのは、ピムが低空から墜落したため、墜落の衝撃はあまり強くなく、結果、彼女自身は軽い打撲程度の怪我ですんだことである。

マヤは痛みをこらえながら状況を確認した。アマゾネス隊の黄色い隊列から数十メートルほど離れた地点に墜落したらしい。隊列の中から、モーラが敵味方の兵をかき分けるようにしてマヤに近付い

てくるのが見える。マヤは小剣を手に取つてようようと立ち上がつた。すると、モーラはマヤとの間に数メートルの距離を置いて立ち止まつ

「おまえはマヤだな。東洋に帰らなかつたのか

と言つた。

マヤは「あたしにはこの世界に帰る場所なんてない」と叫んだ。

「そうか」モーラは腰から短剣を抜いた。「では仕方がない。俺がおまえを、すべての人の魂が帰るべき場所、黄泉の国よみへ送つてやろう」

「う

モーラの瞳は獲物を狙うハゲタカのように鋭い光を放つた。以前、森の中でマヤと立ち会つた時の余裕に満ちた瞳とは全く異なつた。マヤに本気でかかるつもりなのは明らかだつた。マヤは剣を構え、持てるすべての力をその手に込めた。

モーラは短剣を繰り出した。その剣筋はあまりに速く、マヤの目にはほとんど見えてこなかつた。絶体絶命だつた。

と、その瞬間。

建物の影から何か白いものが飛び出してきてマヤの目の前に立ちふさがり、モーラの剣を受け止めた。マヤが凜然としている間に、その白いものは更に一度、三度とモーラの繰り出す剣を受け止めた。よく見ると、その白いものは騎士装束を着た男の背中だったのである。

「 ナヤ、 マヤ

男は振り返りぎりぎりに叫んだ。しかし、その声はマヤの聞き慣れた声だった。

「 ジュート……」

ジュートはその後も、互いの長剣で三回、四回とモーラの短剣を受けた。

やがてモーラは剣を引き、数歩引き下がった。

ジュートはモーラに向かって「 おい、まさかこれっぽっちの戦力でエランが陥落させられるなんて、本気で思つてる訳じゃないだろ? 」 と言つた。

モーラは応える代わりに剣を構え直し、無言のまま再びジュートに襲いかかった。

ジュートはまたもモーラの剣を受けとめたばかりか、モーラに話しかける余裕すら見せた。「 こんなところでやけくそ攻撃なんか仕掛てる暇は、おまえたちにはないんじゃないのか。この間のギル戦でハバリア軍が戦力を使い果たしちまつたことは、じつもお見通しなんだぜ 」

マヤはジュートの強さを初めて知つた。今まで彼のこととにやけ顔のお調子者としか思わなかつた。彼が騎士としてどの程度の者なのかなどとは考えたこともなかつた。軍隊に入つてからこれまで数ヶ月間、剣を扱う練習をずっとやつてきたマヤにも、少しは剣を見る目がある。ジュートが相当な剣の使い手だとこいつとは疑つよう

がなかつた。

モーラは最後に渾身の力を込めて短剣を繰り出した。それがまたもジュー^トに受け止められると、彼女は諦めたようにゆっくりと後ずさつた。彼女の瞳はもう鋭い光を放つてはいなかつた。

マヤは今一度、辺りを見回してみた。アマゾネス隊は王宮北門の少し手前でエラーニア軍の騎士たちに進撃を阻まれ、先ほどまで一枚岩だつた隊列もバラバラになりかけていた。

モーラはマヤたちに、満足と自嘲の入り交じつた微笑みを投げかけてから、隊列のほうへ戻つていつた。彼女がハバリア語で何か叫ぶと、アマゾネス隊は進路を反転させ、北の方向へ撤退を始めた。

ジュー^トはそれを見届けた後、マヤの肩を抱き

「ちょっと遅くなつちまつたが、まあ、お姫さまを守る英雄つてのは土壇場に現れるつて相場は決まつてるからな。どうだ？ なかなかかつこ良かつたろ？」

と、相変わらずの軽口をたたいた。

ところがマヤは、ジュー^トと目を合わさうとしなかつたばかりか、彼の手を振りほどいてしまつた。

ジュー^トは怪訝な表情で「どうしたんだ、マヤ？」と尋ねた。

マヤは「「じめん。ジュー^トの手が傷に触れて痛かつたの」と嘘を言った。

ジューートは珍しく、「や、そりが。そりや悪かつた」と謝った。

するとマヤは

「ずっと言い忘れてたけど、ルーニアも一緒にエランに来てるの。お願い、彼女に会ってあげて」

と言い残し、墜落の衝撃で動けなくなっているペームのほうへ歩き去った。

ジューートはマヤを追いかけることができなかつた。彼女の背中がついてこないでと訴えていたように見えたからである。

その夜遅く、マヤはカスリン通りにほど近いナターシャの部屋を訪ねていた。

「そう、そんなことがあつたの?」ナターシャは、赤ん坊のように胸にすがりついてくるマヤの頭を撫でながら言つた。「辛かつたのね、妹の好きな人を横取りしてしまつたことが。それをずっと隠していたことが

マヤは言つた。「あたし、ルーニアのいる部屋には帰りたくない……」

「じゃあ、今晚はここに泊まつてゆきなさい」ナターシャは、優しく、妖しく微笑んだ。「マヤが打ち明けてくれたお返しに、あたし

もマヤに秘密を打ち明けるわ。ハバリアでは人が名乗る時、名字が先で名前があと、しかも女人人は、名字の最後に a を付けることになっているの。そしてあたしがこのあいだ名乗ったリュコ（Liukow）という名字は、ハバリア人の名字、リュコフ（Liukov）をエラン語ふうに読んだものなの。あたしの本当の名前はリュコワ（Liukova）・ナターシャよ

モーラ隊によるエラン王宮急襲の一戦後、マヤは駐留する龍騎兵基地の兵舎に割り当てられた自室で、昼間だけのベッドに仰向けになり、ただぼーっと天井を見つめていた。

彼女がクフルツ診療院で不動の術を解かれてからもうかなりの月日が経つ。なのにこうやって仰向けになると、今でも自分の体が動かないのではないかという錯覚に陥ることがある。

入院中の三ヶ月間、彼女は体を動かせないことが苦痛で仕方がなかつた。ましてやそれは、術を解いてもらえる日が来るのを待つ以外、自分の力では全くどうすることもできない苦痛である。彼女にしてみれば、自分はひょっとしてこの世に存在する最高の苦痛を味わっているのではないかとさえ思えたのだった。

ただ、いま思い返してみると、あの時自分は、実はそれほど不幸ではなかつたような気もする。待つことしかできないのは確かに苦痛だが、体の自由を取り戻せたら自分がこの世界に飛ばされた原因と元の世界へ帰る方法を一刻も早く見つけてやろうとこう希望に溢れていた。何も思い悩むことなど無かつた。

それに傍らにはいつもルーミアがいた。山矢健太はもともと人見知りする性格だった。もちろん友達は何人もいたし、その中に親友と呼べる者もいた。だがルーミアのように、自分の心の内をすべてさらけ出してもよいと思えるような人間は、山矢の周りにはほとんどいなかつた。特に日本に帰ってきてからは皆無と言つてよかつた。だから、山矢？？マヤは、ルーミアと一緒にいられることそれ自体に対してだけでなく、彼女とそういう絆が築けたことに対しても、

喜びを感じていたのである。

しかし、そういう絆が今となつては重荷だった。心が通じ合つて
いる以上、ルーミアに隠しじとなどできはしない。今度ジューートの
話を持ち出されたら、また自分は平常心を失うだろ。そうなれば
きっと、自分が単にジューートにさらわれたことを気に病んでいるの
ではなく、もつと別の理由で動搖していることに、ルーミアは気づ
くに違いない。

それ以前に、ルーミアがジューートとどこかでばったり出会うかも
しない。あるいはジューートのほうからルーミアに会いに来るかも
しない。モーラとの戦いの直後、マヤ自身がジューートにそのよう
に勧めたのだから、そうなる可能性は高い。もし自分とジューートの
関係がルーミアにばれたら？？？何度もなくその問いを自分に問い
かけた。だが、どうしても的確な答えを見つけられなかつた。

マヤが一日前、ナターシャの部屋に転がり込むなどという大胆な
行為に及んだのは、一人では解決できないこの問題について人生の
先輩であるナターシャに助言を仰ぐためだつたに他ならない。

ナターシャにハバリア人であることを打ち明けられたときは、さ
すがに少し驚いた。だが、ナターシャはすぐに

「ヒランには、あたしみたいにハバリア帝国が嫌で逃げ出してきた
人がたくさん住んでいるのよ」

と説明してマヤを安心させた。ヒラニアは排他的な国ではない。
マヤのような東洋人が軍隊にいさせてもらえることからも、それは
明らかである。ならば、王都に他国の民が居住していても不思議は
なかろう。それに、何ヶ月か前、ティン皆近くの森の中でサハラカ

ンと戦った時にモーラがマヤたちにしてくれたことを考えれば、ハバリア人が悪い人たちだとも思えなかつた。

その夜、マヤは一つのベッドにナターシャと一緒に横になり、ナターシャに話を聞いてもらつた。するとナターシャは

「妹さんに打ち明ける必要なんかないわ。マヤは考えすぎよ」

と言つた。いくら姉妹だからといって、いや姉妹だからこそ、お互いの恋愛のこと今まで口を差し挟むべきではないのだ、マヤのように好きな相手がたまたま妹と同じだった場合でも違ひはない、自分にも姉がいるからよくわかる、というのがその理由だつた。マヤは、ナターシャの考えはちょっとドライすぎる気がしたものの、一理あるとは思つた。

翌朝、マヤはナターシャに相談に乗つてくれた礼を言い、ナターシャの部屋をあとにした。ルーミアにジューートとのことを打ち明けるべきなのか、このまま放置するのか、それとも他に取るべき道があるのか、結論が出たわけではなかつたが、悩みを聞いてもらえたので少しは気が晴れた。もっとも、このような大胆な行為に及んだ以上、彼女はその代価を支払う必要があつた。

マヤは天井を見つめるのをやめ、うららかな春の陽^ひが差し込む窓に背を向けるように寝返りを打つて、ため息まじりに

「二口間の自室謹慎、か

とつぶやいた。

ナターシャの部屋から竜騎兵基地の自室に帰つてみると、意外な

ことに、ルーミアは不在で、しかも彼女の代わりに、隊長のラウラが部屋の中央に仁王立ちしていた。ラウラは、ルーミアは無断外泊をしたマヤが心配でいても立つてもいられず、捜しに出かけてしまったと説明した後、マヤを詰問し始めたのだった。

結局、マヤは、無断外泊に加え、王宮前でのアマゾネス隊との戦いの際にラウラの制止を無視して単独でモーラに突進したという「命令造反」の咎^{とが}により、一晩牢に監禁され、今日、審問室で審問にかけられた。幸いにして、無断外泊のほうは、今まで負け知らずだったマヤが初めて撃墜されたショックで精神的混乱をきたしたことが原因とされて酌量の余地を認められ、また命令造反のほうも、あの乱戦の中ではやむを得ない面があつたと認められたため、きわめて軽い処分ですんだ。

命令造反については、マヤ自身、反省することしきりだった。彼女は今まで、竜騎兵戦で勝つにしても負けるにしても、それはすべて自分一人のことで、他人はあまり関係がないと思っていた。確かに、ラウラとオクタヴィは頼もしい同僚であり、これまで何度もお互いに助け合ってきた。だが助け合うということは、余力のある者が他者の足りない部分を補つているにすぎず、つまるところ、三人がそれぞれ一の力を持つているとすれば、それをすべて足しても三にしかならないと考えていたのである。マヤが今回撃墜されたことから得た教訓は、一掛ける三が常に三になるわけではなく四にも五にもなり得るし、逆に四とか五だったものから一引いただけで二に、あるいはそれ以下になってしまつ場合もあるのだということである。

隊長という立場上、上官や審問官の前では厳しいことを言つてきただが、二人きりになると笑顔で励ましてくれたラウラ。監禁中も審問中も終始優しい言葉を掛けてくれたオクタヴィ。マヤは一人の同僚のことを想い、もう一度と彼女たちに迷惑を掛けるまいと誓つた。

また、重傷を負ったピムをほつたらかにして外泊したことも後悔し始めていた。もちろんモーラとの戦いの後、救護班の竜たちが大きな網を使ってピムをちゃんと竜騎兵基地に運んでくれた。基地にさえ帰すことができればそこには竜のための十分な医療設備が整っているので、何ら心配の必要はない。だがピムは、アヴィー村から今まで苦楽をともにしてきたいわば親友である。親友が傷の痛みに苦しんでいるときに自分だけ苦しさから逃げ出すなど、裏切り以外の何ものでもないと彼女は思ったのである。

そこでマヤの頭の中に、再び妹の顔が浮かんできた。

昨日、マヤを捜しに行っていたルーミアは、基地に戻ってきてマヤが牢に入れられていることを知るやいなや、すぐさまマヤの元に飛んできた。そして今日、審問が終わるまで、ホト先生の実験の手伝いをほっぽり出してマヤのそばにずっと付き添ってくれたのだった。その間も、マヤは何度か、ジユートとのことを打ち明けようかと思った。だが牢には牢番があり、とてもそのような込み入った話ができる雰囲気にはならなかつた。

また審問のとき、審問官はルーミアに、マヤが妹と同室では謹慎したことにならないのでマヤの謹慎期間中、ルーミアはラウラの部屋で寝起きするようにと言つた。ルーミアは姉の処分が決まって安堵すると、昨日さほつた実験の手伝いに再び参加すべく、先ほど魔道学校へ出かけて行つたが、審問官にそう言われてるので、今日の夕方、基地に帰つてきてもマヤの部屋には戻つてこない。つまりマヤは、謹慎期間があける三日後まで、一日に数度許されている短い面会時間にだけルーミアと顔を合わせればよいことになる。だからこの謹慎期間は、マヤが妹との問題に正面から向き合つたのまたないチャンスだった。少なくとも、そうなるはずだった。

三日後、ルーニアは朝一番にラウラの部屋から、まだ起きたばかりのマヤのところへやつてきた。このときばかりはマヤも、問題を抱えてることを半ば忘れて、自由の身になれたことを妹と喜び合つた。ルーニアに引き続き、ラウラとオクタヴィイも祝辞を述べに来た。その後、彼女たち四人は連れだって兵舎の食堂へとおもむき、朝食に付いてきたミルクで乾杯をすることとなつた。

その席でルーニアは

「今日から明日にかけてホト先生の実験が最終段階を迎えるの。それでね、先生から今夜は魔道学校に泊まるように言われちゃつた。せっかくお姉ちゃんと同じ部屋に戻つて来られることになつたのに、明日までお預けなんて、残念」

と言つた。

するとラウラは、マヤとルーニアを見比べ、あきれたように言つた。「おまえら、ホントに仲がいいよなあ。あたしにも兄貴がいるけど、おまえらぐらいの歳の時は、喧嘩ばかりしてたぜ」

オクタヴィイも同感だつた。「それもあなたたち、本当の姉妹ではいらっしゃらないのでしょうか？ 親しい友人同士でもずっと一緒にいれば喧嘩ぐらいはいたしますのに、わたくし、あなたたちが喧嘩したところを見たことがございませんわ」

マヤは応えた。「喧嘩なら一度したことある。あたしが竜騎兵隊への入隊を勝手に決めちゃったときにね」

ルーニアはちょっと申し訳なさそうに言った。「あれはあたしが悪いの。お姉ちゃんの気持ちを理解してあげられなかつた。今思うと、あたしつてなんて意固地だつたんだらうつて気がする。でも、あんなのはもういや。もう一度喧嘩したくない」

ラウラは「まあ、あたしとしても、マヤの謹慎があけたと思つたら今度は姉妹喧嘩が原因でルーニアがあたしの部屋に転がり込む、なんてのは御免こつむりたいからね。せつかギール城のあのカビ臭くて狭つ苦しい部屋をおさらばできたんだ。次はどの戦線に回されるのかわからないけど、せめてここにいられる間は部屋を一人で伸び伸びと使いたいじゃないか」と囁つて笑つた。

オクタヴィイが応えた。「あら。正直に、殿方をこつそり部屋に招くことができなくて困るとなおっしゃればよいのに」

「これにはマヤもルーニアも笑うしかなかつた。真顔で、しかもあの口調でこんな冗談をさらりと言つてしまつオクタヴィイの性格は、彼女たちにとつて謎以外の何ものでもなかつた。

ラウラは胸を張つて言つた。「あたしはこれでも栄光あるファクトィム装甲竜騎兵隊の隊長だぞ。そのあたしが男子禁制のこの兵舎に男を招くわけがない。……というか、そんな男がいたら紹介してくれ」

一同はまた大笑いした。

マヤは、アイリゲン大佐という人がいるんじゃないのと言つてや

うかと思つたが、ラウラを本氣で怒らせそうな気がしたので、それは諦め、代わりに、ちょっと悪戯つぽく「でもあたしの謹慎がかけてせいせいしているのよ、ラウラだけじゃないわよ。ルーミアの方もさつき、ラウラの部屋で寝泊まりするのはもうこいつだつて言つた。ラウラの『びきがつるをへて眠れないって』と言つた。

ラウラはルーミアを睨みつけ「何? おい、本当か、ルーミア?」とすこし見せた。

ルーミアは必死の形相で「あたし、そんなこと言つてないーもう、お姉ちゃん、嘘ばっかり!」と訴えた。

マヤはワインクをして「この間、あたしに『Hランでは縁のリップステイックがはやつてる』なんて嘘を教えてくれたお返しよ」と言つた。

オクタヴィイは笑いながら「まあ、いよいよ姉妹喧嘩の始まりですわ」と言つた。

その時、マヤは思つた? ? 今、自分と妹の関係は良好だ。妹によけいなことを打ち明けてこの関係を壊さなければいけない理由が、いつたいどこにある? 妹も先ほど、もう一度と喧嘩したくないと言つていたではないか。ナターシャの言つ通り、自分は少し考え過ぎだ。妹には何も言わず放置しておいたほうがよいのかもしれない。もしジユートのことがばれたとしても、案外、『ジユートとつきあい始めたの。いま話そうとしていたところなのよ』とでも言えれば納得してもらえるのでは? ?

やがて、朝食パーティーはお開きとなり、ルーミアは先ほど言つていた実験の最終段階の手伝いのために魔道学校へと出かけ、残り

の竜騎兵三人は駐竜場へと向かった。竜を装甲に慣れさせるための訓練飛行を行うことが目的だった。

もつともピムは、先日の傷をまだ治療中である。マヤが基地に駐在する竜専門の男性白魔道士に訊いたところ、ピムの傷はもうほとんど回復しているが、明日までは大事をとつて飛行を差し控えた方がよいとのことだったので、マヤはその日、訓練そのものには参加せず、ラウラたちの訓練の様子を見学したり、地上に降りてきた彼女たちとフォーメーションの確認をしたりして訓練時間を過ごした。

夕方、マヤは訓練を終え、ピムの世話などの雑務を一通り片づけてから、カスリン通りへと向かうべく五日ぶりに基地を出た。五日前にファクティム隊の竜たちが装甲を装備し終えるまで、マヤたちは昼間は剣や弓矢の訓練を課せられていたが、夕方以降はある程度の自由行動が許されていた。マヤはその時間を利用してペンドントの調査をしていたのである。装甲の装備が終わつた今、マヤたちは本来の任務に復帰し、たとえスクランブル当番に当たつていなくても、敵の襲来に備えて基地で待機していなければならず、自由行動などできなくなる。しかし相棒のピムが治療中のマヤは、待機していても出撃しようがないことから、ピムが完治するまでの今日と明日に限り夕方以降の外出許可を取ることができたのだった。

カスリン通りで乗合馬車を降りた彼女は、ナターシャの部屋のある建物へ足を向けた。と言つても、今日がナターシャの仕事が遅く終わる曜日だということを、マヤは以前、彼女から聞かされていた。ナターシャの部屋の扉をたたいてみたが、案の定、彼女は不在だつた。そこでマヤはあらかじめ用意しておいた紙片を部屋の扉に挟んでおくこととした。紙は、この世界では一般庶民にとつてそれほど安い品物ではない。だが竜騎兵基地の事務所には、上層部に提出する書類を作成するのに使う便せんが山積みになつていて、マヤは先

ほど謹慎処分終了報告書を提出した際、そのうちの一枚をくすねてこつ書き付けておいたのだった。「ナターシャ、この間はいきなり押しかけてごめんなさい。そして一晩泊めてくれてありがとう。私は明後日から本来の任務に復帰します。ですから一緒にペンドントを調査することはもうできなくなります。明日はまだ会えますので、明日の夕方にまた来ます」

マヤはその後、まじない小屋の立ち並ぶミエンテ小路でもう一度ペンドントのことを聞いて回った。カスリン通りなどの繁華街では日没の時刻に街灯がともされ、夜遅くまでその油が絶やされることはないが、広場を離れ路地へ一歩足を踏み入れると、周囲を照らすのは月明かりだけとなる。もちろん、夜空に毎日満月が昇るこの世界では、曇らない限り真っ暗になるということはない。しかし、南側の高い建物に月光を遮られるこのミエンテ小路は例外だった。マヤはさすがに身の危険を感じ、懐の小剣から手を離すことができなかつた。これまで、ミエンテ小路に詳しいナターシャが一緒だつたからそれほど怖くはなかつた。だが本来、ここはこんな時間に女が一人でうろつくような場所ではない。マヤが仮に自分のことを女だと思つていなかつたとしても、他人はそうは見てくれない。せめて彼女が小剣を人並以上に使えるというのならよかつたのだが、彼女の剣の技量はシロウトに毛が生えた程度でしかなかつた。実のところ、いくら竜の操縦がうまくても、地上に降りてしまえばかよわい少女にすぎないのである。マヤは今、改めてそう思い知らされた。

結局、その日もペンドントのことを知つていいという者は見つからなかつた。彼女は苦労が報われなかつたことを心密かに嘆きつつ、竜騎兵基地方面へ向かう最終乗合馬車へ飛び乗つた。彼女の頭の中には、はたしてこのペンドントを頼りに元の世界へ帰る手がかりを探すことの可能なのだろうかという疑念が生じ始めていた。

基地に帰り着いたのは門限ぎりぎりの午後十時だった。彼女はルーミアに自分の苦労話を聞いてもらえば少しは気が晴れるだろうと考えながら、基地の門をくぐり、竜騎兵用の兵舎へと歩を進めた。ところが、マヤとルーミアに割り当てる部屋を外から見ると、窓の中にランプの光は見あたらなかつた。マヤはルーミアが今晚、魔道学校に泊まると言つていたことをよつやく思い出し、一層もやもやした気分になつた。

兵舎の扉を開くと、自室へ続く廊下は、わずかな月明かりが差し込んでいるのを除けばほとんど真つ暗だつた。電気などないこの世界では夜、建物の中が真つ暗なのは、当たり前のことである。これまでもペンドント調査から帰つてきたときはいつもこうだつた。なに、今日に限つてはなぜかその暗闇に多少の不気味さが感じられた。先ほどミヒンテ小路で怖い思いをした余韻を引きずつてゐるせいなのか、あるいは、自室でルーミアが迎えてくれないことからくる心細さのせいなのかもしだれない。マヤはそう考へながら廊下を通り、自室の扉の前までやつてきた。

するとマヤの耳に、自室の中で物音がするのが聞こえたような気がした。一瞬、彼女の心臓が高鳴つた。しかし冷静になつてみれば、ここは軍事基地のど真ん中である。敵が攻めてこない限り、ここほど安全なところは他にないと言つてよい。今はきっと空耳か何かだつたのだろうと思つて直した彼女は、別に警戒することなく、思いつきり扉を開いた。

その時、マヤの目に信じられない光景が映つた。窓から差し込む月明かりが、部屋の中央に一人の男の影を浮かび上がらせていたのである。

驚きのあまり、マヤの口からは声が出てこなかつた。

男は、マヤが体をこわばらせた一瞬を見計らって、すかさず手で彼女の口を塞じできた。マヤが抵抗しようとすると、男は彼女の体を後ろから抱きかかえるようにして彼女の動きを封じた。

マヤはそれでも手足をじたばたさせ、男の拘束を逃れようと努力した。男は、自らの腕力に限界を感じたのか、背後から声を掛けることで彼女の動きを止めようとした。

「おー、静かにしろー。」

マヤはその声を聞いて「おやー」と思った。なぜならそれは聞き覚えのある声、とにかく、ここ数日間ずっと、心の奥底で聞きたいと願っていた声だったからである。

「ジユート？」

振り返った彼女の目の前には、案の定、ジユートのにやけ顔があった。

「よう、マヤ」ジユートはマヤを抱きかかえたまま言つた。「久しぶり、つてほどでもないか。モーラとの戦いの時以来だもんな」

マヤは、自分の心臓がときほどの恐怖と驚きせいでまだまだぞきじしているのを感じながら言つた。「ちよつと、ジユート、こんなところでこつたいて何やつてるの？」

「何つて、おまえが帰つてくるのを待つてたんじゃないか」

「わうこつじじゃなくて、こつは竜騎兵用の兵舎なのよ。男の人

は入っちゃいけないと云なつてゐるの」

「まあ、やう堅じ」と云つてしなしだ

「基地にそり忍び込むだなんて、見つかったら大変なことにならくなつてここに迷い込んだとでも言えばいい

「見つかりはしないさ。第一、俺は今夜、この龍騎兵基地にちやんとした軍の仕事で滞在しているんだ。『いつやう』じゃない。もし見つかったら、小便しに行つたはいが自分の部屋への帰り道がわからなくなつてここに迷い込んだとでも言えばいい

マヤは笑いながら「そんな言い訳、通用するはずないじゃない」と応えた。彼女の胸の鼓動は、驚きによるものから、もつと情熱的なものへと変化しつつあつた。

ジューートは彼女のそんな感情の変化を感じ取つたのか、あまり見せたことのない優しい笑顔で「そう言えば、モーラとの戦いの時、傷が痛むつて言つてただる。怪我の具合は、どうなんだ?」と訊いてきた。

マヤは「うん、大丈夫」とだけ答えたが、心の中は、彼のそういう気遣いに対する嬉しさでいっぱいだった。

ジューートは「やうか。そりやよかつた」と言つた。

マヤはその時よつやく、自分がジューートの胸に抱かれていることに気づき、照れくさくなつて、ジューートの腕を引きはがすよじて一步後ずさつた。

ジューートは名残を惜しみつつも、再び強引にマヤを抱きしめたりはせず、ただ黙つてマヤのはにかむ様子を眺めていた。

彼の瞳を正視してくると心が溶け出してしまって、その気がしたマヤは、窓の方へ皿をそらした。

ジューートはマヤのそんな反応を見て更に話題を変える必要があると思つたらし。彼女と同じ窓の外に皿をやりながら「ところで、ルーミアは一緒にやなかつたのか」と尋ねた。

たちまちマヤの表情が曇つた。「ルーミアは……今日は魔道学校に泊まつてゐる。恩師の先生がやつてゐる実験を夜通し手伝つんだって」「なんだ。タイミングが悪かつたな。マヤがこの間、ルーミアに会いに来てくれつて言つたから、この部屋まで来てやつたんだぜ」「からつて、彼女に遠慮してゐるのか?」

ジューートは、マヤの冴えない表情を見て、その意味するところを察したようだ。「ひょつとしてマヤ、ルーミアが俺のこと好きだからつて、彼女に遠慮してゐるのか?」

マヤは、ジューートに他人の感情を読みとる敏感さがあることを意外に感じつゝも、「別にそういう訳じや……」と無理に否定して見せた。

「でもこの間、ルーミアにジューートのことが好きだつて打ち明けられた。

「気に病むほどいのじやないだろ。ルーミアはルーミア、マヤはマヤなんだから」

れたの。なのにあたし、『ジューートはいい人だつたとゆづ』としか応えられなかつた。本当のことが言えなかつたのよ

「じゃあ、俺が言つてやる。ルーミアは、俺にとつてはいい友人でしかないつてな」

「だけど、ルーミアの気持ちを考えたら、そんなこと……」

ジューートは突然、マヤの肩をひつつかみ、乱暴に彼女の体を搖すつた。「じゃあ、俺の気持ちはどうなるんだ？ マヤが好きだつていうこの俺の気持ちは？ それとも、なにか？ 俺がルーミアに会つて、ルーミアに好きだつて言われたら、俺は『はい、そつですか』とでも応えればいいつてのか？」

マヤは「ジューート、痛い」と言つて彼の手をふりほどいた。

「すまん」ジューートは本当に申し訳なさそうに謝り、マヤの肩から手を離した。「考えてみたら、そうなつてしまつた原因の一端は俺にもある。三年前、俺がルーミアの気持ちに気づいた時点でもつとまつきつと拒むべきだつたんだ」

「ジューート……」

「それじゃ、マヤ、一緒にルーミアに打ち明けよう。ルーミアは聞き分けの悪い娘じゃない。マヤも知つてゐるだろ？ 正直に話せば、まつとわかつてくれるさ」

マヤは気持ちがすーと楽になつた。「うん……。わかつた」

ジューートはマヤを再び抱き寄せた。マヤは初めて自分の意志でジ

コートの胸に体を預けた。ジューートがマヤの頬に手を添えると、マヤの頬は自然とジューートのまくへ引寄せられていった。

ところが、その時。

なんと、廊下の方から声が聞こえてきたのである。

「お姉ちゃん、まだ寝てないでしょ？ 忘れ物を取りに来たの」

マヤは慌ててジューートの腕の中から抜け出そうとした。だが彼女がそうするよりも一瞬早く、部屋の扉が開かれてしまった。

マヤとジューートは、おかるおかる扉の方へ田をやつた。そこにはルーミアが立っていた。窓から差し込む月明かりに照りし出された彼女の顔色は、まるで蠟人形のように蒼白だった。

三人はしばし見つめ合つた。

十秒ほど後、ルーミアはその場を走り去つた。兵舎の廊下には、更にその後、数十秒間にわたつて、ルーミアの足音がこだまし続けた。

翌日、田が沈んですっかり暗くなつた二時半、小路を、マヤとターシャが肩を並べて歩いて歩いていた。

「そう。そんなことがあつたの。それは大変なことになつたわね」

ナターシャはマヤから昨夜の顛末を聞かされ、率直に同情の意を示した。「それで、そのあとどうしたの？」

マヤは表情に苦渋の色をこじませ、言った。「ルーミアを追いかけようとしたわ。でも彼……ジユートに『今度、無断で基地を出たことがばれたら謹慎ではすまなくなるぞ』って言われて、追いかけのをやめたの。ううん、本当は追いかけるのが怖かつただけなかもしれない」

「妹さんは、今、どうしているの？」

「ジユートがね、あたしの代わりにルーミアを追いかけてくれたの。と言つても、ルーミアを引き留めるためじゃなくて、彼女が無我夢中で走つて、るうちに万が一にも危険な場所へ迷い込んだりしないか、見届けるためにね。もう夜も遅かつたから。でもルーミアは、基地の前で待たせてあつた馬車に乗り込んで、そのまままっすぐ魔道学校に向かつた。そして、無事にホト先生の実験室のある建物に入つていつたつて。彼、軍の仕事の関係で、そいやつて尾行したりするのは慣れてるんだつて。それで、今日の夕方にもう一度、魔道学校へルーミアの様子をこつそり見に行つたら、実験の手伝いの仕事をちゃんとこなしてたつて、さつきナターシャに会う前に竜の銅像前で報告してくれたわ」

「マヤはこれからどうあるつもつといふと思つ」

「ルーミアは今夜、帰つてくるわ。その時にちやんと話し合いたいと思つ」

「やう。……ねえ、あたしのこと恨んでる?」この間、マヤの相談に乗つてあげたとき、あたし、『まつといても大丈夫』なんて無責任

なことを言つちゃつたでしょ？今回のことば、マヤがあたしの助言の通りに行動したために起こつたわけだから」

「恨むなんて、とんでもない。ナターシャはナターシャなりに、よかれと思つて助言してくれただけだし。それに、どんなことを助言されたにせよ、実際に行動したのはあたし自身だもの。結局はあたし自身の責任」

「よかつた、そう言つてもらえて。無責任なのはもう嫌だから余計なことは言わないけど、とにかく妹さんとの話し合ひがうまく行くよう祈つてる」

「ルーミアにはありのまますべてを話すわ。それで、もし許してくれなかつたとしても」マヤはうつむいていた顔を上げ、言つた。「それは仕方のないことだと思つてゐる。種をまいたのはあたし自身だから、あたしは罰を受けなきやならない」

ナターシャは優しい笑顔でマヤを包み込み、言つた。「マヤの考え方は、きっと正しいわ。いくら大切な妹でも、してあげられることがあげられないことがある。マヤにできるのは事実を打ち明けて誠心誠意謝ることだけ。それを妹さんがどう受け止めるかは、つまるところ、本人次第なのだから。……つて、結局、また偉そうなこと言つちゃつた」

マヤは、ナターシャに自分の言葉を肯定してもらえたことが嬉しかつた。最初は、美玖に似ていることから彼女に親近感を覚えた。彼女にハバリア人であることを打ち明けられた後は、故郷を遠く離れてエランで暮らす者同士という共感も加わつた。ルーミアと今のような関係になってしまった以上、マヤにとつてナターシャは心の置けない唯一の存在だつた。

しかし、残念なこと、マヤは明日から通常の軍務に復帰せねばならない。

ナターシャの方もマヤと同じ気持ちだったようだ。「話は変わるけど、寂しくなるわね、しばらく会えないなんて」

「そうね

「きっとピョーラも寂しがるわ

「ああ、このあいだのワントリヤンね。あたしもすこく寂しい。ナターシャに会えないのも、ピョーラに会えないのも」

「ねえ、マヤ、これを機会に軍隊を辞めて、オランで暮らすなんてのはどう?」

ナターシャに意外なことを言われて、マヤはちゅうとびっくりしたが、ナターシャがいたずらっぽい表情をしていたので、「冗談だと判断した。「そうね。悪くはないわね。でも……」

「竜騎兵やつてる今の生活が充実してる?」

「そういうわけでもないんだけど」

「でも愛着はあるんでしょう? 東洋から出て来て、志願して竜騎兵をやつてるぐらいなんだから」

「ううん、あたしは志願兵じゃない。入隊したのはクフルツ家に割り当てられた出征義務を果たすためよ」

「ああ、そうか。エラーニア人の白魔道士の養女になつたつて言つてたつけ。大変ね。出征義務期間はあとどれぐらいなの？」

「実を言つとね、義務期間はもう終わつたの。『大きな戦果を上げた者は、出征期間をその戦果に応じて短縮される』つていう特例が設けられていてね。あたし、半年で六十匹も撃墜しちやつたから、出征義務からはもう解放されたわ」

「そう。それはよかつたわね。だけど……それでもマヤはまだ竜騎兵を続ける。なぜ？ 正義感から？……あ、あたしはハバリア人だけ、故郷を捨ててここエラーニアに来たような人間だから、ハバリア帝国のことを悪く言われても別に気にしないわよ。前にも言ったでしょ。あたしだけじゃない、エラーニアに住んでいるハバリア人はみんなハバリア帝国を良く思つていないわ」

「正義感とか、そういう理由でもないの」

ナターシャは、今度は少し真面目な顔をして「それじゃあ、どうしてまだ竜騎兵を続けるの？」と訊いてきた。

「それは……」

マヤは一瞬、返答をためらつた。彼女が軍に入つた理由は当初、二つあった。クフルツ家に割り当てられている出征義務を果たすためという一つめの理由は、いま言つたようにすでに効力を失つてゐる。もう一つの理由、すなわち、エラーニア王宮かハバリア帝国に近づき、元の世界へ帰る方法を見つけるという、こちらの理由こそが、眞の、そして現時点での唯一の理由である。しかし、先日の舞踏会の折、エラーニア王宮に近づくのは容易なことではないと

はっきりと思い知らされた。となれば、このまま軍隊に居続け、軍務としてハバリアに侵入する機会が訪れるよう期待するしかないということになる。気の長い話だが、閉鎖国家であるハバリア帝国領内に、それ以外の方法で入り込むことができる可能性は、今のところ皆無だった。ナターシャも、戦^{いくさ}が始まつてからはハバリア人である自分さえ故郷へ帰ることを禁じられるほど閉鎖政策が厳しくなつてしまつたと嘆いているぐらいなのだ。しかも、もしこのまま戦が終わり、そのあとにハバリアが閉鎖政策をやめなければ、永久にハバリアに入れなくなつてしまふかもしれない。

もつと簡単な方法もないわけではない。単に、ハバリア軍に寝返つてしまえばよいのである。だがこの場合、彼女の養父、クフールツ先生と義妹、ルーミアは、裏切り者の家族としてエラーニア軍に捕えられ、牢獄にでも放り込まれるのは間違いない。命を救つてくれた恩を仇^{あだ}で返すようなまねが出来るほど、マヤは冷酷ではない。

もつとも、そういう込み入った事情までナターシャに話すつもりは、マヤにはなかつた。いくらナターシャが自分に親しみを感じてくれていても、異世界に帰るなどという話はあまりにも荒唐無稽で、信じてくれないだろうと思つたからである。そこでマヤは

「あたし、ハバリアに行きたいの。そつしなければいけない理由があたしにはあるの」

とだけ答えておいた。

「そつなの」ナターシャは、マヤが言葉を不自然に濁したことを特に気に留めるでもなく、話を続けた。「知つてる？あたしの故郷、ハバリアはね、二十年前までエラーニア王国の領土だつたのよ」

「へえ。ハバリアにはエラン語を話せる人が多いつて聞いたけど、そのせいなのね」

「そう。でも二十年前、ハバリア候グロウツがヤグソフっていう怪僧を側近に加えてから、事情が一変したわ。グロウツはヤグソフの進言に従つて軍隊を動かし、エラーニア王宮にハバリア皇帝としての地位を認めさせたの。更に、それからハバリア地方をすべて自らの版図に加えるまでに、三年とかからなかつたわ。その後もハバリア皇帝は、いろいろ理由をつけてゆつくりと、しかし確実に、エラーニア領内のハバリア人居居住域を自国領に加えていった。そして一昨年、遂に王都エランの北側に広がる最後のハバリア人居居住域、エールデラントを武力で制圧した。でもエールデラントには、多数のエラン人がハバリア人と入り交じるように居住していた。エラーニア王宮も、ことここに至つては黙つていられなかつた」

「それで、今度の戦^{“”}が起きた」

「そうよ。あのね、マヤ。こういう言い方をしたらマヤは気を悪くするかもしねないけど、マヤは東洋人で、この戦^{“”}とは直接関係がないでしょ？極端な話、もしマヤが東洋からやつてきたときハバリア領内で墜落していたら、今頃ハバリアの竜騎兵になつていたかもしれないじゃない？さつきあたしがマヤに竜騎兵をやつている理由を訊いたのは、そんなマヤがどうして命の危険を冒してまでエラーニア軍のために働くのか疑問に思ったからなの。もしかしたら、誰かにだまされてやうざれてるのかな、なんて」

マヤはナターシャの言葉の真意を測りかねたが、とりあえず「気遣つてくれるのは有り難いけど、そんなんじゃないわ。さつきも言つたけど、あたしにはエラーニア軍にいなればならないちゃんとした理由があるの」と答えた。

「やうね。ちよつと変なこと訊いたわね」ナターシャは自嘲氣味に微笑んでから、「あ、あのまじない小屋よ。あそこのまじない師、魔石に詳しいんだって。行ってみましょ」と話題を変えた。

ミント小路での調査最終日となつたその日、マヤたちは例のペンダントにはめられた紫色の宝石を見たことがあるという者にやつと巡り会つことができた。ただ、そのハバリア人のまじない師から聞かされたのは、彼がハバリアにいたころ、マヤたちのペンダントとよく似たものを誰かが首に掛けているのを見たような気がするといつ、曖昧模糊とした事実だけだった。確かに、何の収穫も得られないよりはましである。しかし、その程度のことが明らかになつただけでは、少しも事態を進展させることにはならない。ハバリアが関わっていることば、言われなくてもわかつてはいるからである。

マヤは半月ほどミント小路に通い詰めた苦労が実らなかつたとことを残念がりながらも、案内してくれたナターシャには礼を述べた。ナターシャは自分はこれからも調査を続けてみると言い残し、別れを惜しみつつ、マヤの前から去つた。

カスリン通りでこれまで通り最終乗合馬車に乗り込んだマヤは、これから竜騎兵基地で待ち受けているであろう困難を思い、陰鬱な気分になつた。もつとも彼女の心は、さきほどナターシャに話したとおり、すでに覚悟が決まつてゐる。ルーミアがマヤのところにいるのが嫌で、たとえばそのまま魔道学校に泊まり続けるとか、アヴィー村の実家に帰つてしまつようなことになつたとしても、引き留め

ることはできないだらう。マヤが心配したのはむしろ、ルーミニアがヤケを起こして怪しげな男のあとについていたりしないかということだった。

基地に帰り着いたマヤは、まっしづらに自室へと向かつた。ところが彼女の部屋の前にラウラが立ち止だかつていていたのだった。

マヤが「話はあとにして」と書いて皿室の扉を開こうとすると、ラウラはマヤの動きを遮つて「まず話を聞け」と言った。ラウラの表情がとても真剣だったので、マヤはとりあえず隊長の話に耳を傾けてみることにした。

ラウラは言った。

「用件は二つ。一つは、先ほどアイリゲン大佐から聞かされたことなんだが、エラーニア王国軍は、ハバリア軍の占領下にあるヒルデラントを奪回すべく、近々作戦行動を開始する予定であり、ファクティム装甲竜騎兵隊はその準備行動の一環として、数日中にエラン近郊のマグンへ移動することになった。マヤも、その心づもりをしておいてほしい。そして二つ目は」

そこで彼女は、真剣な顔をやめ、ちょっとやるせない表情をした。

「今日からあたしは従者をつけることにしたので、マヤに紹介しておきたい。……おい、出でこい」

すると、マヤの部屋の隣にあるラウラの部屋の扉が開き、中から白魔道士服を着た少女が姿を現した。

ラウラはため息を一つついてから、少女の肩に手を置き、言った。

「これが今日からあたしの従者になつた白魔道士、ルーミア・クフルツだ」

マヤはびっくりしてしまい、文字通り開いた口がふさがらなかつた。

ルーミアは無表情のまま、感情のこもらない冷たい口調で「よろしくお願いします、マヤ・クフルツ竜騎兵」と言つた。

それから十日後、エラーニア王国軍とハバリア帝国軍が対峙する全戦線において、エラーニア竜騎兵隊による一斉攻撃が行われた。目的は、ハバリア側の竜騎兵基地を空襲し可能な限り破壊すること、および、その際迎撃に出てくるハバリア竜騎兵隊に打撃を与えることであった。

エラン近郊の小さな町、マグンに進出していたマヤたちファクト��装甲竜騎兵隊は、この作戦に際し、エールデラント南東方面空襲隊の護衛という任務を与えられた。この「護衛」という言葉は、わかりやすく言うと「盾代わり」のことである。しかもマヤたちの担当した地区は、敵が最精銳の竜騎兵を優先的に配置している場所の一つだった。ファクト��隊はギール戦以降、エラーニア軍の中でも精銳部隊の一つに数えられるまでになっていたのだから、このような大役を「えられたのは当然のことである。とは言えこれは、マヤたちが上層部から掛けられる期待に応えなければならない初めての任務だった。ギール戦のように、攻撃してくる敵からただ城を

守っていればよかつたのとはわけが違つた。つまりマヤたちは、敵と戦うのと同時に、責任の重さから来るプレッシャーとも戦わなければならなかつたのである。

戦況は、当初こそ一進一退だつたが、次第に物量で勝るエラーニア軍が優勢となつていつた。マヤたちも、出撃を繰り返すたびに敵の迎撃が少なくなるのを実感した。モーラとエラーニア王宮前で戦つたとき、ジユートはハバリア軍がギール戦で戦力を使い果たしたと言つていたが、今、マヤの目の前でそれが事実だということが証明されつつあつた。それでもマヤは、そのとき撃墜された反省から、この戦いでは常にラウラとオクタヴィとの連携を意識し、決して油断することも増長することもなく、着実に護衛の任をこなしていくた。お陰でマヤの撃墜スコアは、遂に八十匹を超えるまでになつた。

戦果の芳しさとは裏腹に、マヤの心は晴れなかつた。理由は、もちろんルーミアとのことだつた。マヤは最初、ルーミアは記憶喪失にでもなつてしまつたかと思つた。しかし、ラウラがルーミアを従者だと言つて「紹介」してくれたとき、マヤが名乗る前にルーミアの方からマヤの名を呼んだことから、マヤのことがわからないわけではなさうだつた。現にラウラやオクタヴィには、今までと全く同じように接していた。ではなぜマヤと話すときだけ無表情で、冷たい口調の敬語を使い、しかも「ママ・クフルツ竜騎兵」と階級で呼ぼうとするのか。単にマヤへの痛烈な皮肉のようにも解釈できたが、マヤはそうでないよくな気がした。ルーミアはもともとそんな陰湿なことをする娘ではない。とすれば、先日「お姉ちゃん」とはもう一度と喧嘩ないと誓つていたことから推測するに、どうやらルーミアは、今のマヤを「お姉ちゃん」ではないと見なすことによつてその誓いを破らないようにして、そつすることで精神のバランスを取つてゐるのではないか。

もちろんマヤは、今までに何度もルーニアを呼び止め、ジユートとのことを謝罪しようとした。だがそのたびにルーニアは、忙しいと言つて足早に立ち去つた。それでもマヤがルーニアを追いかけ、背後から無理やりにでもことの次第を説明すると、ルーニアは表情一つ変えず、「へえ。マヤ・クフルツ竜騎兵も大変ですね。どうなたのことをおっしゃつているのか存じませんけど」などと応える始末だった。

こうなつてしまつては、マヤとしてはほどぼりが冷めるのを待つ以外、どうすることもできなかつた。幸いにして、と言つべきか、今は作戦中であり、妹とどう接するかなどといふことを考える余裕もなかつたし、またそんなことを考へることが許される状況でもなかつた。

エラーニア竜騎兵隊による一斉攻撃は三日間続いた。その結果、半数のハバリア竜騎兵基地に壊滅的な打撃を与え、敵竜騎兵戦力も三割程度を行動不能に陥らせたと見積もられた。一方、エラーニア側の竜騎兵戦力は一割程度が損害をこうむつたにすぎなかつた。エラーニア王国軍は、開戦時のハバリア軍の奇襲によって奪われた制空権を一年五ヶ月ぶりに奪回することに成功したのである。

しかしこの一斉攻撃は、実のところ、エラーニア軍による次なる反攻作戦の序章でしかなかつた。軍上層部は一日後、エールデラントの南東、南方、南西の三つの方面に待機させてあつた地上軍にエールデラントの中心都市シュラースへ向けての進軍を命じた。

制空権を奪われたハバリア軍は、あまりにももろかつた。中にはエラーニアの大軍を見ただけで戦わずして白旗を揚げる部隊すらいた。ハバリア軍が撤退した町や村にエラーニア軍が進軍すると、エラン人だけでなくハバリア人の住民までもが歓声を上げて彼らを迎

えた。ハバリア軍は残存兵力をとりまとめ、シュラースへと撤退するものが精一杯だった。

進軍開始のわずか半月後、エールデラントに残つたハバリア軍はシュラースに包囲された。彼らの頼みの綱は、ハバリア領内から竜騎兵によつて運ばれる補給物資だけだつた。だが、制空権を奪われてゐる現状では、それも口に口に少なくなつていつた。

マヤたちファクティム竜騎兵隊はシュラース近くの村にまで進出し、そこからシュラース守備部隊を攻撃したり、彼らに補給物資を投下しようとする敵竜騎兵を追い払う任務に就いた。もつとも、ハバリア軍上層部がシュラースを奪回する気はないらしく、シュラース戦線に回されてくる敵は、歳を取つてやせ衰えた竜に乗つた未熟な少女竜騎兵ばかりだつた。そのためマヤの撃墜スコアは更に上昇したが、そのような竜騎兵を撃ち落としてスコアを稼いでも、マヤは喜ぶ気になれなかつた。

ところが、マヤは一度だけ、哨戒飛行中にとてつもない強敵と遭遇した。相手は装甲をつけていない普通の竜に乗つていた。だがその竜は、この戦線に回されてくる他の敵の竜とは明らかに異なつてゐた。体が一回りも二回りも大きいのに、動きがとても敏捷だつたのである。ピムをはるかにしのぐ運動能力を持つ、年若い竜であることは間違ひなかつた。竜だけではなかつた。それを操る竜騎兵の飛行テクニックも並はずれていた。マヤと互角かひょつとするとそれ以上とも思えた。マヤはあつさりと後ろを取られた。敵の竜は牙をむき、ピムをはじめとするすべての飛行竜の弱点である翼の付け根に、今まさに噛みつこうとしていた。マヤは初めて空中戦で撃墜されるかに見えた。

彼女の窮地を救つてくれたのは、ラウラとオクタヴィだつた。少

し離れた別々の空域を哨戒していた彼女たちはマヤが苦戦しているのを見つけると、すぐさま駆けつけてくれたのだった。ファクティム竜騎兵隊がフォーメーションを組んだ今、たとえマヤ＆ピム以上の能力を持つ敵であっても一匹ならば怖くはなかつた。たちまち形勢は逆転した。不利と見た敵竜騎兵は、ハバリア語で何か叫んで竜に頭を北へ向けさせ、戦闘中の敏捷さそのままに、信じられない速度で戦闘空域を離脱した。マヤたちに追撃のいとまなどとえてはくれなかつた。

この強敵との戦いの折、マヤは不思議に思ったことが二つあつた。一つ目は、相手の竜騎兵が恐ろしく無表情だったこと。その無表情さたるや、今のルーミニアがマヤに接するときの冷たい表情が、愛想のよい笑顔に思えてしまつほどだつた。ヒラーニア王国竜騎兵隊の中でも精銳のうちに数えられるファクティム隊の三匹の装甲竜と対峙すれば、普通、冷静ではいられないだう。なのにその敵竜騎兵は、表情に焦りの色を見せなかつたばかりか、眉毛一つ動かさなかつた。彼女は非常に肝の据わつた竜騎兵、だつたのだと言わればそうかもしない。だがマヤの目には、その女が状況を冷静に分析しているようにさえ見えなかつた。言つてみれば、マネキン人形が竜に乗つているかのような、そんな印象を受けたのである。

二つ目、これはマヤの思い違いかとも思われたが、マヤはその敵竜騎兵の顔を以前、どこかで見たような気がした。それも一年以上前、つまりこの世界に飛ばされる前に目にしたような覚えがあつたのだ。もしその記憶が正しければ、マヤ以外にこの世界に飛ばされた者がいるということになる。となれば、その者を追求することであることは元の世界へ帰る方法がわかるかもしれない。マヤは、どこで、どういう状況で、その顔を見たのか、そしてそれが誰なのかを思い出そうと記憶の糸をたぐつてみた。しかし結局、思い出すことはできなかつた。

エラーニア王国軍がエールデラントに進軍を開始して一十日後、シユラースは陥ちた。^お作戦開始前に軍上層部が定めた一ヶ月以内という攻略目標期日を、大幅に下回つての大勝利だった。

シユラースが陥落すると、マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊はすぐさまシユラース市内への進駐を命じられた。エールデラントがハバリア軍の支配から解放されたと言つても、いまだシユラース周辺でゲリラ化したハバリア軍残存兵との小競り合いが断続的に続いている現状では、エラーニアの竜騎兵の大部分は、ゲリラによる襲撃を避けるために、なおシユラースのはるか南方に留め置かれるえない。最精銳のエラン第一装甲竜騎兵隊に至つては、やつと王都エランの北隣の町に進出したばかりにすぎないのである。その中でファクティム隊が先陣を切つてシユラース進駐を命じられたといふことは、エラーニア軍上層部がファクティム隊を優秀な部隊としてよほど信頼しているのか、さもなければ逆に、秀でているのをよいことに厄介^ごことを押しつけているのがどちらかなのだろう。

マヤたちは当初、シユラース城の駐竜場に進駐しようと考えた。ところがそこは、先日行われたエラーニア竜騎兵隊による一斉攻撃の折、徹底的に破壊されており、駐留するには修復工事が必要だつた。そこで仕方なく、彼女たちはシユラース上空を飛び回り、駐留が可能なスペースを探した。竜を三匹駐留させるには、かなりの面積を必要とする。特にシユラースのような街中でそのようなスペースを確保するのは、容易なことではなかつた。結局、シユラースのはずれにある農場に程よいスペースを見つけ、農場主との交渉の末、

ようやく仮の駐竜場として使用することを認めてもう一つができるのだった。

日没後、ラウラはマヤに仮眠を取るよう命じた。シュラースに複数の竜騎兵隊が進出してくれば、寝ずに夜間の敵襲に備える当番を隊ごとに交代で務めることができるようになるのだが、今まだ一隊しか進駐していないため、隊の中でそのような当番を務めるローテーションを組む必要があったのである。

マヤは仮の兵舎として使わせてもらうことになった農場の納屋で、干し草の山をシーツで覆つて作ったベッドに横になり、目を閉じた。しかし日没して間もない間に眠れと言われても、そう簡単に眠ることなどできはしない。そこで彼女は仮眠を諦め、納屋の周囲をぶらぶらと歩き始めた。

すると。

彼女の目の前に、意外な人物が現れたのだった。

「お久しぶり、マヤ」

その人物は水色のジャケットを着、髪をショートカットにした若い女性だった。

「ナターシャ！？」マヤは驚きを隠さなかつた。「どうしたの？どうしてナターシャがこんなところにいるの？」

ナターシャは満面の笑みをたたえ、言った。「さつき赤い竜が空を飛び回つてたのを見かけたのよ。ほら、この間、マヤ、話してくれたじゃない、マヤたちの隊の竜は装甲を赤い色に塗つてゐて。

だからさつとマヤたちだつて思つて、追いかけてきたの

「さつこじやなくて、どうしてシユラースになんか来たの、つて。ここはまだ危ないのに」

「そう言えばマヤには言つてなかつたかな？あたしね、三年前にエランに移り住む前はこのシユラースに住んでいたのよ。たつた一年間だつたけど、それでもそのときお世話になつた人が何人かいたから、安否を確かめたくて、それで、五日前にここがもうすぐ解放されるつていう話を聞いて、ビュアラを近所の人に預けてエランから出てきたの

「さうだつたの。それは大変だつたわね。あ、こんなところで立ち話も何だから

マヤはさう言つて、ナターシャを納屋の中へと案内した。

ナターシャはマヤに勧められるまま、太い丸太を輪切りにして作つた椅子の上に腰掛けた。見ると、納屋の中央には火が焚かれ、その上に小さなやかんが掛けられていた。マヤは井戸から汲んでおいた水で手をすぐようナターシャに勧めてから、自分も手をすすぐだ。次に、片隅に置いてあつた自分の背嚢からカップを一つ取り出し、やかんの湯でいつたんすすいで湯を捨てた後、改めて湯を注ぎ、ナターシャの座つている隣の丸太椅子の上に置いた。

マヤは言つた。「それで、こちらの知り合いの人たちは、無事だつたの？」

ナターシャは答えた。「ええ、おかげさまで

「それはよかつたわね。でもびっくりしたわ、ナターシャがこんなところまで訪ねて来てくれるなんて。それに、ここひと円ほど、ずっと戦つてばかりだつたから、」んなふうに誰かとくつろいで話すなんてほんとできなかつたの。だから、すつごく嬉しき

「彼氏とも全然会つてないの？」

「ええ。作戦が始まつてからほ一度も」

「寂しいわね」

「まあね。でも今は戦時下だもの。軍人の彼とエランで何度も会つことができたのが不思議なぐらいよ」

「じゃあ、妹さんは？」

「シユラースに来てるわよ。今は隊長のラウラとオクタヴィイと一緒に小川の向こうの牧場で竜の世話をしている」

「あれ？ あれだけ仲がいいって言つてた妹さんが、ここに一緒にいるってことは、もしかして……？」

マヤは苦笑しながら応えた。「ええ、まだ仲直りできていないわ。つて言つて、向こうがとりつて鳥を『えてくれない』

ナターシャはマヤに同情した。「ひと月も経つてゐるのに許してくれないなんて、それって、ちょっとひどくない？」

「そうかもね。でも、いつか許してくれるかもしれないし、もうずっとこのままのまゝかもしれない。ルーミアね、あたしのことを他人

扱こするのよ。おかしこりじょ？まあ、面と向かって嫌みを言われるよりはましよね」

「かわこわう」「元

「なんか、もうどうでもよくなつてきちゃつた。ルーニアのことも、ジューートのことも、竜騎兵の仕事も。あーあ、この間、ナターシャに言われたみたいに、軍を辞めてエランにでも住もうかな」

「軍にいなければならぬ理由があるんじゃなかつたの？」

「うん、それも最近、ちょっとね……。ねえ、ナターシャ、エランつて住みやすい？あたし、生まれたのも育つたのも大きな街だったから、本当言つて、アヴニ村つてあまり住みやすいとは思えなかつたの」

「どうかな。あたしは、ドゥムホルクで生まれ育つて、このシュラースに一年、エランに三年住んだけど、どの街もそれなりにいいところはあつたから」

「やあ、ナターシャつてハバリアの首都のドゥムホルク出身だつたのよね」

「マヤはなんてこつ街の出身なの？」

「あたしは……」

マヤは言葉に詰つた。彼女はこの世界では東洋のブンゴリアといつ国から来たことになっている。彼女がクフルツ診療院を退院した日、彼女をファクティム城へむらうべくアヴニ村にやってきた

ジューートたち一行に、ルーミニアが口から出任せでそう応えてしまつたからである。マヤは、自分の出身地を人から尋ねられてもよどみなく答えるよう、あらかじめ地図でブンゴリアの首都の名前を調べておいたのだが、このようにいきなり尋ねられると、やはりなかなか口をついて出でくるものではなかつた。だからといって黙つているわけにもいかないと思つた彼女は、ブンゴリアの地名などナターシャはどうせ知らないだろうと判断し、とつせに元いた世界の故郷の都会の名前を答えた。

「へえ、案の定、ナターシャは何の疑問も持たなかつたようだ。」
いかにも東洋的な響きね

マヤは怪しまれなかつたこと、安堵しつつ、「そうかな」とあいまいな返事をしておいた。

するとナターシャは、不意にマヤの顔をまじまじと見つめ、言つた。「ねえ、マヤ、故郷ではすこくもてたんじやない?」

マヤは首を振つた。「まさか

「だつて、マヤつてかわいいもの。よく言われたでしょ?」

「ううん。言われたことない

「じゃあ、あたしが言つてあげる。マヤはかわいい。とっても」

マヤはじつ答えてよいかわからなかつた。

今、納屋で焚かれている火の中で、まきがパチッとはじける音がした。

むらむらと揺れる炎を見つめていた。マヤは何となく不思議な気分になつた。以前ルーミアにも話したとおり、マヤは女性の肉体を得て以降、女性を異性として見ることができなくなつていて。いま考えてみれば、その兆候は、クフルツ診療院に入院していたころから現れ始めていた。ルーミアはマヤ？？山矢の入院中、皮膚の再生具合を確かめるために彼（女）の体をなで回したり、彼（女）の顔の再生具合を見極めるために自分の顔をすぐそばまで近づけてきたりしたことが何度もあった。山矢はそのとき、確かにちょっと恥ずかしいとは感じた。しかし、十六歳の少年がルーミアのような女の子にそのようなことをされたら普通どのような感情を抱くかを考えれば、山矢の精神的女性化はその時点でかなり進んでいたことがわかる。その後、マヤとなつた彼が、ルーミアとともに裸で水浴びをしたときには、もうすでに、自分が女性の裸を見ているのに特別な感情を抱いていないことにすら気づいていなかつた。そして今、ジユートを彼氏と呼ばれて少しも違和感を覚えないほど、マヤは自分を女性だと自覚するようになつていて。それは、単に精神を女性の肉体に移し替えられたわけでも脳を移植されたわけでもなく、魂の肉体として再生されてしまつたことによる、当然の帰結であつた。だから彼女はこの時、ナターシャに對して異性に抱くような衝動を感じていたわけではない。だが、そういうものとは異なる種類の、最も深い想いが胸に溢れていたのは確かだつた。

ナターシャは、どうやらマヤのそういう想いを肌で感じ取つたらしい。マヤの座つている隣の丸太椅子に座り直し、その体をマヤの体へぴつたりと寄せてきたのだった。

「ハバリアではね」ナターシャは言つた。「仲のよい女の子同士がディープ・キスをしたり抱き合つたりすることは、全然変なことじやないのよ

マヤはちょっと驚いて、身をこわばらせた。ナターシャは大人っぽい、妖しい微笑みをたたえ、マヤの瞳をのぞき込んできた。そうしていつの間にマヤの体のこわばりは、まるで熱したチョコレートのように柔らかくぼぐれていった。

ナターシャはマヤの体をその腕で包み込んだ。マヤが体をナターシャの胸に預けると、ナターシャは自分の唇をマヤの唇の上にそっと重ねた。それはマヤにとつてファーストキスだった。

何秒か何十秒か後、ナターシャの唇は、甘酸っぱい余韻を残してマヤの唇から離れた。それからしばらくの間、二人はじっと、相手の瞳に自分の姿が映るのを見つめ合つた。やがてナターシャは着ている服の胸の部分をはだけ、マヤの手を取つて自分の胸のふくらみに触れさせた。マヤはその時、ほんの一瞬だけ、魂の奥底に宿る男性の感情に支配された。

するとナターシャは突然、自分の体をマヤから引き離した。マヤは何か間違つたことをしでかしたのかと思い、おそるおそるナターシャの表情を伺つた。しかしナターシャは、先ほどと変わらない大人の微笑みのまま

「マヤって、なんか男の子みたい。時々そういうことがあるわ

と語つた。

マヤは内心、どきつとした。だがナターシャの笑顔を見る限り、彼女がそのセリフを本気で言つたとは思えなかつたので

「軍隊になんかいるからなのかな

とだけ応えておいた。

ナターシャは、はだけていた服を直し、カップに注いであつた湯を一口飲んでから、言った。「『めん。さつき』ハバリアでは女の子同士が抱き合ってもかまわない』なんて言つたけど、あれは嘘。マヤがあんまりかわいかったから、ちょっととからかつてみたくなつただけなの」

マヤは今になって、自分たちがいかに恥ずかしいことをやろうとしていたかに気づき、顔から火が出そうになつた。「もう。ナターシャつたら」

ナターシャは、今度は子供のようにいたずらっぽく微笑み、言葉を続けた。「ねえ、マヤ。ずっと前、あたしは、エラン語のナターシャ・リュコーと、ハバリア語のリュコワ・ナターシャつていう二つの名前を持つていろいろ話したわよね

恥ずかしさによる動搖を鎮めるためにカップの湯を一口飲み込んだマヤは、ナターシャのその話題転換の方向性がよくわからなかつたものの、そういう話があったことは思い出し、とつあえず「ええ」と相づちを打つた。

「本当のことを言つとね、あたしにはもう一つ名前があるの

「もう一つ?」

「せうよ。それは四年前、結婚してこのショコラースに住みよつたるまで名乗つっていた名前なの。いわゆる旧姓つてやつね」

「ナターシャ、結婚してたの？」

「ええ。あたしは四年前、家出同然でドゥムホルクを出た。そして放浪の末にこの町に流れ着き、ハバリア系住民の彼と出会ったの。あたしはすぐに彼に夢中になり、ほどなく結婚した。彼と一緒に暮らした一年間は、今思い返しても本当に楽しかった。あたしの人生で最も幸せな時間だった」

「あの、じゃあ、田那さんは、今は……？」

ナターシャはゆっくりと丸太椅子から立ち上がり、マヤに背を向け、言った。「死んだわ。狂信的反ハバリア主義者のエラン系住民に殺されてね。もちろんあたしも一緒に殺されるはずだった。でもあたしはその時たまたま不在だった」

「そんなことがあったなんて……」

「その後、あたしはエランに移り住んだ。エランのような大きな街にいた方が、自分がハバリア人だとばれずにすむと思ったから。だけどね、マヤ、あたしはエラン人を恨んでいるわけじゃないのよ。もちろん夫を殺した犯人には憎しみを抱いたわ。でも逃亡していたその犯人は、おととしハバリア軍がエールデラントに侵攻してきた時、真っ先にハバリア軍にとらえられて、留置所に連行される間になぶり殺しにされたって聞いた。だから今は誰も憎くないし、誰も恨んでいない」

「『めん、ナターシャ。その話、あまりにもショッキングすぎて、あたし、ナターシャにかける言葉が見つけられない』

「別にいいのよ。同情のセリフは聞き飽きたから。でもその事件を

境に、あたしは変わったわ。それまでは、ヒラン人とハバリア人の対立なんてあたしには全く関係のないことだと思つてた。この戦が始まる少し前に姉や妹たちが連絡を取つてきてあたしにある仕事を命じたとき、その仕事を何のためらいもなく引き受けたのも、その変化のせい

「妹？ ナターシャにお姉さんがいるって話は聞いたことがあるけど、妹さんもいたの？ それにお姉さんたちの命じた仕事つて？」

ナターシャはマヤの方を振り返り、言った。「あたしの下の妹の名前はニーナ。上の妹の名前はモーリカ。そしてあたしがそのとき引き受けた仕事は、スペイよ」

マヤは愕然となつた。

「ヤグソフ……四姉妹……なのね」

彼女の口からはそれ以上の言葉が出てこなかつた。また敢えて口にする必要もなかつた。訊き返さなくともすべて明らかだつたからである。

「お願い、マヤ」 ナターシャはいきなりマヤの手を取り、言った。「あたしと一緒にハバリアに来て。あなたならハバリアでもきっとエース竜騎兵になれるわ。だってあなたはそのためにこの世界に呼ばれたのだから」

「やつぱりあなたたちだったの、あたしをこの世界に呼び込んだのは」 マヤは苦渋の表情を浮かべ、言った。「ナターシャ、あなたはずつとあたしをだましてたのね」

「確かにあなたに近づいた目的は、あなたの正体が異世界から飛ばされてきた男の子じゃないかって疑つたからよ。二ーナと二人でこつそりマキナスの森の墜落現場を訪れたあたしは、ひょっとしたら、燃え尽きかけた男の子の魂が女の子の魂として再生されたんじゃないかって考えた。だけど二ーナはそんなことあり得ないって言つて、はなからあなたをマークしなかった。本当に東洋から来た女の子だと思つてた。あたしも最初、確信が持てなかつた。そこであのペンドントを首にかけて、カスリン通りの竜の広場前で待ち合わせをしているあなたの前に現れた。あなたが異世界から来た男の子ならペンドントを見て何か反応するだろうと思つたから。あなたは確かに反応したわ。でも、それは、あたしが予想した反応とは違つた。話がややこしくなつたのは、モーラが偶然、あなたにあのペンドントを渡していただせいよ。お陰で、あなたが本当に東洋人の女の子で、モーラからもらつたペンドントがただ珍しかつたから興味を持つただけつていう可能性がずっと捨てきれなかつた。そう、さつきあなたの口から異世界の日本にある街の名前を聞かされるまでね。前に言つたでしょ。姉はよく私に『旅』の話をしてくれたつて。旅つていうのは異世界への旅のことよ。姉の話の中には、日本の地名がいくつも出てきたわ」

「あたし、あなたのことを本当の友達だつて思つてたのに……」

「あたしだつてそうよ。きっかけはどうあれ、今はあなたがあたしにとつて一番の友達だつてことは事実だもの。だからこそこうしてお願ひしてゐんじゃない。マヤ、ハバリアへ来て。戦うのが嫌なら、別に竜騎兵をやらなくたつていい、エラーニア軍を辞めてハバリアへ来てくれるだけでもかまわないの。ハバリアにさえ来てくれればあなたを元の世界へ帰してあげられるんだから！」

「え？」その言葉はマヤにとつて青天の霹靂の「」ときものであつた。

「本当？本当に元の世界へ帰れるの？」

「もちろん」ナターシャはマヤの手を更に強く握りしめた。「呼び込んだのはあたしたちなんだから、逆に向こうへ飛ばすことも当然、出来るわ」

「帰れる……、元の世界へ……」

マヤは虚空を見つめ、今までこの世界で自分がしてきた苦労を想い、向こうの世界で自分を待っている人たちの顔を思い浮かべた？？父、母、友人たち、アクロバット飛行のコーチや仲間たち、そして相良美玖。

ナターシャはマヤの肩を抱いて椅子から立ち上がり、言つた。
「ね、一緒にハバリアへ行」

マヤはナターシャの瞳を見つめた。

ナターシャの顔に、美玖ながらの笑みがこぼれた。「ね？」

とこころが。

「いや

マヤは首を横に振った。

予想外の答えに驚いたナターシャは声を荒げて「どうしてー」と叫んだ。

マヤは言った。「あたし、やっぱりあなたたちが信用できない

「どうして…どうしてなの…? どうしてそんなことをいつの?」

「あたしがこの世界に飛ばされてしまったのも、女になってしまったのも、元はと言えばみんなあなたたちのせいなのよ。考えてみて。医者に殴られて大怪我をさせられた上にタダで入院させてやるって言われたら、どんな気持ちになるか」

「あたしのことを見たるんじゃなかつたの? 今そう言つたじゃない。それなのに信用できないの?」

「ナターシャのことは全く信用していられないわけじゃないわ。だけど、ハバリアに行けば、あたしを迎えてくれるのは自分たちの都合であたしを異世界に飛ばすような身勝手な人たちなのよ。そんな人たちを信用するなんて、できるわけない」

「でも、でも、マヤはさつき、妹さんのことも彼氏のことも竜騎兵の仕事もどうでもよくなつたつて言つたわよね。ハバリアに来れば、異世界に帰れば、そんな嫌なことももう忘れられるのよ」

「確かにさつきはそう思つた。でもあたし、やつぱりルーニアが大事。ジユートが大事。一緒に戦つてくれる仲間のことが大事」

「じゃあ、どうしてもあたしと一緒に来てくれないの?」

「行けない」

「どうしても?」

「どうして？」

ナターシャは、マヤの肩を抱いていた手を離し、半歩あとずかつた。「そう……残念ね……」

そのとき急に、マヤの視界が、パンチのはずれたカメラのようになってしまった。

「え？」

彼女はその場に立つて、いられなこぼひこめまいを覚え、へたへたとしつもひをついた。

ナターシャはそんなマヤを見ても、表情一つ変えず、また助け起しそうともしなかった。「手荒なことはしたくなかった。でももう少しうるしか他に方法がなかったの」

マヤは叫び声を上げようとしたが、彼女の喉はもう思い通りの声を発すことができなかつた。

友人という仮面を脱ぎ捨て、今や一人の女スパイとなつたナターシャは、冷たく言ひ放つた。「さつきマヤがお湯を飲んだカップの中に、こつそり薬を混ぜておいたわ。あなたがあたしとのキスに夢中になつている間にね。ハバリアへ来ると言つてくれれば、効果を打ち消す薬を渡すつもりだつたんだけど

その間にも、マヤの意識はどんどん遠のこつていた。

「マヤ、あなたと友達でござられたのひと月半、本当に楽しかつた。あつがとつ。そして、さみうなら

数秒後、マヤの意識は真っ白なモヤの中に完全に埋没した。そのまま直前、彼女の目に愛するジゴートの幻が見えたような気がした。

マヤは夢を見ていた。長い長い真っ白なトンネルをただひたすら歩いてゆく夢だった。

しばらく行くとトンネルの出口が見えた。彼女は走り出した。出口の向こうで誰かが自分の名前を呼んでいるような気がしたからである。

出口から勢いよく飛び出したと思った瞬間、彼女は目が覚めた。

彼女の目の前には、ルーニアの微笑む顔があった。

マヤは不思議な気分だった。体がだるくて頭もぼーっとしているのに、なぜか過去の記憶だけははつきりしていた。

彼女は、自分は今、天国にいるのだと思った。記憶によると、ルーニアとは喧嘩中だったはず。妹が自分に笑顔を見せてくれるはずはない。ここはきっと、慈悲深い神様が死後の自分に与えてくれた理想の世界なのだ。

しかし、やがて頭の中にかかっていた霞が晴れ始めたとき、マヤは自分がまだ地上にいるのだということを知覚できるようになった。

すると田の前のルーミアは「お姉ちゃん、気がついたのね」と声をかけてきた。

マヤはまだうまく動かせない喉と舌を最大限駆使して声を絞り出した。「ルーミア……」

「本当によかつた。ちゃんと魂を呼び戻すことができて」

「リリはなぜどこへそれに、あたしはいつたこどりしたの?」

「リリはシユラースのはずれにある農場の納屋の中よ。そしてお姉ちゃんは気を失つてたのよ」

体にほんの少しだが力がはいるようになつたので、マヤは首だけを起こしてみた。どうやら彼女は、干し草のベッドの上に寝かされていてるらしかった。更に辺りを見回してみたところ、納屋の中には、すぐ傍らに付き添つているルーミアの他に、少し離れてラウラとオクタヴィイが立つっていた。

ラウラが言った。「大丈夫そうだな」

オクタヴィイも声をかけた。「よかつたですわね、マヤ」

「ラウラ、オクタヴィイも……。でも……あたし……いつたいどうして氣絶なんか……そう言えば……、そつ、ナターシャー・ナターシャは?」

ルーミアが答えた。「あの女スパイのことね。彼女なら逃げたわ

マヤは言った。「そりよ、あたしはナターシャに変な薬を飲ま

れて、そしたら意識が遠くなつて……」

ラウラが言つた。「本当に危ないとこりだつたんだぜ。あたしにはよくわかんないんだけど、おまえの飲まれた薬つてのが、なんでも体を生かしたまま魂だけあの世へ飛ばしちまつ藥らしくてな」

オクタヴィイが付け加えた。「ルーミアが白魔法あなたの魂を呼び戻してくさつたの。本当に必死でいらっしゃいましたわ。それに、呼び戻すことに成功した途端、大声でお泣きになつて、それからじばら涙をやみませんでしたわよ」

マヤは改めてルーミアの顔を見た。確かに妹の目には泣きほらしき跡がある。「ルーミア、ルーミアがあたしを助けてくれたの？」

ルーミアは答えた。「肉体を生かしたまま魂だけ消し去るなんて常識では考えられないことよ。あの女スパイがそんな薬を飲ませていつたこどりするつもりだつたのかわからなかつたし、そんな薬のせいだ遠くに行つてしまつた魂を呼び戻せる自信もなかつた。でもとにかくやつてみた。無我夢中だつたわ」

「ありがとう、ルーミア。あたし、またルーミアに命を助けられたのね」

「ううん、お姉ちゃんを本当に危機から救つたのはあたしじゃない。ジューートがここに踏み込むのがあとほんの少し遅かつたら、お姉ちゃんはあの女にどこかへ連れ去られていたんだから」

「ジューート？ 彼が来てたの？」

「ええ。彼、ここ何ヶ月かずっとスパイ狩りの任務に就いてるんだ

つて。それであのナターシャって女スパイがマヤと関わりがあることを知つてマヤが心配になつて、本来の任務をほつぼり出してナターシャをHランから追いかけて来たんだつて言つてた」

「ジユート……。あたしのために、そこまで……」

マヤの心中は甘く切ない想いで一杯になつた。彼に会いたい。彼の声が聞きたい。少し前までは男に対してもうこう感情を抱くことにまだ違和感があつたのに、今ではそのような感情が彼女の精神の主要な部分を占めるまでになつっていた。もはや、心中にジユートへの想いが存在しない自分を想像することができなかつたし、またそのような想像をするのが怖いとさえ思えた。

しかし、彼女には、この想いを確かなものとするためにやらなければならぬことがあつた。「ねえ、ルーミア、お願ひ。あたしの話をもう一度ちゃんと聞いて」

ルーミアはすべてを語りきつたかのように静かに「何?」と訊き返した。

「あたしルーミアに謝りたいの。ジユートに対するルーミアの気持ちを知つていながら、彼を横取りしてしまつたことを。そしてそれを隠していたことを」

ルーミアは首を振つた。「そのことはもういいの、お姉ちゃん。もういいのよ。あたし、白魔導士として、治療した患者さんから感謝してもらえるぐらいには仕事をこなせるようになつたつもりだつた。だけどやっぱり、十六歳の女の子でしかなかつた。人間的には未熟だつた。だから、怒りとかねたみとかそういう感情に捕らわれてしまつて、お姉ちゃんやジユートの気持ちを考えてあげることが

できなかつた。お姉ちゃんのジュー^トに対する想い、ジュー^トのお姉ちゃんに対する想いをわかつてあげることができなかつたの。

でもわかつた。彼のあんな表情、初めて見たわ。竜の世話をしていたあたしのところに駆け寄つてきて『マヤが死にそうなんだ。どうにかしてくれ』って言ったときのあの必死の表情。彼は本当は、誰かのために何かをしてあげるなんてことはしない人。そんな彼がお姉ちゃんのためになら自分をかなぐり捨ててもいいって思つたのよ

「ルーミア……」

「彼だけじゃないわ。いまお姉ちゃんが彼のことを考えてたときの表情、とっても切ない表情だつた。あたし考えたの。あたしは今までこんなに彼のことを想つたことがあつたかなつて。そしたら、気づいた。あたしの彼への想いは、单なる憧れ。恋じやなかつたつて

マヤは妹の手を握りしめ「ごめん、ルーミア」と言つた。

ルーミアは微笑みながら姉の手を強く握り返した。

姉妹はそれからしばらぐの間、無言のまま見つめ合つた。

やがて彼女たちは握り合つていた手を名残惜しそうに離した。だが、かたわらで見守つていたラウラとオクタヴィイの田には、マヤとルーミアがいまだ姉妹の絆という手でつながり合つてゐるのが見えるよつた気がした。

そのときラウラは、ふと納屋の外に何かの気配を感じ取つた。にもかかわらず、彼女は他の三人に警戒を促すどころか、むしろ嬉し

そうに「さて、そろそろあたしたちは退散する時間だな」とつぶやいた。

マヤは「え?」と訊き返した。

オクタヴィイはすぐにラウラの言葉の意味を察し、「ルーニアも一緒に退散いたしましょ?」と言った。

ルーニアは一瞬、不思議そうな顔をしたが、オクタヴィイがウインクするのを見て納得の表情になった。「そうね。あたしもそろそろ退散するわ」

ラウラたちの言動の意味がひとり呑み込めないマヤは、上半身を起こし「ちょっと、どうして?まだここにいてくれてもいいの?」って言うか、誰か一人ぐらいここにいてよ」と懇願した。

しかし、ラウラたち三人は、マヤを無視して、そそくさと納屋を出て行こうとした。

納屋を出る間際、ラウラは「にやけ顔の嫌な奴だと思ったが、姉妹の和解シーンをぶち壊さないように外で待つてやるぐらいの神経は持ち合わせてるんだな」と言つた。

三人が出て行つた後、入れ替わりにジユートが納屋に入つてきた。いつも通りのにやけた笑顔だった。

シユラース陥落は、事実上、エラーニアが一年ぶりにエールデラント地方をその統制下に置いたことを意味した。それはすなわち、王国の領土がこの戦^{いいくせ}の始まる前の状態に復したということでもあった。

だが、エラーニア王宮の指導者たちは、それで王国が「元の姿」に戻ったとは考えなかつたらしい。領土回復を祝う行事の準備を始めていた王都の民たちに対し、王宮は次のような布告を発し、祝賀行事の中止を命じたのだった。

「我々はまだ全エラーニア領を回復してはいない。祝賀行事は、『ハバリア皇帝』を名乗るならず者をドゥムホルクから追い出した後に行われるべきである」

一週間後、マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊の一一行は、エールデラントの北はずれ、現時点でのハバリア領との境界線近くにあるナクスドルプという小村にまで進出していた。

彼女たちはシユラース陥落後も、毎日のようにエールデラント残存ハバリア兵の掃討作戦にかり出され、ほとんど休む暇もなかつた。体力には自信があるはずの隊長、ラウラでさえ「軍の上層部の連中はあたしたちのことを疲れ知らずの超人だとでも思つているのか」とぼやき始めていたし、オクタヴィイも、そのスレンダーな体つきか

ら想像されるほど脆弱ではなかつたものの、やはり表情に疲労の色をにじませていた。そんなとき、上層部の命令書を携えた伝令役の兵士が、シユラースの農場に駐留している彼女たちのもとを訪れた。元来、樂觀主義者のラウラは「きっと休暇命令だ」と言つて、期待に手を震わせながら命令書を紐解いた。だが数秒後、隊長は命令書を放り投げて天を仰いだ。マヤがそれを拾い上げて見てみると、そこには

「ナクスドルプに進出し、そこで次の命令があるまで臨戦態勢で待機せよ」

と書かれていたのだった。

命令書を受け取つたのは昨夜、ナクスドルプへ移動してきたのは今朝早くである。更に村の人たちへの挨拶回り、付近の地形の把握、偵察など、進駐後には行わなければならない仕事を一通り片付け終わつたのは、夕方近くだった。ラウラは隊員たちの疲労を考えて、次の任務を命じられるまでしばらくな間、一名のみが警戒当番、あとの一名は休息というローテーションを組むことにした。そして、自分が一番に警戒当番に立つからオクタヴィイとマヤはテントを張つて休むようにと命じた。

オクタヴィイとマヤとルーミアは五、六人が入れる大きさのテントを一つ、張つた。オクタヴィイはその作業をやり終えると、すぐに寝袋に潜り込み、ほどなく小さな寝息を立て始めた。マヤもかなり疲れがたまつていたので、それほど眠くはなかつたけれども、寝袋に入つて体を休めることにした。

ところが、十分ほどしてマヤが一階から転げ落ちる夢を見て目を覚ましたとき、彼女の隣では隊長が仰向けになつて大いびきをかい

ていた。どうやら疲労と眠気に耐えきれず警戒当番をやめつたらしい。

ルーニアはちゅうづきの時、ラウラの大きな体を毛布で覆おうとしていた。姉が田を覚ましたことに気がついたルーニアは、苦笑いをしながら

「『この付近に敵が潜んでいる可能性は少ないし、何かあつたとしても村入たちはみな協力的なので知らせてくれる。だから大丈夫だろ』って言って、寝ちゃったの。このまま寝かせておくわ。敵襲を警戒することぐらいならあたしにだつて出来るし、あたしは戦闘員じゃないからお姉ちゃんたちほどは疲れてないしね。だから、お姉ちゃんも安心して寝てて」

と囁つた。

マヤが再び田を覚ましたのは、夜もだいぶ更けた頃だった。テントの中を見回すと、隊長は先ほどと同様、仰向けになつていびきをかいていたが、ルーニアとオクタヴィの姿は見当たらなかつた。マヤは寝袋からはい出し、テントの外に出てみた。テントのすぐ前に大きな木が一本立つていて、オクタヴィはその幹にもたれかかって空を見上げていた。彼女はさすがに警戒当番をやめつたりはしなかつたようだ。

マヤは「お疲れさま。警戒当番を交代するわ」と声をかけた。

オクタヴィは眠そうな田をマヤに向け、「『苦労さま。それではよろしくお願ひいたします』と、いつも通りのばか丁寧な口調で応えてから、マヤの横を通りてテントへ向かおつとした。が、そこで何を思ったか急に振り返り、マヤの顔をまじまじと見つめ始めた。

マヤは怪訝そうな顔をして「な、何?」と言った。

「あら、『めんなさい』」オクタヴィイは自分の取った行為の突飛さを自らあざけるかのように微笑み、答えた。「わたくし、寝ぼけているのかもせませんわ。今、マヤが『お疲れさま』って言ってくれたとき、マヤの顔がわたくしの知り合いの顔に見えましたの」

「ふーん。それって、その知り合いの人があたしに似てるってこと?」

「全然。だってその子は、歳はマヤと同じくらいですけど、男の子ですもの」

マヤはまじょつと拍子抜けしたよつ」「なんだ。男の子か」と応えた。

オクタヴィイは更に自嘲的な口調で言葉を続けた。「マヤの顔を見て男の子を連想したなんて、失礼な話ですわよね」

「別に気にしてないわ」

「でも、言い訳ではございませんけど、その子、性格的にはじ」となくマヤと似たところがございましたのよ。その男の子はね、ファクティムにあるわたくしの実家の近所に住んでいる幼なじみですの。と言つても、それほど仲が良かつたわけではございませんのよ。小さい頃は確かにお姉さん気取りで世話を焼いてあげたりしたこともございましたけど、わたくしが女学校に入学する頃には、顔を合わせてほんんど口もきかなくなっていましたわ。それが一年前、わたくしが軍に招集されることが決まったとき、その子はわたくしの

「オクタヴィイも隅に置けないわね。で、どう思ひましたの？」

「お断りしました」

「タイプじゃなかつた？」

「嫌いではございませんでした。いえ、どちらかと言えば好ましいと思つていたかも知れません」

「じゃあ、どうして？」

「わたくしが軍に招集されている一年間、ずっと待つてくださいなんて申し上げる勇気は、わたくしにはございませんでした。でも、もしかしたら、いえ、たぶん、彼はわたくしが本心からお断りしたのではないか」と、気づいていたのではないかと思ひます

「オクタヴィイの出征義務期間つて、確かあとひと月ほどで終わるんでしょう？その子、きっとファクティムでオクタヴィイの帰りを首を長くして待つてゐるんじゃない？」

「まあか。あのくらいの歳の男の子にとって、一年という時間は短くはございません。それにわたくし、出征義務期間を終えても軍を辞めるつもりはございませんから、彼がどう思つて居るか、会えるのはまだ先の話ですわ」

「え？ 故郷へ帰らないの？」

「ええ。もう少し、ラウラとマヤとルー・アードと一緒に仕事がしたい

なつて思つて

マヤは「そう」とだけ応えたが、心中では、一緒に仕事をした
いと言つてもらえたことを嬉しいとも感じていたし、少し誇らしい
とも思つていた。

オクタヴィイは口に手を当て、あぐびを噛み殺しながら「では、わたくしは休息に入らせていただきます」と言つた。マヤが改めて「お疲れさま」と声をかけると、オクタヴィイはくるりと背と向けて、トのほうへと歩いていった。

マヤはさつきオクタヴィイがやつていたように、木の幹に背中を預けて夜空を見上げてみることにした。

今日は、空に浮かんでいる月は「三日月」だった。マヤを見下ろすのは、餅をついている愛嬌たっぷりのウサギではなく、無愛想なつぺらぼうである。かつて山矢健太が NASA の宇宙船の写した月の裏側の写真を目にしたとき、彼はそののつぺりした表面に、言い知れぬ不気味さを感じたのだった。だが、一年前にこちらの世界に飛ばされて以来、何度もあののつぺらぼうを見上げているうちに、そこには着飾った華麗さとは違った、シンプルな優美さがあることに気づき始めた。今ではむしろ、出しゃばりなウサギが呪わしいとさえ思えるようになった。

やがて、マヤの脳裏に、この一年間に彼女の身の周りで起こったいろいろな出来事が浮かんできた？？思い返せば、最初はショックингだと思っていたことも、今となつてはいい思い出でしかない。異世界に飛ばされたことも、女になつてしまつたことも、竜の操縦をやるはめになつたことも。そして軍に入り、数々の戦いをくぐり抜け、エース竜騎兵と呼ばれ、拳げ句、最前線のこんな鄙びた村に

放り出されたといつて、あたしは少しも違和感を覚えていない。あまりにも色々な経験をしそぎて、精神的ショックを感じにくい体质になってしまったのだろうか？いや、たぶん違う。山矢健太という男の子はどちらかといふと纖細な精神の持ち主だった。それはマヤになつてからも変わっていない。あたしが回復不能なほどの精神的パニックに陥ることなくここまでやって来れたのは、きっと……

そのとき不意に、マヤの背後で彼女を呼ぶ声がした。

「お姉ちゃん」

マヤは振り返ろうとしたが、背後には木の幹があつたため、一步横にステップを踏んでから幹の向こう側を見通した。声の主、ルーミアは、マヤの立っているところへ、テントとは別の方向から歩み寄つてこようとしていた。マヤは心の中で、先ほどの独り言の続きを言つた？？あたしがここまでやつて来れたのは、きっとルーミアがそばにいてくれたから？？

ルーミアはマヤのすぐそばで立ち止まり

「ピコアラを引き取つてくれる人、見つかったわ」と言った。

マヤは意外そうに

「あ、探しに行つてくれてたんだ。あつがとう」と応えた。

ルーミアはどういたしましてと言つ代わりに、マヤが先ほどので
もたれていた木の幹にもたれかかった。

マヤは「でも、よく憶えてたわね。きのう、ひょっとそんな話を
しただけなのに」と言いながら、ルーミアと肩を並べるよつて、再
び幹にもたれた。

「忘れないわよ。あたし、お姉ちゃんの言つたことは絶対に忘れな
いもの」

「絶対に?」

「うん」

「百パーセント?」

「うん」

「ほんと?」

「約百パーセント。正確には九十六パーセントぐらゐ」

「何それ」

二人は顔を見合させ、くすくすと笑つた。くだらないセリフを真
剣にやりとりしている自分たちが滑稽に思えたからである。

「そういえば、さつきね」マヤは言葉を続けた。「オクタヴィに、
男の子に見間違えられちゃつた」

ルーニアはいかにも不満そうに、大げさに声を荒げて「えーっ、ひどい。お姉ちゃんのどじが男の子に見えるって言つの？」と言つた。

「じいのがマヤは、それには応えず、ちょっと寂しそうな顔をして、自分自身の言葉を続けた。「あたし、一週間前にも同じようなことを言われたわ」

「えっ」ルーニアは、姉の口調と表情から、会話の流れが先ほどの冗談とは違う方向へ進み始めたことを悟つた。「一週間前つていつことは、もしかして……ナターシャ？」

マヤは静かに「ええ」と応えた。

「えっ」ルーニアは言葉を選ぶためにひょいと間を置いてから言つた。「氣の毒に、つて言つてあげるべきかな？」

「相手がどんな人であつても、そう、たとえあたしの魂を抜いて体だけハバリアに連れてゆこうなんて、とんでもないことをやろうとした女スパイでも、死ぬのはやつぱり氣の毒なことだと思つ」

「きのうのゴルグでの掃討戦のとき、ハバリアの敗残兵たちと一緒に死んだって言つてたわよね」

「ええ。でも、きのうはルーニアにそれ以上、詳しい話はしてあげられなかつたわね。あたしたちがゴルグから帰還したあと、すぐにここ、ナクスドルプへの移動を命じられてしまつて、すいべく慌ただしかつたから」

「そうね」

「ねえ、いま話してもいい? きのうの話

「ええ

マヤは話し始めた。

一昨日、マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊の三名は、コルグといふ小さな町に籠るハバリア敗残兵の掃討作戦を援護する任務に就くよう、上官であるアイリゲン大佐から命令を受けた。その際、大佐から知らされた情報によると、コルグはエールデラントにおけるハバリア軍の最後の組織的抵抗拠点であり、この敵さえ片付けてしまえば今後、エールデラント内では単発的なテロ行為があつたとしても組織立った敵による軍事攻撃はなくなるだつたことだつた。

マヤたちは、この一週間ほどの間に参加した掃討戦がどれも困難な戦いだつたことから、この最後の抵抗は今まで以上の激戦になるだろうと覚悟して出撃した。ところが、コルグに着いてみると、敵の大半はすでに投降しており、ほんの三十人ほどがコルグ郊外の富豪の屋敷に立てこもつてゐるにすぎないことを知らされた。

現地の司令官は説明した。「こちらの魔道士兵力で屋敷の屋根に穴をあけて、きみたち竜騎兵に上空から油を注いで火を放つてもらえば、頑丈な石造りのあの屋敷の中に潜んでいる敵でもイチコロだ。だが、もうほとんど抵抗力を持たないあのよつな敵をなぶり殺すところを町の住民に見られたら、今後の統治政策に影響が出る。その

あたりのことは軍の上のほうからきつく言われるんだよ。それに「司令官はそこで、少し離れたところで心配そうに屋敷を見つめる小太りの中年男をあごで指し示した。体中を華美な貴金属でごごと飾り立てた、見るからに成金そうな男である。「この町の『実力者ど』が屋敷を壊されのは絶対に嫌だとダダをこねて……もとい、おっしゃつてもいるのでね。まあ、敵の連中はもう何日もろくに食い物にありついていないはずだから、こうやって遠巻きに包围して降伏勧告を続けていれば、空腹に耐えかねて白旗を揚げるがさもなければあと数日で飢え死にするだろ?」

ラウラは司令官の説明と現在の情勢を自分なりに分析し、この場に竜騎兵戦力は不要との判断を示した。その上で、アイリゲン大佐にシユラースへの帰還を許可してほしい、ついでに休暇も欲しいと具申する手紙をしたため、伝令兵に届けさせた。と言つても、伝令兵が手紙をシユラースの司令部にいる大佐に届け、大佐がそれを読んでしかるべき決定を下し、別の伝令がその内容をマヤたちに伝えてくれるには、どう考へても半日以上の時を要する。軍の命令でここに派遣された以上、マヤたちは勝手に帰還するわけにもいかないので、とりあえず、適当な場所で野営してアイリゲン大佐からの連絡を待つことにした。

事態が急変したのは、翌朝の日の出前だった。投降したと思われていたハバリア兵たちが、収容施設で一斉に蜂起し、それに呼応して、町に潜んでいたハバリア兵がハバリアに協力的な住民とともにエラーニア軍将校の宿泊施設を襲撃し始めたのである。

マヤが異変に気がついたときにはすでに町は大混乱だった。一部のハバリア兵がエラーニア兵の軍服を奪つてエラーニア兵になりすまし、エラーニア将校に近づいて殺害するという手口をとつたことが混乱に拍車をかけた。エラーニア兵たちは疑心暗鬼にかられ、自

分の身を自分で守ること以外、何も出来なくなつた。

特にエラーニア兵たちを震撼させたのは、ハバリア兵がコルグじゅうの白魔道士を、エラーニア軍属か否かを問わず、一人残らず殺害してしまつたことである。こちらの世界の兵士がマヤのもといた世界の兵士より勇敢に戦えるのは、腕の一本や一本を失つても男性白魔道士が再生してくれる、命を失つても女性白魔道士が魂を呼び戻してくれるという安心感があるからである。であるがゆえに、一旦、白魔道士のサポートを受けられないという事実を知らされると、却つて深刻なパニックに陥つてしまふのだった。

今やエラーニア随一の精銳部隊と見なされつゝあつたファクティム装甲竜騎兵隊にも、この混乱を回避することは出来なかつた。というより、むしろもろに巻き込まれたと言つたほうがよい。マヤたちが野営テントのすぐそばに駐竜してあつたピムたちのもとへ向かうと、そこにはすでに敵の魔の手が伸びていた。敵は竜騎兵を、将校や白魔道士と並んで優先的に排除しなければならない兵力と見なしていたのである。不幸中の幸いだつたのは、敵がマヤたち竜騎兵を直接狙わず、ピムたち竜のほうを狙つてきただことである。おそらく暗殺術に長けた敵の兵はみな、将校や白魔道士殺害のほうに回されていたからであろう。見ると、ピムのそばに水色の服を着た女が一人、立つており、ピムの頭を優しくなでながら、ピムの口に怪しげな液体の入つた瓶を押し込もうとしていた。毒なのか、眠り薬なのか、それともピムの精神をおかしくさせる薬なのかはわからなかつたが、いずれにせよ、マヤの目にピムがその液体をおいしそうだと思つてゐるようには見えなかつた。

マヤは

「ピム、逃げて

と叫んだ。

するとピムは口から瓶を吐き出し、瓶を押し込もうとしていた女を振り払うように首をもたげ、翼を広げて羽ばたき始めた。女は風圧でその場に昏倒したが、ピムはそれを無視して上空へ舞い上がった。

ラウラとオクタヴィイもその時、同じように自分の竜に上昇を命じた。彼女たちの竜もそれぞれ別の工作員にピムと同じ仕打ちを受けそうになっていたのである。竜が飛び立つとき風圧で昏倒したそれらの工作員は、マヤたちが武器を構えてにじり寄つてくるのを見るに、慌てて起き上がり、脱兎のごとくその場を走り去つた。あとにはピムに液体を吐えようとしていた女だけが横たわっていた。

ラウラとオクタヴィイはそのまま工作員を追撃した。だが、マヤは横たわっている女が気になり、小剣を構えたまま更に一、二歩にじり寄つた。それでも女は動く気配を見せなかつたので、マヤは剣を下ろし、しかし気は緩めずにゆっくり歩み寄り、女の顔を覗き込んだ。

「ナターシャ！」

マヤは思わず叫び声をあげた。

眠ったように目を開じていたナターシャは、マヤの声に呼び起こされ、静かに目を開いた。

「マヤ……」

マヤは地面に膝をつき、ナターシャの体を抱き起こした。

「ナターシャだつたなんて」

ナターシャは弱々しい声で「やつぱりわつのはまヤの相棒のピムだつたのね。きっとそつだと思つた。マヤのにおいがしたような気がしたから」と言つた。

マヤはナターシャの声があまりにも弱々しいことを不思議に思つた。翼の風圧で倒れただけでこんなになつてしまはすないからである。マヤは、他にどこか悪いところがあるのかとナターシャの体を見回してみた。ナターシャの着ている水色のジャケットの右の脇腹あたりが徐々に赤く染まり始めているのが、すぐに見つかった。

「ひどい怪我をしているじゃない」

「エリヘ来る間にエラーニア兵と戦闘になつて、そのとき刺された」

「白魔道士を呼んでくる」

「無駄よ。この町にいた白魔道士はみんな死んだわ」

「なぜ?どうしてハバリア軍はそんな惨いことをしたの?第一、白魔道士がいなくなつたら、こうやつて味方が傷ついたときに誰も治せないじゃない。自殺行為だわ」

「その通りよ。この作戦の目的は一人でも多くのエラーニア人をあの世に連れにすることだから」

「そんなバカなことつて」

その時、ナターシャは「う」^ヒと苦しそうに呟き声を上げた。

「ナターシャ、しつかりして

「マヤ……あなた、優しいのね。あなたにあんなひどことをしたあたしを……気遣ってくれるなんて……」

「しゃべらないで。この町に白魔道士がいないなら、シユラースからルーニアを連れてくるか」「ひ

「もひ……間に合わない……わ。でも……よかつた。最後に……マヤに会えて。会える気が……した。きのう……赤い装甲を付けた竜騎兵が……この町に……舞い降りてくるのを見つけたから……志願したの。竜に……毒を飲ませる……役目を。マヤに……会いたかったから。大好きな……マヤに……」

「ナターシャ……

「この間……シユラースで……マヤに……一緒にハバリアに来てつて……頼んだ時……マヤは……拒否したけど……それは……正解だったのよ。マヤを……もといた世界に……帰すつもりなんか最初から……なかった。みんな……嘘だつたの。でも……信じて。あたし……本当に……マヤのこと……好きだった。マヤの……魂を抜いてしまったあとで……すげく……後悔した。自殺しようかと思つた。だから……マヤが助けられて……魂を取り戻せたつて……あとで知らされて……すついぐ……すついぐ……嬉しかったの」

「ナターシャ、わかったから、もひしゃべらないで

「マヤが……異世界から来た……男の子だつて……」とまでは……誰にも……話して……ないから……安心……して。

罪滅ぼしの……つもつじやないけど……これだけは……言つておきたくて。よく……聞いて。ドゥムホルク……宮殿の……尖塔の……最上階に……異世界への……門を……開く……装置があるの。それを……使えば……元の……世界に……」

ナターシャの体は断末魔の痙攣を始めた。

「ナターシャ！」

「ビュアラのことを……ね願い……」

その言葉を最後に、ナターシャは息を引き取つた。

マヤはナターシャの体をそつと地面に置き、胸の前で手を組ませてあげた。そして自らも胸の前で手を合わせ、この悲しき運命の持ち主の冥福を祈つた。

田を上げると、少し離れたところで子犬が一匹、気持ち良さそうにうたた寝をしていた。ナターシャがかつてトランで怪我の手当をしてあげてそのまま飼つていたあの子犬、ビュアラだつた。こんな戦場のど真ん中にナターシャが連れてきたのだろうか。それとも、勝手についてきたのだろうか。主人の死にも町の混乱にも全く動じることなく悠々と眠り続けるあの肝つ玉の太さを考えれば、どちらもあり得ることだ。ナターシャは以前、マヤが一番の友達だとつていた。それがもし本当だつたとすれば、ナターシャはマヤと別れなければならなかつた寂しさを、ビュアラを片時も離さないことで

紛らわそうとしていたのかもしれない。

町の混乱は昼前には沈静化に向かった。暗殺を逃れたエラーニア将校たちが指揮系統の立て直しを図つたからである。秩序を取り戻すと、エラーニア軍は正規軍としての強さをいかんなく發揮し始めた。逆にハバリア敗残兵たちは、みるみる鳥合の衆の弱さを露呈し始めた。マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊も、ハバリア兵へ対地攻撃を加えたり、孤立してしまったエラーニア兵に上官の命令を伝えて指揮系統を確立したり、近隣の町から白魔道士を空輸する役目をになつたりと大活躍だった。

昼過ぎに戦闘は終わった。エラーニア側もハバリア側もかなりの数の戦死者を出していた。特にハバリア軍はほぼ全員が死亡していた。『一人でも多くのエラーニア人をあの世に道連れにする』というハバリア側のもくろみは、まんまと成功したことになる。白魔法が普及し始めて以降に限つていえば、これほどの戦死者を出した戦いは、歴史的にあまり例がないのだという。

マヤはビュアラを連れて、ラウラとオクタヴィイとともにルーミアの待つシユラースの農場への帰途についた。彼女たちが無事帰還したのは夕方、そしてほどなくナクスドルプへの移動を命じられたのだった。

「『異世界への門』か

マヤの話を聞き終わったルーミアは、半ば独り言のようにつぶや

いた。

「本当のことをなのかしき」

マヤは応えた。「本当だと思つ」

「だとすれば……、だとすればお姉ちゃんはどういふつもり?」

「そこを田指すわ。ドゥムホルク宮殿の尖塔の最上階にあるそこを。元の世界へ帰るために」

「簡単なことじゃないわよ」

「ヒラーニア王宮の指導部が、ドゥムホルクを奪い返すまで戦はやめないって言つてるみたい。ひょっとしたら軍務としてそこへ行く機会を『えりれるかも知れない』

ルーミアはちょっと表情を曇らせ、「それなら……そういう可能性もあるかもしないわね」と言つた。

マヤは何も応えなかつた

彼女たちは今、一本の木の幹に肩を並べてもたれかかっていた。と言つても、その幹は直径が八十センチほどしかないため、体を同じ方向に向けてもたれることはできない。つまり、マヤは幹の南面にもたれて南の空を、ルーミアは南東の面にもたれて南東の空を見上げていた。

次に口を開いたのはルーミアだつた。沈黙があまりにも長いので、何となく不安になつてきつたからである。彼女はもたれていた体を起

「」し、姉の顔を覗き込んで「お姉ちゃん？」と声をかけた。

マヤは夜空を見つめたまま、ぽろぽろと涙をこぼしていた。

ルーニアは驚きのあまり声を出すことが出来なかつた。

マヤは視線を夜空に固定したまま、言った。「ねえ、ルーニア。泣くのは、おかしいことかな？」

「え？」

「あたしの魂を抜いて死んだも同然の状態にした人のために涙を流すのは、おかしいことなのかな」

「お姉ちゃん……」

「ねえ、あたし間違つてる？ 彼女を、ナターシャを憎まなきやだめ？」

「……」

「あたし、ナターシャのことが憎めないの。あんなにひどいことをされたのに、憎めないの。彼女のことが好きだつた。本当に大好きだつたから」

ルーニアは無言のままマヤの肩を抱きしめた。

するとマヤは、我慢しきれずルーニアの胸にすがりついた。「あたし、男の子だったときは泣いたことなんて一度もなかつた。サーガ死んだときだつて、涙なんか一粒も流さなかつた。なのに、な

のと、今はどうじても涙が止まらない。悲しくて悲しくて仕方がない。どうすることも出来ないの」

ルーニアは、包み込むよつて圍つた。「どうもしなくてもいいのよ、お姉ちゃん。お姉ちゃんは間違つていない。これでいいの、このまま。このまま、泣けるだけ泣いたらいわ」

「ルーニア」

それからしばらくの間、マヤはルーニアの胸の中で、肩を震わせて泣いた。ルーニアは、姉の中から溢れ出る悲しみの感情をすくい取るかのように、優しく姉の頭を撫で続けた。

月は、そんな姉妹の様子を、無表情のままじっと見守つていた。

やがてマヤが顔を上げた時、その目に涙の跡はあつたが、もはや瞼から涙が溢れ出してはいなかつた。表情も、晴れ晴れにはほど遠かつたが、どことなく安らぎを帯びたものになつていた。

マヤはルーニアの目を見つめた。ルーニアは小さなうなづきでそれに応えた。さほど意味のあるうなづきではない。だが、マヤはなぜか、それですべてを許されたよつた気がした。

と、その時。

彼女たちのすぐそばで

「あのー」

という、か細く頼り無げな男の声がした。

マヤヒルーニアは口から心臓が飛び出したくなびき、その声の出所とおぼしき方向に田をやつた。そこに立っていたのは、エラーニアの軍服を着た、青白い顔の若い男だった。

「お取り込み中のといひ申し訳ありませんが、一いちら、ファクティム装甲竜騎兵隊の野営地ですかね？」

マヤヒルーニアがさうだと答えると、男はびじっと姿勢を正して敬礼し

「アイリゲン大佐からの命令書をお持ちしました」

と囁つた。

マヤはその伝令役の兵士をその場に待たせておいて、ラウラたちが寝ているテントに戻り、声をかけた。田を覚ましたラウラとオクタヴィアは、マヤから起こされた理由を告げられ、だるそうに体を起こして寝袋から出た。テントから出てきたラウラに、兵士はいま一度敬礼し、命令書を手渡した。ラウラは受け取った命令書を開いて眼そうな田でその文字を追つた。やがて命令書を持つ彼女の手はわなわなと震え始めた。

「あたしたちを殺す氣か！」

ラウラは田の前の兵士をさう言つて怒鳴りつけた。

兵士は泣きそつた顔をして「自分こそがわれましても困るのですが」と囁つた。

「マヤは半ば呆然としているラウラの手から命令書を取り上げて、十分に月明かりを受けるように大きく広げ、ルーミアとオクタヴィーとともに読んだ。そこには

「ホラーニア王国軍は明日五月十六日、日の出とともにハバリア地方への進軍を開始する。ファクティム装甲竜騎兵隊はその際、ザエフ街道を北進する主力部隊の右側面の制空を確保するよう努められたし。以上」

と書かれていた。

オクタヴィーは「あら。昨日、エールデラントの掃討が終わつたばかりですのに。慌ただしいですわね」とつぶやいた。言葉遣いはいつも通りばか丁寧であったが、口調には、彼女にしては珍しく若干の刺々しさがあった。

ラウラは「つたく。アイリゲン大佐は何を考えてるんだ。こっちの体のことも少しは気遣えってんだよ。か弱い乙女なんだぜ」とぼやいた。と思つたら、急に恥ずかしそうに後ろ頭をかき始めた。いま自分がいかに恥ずかしいセリフを言つたかに、言つてしまつてから気づいたのである。

一方、マヤは他の一人の竜騎兵とは違つたことを考えていた。エラーニア王国軍が進む先にはドゥムホルクが、そしてその宮殿の尖塔にはきっと異世界への門を開く装置があるはずである。彼女は自分の思いに共感してもらいたくて、妹に希望に満ちた力強い視線を送つた。ルーミアはちょっと複雑そうな表情をしていたが、マヤの視線に気づき、同意を示す視線を送り返してきた。

すると、伝令役の若い兵士がまた

「あのー」

と、消え入りそうな小さな声で話しかけてきた。

ラウラは今にも兵士の胸ぐらをつかみそうな勢いで「なんだ。まだなんか文句があるのか?」とまくしたてた。

兵士は半べそをかきながら「い、いえ。」こちらの隊長殿にアイリ
ゲン大佐からの伝言をお伝えしようと思いまして」と言つた。

「伝言？あたしに？」

「は、はい。お伝えします。『今度の作戦が一区切りついたらファ
クティム隊に必ず休暇を与えてやってほしいと上層部に掛け合つた。
もう少しがんばってくれ。愛するラウラベ』とのことであります。
一軍人が部下のために兵力の運用方法に関して上層部に口を出した
ことがばれたら問題なので、文書にはせず、自分に口頭で伝えさせ
ると仰せでした」

その途端、ラウラは破顔して両腕で兵士をがばりと抱きしめた。

「やうだよ、そうだよ。その知らせが聞きたかったんだよ。おまえはなんていいやつだ。あたしはおまえを愛してやりたいよ」

と書いて、胸に兵士の顔をそのままいづれの押し付けた。

兵士はラウラの胸の中で照れくさそうに苦笑いしていた。

ハバリアへの侵攻作戦が始まった。もつとも、公式的な呼称はあくまで「ハバリア地方奪回作戦」である。そこには、二十年前のハバリア独立という歴史的事実を、今更ながらなかつたことにしようとするエラーニア王宮の意図が現れていた。

ホールデラント奪回を完了したばかりのこの時機にエラーニア軍が時を置かずハバリアへの侵攻を開始したのは、自軍の攻撃準備が十分に整うのを待つことよりも、防衛体制が整う前の敵を少数の精銳部隊で叩くことのメリットを重視した結果だつた。その意味では、軍上層部が精銳部隊の一つであるファクティム隊をこの作戦に投入したのは当然の選択であつた。それに加え、あとひと月ほどするとハバリア地方に雨期が到来し軍事行動が困難になることも、上層部が作戦開始を急いだ理由の一つだつた。

ファクティム隊は命令の通り、ザエフ街道を北へ進軍する主力部隊の右側面を警戒する任務に就いた。ハバリア側の抵抗は弱かつた。敵の本国に侵攻しつつあるのが信じられないほどだつた。特に竜騎兵力は質の低下が目についた。エラーニア軍の侵攻を迎え撃つ準備がまだできていなかつたのは誰の目にも明らかだつた。エラーニア軍上層部の取つた作戦の妥当性が証明されたわけである。

それにしても、ギール戦の頃まであれほど潤沢だつた敵の竜騎兵力はいつたいどこに行つてしまつたのだろう。ギール戦の折に戦力を使い果たしたといつても、それからもう二ヶ月以上、経つている。兵力を再建するには十分な時間があつたように思える。マヤはある日の任務を終えて帰還したあと、隊長にそのあたりの疑問をぶつけ

てみた。

ラウラは答えた。「竜つてのはもともと南の暖かい地方に棲んでいる生き物なんだ。北の地方にも竜がいないわけじゃないが、成長も遅いし体もあまり丈夫じゃないから戦闘には向かない。だから、この戦^{いいくわ}が始まつた当初は、エラーニアよりも北にあるハバリア帝国がどうやってあれだけの数の竜騎兵力を簡単にそろえることができたのかみんな不思議に思ったものさ。『ヤグソフの異呪』って話が出始めたのはその頃だよ。怪僧ヤグソフは、子竜を短期間のうちに丈夫で敏捷な竜に成長させる術が使えるって噂だ」

「じゃあ、最近、竜騎兵力が不足し始めたのは……？」

「ヤグソフのおっさんがあんまり休暇でも取つてんじゃないの？働き過ぎで疲れたからつて、あたしたちみたいに。ははは、んなわけないか。
……あーあ、早いとこ作戦に一区切り付けて休暇をもらいたいよな
……」

ラウラの答えは、マヤの疑問の解決にはあまりならなかつたが、ヤグソフなる怪僧がハバリアの政治面だけでなく軍事面にも大きな力を發揮していることはわかつた。

侵攻四日目にして、エラーニア軍は早くもハバリア南部の中心都市、ザエフまでの道のりの半分を踏破していた。エールデラント奪回作戦時以上の進撃ペースである。兵士たちの間には楽観ムードが漂い始めた。ザエフは、最終目標であるドゥムホルクまでの道のりのちょうど中間地点にある。たつた四日で全体の四分の一にあたる地点まで来れたということは、このペースを続ければ雨期が訪れるまでにハバリアの首都ドゥムホルクを攻略し、ひょっとしたら戦を終わりにすることが出来るかもしないのである。

そのときマヤの心にあったのは、樂觀といつよりも、期待に胸躍るわくわく感とでもいってべきものだった。ドゥムホルクは、兵士たちにとっては単なる軍事目標だが、彼女にとっては彼女自身の存在意義に関わる重大目標である。ピムを高空に上昇させ、北の方向を見渡せば、街道の先にはすでにザエフの町が、そして更にその先にはハバリア南部と北部を隔てるならかな山脈が見える。そして、その山の向こうにはその重大目標がある。

だが、マヤたちが北へ進むに連れ、ルーミアの表情は曇りがちになつた。その原因は、本人に訊くまでもなかつた。マヤがドゥムホルクに近づくということは、彼女が向こうの世界に帰る日が近づくことを意味する。それはすなわち、マヤとルーミアが永遠に別れなければならぬかもしない日が近づくことをも意味している。ずっと以前から、いつかそういう日が来るのだろうという漠然とした思いはあつた。それが、ナターシャに異世界への門のことを聞かされた瞬間、急に現実味を帯び始めたのである。

ルーミアは、彼女自身がこのことについてどう思つているのか、マヤには何も語らない。他人に対する気遣いを片時も忘れないルーミアの性格を考えれば当然だろう。向こうの世界へ帰りたいというマヤの気持ちを理解してあげられる人間は、この世にたつた二人、マヤの正体を知っているルーミアとルーミアの父だけなのだから。ただ、他の問題ならそうやって他人を気遣つていてことさえ表に出すことのないルーミアも、このことに限つてはさすがにそこまで自分を制御しきることはできず、それが表情の曇りとなつて現れたらしい。

マヤとしても、もしルーミアに一度と会えなくなるとすれば、それはあまりにもつらい別れである。しかし、そのこと自体よりも、

ルーミアにつらい思いをさせなければならない」とのほうがつらかつた。マヤは向こうの世界に帰ることによつて、いまさらに持つているものを「失う」一方、どのようなかたちにせよ元の世界での生活を「得る」ことができる。だが、ルーミアはマヤとこう存在をただ「失う」だけなのである。

マヤは考えた。ひょっとしたら、異世界への門を使えばあちらの世界とこちらの世界を自由に行き来することができるようになるだらうか？ ルーミアの笑顔をいつでも見に来られるのだろうか？ いや、自分はこちらの世界に飛ばされたときに死にかけた。異世界への門を通ることが自分の家の門をぐぐることと同じぐらい容易なことだとは思えない。

もつとも、別れがつらいからといって元の世界へ帰る決心を変えるつもりは、マヤにはなかつた。自分がこの世界にとつて異分子であるという精神的な理由。こちらの世界とあちらの世界の物質構造の違いが何かとんでもない破滅的な現象を引き起こすのではないかという科学的な理由。そして、美玖との約束をまだ果たしていないという感情的な理由。これらは今までに何度も考えたことである。そして先日、そこに新たな動機？ ナターシャが命と引き換えにいたらしてくれた情報を無にすることはできない？ が加わつた。もはや、このザエフ街道をドゥムホルク宮殿めざして北上する以外に進むべき道はないとマヤは思つていた。彼女にとって、「元の世界に帰る」ということは、単にこちらの世界からあちらの世界へ戻ることだけではなく、元いた自分の居場所に戻り、そうすることと異世界に飛ばされるという異常な体験をいわば「リセッターする」ことをも意味していたのである。

その一方で、彼女をこちらの世界に居続けたいと思わせる、逆の動機も新たに生まれていた。それは、言つまでもなくジューントとい

う存在である。半月ほど前、シユラースの農場の納屋でルーミアと和解したあと、マヤはジユートと甘い一夜を過ごした。その時の動機は生じた。しかもその後、手紙でしか彼と触れ合うことができないもどかしさ中で、ますます大きくなつていった。それでもマヤは、そんな甘い想いの中に自分自身が埋没してしまつことを許さなかつた。まだ女になつたばかりの頃、脳に宿る女の本能に命じられるままいつか男を求めるようになるのだろうかと恐怖したことを思い出し、そう、この想いはマヤの本能なのだ、山矢健太の意志ではないのだと自分自身に言い聞かせ、無理矢理納得しようと努めた。

エラーニア軍の進撃ペースも、そんな彼女をドゥムホルクへといざなうかのようだ、快調さを維持していた。街道を進む地上軍の兵士たちは、敵の抵抗があまりに少ないので、ハバリアにピクニックに来ているのと勘違いしそうになつた。ファクティム隊も、ほどなくナクスドルプからもつと前線に近い村に拠点を移し、そこから他の竜騎兵隊とともにザエフの空襲を開始したが、ドゥムホルク攻略の最大の障害と見なされている拠点都市に攻撃を加えているとのに、敵の反撃は軽微だった。今やエラーニアの軍関係者の間では、勝利できるかどうかではなく、勝利がいつになるのかが最大の関心事だつた。

そんな中、エラーニア軍の精銳部隊の一つであるエラン第一竜騎兵隊が壊滅したとの知らせが駆け巡つた。進撃を開始して一週間後、地上軍の先鋒隊がザエフの門前にまで到達したことだった。その突然の知らせを受け、軍上層部はとりあえず事実関係を確認するために情報収集を試みたものの、エラン第一竜騎兵隊の隊員三名が全員戦死していたため、確かな情報を集められず、壊滅の真相を明らかにすることはできなかつた。上層部は結局、今回の一件は慢心していたエラン第一隊が敵の弱小部隊に足もとをすくわれたとことが原因と結論付け、各部隊にもう一度、気を引き締めるよう訓戒し

たにすぎなかつた。

だが、一番慢心していたのは上層部自身であつた。数日後、主力部隊が続々とザエフ郊外に到着し始めた頃、今度はアマルータ装甲竜騎兵隊が壊滅したとの報告が入つたのである。ただ今回はザエフ付近にまで自軍の白魔道士が進出していたため、アマルータ隊の竜騎兵の一人が命を救われ、彼女の口からことの真相が明らかにされた。

「敵の竜騎兵の中にはすごいのがいる」

翌朝、エラーニア王国軍ハバリア遠征隊総司令部にファクティム装甲竜騎兵隊、ガコス装甲竜騎兵隊、エンケ装甲竜騎兵隊の隊員計九名が集められた。これが現時点でハバリア遠征隊に配属されるすべての竜騎兵力である。ハバリア遠征隊竜騎兵部隊の総指揮官に任じられていたアイリゲン大佐は、彼女たちに

「今まで、各隊ごと個別に空襲、哨戒等の任務を行つてきたが、強力な敵の存在が確認されたことから、警戒のため当分の間、この三隊は一体となって行動することとする。本日はザエフに無理な空襲を加えることは差し控え、ザエフ前面に友軍地上部隊が展開するのを援護する任務に就くこと」

と指示した。

マヤはアマルータ隊が遭遇したという「すごい敵」がどのようなものなのか気になつた。マヤたちファクティム隊はシュラース戦の折、とてつもなく強いがなぜか無表情な、不思議な敵に出会つている。もしかしたら今回の敵はその時の敵と関連があるのだろうかと思つたのである。ありがたいことに、ラウラがマヤの考えを代弁し

てくれた。

「なあ、 ウィル。 あたしたちがこの間、 シュラースですごい敵と遭遇したつて報告しただろ？ 今回の敵は、 その時のと同じやつじゃないのか？」

ウィル・アイリゲン大佐は、 他の隊の隊員たちも同席している作戦会議の場でラウラがため口を聞いたことを咎める意味を込めて、 咳払いを一つした。 そして、

「敵兵力は目下、 分析中である。 詳細がわかり次第、 諸君にも知らせる」

と答えた。

竜騎兵たちはその後、 すぐさま『えられた任務に就いた。

午前中は何事も起こらなかつた。 「すごい敵」 以外の敵の竜騎兵も、 下手に出撃して消耗することを恐れているのか、 全く姿を見せなかつた。 マヤたちは他の一隊とともに、 ザエフの南側から東西方向に展開しようとする味方の地上軍の上を飛び回り、 敵の動きを見守つた。

マヤは先日、 シュラースで出会つた敵のことをもう一度、 思い出してみた。 あの竜騎兵の顔、 やはり元の世界にいた頃に見たことがある。 ただ前回、 遭遇したときには気づかなかつたが、 いま改めて考えてみると、 どこかで彼女と直接会つたわけではなく、 写真か何かで見かけただけのような気がする。 いつたい誰なのだろう……。

午後になつた。 マヤたちは交代で竜を地上へ降ろし、 翼を休めさ

せる間にえさを与え、ついでに自らも携行食料で軽い昼食を済ませた。九人全員が休息を終え任務に戻った頃には、昼下がりのけだるい空気が辺り一帯を覆い始めた。強敵に備えて張りつめていたマヤたちの緊張の糸も、わずかではあつたが緩み始めていた。

そのとき突然、エンケ隊の竜のうちの一匹が地上に向かつてまつすぐに降下を始めた。

いまこのタイミングで他の八人に何の断りもなく警戒任務を中断するなど考えられない。ならば、この突然の降下の理由は一つである。

緊張の糸は再び最高潮に張りつめられた。降下した竜は着陸態勢をとることなく地面に激突した。味方の白魔道士隊がおそらく救助に向かつたのだろうが、そのようなことを確かめる余裕はない。マヤたちは全神経を、自分の前方と後方と右方と左方と上方を注視することに振り向けていたからである。

「あそこだ！」

ラウラが叫んだ。彼女から比較的近いところを飛んでいたマヤには、その大きな叫び声が直接聞こえた。ラウラの声が聞こえなかつた他の竜騎兵も、ラウラが自分の乗っている竜の頭を急に太陽の方に向へ向かたことから、すぐに、注意をどこへ集中させればよいかを悟つた。

竜騎兵たちはまぶしさに目を細めながら南の上空を見つめた。太陽の中から黒い影が飛び出し、ものすごい勢いでこちらに向かってくる。それも三つも。

次の瞬間、マヤたちエラーニア竜騎兵隊が陣取っている空間を、黒い巨大な弾丸のようなものが三つ貫いた。そう、まさに弾丸だつた。空間がひしゃげ、張り裂けるのが見えたような気さえした。こんなものに直撃されたら、どんなに分厚い装甲をまとった装甲竜でもひとたまりもないだろう。

マヤは辺りを見回し、状況を確認した。彼女の悪い予感は見事に的中した。すでにガユス隊の竜が一匹、装甲の隙間から血を吹き出しながら墜落しつつあつた。

さすがの精銳エラーニア竜騎兵たちも戦慄を禁じ得なかつた。だが彼女たちが精銳と呼ばれる所以は、たとえ戦慄していてもいま何をなすべきかを決して忘れないことである。残つた七人は誰に命じられることなく、ラウラの周りに密集体形を作つた。こうすれば敵は先ほどのような一撃離脱戦法をとることが困難になるからである。

案の定、マヤたちのそばを通り過ぎていつた三つの黒い影は、遠ざかるのをやめ、一旦、その場に停止した。もしマヤたちが密集しなければ、再び一撃離脱を企てるつもりだつたにちがいない。

マヤはその三つの影を凝視した。距離が遠すぎて詳細はわからなかつたが、どうやら三匹とも黒い装甲をまとつた大柄な竜のようだつた。

敵の黒い三匹とエラーニアの七匹はしばらくの間、相手を踏みするかのように、距離を置いてお互いをにらみ合つた。

「行こう」ラウラが言つた。「じつは今、太陽を背にしている。敵は日光がまぶしくてこちらの動きがつかみにくいはずだ」

今度は密集体形をとつてていたため、ラウラの声は他の六人全員の耳に届いた。六人とも口では何も応えなかつた。だが行動によつてラウラの提案に同意したことを示した。

エラーニアの装甲竜七匹は密集体形のまま、文字通り一丸となつて敵の装甲竜に突入を敢行した。

すると敵の三匹は、こちらがすぐそばまで近づいてきたのを見計らつて、それぞれ別の方向へ散開した。この動きはマヤたちの予想の範囲内だったので、それほど動搖はなかつた。と言うよりむしろ、敵がバラバラになつたことによつて各個撃破のチャンスが生まれたと思つた。

しかし、敵のその次の動きは、マヤたちの想像の及ぶものではなかつた。実際のところ、敵の三匹がどう動いたのかマヤには理解できなかつた。なぜなら、気がついたときにはマヤは敵の三匹に三方を囲まれていたからである。

マヤは度肝を抜かれながらも、持ち前の人並みはずれた空間認識力で、後ろの下方に逃げ道があることを察知した。前方に陣取つていた敵の竜が、マヤめがけて強力な頭突きを繰り出したが、マヤはその一瞬前にピムに下降を命じていた。

その時、マヤの目ははつきりと、頭突きを繰り出した竜を操縦している敵竜騎兵の顔をとらえた。シュラースで遭遇したあの強敵だ。間違いない。無表情なところもあのときのままだ。

敵はマヤを取り逃がしたこと悔しがるそぶりも見せず、次の瞬間にはオクタヴィを包囲してゐた。あらかじめ決められていたかのように、全く無駄のない行動だつた。しかもその動作がまた途轍も

ない。マヤに頭突きしようとした竜は、頭突き失敗の直後、斜め上後方へ宙返りをしてオクタヴィイの竜の腹の下に位置を移したのである。そこにオクタヴィイがいるということを認識するのも難しい。なのにその竜の操縦者は、そのような宙返りによつて他の一匹とともにオクタヴィイを包囲することができると瞬時に認識したのである。とても人間業とは思えなかつた。

マヤは、驚く間も惜しんでオクタヴィイの救助に向かつた。オクタヴィイは今、宙返りをした敵に下方を、他の一匹の敵に前後を封じられている。見たところ、オクタヴィイの前方に立ちふさがつてゐる敵がマヤの方向からの攻撃に對して比較的無防備のように思えた。そこでマヤはパピムにその敵へ突撃するよつと命じた。

ところが、その次の瞬間にマヤが感じた驚きは、今日これまでに感じたどの驚きよりも遙かに大きいものだつた。その敵竜にまたがつてゐる女の顔がマヤの目に飛び込んだ時、マヤは心の中で叫び声を上げた。

？？あの女にも見覚えがある！？？

オクタヴィイの下にいる竜騎兵だけでなく、前方の竜騎兵の顔も記憶にあると気づいてしまつた。この瞬間から、マヤのエース竜騎兵としての勘が狂い始めた。

？？一人だけなら他人のそら似といつることもあり得るが、二人となると、偶然とは考えにくい？？

百パーセント意識を集中していくても苦戦しているといつのに、マヤはある「ことか、他」とを考え始めたのである。

？？間違いない。あの顔、一年以上前、まだ向こうの世界にいた時に見た顔だ？？

マヤの突撃を受けたその敵竜は、寸でのところでピムの頭突きをかわした。その間に、他の一匹の敵もラウラの竜やその他の味方の竜の突撃を受けた。そのため、敵は一旦、オクタヴィを包囲する環を解いた。

？？しかも、今あの女の顔、シュラースでも会ったもう一人の女よりはっきりと記憶にある。確か？？

だが敵の竜たちはすぐに、またとんでもなくトリックキーな動きでエンケ隊の竜のうちの一匹を包囲した。

？？そつ、雑誌に写真が掲載されていたんだ。彼女の名前は？？
マヤは包囲されたエンケ隊の竜を助けるべく、再びピムを突進させた。

？？バー・バラ・スター・ゼン。全米アクロバット飛行競技選手権女子部門三年連続チャンピオン。アクロバット飛行競技世界選手権チャンピオン、アンドリュー・スター・ゼンの妹？？

マヤがたどり着くよりも一瞬早く、敵は包囲下のエンケ隊の竜にダメージを与えることに成功した。ダメージを受けたエンケ隊の竜は、苦しそうな鳴き声を上げながら高度を下げ始めた。

もちろん、エラーニア竜騎兵たちもただ黙つてやられてばかりいるわけではなかつた。マヤと同じく救出に来ていたラウラの竜が、バー・バラ・スター・ゼンかと思われる女の乗つた竜の土手つ腹に頭突

きを命中させた。残念なことに決定的なダメージを与えることはできなかつた。それでも、敵竜に苦痛を与える、制御を難しくさせる効果はあつた。

ダメージを受けた敵竜は徐々に高度を落とし始めた。マヤはすかさず、追撃に移つた。本来の彼女であれば、手負いの竜にとどめを刺すなど雑作もないことである。しかし、そこには、もしかしたら自分と同じ世界から来たかも知れない人が乗つてゐる。そんな人を地上にたたき落とすことなど、マヤにはできなかつた。

マヤはピュをその敵竜のすぐそばにまで近づけた。そして、戦闘中だといつことも忘れ、ただ必死に

「Ms. Stassen! You're Barbara Stassen, right? You came from the other world, didn't you? Me, too. Listen, Ms. Stassen! Hey! Ms. Stassen, listen to me! Please!（スター・ゼンさん！あなたバーバラ・スター・ゼンさんですよね？異世界から来たんでしょう？私もです。スター・ゼンさん！聞いてください。ねえ、スター・ゼンさん！お願いだから、聞いてください！）

「

と呼びかけた。

なのに相手の女は、ブロンズ像よりももつと無表情のままだつた。

すぐさまマヤの左と右から、残りの一匹の敵が同僚の危機を救うべく近づいてきた。左からやつてくる敵は、シユラース上空でも戦つたことのあるあの女の操縦する竜だつた。マヤはそちらの竜の

襲撃をかわすことはできた。だが、右方向から彼女を襲つた敵竜をかわすことは全くできなかつた。なぜなら、彼女の心は、その日最大の驚きによって完全に支配されてしまつたからである。右の竜を操縦している女は、なんと、手負いの敵竜に乗つている女と同じ顔をしていたのである。

田の前にもバーバラ。右からもバーバラ。マヤの心の片隅に残つていた最後の平常心のかけらは、ついに吹き飛んでしまつた。

？？バーバラ・スター・ゼンが一人……。どうして……？？

マヤが驚愕している間に、右から来た敵竜はピームの体に決定的なダメージとなる体当たりを加えていた。

マヤはピームの背中から振り落とされ、ピームとは別々に地上へ墜落し始めた。遠ざかり行く意識の中で、彼女はずっと遠くの空に、薄緑色の派手な衣装をまとつた竜騎兵が黒い装甲竜の背中の上に立つているのを見た。

？？あれは、ヤグソフ四姉妹の一ーナ……？？？

マヤの意識はそこで途絶えた。

一週間後、マヤはザエフ近郊に設置されたエラーニア軍の野戦病院のベッドの上で田を覚ました。

「あたし、またルーミアに命を救われたのね。これで何度もだらう？」

マヤはかたわらに付き添うルーミアにそう尋ねた。

ルーミアは「命を助けられるたびにいちいち恐縮してたら、竜騎兵なんて仕事やってられないでしょ」と、自分のほうが姉であるかのような口調でたしなめた。

「ねえ、隊長とオクタヴィはどうしている？」

「二人とも元気よ

「よかつた。じゃあ、今の戦況はどうなってるの？」

「ザエフはまだ陥ちていないわ」

「一週間も経っているのに？」

「ええ。ハバリアの竜騎兵の中にすこく強いのがいて制空権をとれないって。それで、ここ一週間は防戦一方。いまエラーニア本国から援軍がそろうのを待っているところ」

「そうなの」

「エラーニア地上軍の兵力は、侵攻を開始したときの五倍、竜騎兵力も、エラーニアが現在保有する一十三個の竜騎兵隊のうち十九個をザエフ戦線に回したって。総力戦ね」

「つていうか、もともとあんな少ない兵力でハバリアに侵攻したのは無理があった」

「やつかもね。あたしとじては、援軍のおかげでお姉ちゃんにかかる負担が軽くなってくれさえすれば、それでいいんだが」

「でも、あの強敵とはまた戦わなくちゃならなー」

「お姉ちゃんを撃墜したのは、みんなにやつこ敵だったの?..」

「うふ。強かつた」

「やつ。Hース竜騎兵のお姉ちゃんが言つてだかう、やつと本当にすここんでしょうな」

「Hース竜騎兵か。そつこえばやつだつた」

「ーーー!! 田つたらもつ戦線へ復帰でしょ?」

「たぶんね……」

「気をつけてね」

「.....」

「.....」

「.....」

「お姉ちゃん?..」

「あ、」めぐ。ひょっと考え事してた

「びっくりした。まだどこか体に悪いところがあるのかと思った」

「あのね、ルーニア。こまルーニアにエース龍騎兵って言われて思
い出したんだけど」

「ええ」

「ずっと前、ナターシャがシュラースであたしをさらおひとしたり
き、彼女、『マヤをエース龍騎兵にするために』けりけりの世界へ呼ん
だ』って言つたの」

「ヤグソフだけが使えるつていつ、魔道学の常識を超えた魔法、『
ヤグソフの異呪』で呼ばれたのよね？」

「ええ、おそらく。でも、これってちょっとおかしくない？あたし
は今、確かに竜騎兵隊に入つて『エース龍騎兵』なんて呼ばれてる
けど、それは、あたしがたまたま飛行機事故で元の肉体を失つて女
の子になつてたから出来たことでしょ？」

「ああ、そうか。もしお姉ちゃんが事故に遭わずに無事にこちらの世
界へたどり着いていたとしたら、お姉ちゃんは男の子のままだつた
はず。男の子は竜に乗れないから龍騎兵にもなれない」

「最初からあたしを事故に遭わせるつもりだった、肉体を失わせる
つもりだったと考えられなくもないけど……」

「それは、前にお父さんも説明したけど、あり得ないことだわ。肉
体を完全に失わせて魂だけにして、それを女の魂として再生するの
を意図的に行うのは、現代魔道学の常識に照らして考えれば、絶対

無理。お姉ちゃんのケースは、奇跡中の奇跡

「でしょ? だとすれば、ナターシャのあの言葉、こいつたいていう可能性はひとつあえず置いといて、他に考えられるとすれば、こっちには『パイロット』なんて言葉はないから、竜騎兵って単語を使つただけ、つまり、ただ単にあたしを飛行機に乗せて戦わせるつもりだったってことなのか? ……」

「『ヤグソフの異呪』を使えば男のまま竜に乗れるようにならってことなのか? ……」

「そもそもなれば」

「やつだわ!」

「やつよ。最初から『ヤグソフの異呪』の力であたしを女にするつもりだつたつていう可能性がある」

「もしそうだとしたら」

「やして、もその力を逆の作用にも使えたとしたら」

「お姉ちゃんは、男の子に戻れるかもしれない!」

「やつにやつとなるわ」

「やつね。やつこととなるわね」

「ええ……」

「……あんまり嬉しい「じやないわね」

「嬉しいわよ。でも、ちょっと複雑な感じもある」

「女の子としての生活に慣れてしまつたから不安なの？」

「それもあるし、ルーミアに男の子の姿を見られるのが恥ずかしいつていうものあるし。でも、どのみちこれは『ヤグソフの異呪でそういうことができる』としたらいつていつ『反定の話』

「やうね」

「第一、ヤグソフの異呪はヤグソフにしか使えないって言われてるんだから、異呪で性転換ができたとしても、男の子に戻りたいならあたしはヤグソフにお願いしなきやいけない。『ねえ、ヤグソフのおじさまあ、マヤ、とおつても困つてゐの。おねがい、マヤを男に戻してえ』とか言つて」

「何？その声色。媚を売つてゐつもり？」

「ダメかな

「全然だめ

「じゃあ、ルーミアがやつてよ」

「いやよ。あたしは男には媚びないの」

「えーつ？ルーミアつて見た田はわつと少女キャラだから、もつと

かわい」「ぶつたほつがもてるのに」

「あたしはそういうふうに見られるのが嫌なの」

「もつと素直になりなさいよ」

「何よ。自分がちょっとジユートといい関係になれたからって

「あ、ごめん。本気で怒った?」

「まさか。冗談よ。お姉ちゃんの悪ふざけにつきあつてあげただけ。
……何にせよ、ヤグソフがそんな中途半端な色仕掛けでお願いを聞いてくれるほど親切な人だつたら、きっと戦なんて起こさないわ」

「そうよね」

「話は変わるけど」

「うん」

「はい、これ」

「何?」「れ」

「ネックレス」

「あたしにくれるの?」

「ええ」

「えいこいじゅへ。」

「お誕生日プレゼント。三日遅れだけど」

「ああ、やうか。意識を失つてこの間に」

「あい。十七回目の誕生日おめでとつ、お姉りやん」

「ありがと」

「なんか、半年前があたしのとせ以上にひどい誕生日になつたやつ

たわね」

「おやかあれよつひどくなるとせね」

「次の誕生日はちゃんとパーティーとか開いて盛大に祝えたりい
な」

「あい。そのときにはあたしも……」

「…………」

「…………」

「……とにかく、次の誕生日は、お姉ちゃんはお姉ちゃん、あたし
はあたしで、もつとゆつたりした雰囲気の中で祝つてもうべつたらい
いわね……」

「……あ、やうね……」

「……じゃあ、お姉ちゃん、あたし、仕事に戻つていい？」

「もしかして、ギールにいた時みたいに、この野戦病院でも自発的に兵士を白魔法治療してあげてるの？」

「ええ

「ルーミアらしいわ」

「じゃあ、またあとで」

「あ、ルーミア」

「何？」

「いろいろと、ありがと」

「……うん。じゃあ

ザエフへの総攻撃が開始された。

ヒラーニア側の地上兵力は、十分すぎるほど十分である。だが制空権がとれなければ、進軍することは不可能、とは言わないまでも非常に困難となる。ファクティム城に拉致されたマヤがルーミアの連れてきたピムに助けられたときのことを思い出してほしい。堅牢な城塞の壁さえピムの頭突き一つでいとも簡単に壊すことができた。

もし竜を十匹集めれば、一日で町を一つ破壊することもできてしまう。まして地面に這いつぶばつて生身の体をさらしている地上兵が、一旦、敵の竜の攻撃目標になつたとしたら、逃げるか、攻撃が外れることを神に祈るほかない。それほど竜騎兵力は大きな影響力を持つてゐるのである。

エラーニアの竜騎兵力は十九隊。一方、ハバリア側は十一隊だが、そのうち八隊は竜がひ弱すぎてほとんど戦力とは呼べないシロモノだった。残りの三隊のうち、二隊は竜騎兵の熟練度は高いが竜のほうがやはり丈夫とは言えなかつた。そして最後の一隊、これが例の強敵である。

エラーニア側はなんと、十九隊のうち十五隊をその一隊の強敵に振り向けるという大胆な作戦に打つて出た。そもそもこの戦線にこんなにたくさんの竜騎兵力が回されたのは、その強敵を倒すにはそれぐらいの兵力がどうしても必要だとアイリゲン大佐たちがエラーニア王宮に進言したからである。ハバリア遠征隊の首脳部は、マヤが撃墜された後、すつかりあの強敵に対する恐怖心に取り憑かれてしまつたらしい。

マヤたちファクトチーム竜騎兵隊も、当然、その強敵を攻撃する十五隊の中に加わつた。事前に定められた作戦の通り、揺動、包囲、突撃といった行動を同僚たちと連携して行つてゐる間、マヤは何度も敵の竜騎兵の顔を間近に見るチャンスがあつた。そのうちの一人はシユラースでも遭遇した女。そして残りの一人がバー・バラ・スター・ゼンではないかと思われる女と、そのそつくりさん。前回と全く同じメンバーである。ただ今回、味方が優勢という状況の中で落ち着いて敵の三人の顔を眺めてみると、二人のバー・バラ・スター・ゼンは微妙に顔のニュアンスが異なつてゐるようと思えた。

マヤはバー・バラ・スター・ゼンの家族構成について詳しく知っているわけではない。彼女の兄が彼女以上に優秀なパイロットだということは有名だが、もしかしたらバー・バラにはそれほど有名ではないよく似た妹か姉がいて、その姉妹とともにこちらの世界に引き込まれたのかもしれない。

もちろんマヤは、今度は戦闘中に彼女たちに話しかけるなどいう愚かしい行為に及ぶことはなかつた。そうしようにも、相手の女が相変わらずあまりにも無表情で、たとえ耳元で怒鳴つたとしても何の反応も示しそうになかつたのである。

戦況はと言えば、多勢に無勢という言葉をそのまま絵にしたようなものだつた。いくら恐るべき力を持つた敵でも、三対四十五という数的劣勢を跳ね返すことは物理的に不可能である。仮にこちらが十四撃墜されてもまだ三十五匹も残つているのである。実際のところ、敵は十匹以上のエラーニア竜を撃墜した。だが、それでもエラーニア側は次々と新手を繰り出すことができた。さすがの強敵も疲労には勝てず、だんだん動きが鈍くなつてきた。

マヤは、もはや大勢は決したと判断した。ファクティム隊は敵竜騎兵をある程度沈黙させることに成功した場合、すぐさまザエフへ空襲を加えることになつてゐる。ラウラの指示を仰いだところ、敵の反撃を受ける可能性は低いので特にフォーメーションは組まず個別に空襲を行えばよいとのことだつた。そこで、マヤはピムの高度を下げ、ザエフ市街へ向かわせた。

ふと、そのとき。

北の方向、戦闘空域からやや離れた空に、一匹の装甲竜が漂つてゐるのが目に入った。黒い装甲をまとつた、大柄の竜である。しか

もその背中には薄緑色の竜騎兵服を来た少女が、なぜか座らずに突つ立つている。

「一ーナだ」

マヤは叫ぶが早いか、ピムを薄緑色の竜騎兵めがけて突進させていた。

その竜騎兵は、マヤがすぐそばにしゃってくまで、ただぼーっと竜の背中に突つ立っていたが、マヤの接近に気がつくと、慌てたように竜の背中に座り直した。

相手の竜はピムの突進をかわしじてよけた。マヤはそのままその竜が反撃に移るものと予想し、警戒態勢をとった。

だが、相手の竜騎兵は竜をマヤに近づけることも、逆に遠ざけることもせず、ピムから少し離れた位置にとどまり、マヤに声をかけてきた。「久しぶりだな。貴様、マヤとかいつたな」

マヤは応えた。「あなた、一ーナね」

竜騎兵一ーナは、以前、ファクティム近郊で出合った時と同様、不敵ににたにたと笑いながらマヤを睨みつけていた。「姉のモーラが世話になつたらしいが

「お世話になつたのはこいつよ。一度は命を助けられ、一度は殺されかけたわ

「それが戦^{一ツくわ}というものだ。貴様も竜騎兵なら、それは覚悟の上だろう? では、マヤとモーラ、ナターシャはどうだ? あやつは貴様に何か

世話をしてもやつたかな

マヤはナターシャの名前を持ち出されてはつとなつた。「ナターシャが……ナターシャがあなたに何か言ったの?」

「一ーナは顔をしかめ、答えた。「何か言ってくれていれば、我らハバリア軍はザエフでこんなに苦戦しなかつた。いや、そもそもエラーニア軍」ときに攻め込まれることもなかつた。あやつは、ナターシャははやつぱり裏切り者だ。裏切り者はしょせん裏切り者だったんだ」

「ナターシャのことを悪く言わないで」

「ほほう。あやつのことをそのまゝがんばりこなすことまゝ、やはり世話になつたんだな」

「何のことかよくわからぬわ。あたしはエランで彼女と知り合つて、友達になつただけ。それだけよ」

「ふん、まあいい。すべては後の祭りだ。貴様のことも、このザエフ戦線の戦況もな」一ーナは自分の乗る龍の頭を北に向か、「では、マヤ、近いうちにまた会おう。戦場で」と言こ残してその場を飛び去つた。

マヤは一瞬、追撃しようかと思ったが、一ーナの龍の飛び去る速さが並外れていたので追いつけないと判断し、ザエフ空襲という本來の任務に戻ることにした。

結局、エラーニア竜騎兵隊は、例の強敵のうち一匹を撃墜し、残りの一匹にも深刻なダメージを与えて撤退に追い込んだ。敵の他の

竜騎兵隊も、ほぼ壊滅状態に陥らせた。

制空権を得たことを確信したエラーニア軍ハバリア遠征隊総司令部は、地上部隊に対しザエフ突入を命じた。ザエフのハバリア地上軍は死にものぐいで抵抗したが、それも長くは続かなかつた。

五日後、ザエフは陥落した。ハバリア侵攻から一ヶ月でザエフを攻略するという目標を結果的に達成したとはい、内容から見れば、予想を遙かに上回る大苦戦だつた。侵攻開始当初、一ヶ月以内にドウムホルクを陥落として戦を終わらせることが可能などと楽観したことだが、今となつては空虚な妄想として思い出された。

ザエフ陥落の翌日、ハバリア地方は雨期に入つた。

数日後、マヤは湯煙の中にいた。

ハバリア侵攻作戦開始前にアイリゲン大佐が約束してくれた通り、ファクティム装甲竜騎兵隊はザエフ陥落後、十日間の休暇を与えられた。本来なら大喜びすべき状況である。だが、ファクティム隊の面々は不満を募らせていた。

「つたく、これのどこが休暇なんだ」ラウラはそう言つて、湯の中にそそり立つ岩石にその大きな背中を預けた。「『雨期の最中でも敵が行動を起こすこともあり得る。場合によつてはファクティム隊の力が必要だ。休暇中、ザエフ近郊から離れないでほしい』だつて？ふざけるなつつーの。これじゃあ、ギール城で敵襲に備えてじつ

と待機していたあの時と、大して変わらないじゃないか

オクタヴィイは一方の手で湯をすくい、もう一方の腕にこすりつけ
るよつにしながら「ほんとですわね。わたくし、帰省ぐらこはさせ
てもういえると思つていましたわ」と言つた。

ルーニアは、上のほうへまとめあげた長い髪がずり落ちてこない
か、ちよつと氣にしながら「せめて、ザエフの近くに、休暇を過ご
すのにもつと適した場所が残つていたらよかつたのにね」と言つた。
ラウラは吐き捨てるよつて「この間の戦闘で破壊し廻へしたあと
だからな」と言つた。

オクタヴィイは手ですくつた湯を、今度は首筋にかけながら「でも、
この露天風呂と温泉宿が残つていたのは不幸中の幸いでしたわね」
と言つた。

「ラウラは、まあな」と応えた。

ルーニアが言つた。「あたし、温泉つて初めて

オクタヴィイが言つた。「わたくしもです」

ラウラが言つた。「ホラーニアには温泉なんてないからな。あた
しはまだ小さい子供だった時、親に連れられて一度、この近くの温
泉に来たことがある。その当時はまだハバリアが独立する前で、こ
とはホラーニア領だったから

ルーニアが言つた。「お姉ちゃんはどう? 温泉つて来たことある

?

ラウラはその時、マヤがうつむいたまま上田遣いにオクタヴィイのほうを伺つてこりとこ氣づいた。「マヤ、どうした？」

マヤは恥ずかしそうに「う、うん。オクタヴィイって着痩せするんだなって思つて……」と言つた。

オクタヴィイは応えた。「あら。わたくしつて何も着ていないとみんなに太つて見えます？」

マヤは慌てて「ううん、そんな意味じゃない。そんな意味じゃ、全然ない」と言つた。

ラウラはマヤの言おうとしていることに気づき、マヤの胸とオクタヴィイの胸とルーミアの胸と自分の胸を見比べた。ラウラの胸は結構、大きい。体自体が大きくて肩幅も広いため目立たないだけである。他方、ルーミアの胸は誰が見てもふくよかである。オクタヴィイの胸が標準よりやや大きいことには、ラウラもいま氣づいた。だが、マヤの胸は、お世辞にも大きいとは言えない。

ラウラはオクタヴィイに「おまえは服を着ていようと着ていまいとスレンダーだよ」と言つてから、マヤに「なあ、マヤ。おまえ、まだ十七だろ?」と尋ねた。

マヤは答えた。「うん」

「じゃあ、これからだよ。まだまだ、胸は大きくなる」

マヤは、自分の胸が他の三人より小さいことを気にやんでいるとラウラに悟られたのが恥ずかしくて、顔を真っ赤にしながら「そう

？」と応えた。

「ああ、そうや」

オクタヴィイも「そうですわよ」と応えた。

ルーニアは何も言わなかつた。

ラウラが言つた。「それとも、彼氏に何か言われたのか？」

マヤは更に顔を赤らめながら首を振つた。

ラウラは続けた。「男には田の性欲と心の性欲があるつて話だ。だから見た目がよい女なら、それほど好きでなくても抱ける。でも、本当に重要なのは心のほうだ。体のことを言われてもあんまり気にするなよ」

マヤは男だつた時に感じていたことをラウラに指摘され、妙に納得した。「うん。わかつた」

ラウラは、マヤとその彼氏、ジユートとの仲がどうなつているのかちょっと気になつて、マヤに「この休暇中に彼氏と会う予定とかないのか」と訊いた。ラウラもやはり一人の女性、他人の恋愛の話には興味があるようだ。

マヤはまた顔を赤らめながら「今夜、会ってくれるつて」と答えた。

オクタヴィイが言つた。「よかつたですわね」

ラウラが言った。「もつだいぶ長い間、会ってないんだろ?」

ルーミアが口を挟んだ。「一ヶ月ぶりぐらじよね?」

ラウラとオクタヴィイは、ルーミアのこの態度を見て安堵した。彼女たちはルーミアがジューートに憧れを抱いていたことは知っている。だから、こまごまこうつ話をしながら、もしかしたらルーミアが気分を害したのではないかと少し心配していたのである。どうやら、ルーミアはジューートのことについては全く吹っ切れているようだった。

ラウラは、マヤに「軍人同士じやなかなか会えなくとも仕方ないよな」と言った。

マヤは「そうね」と答えた。

「でも、あともう少しの辛抱だ。雨期が明ければハバリア北部への進撃が開始される。そしてドゥムホルクが陥落すれば、戦が終わるはずだ。戦が終われば、彼氏ともうと頻繁に会えるだろ? たとえ向こうが職業軍人でも」

「だといこねど

オクタヴィイは「きっともっと会えるようになりますわよ」とマヤを慰めてから少し話題の方向性を変えた。「ねえ、マヤ。マヤはこの戦が終わったらどうなさいますの? マヤはルーミアの家の養女ですから、ルーミアの故郷に帰るのでしょうか?」

マヤはまじょつと困惑したような顔をして「どうあるかなんて、考えたこともなかつた」と答えた。

「ラウラはまだいるおつもじ?」

ラウラはマヤとは対照的に嬉しそうだつた。「え?あー、あたしは……あたしも決めてない。あたしは戦^{いくさ}が終わつたら除隊して、故郷のファクティムに帰つて……花嫁修業でもするか?わはははは、いや[冗談、冗談だけどな

マヤはラウラの態度から彼女が除隊後に何をするつもりなのかを容易に推察できた。きっともうすでにアイリゲン大佐と将来の約束をしているに違いない。ただ、ラウラはアイリゲン大佐との関係をマヤたちにも公言していない。そういうことをこちから聞いただすのも失礼なので、マヤは何も言わなかつた。

オクタヴィは話を続けた。「ルーミアは、故郷に帰つてまたお父様の白魔道治療院を手伝つんでしょう?」

ルーミアは「うん」とうなずいた。

オクタヴィは最後に自分の話をした。「わたくしもファクティムに帰つてお父様の仕事を手伝えますわ。と言つても、アドレアーヌ家のしきたりで銀細工の技術は婦女子には伝えないことになつてありますから、事務的なお仕事のお手伝いですけど」

ラウラはマヤとルーミアに「アドレアーヌ家はファクティムでは有名な銀細工職人の家柄で、職人でありながらエラーニア王宮から貴族に準ずる称号を与えられてるんだぜ」と説明した。

オクタヴィは言った。「ねえ、みなさん、戦^{いくさ}が終わつてそれぞれ故郷に帰つたあとに必ず一度、会いましょう。みなさんファクティムかその近くにお住まいですから、ファクティムでなら集まること

ができますわよね？」

ラウラは「そうだな。それはいいな」と答えた。

オクタヴィイは続けた。「わたくし、このファクティム竜騎兵隊のみさんが本当に大好きです。かけがえのない友だと思つておりますの。ですから、除隊したあとずっとみなさんと今のよつな關係を続けてゆきたいのです」

マヤはオクタヴィイの言葉を聞いて表情を曇らせた。マヤはいずれ異世界に帰ってしまうかもしれない。そうなれば、オクタヴィイの言うように『ずっと』今のような関係を続けることはできない。

オクタヴィイはそんなマヤの様子に気がついて「どうかなさこましだ？」と尋ねた。

すると、マヤは無理矢理に微笑んで「ううん。何でもない。やつね、もし再会できる機会があるなら、かなうすまた会いましょうね」と言った。

その夜、マヤは温泉宿の庭園でジユートと会っていた。

「ナム、マサ」

ジュートはいたく不満そうだった。

「おおえ、どうしてズボンをはいている？」

マヤは不思議そうな顔をして「え？」と話を返した。

「どうしてスカートをはいていないのかと訊いている」

「どうしていわれても、私服はこれしか持つてきていらないもの。他のみんなエランの基地においてきやつたから」

ジューイーは急に泣きまねを始めた。「そんなあ。エランで会つて以来、何ヶ月かぶりにマヤの私服姿が拝めるつてんで、あつと!!! 之力をはいてくれると期待してたのに」

マヤはジューイーの頭を撫でながら「わかった、わかった。」こんど会つ時はパンツが見えそつなくらい短いのをはいてきてあげるから、泣かないの」と言つた。

ジューイーはぱたつと泣きまねをやめ、満足そつそつと微笑んだ。

マヤはあきれ顔で「怒つてみたり泣いてみたり喜んでみたり。あなたの百面相ぶりには圧倒されちゃうわ」と言つた。

するとジューイーは、思に出したよつてポケットから小さな小箱を取り出しつつ、

「やつやつ。おまえに渡したいものがあつてな

と言つた。

「マヤはジュークから小箱を受け取り

「何？これ

と囁いた。

「開けてみる」

マヤが小箱を開いてみると、中には指輪が入っていた。

ジュークは「誕生日プレゼントだ。ちょっと遅くなっちゃったけどな」と囁いた。

マヤは感激の表情で「ありがとうございます。す、嬉しい」と囁いた。

「はめてみてくれ」

マヤは言われるまま指輪を箱から取った。ところが、それを左手の薬指のそばまで持つていった時、ふとためらいを覚えた。

ジュークは怪訝そうな表情で「どうした？」と尋ねた。

マヤはもう一度、指輪をはめるよう自分自身に命じた。だが、どうしてものはめることができなかつた。これは単なる誕生日プレゼントで、別に永遠の愛を誓つものではない。ちょっとはめてみるべからい何の抵抗もないはず。そうだとわかっているのに、どうしてもその環に指を通せないのでした。

彼女は思つた。いずれ自分は異世界に帰ることになるかもしれない。その時は当然、彼とは別れなければならない。彼とこんな関係

を続けることは、もしかしたら彼に対する裏切り行為なのではないか。

マヤは表情を曇らせて「「」めん。」の指輪はしてあげられない」と言った。

ジューートは、マヤの突然のこの言葉に驚き、大声で

「なぜだ！」

と叫んだ。

マヤはジューートの田を見ないよつて首を横に振るだけだった。

ジューートはマヤのあいさつからんで彼女の顔を自分に向かわせた。

「理由を言え」

マヤはおそれおそれジューートの田を見て「理由は……理由は、いずれお別れしないといけないから」と言った。

「故郷へ、東洋へ帰つてしまつてことか」

「故郷へ……、さう、故郷へ帰らなきやいけないの」

「俺がおまえを故郷へ帰すと思つか」

「だめなの。必ずしても帰らなきやいけないの。必ずしても

「じゃあ、おまえにこつこつ俺もおまえの故郷へ行く」

「無理よ。あなたにはあたしの帰るところへ行けないわ」

ジューートは声を荒げ、叫んだ。「いや、俺はおまえの側から離れない。離れるもんか。絶対について行く。どんなことをしたって、どこにだってついて行く。どこにだってな。たとえ東洋だらうが、南洋だらうが、異世界だらうが……」

マヤは彼の言葉の最後の部分に敏感に反応した。「いまなんて言った?」

ジューートはまばたきの悪やつな表情のまま何も答えなかつた。

「こま異世界つて言わなかつた?」

ジューートは黙つたままだつた。その態度から、彼が言葉のあやで異世界とこゝ单語を使つたわけではないことは明らかだつた。

「知つてたの?あたしがどこから来たのか

ジューートは重そうに口を開いた。「知つてた……とこつか、そういう始めていたんだ

「じつこいつ」とへ

「一年前、俺たちが初めてアグニ村で会つた時のことは憶えているだらう?」

「ええ

「あのとき俺たちはエラーニア王宮の命令でアウスゲント地方に降り立つたという『男の竜騎兵』を探していた。それは知ってるな。なぜそんなことをしていたかと言うと、ハバリアに忍び込ませているスパイが『ヤグソフが戦力として異世界から異呪で呼び出した『男の竜騎兵』』が、不慮の事故でアウスゲント地方に降りたらしいと報告してきたからだ。今まで隠していたが、俺は騎士ではなく本当は情報部の将校なんだ」

「ヤグソフが戦力として呼び出した?」

「そうだ。だが、いま考えたら、俺たちは『男の竜騎兵』という言葉にこだわりすぎていた。特にあの調査隊の隊長のバンク・ベルツてのが頭の固い奴だつたから、余計にそうなつてしまつた。だから、俺たちはマヤのことも、オカマでないことを確認すればそれ以上は疑う必要はないと思った。その後も結局、『男の竜騎兵』は見つからず、調査隊は解散ということになつた。俺は、引き続きスパイ狩りの任務に就いた。そのうち、俺はおまえと再会し、おまえのことが好きになつたが、よく考えると、やつぱりおまえが異世界から呼ばれた人間だと考えればつじつまが合つような気がしてきた。ナターシャとかいう女スパイがおまえに接触していたと知つた後は、ますますそう思えるようになつた」

「じゃあ、あたしの正体も、もちろん……」

「ああ。俺たちのスパイがハバリアから送つてきた情報の一部が間違つていたとすれば、つまり『ヤグソフが呼び出した男の竜騎兵』の部分が『ヤグソフが呼び出した女のパイロット』だつたとすれば、すべてつじつまが合つんだからな」

「え?」

「飛行機械を操縦する人をパイロットっていつんだろ?」

「え? ええ……」

ジュークはちよつと表情をほいほばせて「ヤグソフが呼び出すべ
らいだから、おまえはさぞ優秀な女流パイロットだったんだろ?」
と言つた。

「ジューク、あ、あの……」

マヤはジュークの誤りを正そつとしたが、そつする前に彼の唇に
言葉を封じられてしまつた。

ジュークは唇を離した後、言つた。「そつまは取り乱してすまな
かつた。俺が異世界になんか行けるはずないのにな」

マヤは首を振つた。

ジュークは続けた。「マヤが異世界に帰るのは明日や明後日のこ
とじやないんだろ? じゃあ、これだけは憶えておいてくれ。異世界
がどんなに便利な世界なのかは知らないが、おまえがこの世界にと
どまってくれれば、俺はおまえを『この世界が一番いい、異世界に
帰らないでよかつた』って思えるぐらい幸せにしてやる。俺にはそ
の自信がある

「ジューク……」

「おまえの正体を誰かにばらすつもりなんかないから安心していい。
今日はもう帰る。じゃあ、またな

ジューートは声を残し、去つていった。

庭園の暗闇に一人取り残されたマヤは思った。自分のつべ嘘がどんどん周りの人を不幸にしてゆくような気がする、もう嘘はつきたくない、と。

真夜中少し前、マヤとルーニアは温泉宿の一室にワウワウとオクタヴィイを呼び出していた。

「ワウワウ、マヤの打ち明けた話をすべて聞いた後、驚きの表情で「異世界？」

と訊き返した。

オクタヴィイも驚きをあらわにした。「……とは違つむつ一つの世界……。そんなところがあるなんて。なんて不思議な話ですの」

マヤは「今まで隠してて」めん」と謝った。

ラウラはルーニアに「ルーニアは知っていたのか」と尋ねた。

ルーニアは「うそ。『めんたこ』と言つた。

オクタヴィイは言った。「でも、これで納得いたしました。先ほど、

わたくしが『戦が終わったらまた会いましょう』って言つたと、
マヤが浮かない顔をなさつていたのは、向こうの世界にお帰りにな
つてしまふかも知れないからでしたのに。わたくしは、やはり東洋
へお帰りになるのかなとは思つましたが、まさか異世界とは想像も
つきませんでした」

ラウラが言つた。「でも異世界の話よりもっと驚いたのは

オクタヴィイが続けた。「マヤが男の子だつたつてことですね」

マヤは恥ずかしそうにうつむいて、「『めん』と繰り返した。

ラウラが言つた。「あたしは別に気にならな」よ。元が男の子だ
らうと異世界から来ようとしたマヤはマヤ。あたしたちの大好きな仲間さ

マヤは顔を上げ、「ありがとつ、ラウラ。」こんなことならもつと
早く打ち明ければよかつたわ」と言つた。

ルーニアも自分のことによつて嬉しそうな顔をした。

だが、オクタヴィイは表情を曇らせて「ただ、一つ困つたことがあります」と言つた。

マヤは心配そうに「どうしたの?」と尋ねた。

「アドレアーヌ家には『女子は、結婚相手とする男子にしか素肌を
さらしてはならない』といつこせたりがありますの」

「うん、それで?」

「ねえ、マヤ。異世界にお帰りになる前にひがの父に会つていただけますでしょ？」「

「は？」

「でもよかつたですか」

マヤは話の脈絡が全くつかめず、言葉を返すことができなかつた。

「わたくし、実を言つと男のかたが少し苦手でしたの」

「…………」

「以前にも申し上げた通り、マヤはわたくしの好みの性格ですから

「…………」

「異世界とこちらの世界、遠く離れるのはつらいですけど、安心ください。わたくしは一生、あなたの妻でいます」

オクタヴィイの言つてこる」との意味をようやく理解したマヤは、びっくりして「ちよつと、オクタヴィイ、冗談でしょ？？」と言つた。

オクタヴィイは大まじめな顔をしたまま、続けた。「わたくしとしては、できればマヤが異世界にお帰りになる前に、式だけは挙げていただきたく思うのですが。ウェディングドレスを着て祭壇の前に立つのが小さい頃からの夢でしたから」

ルーニアは不覚にも、お揃いのウェディングドレスを着た姉とオクタヴィイがベッドルームに入つてゆく姿を想像してしまい、声を大

にして「オクタヴィイ！お姉ちゃんは、今はれっきとした女なんだから、オクタヴィイと結婚なんかしない！するはずないじゃない！」と叫んだ。

マヤも困惑しきった表情だつた。「あたしだつて、オクタヴィイのこと、嫌いじやない、ううん、好きだけど、ほら、いまあたしにはジユートもいるし、オクタヴィイの気持ちはありがたいとは思うけれども結婚つていうのはちょっと」

その時、ラウラが大声で笑い始めた。「オクタヴィイ、もうそれぐらいいにしといてやれ」

マヤとルーミアはきょとんとした表情でラウラの顔を伺つた。

オクタヴィイは言つた。「冗談ですわよ、マヤ、ルーミア」

マヤとルーミアは異口同音に「びっくりした」と言つた。

「だいたい、うちにはそんなしきたりはありませんもの」

マヤは「もう、オクタヴィイも人が悪い」と言つた。

ラウラは「こいつ、前にもサーラにプロポーズしてからかつてだからな」と言つて苦笑いした。

オクタヴィイはちょっとお姉さんぶつた口調で「でも、今回のはただからかつたのではなく、マヤとルーミアがわたくしたちに大事なことを隠していた罰ですわよ」と言つた。

ラウラが言つた。「そつだぜ。あたしたちのことを信頼してくれ

てなかつたつてことだからな

マヤヒルーミアは改めて「『めん』と謝った。

ラウラは、一人に小さくうなずいてみせた。「まあ、何にせよ、これであたしたちには、ハバリアをやつつけこの戦を終わらせるつて以外に、もう一つ目的ができたわけだ」

オクタヴィイが応えた。「そりですわね」

マヤは訝き返した。「どうこいつ」とへ

ラウラが言った。「あたしたちが必ずおまえを、ドゥムホルク宮殿の最上階に連れて行つてやる」

オクタヴィイが言った。「必ず、異世界に帰れるようにしておしあげますわ。帰りたいんでしよう?」

マヤは言った。「でも、一人にそこまでしてもらひつ理由が……」

ラウラが言った。「理由は、仲間だからだ。それじゃ理由になつてないか?」

オクタヴィイが言った。「わつせも言つたでしよう。わたくしはみなさんが大好きだつて。わたくしのまつもそれだけの理由ですわ」

マヤは「ラウラ、オクタヴィイ、ありがと」と繰り返すしか言葉が見当たらなかつた。

ラウラは言葉を続けた。「となれば、あとほんせつひつてマヤをそ

「」へ連れてゆくかだ

オクタヴィイが言つた。「戦^{いくた}が終わつた後では遅すぎますわね」

「たぶんな。ドゥムホルク宮殿がエラーニアに接収されてしまったら、入り込むことなんかできやしない」

「それに、異世界への門を開く装置つていうのを破壊してしまつかもしれませんし」

「つてことは

「ドゥムホルクを攻めるときに行くしかないですわね」

そこで、当事者なのに話から半ば置いてきぼりにされていたマヤが口を挟んだ。「でも、あたしたち、必ずドゥムホルク宮殿に行けるとは限らない。他の戦線に回されるかもしぬないし、ドゥムホルクに回されたとしても宮殿とは違うといひで任務をこなさなければいけないかもしぬないし」

ラウラは得意げな表情で「大丈夫だ。あたしはエラーニア竜騎兵隊の上層部に顔が利く」と言つた。

オクタヴィイが応えた。「アイリゲン大佐ですわよね?」

「なぜ知つている

「みなさん」存知ですわよ

「やうなのか?なんてこつた。まあ、とにかく、あたしに任せろ、

「マヤ。必ずドゥムホルク回廊で回してもらひに遊びに行かせよう。

マヤは一度、「あつがとつ、ラウリ」 と答えた。

ある日、ルーニアが「よかつたわね、お姉ちゃん」と声をかけてきた。

ルーニアは「うん」と答えるが、妹の顔を見た。ルーニアは本当に嬉しそうに微笑んでいた。

11 ドゥムホルク

ハバリア地方の雨期は一ヶ月間続いた。

その間に、エラーニア軍は、ハバリア帝国が自国領と見なして占領していた地域の奪回を着々と進め、雨期が終わる頃には、ハバリアの帝都ドゥムホルクのあるハバリア北部以外の地域をすべてその手中に収めていた。もはやエラーニア王国軍の勝利は誰の目にも明らかだつた。わずか五ヶ月前、ギールで王国の存亡をかけた戦いが行われたことが、遠い昔に見た一夜の悪夢のような、かすんだ記憶となりつつあつた。

マヤたちファクティム装甲竜騎兵隊は、休暇が終わった後も、よそへ配置転換になることもなく、雨期が終わるまでザエフ戦線での警戒任務にあたつた。警戒といつても、今のハバリア軍の戦力では、ザエフに駐留するエラーニアの大軍に対し、反抗作戦どころか、ごく小規模なゲリラ戦を行うことさえ難しい。マヤたちがここ半年ほどの間、激戦に次ぐ激戦を戦つてきたことを思えば、この警戒任務は彼女たちにとって、事実上、休暇の延長だつた。たまの晴れ間に竜たちを出撃させるのも、軍務というよりは、愛犬家が飼い犬を散歩させるのとほとんど変わらない、いわば空中散歩のようなものだつた。

そんなのんびりした日々の中、マヤは改めて、自分がこちらの世界に飛ばされてから今までにやつてきたことを思い返してみた。とにかく必死だつた。竜を人よりうまく乗りこなせることしか取り柄もない彼女が元の世界へ帰る手がかりを得るには、必死に戦つてハバリアへ近づく以外、方法がないと思つたからである。その結果、エース竜騎兵と呼ばれるまでになつていたが、彼女自身は軍隊内で

の昇進とか名譽とかそういうものには興味も関心もなかつた。だが、シユラースでナターシャに「マヤはエース竜騎兵になるためにこちらの世界の呼ばれた」と告げられて以降、マヤは時折、自分がエース竜騎兵であることの意味を考えるようになった。

ザエフ攻略戦のとき投入されたエラーニア側の竜騎兵力は全部で十九隊五十七匹。現在、エラーニア王国軍が保有しているすべての竜騎兵力を合計しても六十九匹にすぎない。一方、マヤの撃墜スコアはすでに九十四匹を超えている。もちろん、撃墜スコアとは、敵の竜を一匹撃墜したという事実に對して与えられる数字でしかない。白魔法の発達したこの世界では一度撃墜された敵がすぐに復活してまた立ち向かってくることも珍しくない。だから「九十四匹の敵を撃墜した」というのは、敵を延べ九十回撃墜したという意味であつて、九十四匹の敵をすべて再起不能にした、あるいは「きものにした」という意味ではない。

それでも、マヤはたつた一人で、エラーニア一国が保有する竜騎兵力を遙かに上回る数の敵を、一時的に戦力として使い物にならない状態にし、そのうちの何匹か何十匹かは再起不能にしたわけである。もし仮にエラーニア軍にマヤがいなければ、今ごろハバリア側にはあと何匹か何十匹かの竜騎兵力が余分に存在している計算になる。まして、ナターシャの言つていたようにマヤがハバリア側のエース竜騎兵になっていたとしたら、逆にエラーニア側の竜騎兵力が今より何十匹か少ないことになる。そうなつていたとしたら、エラーニア軍がハバリアへ侵攻するどころか、ハバリア軍がエラーニア全土を蹂躪していたかもしれない。

マヤははふと、エラーニア竜騎兵隊の中で自分に次いで第二位の撃墜スコアを持つ者がいつたい何匹ぐらい撃墜しているのか知りたくなつて、ラウラに訊いてみた。ラウラは二十数匹だと答えた。それ

を聞いて、マヤは背筋が寒くなつた。自分がいかに人間離れしたことをしてかしたのかに、今更ながら氣づき、怖くなつたからである。と同時に、一年前、ニーナやジュートたちがアヴニ村近郊に墜落した自分を血眼になつてまで探しまわっていた理由が、ようやく理解できたのだった。

七月月中旬、ついに雨期が明けた。

エラーニア軍は満を持してハバリア北部への進撃を開始した。アクティム竜騎兵隊も、もちろん進撃部隊の序列に名を連ねていた。きっと、アイリゲン大佐に対するラウラの根回しが功を奏したのだろ。これで、マヤが元の世界へ帰ることができる可能性が何倍にも高まつた。以前、ラウラやオクタヴィイが言つていたように、ドゥムホルクが陥落すれば、ドゥムホルク宮殿はエラーニア軍に接收されてしまうか、最悪の場合、異世界への門を開く装置ごと破壊されてしまうことも考えられる。そうなる前にその装置のある場所へたどり着くには、少なくともドゥムホルク攻略作戦に参加させてもらわなければならなかつたのである。マヤは特に信心深いわけではない。だがこのときばかりは、良い同僚に恵まれた幸運を神に感謝したい気持ちでいっぱいだつた。

エラーニア兵たちの士気も、敵の本拠地、ドゥムホルク攻略を目指す戦いとあつて、俄然、高まつた。しかし、今回はハバリア側も満を持していた。エールデラントからザエフを目指してハバリア南部へ侵攻したときのようにはいかなかつた。戦いは緒戦から苛烈さを極めた。エラーニア竜騎兵隊は数の上では圧倒的だつたが、地中深く掘り下げられた対竜騎兵用陣地に籠る敵を屈服させるのは容易なことではなかつた。敵兵が放つ対竜騎兵用石丸は、十分に訓練されていて狙いが正確だつた。敵の魔道士隊が繰り出す攻撃魔法も強力だつた。

そのうえ、ザエフ戦でマヤたちを苦しめたあの黒い竜騎兵が、行く手に再び立ちはだかった。エラーニア兵たちは、いつしかその強敵を、装甲の色にちなんで「カラス」と呼ぶようになっていた。カラスは一匹か二匹編隊で前線にやつてきては、数匹のエラーニア竜を血祭りに上げて帰つて行つた。ザエフにおいて、エラーニア側は三匹のカラスのうち一匹を撃墜し、残りの一匹にも深刻なダメージを与えたはず。どうやら、ハバリア側はこのひと月の間にダメージを受けたカラスを再生し、更に何匹かを新たに増強したらしい。

とはいっても、ハバリア軍のそういうた奮戦は、あくまでもエラーニア側の攻撃に対する防御として有効だったにすぎない。戦の形勢を逆転させ、ハバリア軍が攻撃側に回ることができるようにするほどの影響力はなかった。カラスたちも、兵力をまだ再建中のせいが、ザエフ戦のときのような組織的な行動をおこなうこともなかつた。それに、勝利を確信して果敢に立ち向かつてくるエラーニア軍に対し、敗色濃厚なハバリア軍は、兵力以前に精神面でも劣勢に立たされていた。

ハバリア軍の戦線は、やがてずるずるとドゥムホルク方向へ下がり始めた。エラーニア軍が進撃を開始して一ヶ月後、ついに戦線は突破された。エラーニアの大軍はなだれを打つてドゥムホルク方面へ殺到した。

数日後、ドゥムホルクはエラーニア地上軍の重包囲下に陥つた。

ファクティム装甲竜騎兵隊は、ドゥムホルク戦線の最前線にまで進出していった。通常、竜騎兵は相棒の竜を地上で休息させている間に敵地上兵の襲撃を受けることがないよう、味方の地上軍によって安全が確保されている場所に拠点を構え、そこから前線まで飛行して任務をこなす。だが、いまだエラーニアに抵抗する意思のあるハリア兵がみなドゥムホルク市内に押し込めらでしまった今となつては、拠点を後方に置く意味などなかつたのである。

夕方、前線司令部のウイル・アイリゲン大佐に呼び出されていたラウラが、ファクティム隊の野営テントに戻つて来た。めいめいテントにたたずんで隊長の帰りを待ちわびていたマヤとオクタヴィとルーミアの三人は、テントの入口に隊長が姿を現した途端、一斉に彼女のほうに目をやつた。ラウラは開口一番、

「『エラーニア王国軍は明日、日の出とともにドゥムホルク総攻撃を開始する。エラーニア竜騎兵隊が敵の竜騎兵力を沈黙させることに成功した場合、ファクティム隊は、地上軍の支援に回る。更に地上軍が市街への突入を果たした場合は、ドゥムホルク宮殿の尖塔に突入し、敵兵の掃討にあたること』との命令を受けた」

と言つた。

すぐさま、ルーミアとオクタヴィが

「良かつたね、お姉ちゃん」

「良かつたですわね、マヤ

と声をかけてきた。

「マヤは」人に「うん」つなぎにしてみせてから、ラウラは

「ありがと」

と言つた。

ラウラは笑顔で応えた。「なに、たいしたことじゃないさ。次の休暇をウィルと過ごす時、ベッドの上でいつもより余計にサービスしてあげればいいだけのことだから」

ルーミアはそれを聞いて真っ赤になつた。

ラウラは、今度は高笑いをしながら「冗談だ。ルーミアには刺激が強すぎたか?」と言つた。

オクタヴィは言った。「これでわたくしたちは、軍務として、堂々とマヤを尖塔の最上部に連れて行くことができるわけですね」

マヤが言った。「ラウラとオクタヴィには本当に感謝してるわ」

ラウラは「感謝するのは、実際に異世界への門を開く装置つてやつを揃んでからにしろ、マヤ」と言つて、ぐるりと背を向け、空を見上げた。

マヤたちも、ラウラの背中越しにテントの入口から空を透かし見た。そこには不気味などす黒い影が、赤い夕空をつんざくようにそり立つている。

「あの尖塔にたどり着くまでに敵のどんな抵抗を受けるか、まだわからないんだからな」

「ラウラのその言葉を、オクタヴィイが補つた。「ここは敵の本拠地ですものね」

マヤは一人の言葉に同意した。「そつね。あたしのことなんかより、まずはドゥムホルク攻略を成功させるのが先よね」

ラウラが言つた。「やつこいつことだ。とにかく、明日は大変な一日になるだひ。今日は早めに休んでじゅうぶん体調を整えておかなきやな」

オクタヴィイは真面目くさつた顔をして、ラウラに「あら。あなたは今夜、アイリゲン大佐のところで過ごすのではないんですか？」と尋ねた。彼女が真面目な顔をするときは、たいてい冗談を言つているときである。

ラウラは「んなわきやねえだろ」と型通りのツッコミを入れてから、ルーミアのほうを向き直り、言つた。「ああ、そつそつ、体調の話で思い出した。ルーミアに頼みがあるんだ」

ルーミアは応えた。「『黄光の術』でしょ？」

「お、察しがいいねえ」

「うん。一応、みんなの月経周期は把握してるから。あと二日でいいで始まるしょ？」

「さすが、ルーミアだ。このドゥムホルク攻略戦が何日続くかわからぬから、念のために遅らせとおこつと思つてな」

「じゃあ、かけるわね」

ルーミアはそう言って、ラウラのそばに歩み寄り、手をラウラの下腹部にかざした。ルーミアの手からは黄色い光が放射され始めた。

十秒ほどして黄色い光が途絶えると、ラウラは「ありがとな。ルーミアの術は確実に効くからこことんだよ。やっぱり魔力が強いからなんだろうな」と言った。

ルーミアは微笑みでそれに応えた後、オクタヴィのほうを向き、「オクタヴィは大丈夫よね?」と尋ねた。

オクタヴィは「ええ、わたくしは大丈夫」と答えた。

ルーミアは、今度はマヤのほうを振り向き、「お姉ちゃんはどうする?」と尋ねた。

マヤは「あたしは……まだ先だと悪い」と答えた。

「あたしたちぐらこの歳の女の子は、まだ周期が安定しないから、もしかしたら、つてことはあると思うけど、でも、前にも書いたように、かけすぎるのには体に良くないから」

「うーん。どうしよう。じゃあ、あたしにも念のためにかけておいて」

「わかった」

ルーミアはマヤの手のひらを下腹部に向け、黄色い光を放った。

妹に術をかけてもらっている間、マヤは以前、妹に聞かされたこの黄光の術についての話を思い返した。なんでも、この術は卵胞ホルモンと黄体ホルモンの量を増やす働きがあるのでという。通常、生理が始まる前にこれらのホルモンは減少するが、妊娠している場合は減少しない。生理が始まる三日から五日前にこの術をかけておけば、体が妊娠したのと勘違いしてしばらくのあいだ生理が起きてないようになるらしい。

そんなことを考えているうち、マヤの胸に寂しさと心細さが込み上げてきた。女として生活するためのいろいろな知識を手取り足取り教えてくれたのは、ルーミアである。だが、向こうの世界に帰つてしまつたら、もうルーミアはない。向こうの世界で女として生きることになるのか、男に性転換してもらえるのかどうかはわからないが、どちらにせよ、男に生まれながら魂を女のものに生まれてしまつた苦悩を、一生、背負つて生きて行かなければならないのには変わりない。そんな苦悩を、向こうの世界の人間に容易に理解してもらえるとは思えない。もし理解してもらえなかつたら、たつた一人でその苦悩に耐えていかなければならぬのである。

たとえそうであつても　マヤは心中で強がりを言った
あたしは元の世界へ帰らなければならぬ。元の自分を取り戻さなければならぬんだ

術が終わると、ルーミアはマヤたち三人の顔を順に見回しながら、「他に調子の悪いところ、ない？　あたしの魔法で治せるよ」つた不調なら、治してあげるけど」と尋ねた。

三人は首を振つた。

ルーニアはそれを見届けて満足げにうなづいた。

だがその時、ラウラが不意にルーニアを睨みつけた。

マヤは不思議に思つて、ルーニアのほうをさわった。ルーニアはラウラとオクタヴィの顔を比べるかのよつてに交互に見つめていた。ラウラとオクタヴィの顔を比べるかのよつてに見つめていた。ルーニアはそれに促されるよつて、おずおずと口を開いた。

「あのね……お姉ちゃん」

マヤは、狐にでもつままれたよつな氣分だつた。「な、なに?」

「お姉ちゃんたちがドゥムホルク宮殿の尖塔に突入する時、あたしも一緒に連れてつてほしいんだけど……」

「え?」

「お願ひ」

妹に突然、意外なことを言われ、マヤはこきさか驚いたが、妹の真剣なまなざしを見つめてこるひちに、驚きよりも切なさの方が大きくなつていつた。マヤとしても、もしあの尖塔の最上階で異世界への門とやらを開くことができ、そのまま元の世界へ帰つてしまつのであれば、尖塔に妹を連れて行つて最後の瞬間まで一緒に過ごしたいのはやまやまである。だが、あの尖塔は危険すぎる。マヤは、戦場の真ん中にルーニアを連れて行けるわけないぢやないと語つて妹の頼みをはねつけよつとした。

ところが、マヤの口からその言葉が出る直前、彼女は一つの強い視線が自分に浴びせかけられていったに気づいた。見ると、ラウラとオクタヴィイがマヤに無言の圧力をかけていたのだった。

マヤは苦笑いをした。「もひすでー、元カソとオクタヴィイを穢柔済みなのね」

ルーミアは素直に「ええ」と答えた。

「まあ、普段は決してわがままを言わないルーミアが、たまに言つとすれば、準備万端、整えてあるのも当然よね。三対一じゃ、勝ち田はないわ」

「じゃあ、連れてつてくれるの?」

「あたしが断つても、どうせラウラが『隊長命令だ』とかなんとか言つて連れていかせる算段になつてるんでしょう?なら、断つても仕方ないじゃない?」

「あらがとう、お姉ちゃん」

ルーミアはやさしげに、マヤの腕にすがりついてきた。

「ただし、敵の竜騎兵隊を沈黙させることに成功してからだからね。それまでまじでおとなしくしているのよ」

「うん」

ラウラとオクタヴィイはルーミアに「やつたな」「つまく行きまし

たわね」と声をかけた。マヤが彼女たちのほうに田をやると、一人

はマヤに、今度は圧力の視線ではなく、祝福と激励の視線を送ってきた。

マヤは一人に感謝の微笑みを返した。

その後、ファクティム隊の野営テントをジユートが訪ねてきた。彼はラウラに敬礼をしながら「ヒラーーニア随一の竜騎兵であるマヤ・クフルツ殿と戦略上、重要な話をしたいので、差し支えなければ彼女の身柄をしばらくお借りしたい」と言つた。

もともとやけ顔のジユートがいつも増してにせにせしながらそういう言ひのを見て、ラウラもオクタヴィもルーミアもすぐに、彼が本当に「戦略上、重要な話」をするためにマヤを呼びにきたのではないことを悟つた。ラウラは「許可しよう」と言つてマヤを送り出した。ジユートは「自分の所属する情報部がこの近くに民家を借り上げており、マヤ・クフルツ殿との会談はそこで行つつもりなので、緊急の場合は呼びにきていただきたい」と言つた。ラウラはジユートに勝るとも劣らぬほどにやにやしながら、マヤに「明日の朝までに帰つてこい」と言つた。マヤは肩をすくめて「すぐに帰つてくれるわよ」と応えた。

ジユートはマヤを連れてテントをあとにし、五十メートルほど離れたところに建つてある一軒の民家に彼女を案内した。見たところ、民家はひつそりとしていて、情報部の人員が出入りした形跡も見当たらなかつた。ジユートはなぜか、玄関の扉を開かず、代わりに家の裏手にマヤを導いた。そして庭に面した窓を開き、そこから窓枠を乗り越えて部屋の中へ入つた。マヤは、窓の中からジユートが差し伸べてくれる手につかまって窓枠を乗り越える時、さつきジユートが言つた「情報部がこの民家を借り上げた」という言葉も嘘だつたことを察した。この家はおそらく空き家のだらう。無断で空き

家に侵入するという行為がこちらの世界でも犯罪にあたることは、
マヤも重々、承知している。それでも彼女は、ジューートを咎めよう
とは思わなかつた。一瞬間だけ、誰かに見つかったらどうしようと
いう懸念が頭をよぎつたが、今のマヤには、彼と一緒に何が起こ
つても怖くはないと言い切れる自信があつた。

マヤが家の床に降り立つや否や、ジューートは彼女を乱暴に抱きし
め、唇を重ねた。マヤはそれに積極的に応えた。ハバリア北部への
侵攻作戦が始まつてからここ一ヶ月、彼と一度も会えなかつたので、
彼女自身も彼に対する欲求が抑えられなかつたのである。

二人がキスの嵐の中に身を委ねている間に、日は落ち、辺りはす
っかり暗くなつていた。緯度の高いこの地域では、夏至から二ヶ月
経つた今の時期でも日没は午後八時頃である。一方、この世界の月
は一年中、午後六時に昇つて午前六時に沈む。キスと抱擁が一段落
した後、窓から空を見上げると、月がもうだいぶ高くまで昇つてい
た。東に面したその窓から月光のシャワーがこぼれ落ちる中、二人
はそれからしばらくの間、とりとめのない話をした。ジューートはマ
ヤに将来の夢などを語つて聞かせた。マヤはうんうんとうなずきな
がら彼の言葉に耳を傾けた。

一ヶ月前、マヤが異世界から來た人間であることを知つていると
彼に打ち明けられた後も、マヤはザエフで何度も彼と会い、そのた
びに、自分は元は男だつたことや、ドゥムホルク宮殿の尖塔の最上
階から異世界に帰つてしまふかもしれないことを正直に話そつと思
つた。だがどうしてもできなかつた。彼女は悩んだ挙げ句、ラウラ
に相談した。ラウラは、男は夢を見る生き物だ、最後まで夢を見さ
せてあげるべきだと応えた。マヤはそれでは裏切りにならないか、
彼を裏切りたくないと言つた。しかし、ラウラは「もし尖塔から
異世界に帰ることを彼に告げたら、彼は絶望のあまり、マヤを監禁

してでもそれを阻止しようとするんじゃないか。そうなつたら、一番可哀想なのは彼自身だ。彼はこの先ずっと、マヤに対しても負い目を感じながら生きることになる。男だったことを打ち明けるのも同じことだ。マヤは言いたいことを言つて満足できるが、彼は一方的に咲じむだけだ」と言つた。それを聞いた時、マヤの迷いは消えた。

マヤは思つた。男が女につく嘘はすぐにばれるが、女が男につく嘘は決してばれないという話を聞いたことがある。まさにその通りだ。せつかく女になつたんだから、悪女のまねをして男をだましてみるのも悪くはない、と。

月が東の空から南の空へ移動し始めた頃、ジューートはマヤにおやすみを言つて立ち去つとした。明日、口の出ととともにジドウムホール攻略戦が始まる。ヒース竜騎兵のマヤは、明日の活躍に備えて今日はゆっくり休んだまつがいいところである。

ところがマヤは、窓枠を乗り越えて出て行こうとするジューートを後ろから抱きしめたのだった。

ジューートは何も言わずにマヤのまつを振り向か、こま一度、彼女を抱きしめてキスをした。

窓が東に面していたため、月光はまもなくその部屋に差し込まなくなつた。真っ暗になつたその部屋で、その夜、何が起こつたのか、知る者は誰もいない。

この地に二十一年間存在し続けたハバリア帝国という国家が歴史上から姿を消すときが近づきつつあることを、誰もが感じていた。

エラーニア兵もハバリア兵も、日の出の時刻の一時間前にはすでに準備を整えていた。エラーニア兵は勝利への期待感と故郷で帰りを待つ家族への想いを、ハバリア兵はハバリア人としての意地と先に逝った戦友への想いを、それぞれ胸に秘め、最後の舞台の幕が開く瞬間をただ静かに待ち続けた。

やがて、地平線の彼方から一筋の日光が地上へと降り注いだ。

その直後、エラーニア兵の弓から、ハバリア軍の陣地に向けて一斉に矢が放たれた。引き続き、魔道士隊の放つ攻撃魔法が陣地の上で破裂する。最後の舞台は、これまでの多くの舞台がそうであつたように、激しく荒々しいシーンで開始された。

マヤたちファクティム竜騎兵隊は、他の竜騎兵隊とともに、日の出と同時にドゥムホルク上空へ飛び立つた。もし敵竜騎兵隊が出てきた場合はそれを殲滅し、全く出てこない、あるいは出てきたとしても兵力が微弱な場合は、地上軍の支援を行うことになつている。そしてもし地上軍がドゥムホルク突入を果たした場合は、昨日、言つていたように、マヤはルーミアを連れて尖塔に向かうことができると。

エラーニア竜騎兵隊の兵力はザエフ戦のときよりも一隊増強されて二十一隊六十三匹、一方、ハバリア側の竜騎兵隊はこれまでの戦いでほとんど壊滅に近い打撃を受けている。と言つても、残存している敵竜騎兵力の中には例の「カラス」がいる。ザエフ戦においてたつた三匹で四十五匹の敵を相手に互角に渡り合つたことを考えれば、たとえ数匹が残存しているにすぎないとしても、彼らを無視す

ることは到底、不可能である。ヒラーーニア軍上層部が一十一隊もの竜騎兵力をこの戦いに投入した理由は、そこにあつた。

マヤは敵の動きに対する警戒を怠らなによつ留意しながら、目の前で威容を誇示している怪しげな黒い尖塔をいま一度、観察した。尖塔はドゥムホルク市街のちょうど中心に位置するドゥムホルク宮殿から、天を突き上げるかのようにそそり立つてゐる。形は、側面から見る限りエッフェル塔のようにな細長い三角形をしているが、断面はエッフェル塔とは違ひ円形である。つまりこの塔は円錐形といふことになる。高さに關しては、こちらもおそらくエッフェル塔と同程度、三百メートルはあるうかと思われた。ただ、エッフェル塔が建設當時の技術の粋をこらした幾何学的な美しさに彩られているのに対し、この尖塔は、表面を覆うのつべりした壁の色といい、そこから放たれる雰囲氣といい、例えようのないまがまがしさに満ちあふれている。マヤの目には、この巨大で異様な塔がこちらの世界の通常の建築技術だけで建築されたようには見えなかつた。もしかしたらこれもヤグソフの異呪のなせる技なのかもしれない。

マヤたちはしばらくの間、ドゥムホルク上空の警戒飛行を続けたが、敵竜騎兵は姿を見せなかつた。日の出前にすでに高空に飛び上がつておいて、日の出とともに上から奇襲してくる可能性も考え、東西南北、および上空のすべての空域に目を凝らした。だが、敵の影はどこにも見当たらなかつた。

マヤは思つた。ドゥムホルクが包囲されるまでに多くのハバリア兵が戦場から逃亡したといつ。ザエフ戦の際にカラスに乗つてゐた竜騎兵がマヤの元いた世界から來た女だつたのは、おそらく間違いない。そのうちの二人は撃墜されて戦死したらしいが、一人はまだ残つてゐるはず。彼女とはできれば戦いたくない。願わくば、彼女にもこの戦場から逃亡していひほし。いや、彼女だけではなく、

すべてのハバリア竜騎兵に逃亡していくほしい。そして戦うことなく安全にルーミアを尖塔へ連れてゆかせてほしい、と。

しかし、そのような淡い期待はまもなく裏切られた。ドゥムホルク宮殿の裏手から、黒い影がゆっくりと浮上してきた。その数は、なんと七つ。しかもそのいずれもが、黒い装甲をまとった大柄で力強そうな竜だった。敵はこそそと隠れて奇襲するどころか、無敗のボクシングチャンピオンがタイトルマッチのリングに姿を現す時のように、あとから堂々と戦場に登場したのである。

竜騎兵戦が開始された。これまでの戦いでカラスに対しても密集体形が有効であるという教訓を得ていたことから、マヤたちはすかさず自分の乗る竜をラウラの竜のほうへ近づけた。

ところが敵は、先ほどの登場時に見せた余裕ありげな態度が決して虚勢ではないことを、すぐに証明した。文字通りあつという間だつた。マヤたちが密集体形への移行を完了したときにはもう、五匹のカラーニア竜が血を噴き出しながら墜落しつつあったのである。

カラーニア竜騎兵たちは多少驚きはしたものの、カラスの並外れた強さは織り込み済みだったので、気を動転させることなく、事前に立てた作戦通りの行動を開始した。すなわち、密集体形を崩さないよう注意しながら、一部の隊がわざと隙を作つて敵の何匹かをおびき出し、敵の陣形がバラバラになつたところを包囲して各個撃破するというものである。第一次ザエフ戦で有効だったこの戦法でもう一度、事に当たるつところである。

だが、今回のカラスは七匹である。そのうち三匹をおびき出したとしても、まだ四匹がおびき出されずに残つてゐる計算になる。それではバラバラになつたとはいえず、各個撃破もできないことにな

る。実際、エラーニアの努力が功を奏して敵は三匹と四匹の一つのグループに割れてしまった。だが、そのどちらのグループをとつても、エラーニア竜三十四分の力を持つてゐるのである。むしろその一つのグループに対処するためにエラーニア側のほうが二つ手に分かれることを余儀なくされ、その結果、却つて攻撃力が分散してしまつた。

しかも、一匹一匹のカラスの動きも、ザエフ戦の時より更に敏捷に、更に複雑なつてゐるように見えた。右斜め上の竜に噛み付いたかと思えば、その後には左後ろ下方に位置を移して別の竜に頭突きを加えた。そのような複雑な操縦ができるテクニックもさることながら、相手の場所を瞬時に判断できる空間認識力、空間解析力は、まさにコンピューター並といえた。もつと不思議なのは、そのような複雑な行動を通信機もなしに他のカラスたちと連携して行えることだつた。マヤは、戦の神が彼らを一本の操り糸か何かで操つてゐるのだろうかと疑いたくなつた。

エラーニア竜騎兵隊は、なんとかしてカラスたちをバラバラにしよつと努力した。だが、カラスたちはそんな努力をあざ笑うかのように、近づくエラーニア竜というエラーニア竜をその驚異的な敏捷性で瞬時に包囲して一匹ずつ血祭りに上げた。エラーニア竜が反撃しようとしたとすると、目にも留まらぬ速さで散開してそれを逃れ、またすぐさま他のエラーニア竜を包囲した。エラーニア竜騎兵隊はほとんどなす術もなく、損害だけを増やす結果となつてしまつた。

一時間後、ドゥムホルク上空には、四十六匹のエラーニア竜と七匹のカラスの姿があつた。エラーニア側がわずか一時間で十七匹も撃墜されてしまつた一方、ハバリア側は一匹の損害も出していなかつたのである。

エラーニアの竜騎兵たちは焦燥感に駆られ始めていた。

マヤは、まずい、と思つた。彼女は元の世界にいたとき、テレビゲームのいわゆる戦略シミュレーションを暇つぶし程度ではあったがプレイしたことがあった。戦略シミュレーションでは、全滅するまで戦えと指揮官（＝プレイヤー）が命じれば、仮想空間の兵は死を恐れることなくその場に立ち止まって戦い続ける。だが現実の戦いではこうはいかない。生身の兵は全滅するまで戦うどころか、通常は味方が敵の三分の一程度にまで減った時点で劣勢を悟つてパニックに陥り、指揮官の意思に関係なく退却してしまうのである。マヤが見る限り、エラーニアの竜騎兵隊がそのようなパニックに陥るのは時間の問題と思われた。もし竜騎兵隊が退却してしまうことになれば、ハバリア側はドゥムホルク上空で局地的な制空権を握ることとなり、カラスたちにエラーニアの地上兵を踏みつぶしたいだけ踏みつぶさせることができる。その際、問題となるのは、ルーニアを前線においてきてしまったことである。マヤは今更ながら、敵の反撃力を甘く見て妹を戦場の近くに連れてきてしまったことを後悔した。

それだけではない。カラスたちのあの実力があれば、ひょっとしたら、誰もがエラーニアの勝利を確信しているこの戦況をくつがえすことも不可能ではない。確かに地上兵力はエラーニア側が圧倒している。だが、前にも述べたように、一匹の竜騎兵は千人の地上兵に相当する力を持つている。ましてや敵はあのカラスである。ここでエラーニア軍が負けたら、ハバリア軍は奇跡的に息を吹き返し、ハバリアからエラーニア勢力を追い出すことも、いや下手をしたら、エラーニア全土を席巻することさえ、荒唐無稽とはいえないくなるのである。

カラスに弱点はないのだろうか。マヤはラウラたちとともに敵を

揺動したり、反撃したり、包囲された味方の竜を救出したりといった行動を繰り返しながら、カラスたちを改めてよく観察してみた。七匹のカラスのうち、一匹はシュラースとザエフでも戦つたことのあるあの女が操縦している（ということは、ザエフ戦のとき撃墜された一匹というのは、どうやらバーバラ・スター・ゼンとそのそつくりさんだったことになる）。残りの六匹のうち、三匹のカラスについては、操縦している女の顔を間近に見ることができたが、他のカラスにはそこまで近づく機会がなかつた。マヤは、近くで見ることができたその三人の顔に、見覚えがあるような気もしたし、ないような気もした。いずれにせよ、彼女たちがマヤと同じ世界から来たものだと断定する証拠は何もなかつた。ただ、今回遭遇したこの七匹を操る女がみな、ザエフ戦の時のバーバラ同様、恐ろしく無表情なことだけは確かだつた。

更に六匹のエラーニア竜が撃墜された。カラスのほうはと言えば、一匹がエラーニア軍内で最も精銳の部隊、エラン第一装甲竜騎兵隊の攻撃を受けて多少のダメージを被つたものの、その行動力、攻撃力には何の影響もなかつた。

さすがのマヤも冷静さを失い始めていた。いま敵の攻撃をよけたとき、ドゥムホルク宮殿の尖塔が彼女の視界に入った。だが、もはや尖塔に突入して異世界に帰るどころの騒ぎではなかつた。彼女は次第に、味方が退却を始めた場合どうやって自分自身の身の安全を図るか、前線に置いてきてしまったルーミアをどうやって救出するかといったことを考えるのにより多くの頭脳を使い始めた。

ふとその時。

尖塔の向こう、遙か遠くの空に一匹の黒い竜が漂つてゐるのを、マヤの目はとらえた。

そつと言えれば　彼女は考えた　一度にわたるザエフ戦の折、
二ーナの乗った竜が、ちょうどあんなふうに、ずっと遠くの空を漂
つていた。いまあそこに見えるあの竜、遠すぎて操縦者が誰なのか
までは判別できないが、もしかしたら、あの竜に二ーナが乗って
いるのだろうか

突然、一匹のカラスがピュームめがけて突撃を敢行してきた。マヤは
持ち前の操縦テクニックでなんとかそれをかわした。彼女は一瞬と
はいえ戦場で他ごとを考えたことを反省した。ザエフではそのせい
で撃墜されるという憂き目に遭っている。今は、遠く離れていて攻
撃してこない敵のことなど放つておいて田の前の敵に集中すべきで
ある。

しかし　マヤはそれでも考えるのをやめなかつた。何かと
ても重要なことが頭に浮かんできそうな気がしたからである　も
しあれが二ーナだつたとして、二ーナはあんなところで一体何をし
ているのだろう。彼女とは一年前、アヴニ村上空で一度、ファクト
イムの上空で一度、戦つたことがある。彼女は竜騎兵隊指揮官であ
ると同時に優秀な竜騎兵でもあつた。いま彼女は、カラスたちの指
揮をとつているのだろうか。それにしては遠く離れすぎている。で
は、ただ部下の竜騎兵たちの戦いぶりを、高みの見物しているだけ
なのか。指揮官が安全などころに身を置いて部下に戦わせるという
状況は考えられなくもない。だが、エラーニア防空網を突破すると
いう危険を冒してまで「男の竜騎兵」を探しにアウスグント地方へ
やつて来るほど勇敢な彼女が、この場面で高みの見物を決め込むだ
らうか

マヤはどうしてもその竜騎兵が気になり、戦場を勝手に離脱した
と咎められるかもしないのを覚悟の上で、その竜騎兵の姿がはつ

きつ見える位置までピムを近づけてみた。

薄緑色の派手な衣装をまとつたあのいだたち、やはり一ーナの可能性が高い。竜の首の付け根にまだがらず、背中にぼーっと突つ立つてゐるあの姿勢も、ザエフのときと同じだ。ただ、いまこつやつて改めて見てみると、彼女はそこに突つ立つて、単に映画鑑賞のように受動的に何かを眺めているわけではないよつた気がする。それを証拠に、彼女の肩や腕が小刻みに動いている。彼女のあの目、あれはどちらかといふと、離れたところにある何かに対しても能動的に働きかけようとしている目に見える。例えば……そう、例えば、ルアーフィッシングとか、ラジコンヘリの操縦をしてゐるときのようだ……

その瞬間、マヤの頭に、ついに「ある考え方」が浮かんだ。

それは途方もない「考え方」だった。思いついた彼女自身にさえ大きな衝撃を与えるにはおかなかつた。彼女はその「考え方」の信憑性を裏付けるべく、今までに彼女がこちらの世界で見聞きし、体験してきたことを思い返してみた。

飛行機を操縦中にこの世界に呼び込まれたこと、

一ーナやジユートたちがアウズゲント地方で自分を探しまわつていたこと。

ナターシャにおかしな薬を飲まされ拉致されそうになつたこと。

ザエフ上空でバーバラ・スター・ゼンかもしれない敵と戦つたこと。

それらすべてが同じベクトルを持ち、ある一点を指し示してるように思えた。その一点が何なのかに気づいた時、マヤは迷うことなく二ーナとおぼしき敵竜騎兵めがけてピムを突進させていた。

敵竜騎兵は、ピムがすぐそばまで近づいたのに気づき、慌てて竜の背中に座り直して竜を操縦する姿勢をとった。この反応は、ザエフ戦で二ーナが示した反応と同じだった。マヤはすでに、その竜に乗っている竜騎兵が間違いなく二ーナであることを確信していた。敵竜騎兵はピムの頭突きを間一髪のところでかわした。ここまでザエフ戦の時と全く同じ展開だった。しかし、ザエフではこの後、二ーナがピムから少し離れたところにとどまつてマヤに話しかけてきたのに対し、今回は、ピムからどんどん遠ざかろうとした。

マヤはすかさず敵竜騎兵 二ーナを追撃した。それでも二ーナは反撃するそぶりを見せず、ただピムの突撃から逃れようとするだけだった。一年前、ファクティム上空であれだけ積極果敢にマヤたちを攻め立てた彼女からは想像もできないほど消極的な反応だった。彼女がこのような反応を示す理由があるとすれば、それは何か反撃に移ることができない事情があるからとしか考えられない。マヤはもう一度、二ーナの拳動を伺つた。二ーナが目の前のピムに半分の神経しか集中していないのは明らかだった。では残りの半分はどこに集中しているのか。マヤにはもうそれがわかつていた。

マヤは振り返り、エラーニア竜騎兵隊とカラスが交戦している空域に目をやつた。カラスのうちの一匹がエラーニア竜の突撃をくらつて墜落しつつあるのが見えた。

ピムは更に二ーナの乗る竜を執拗に追い回した。しばらくしてからマヤが再びカラスの動向を確認すると、すでにカラスは五匹に減っていた。

マヤはなおも二ーナを追撃し続けた。二ーナは相変わらずマヤに半分の神経しか集中していないように見えたが、それでも、エース竜騎兵であるマヤの追撃をかわし続けることができるのには、さすがだった。とはいえ、二ーナの表情に次第に焦りの色が濃くなりつつあるのも確かだった。

ピムの何度もかの頭突きをかわした時、二ーナはついにある決断を下したような表情を見せた。マヤはその表情の意味するところを察し、三たび、カラス対エラーニア竜の戦いが行われているはずの空域に視線をやった。案の定、五匹のカラスたちは、先ほどまで相手にしていたエラーニア竜たちに背を向けて、まっしぐらにマヤのほうへ向かつて来つつあった。

あの五匹に囮されたら、マヤといえどもひとたまりもない。だが、二ーナにあと一歩のところまで迫つてこないまじのタイミングで追撃をやめてしまうなど、Hース竜騎兵のやることではない。マヤは一か八か、持てるすべての力を振り絞つて、二ーナの乗る竜に突撃を敢行した。

ピムの頭は二ーナの乗る竜の腹にもろに食い込んだ。二ーナの竜は苦しそうなうめき声を上げ、地上に落下し始めた。二ーナはその背中からマヤを睨みつけ、

「おのれ、マヤ。貴様、またしても！」

と、大きな叫び声を上げた。やがて、二ーナの竜の姿は二ーナともども、ドゥムホルク郊外の森の中に消えた。

マヤはそれを見届けるや否や、すぐさま五匹のカラスたちの動き

を確認すべく振り返った。カラスたちはピムの近くまで迫ってきていた。マヤは一応、防御態勢をとった。しかしカラスたちは、マヤの予想通り、彼女のいる場所を通り越して、そのまままっすぐ飛び去ってしまった。おそらくカラスたちは、こちらに向かう時に背中の竜騎兵からマヤのほうに向かつて飛べと命じられたきり何の命令も受けていないため、ただまつすぐに飛んで行ってしまったのだろう。

いまマヤのそばを通り過ぎて行つた竜騎兵の中に、シュラースとザエフでも会つた例の女がいた。シュラースで会つたときからずつと、どこかで見たことがある顔だとは思つていたが誰なのがどうしても思い出せなかつたその女。マヤはこの時、ようやく誰なのがわかつた。いや、正確に言つと、マヤはそんな女は知らない。ただ、その女の顔からもう少し皮下脂肪をとつて精悍な顔つきにし、肌の色から白みを取り去り、更に口の周りに鬚をたくわえさせれば、アクロバット飛行競技ヨーロッパ選手権チャンピオンのジュリオ・マルティーニというイタリア人の顔になることに気づいたのだった。

二十九匹ほどのヒラーニア竜がカラスたちを追いかけて行つた。カラスたちが何らかの理由で突如、撤退を始めたものと思い込み、追撃に移つたらしい。

ほどなく、ラウラとオクタヴィもマヤのところにやつてきた。ラウラはしきりに首を傾げながら、「マヤに、いつたい何があつたんだ? カラスどもはなぜ撤退したんだ?」と尋ねた。マヤは「詳しいことは後で」とだけ答え、すぐさまピムをドゥムホルク市街地の周縁部、ヒラーニア地上軍とハバリア地上軍が激戦を繰り広げている戦場へと向かわせた。敵竜騎兵を沈黙させることに成功したので、事前の計画通り、地上兵の支援に回ることにしたのである。

もともと数の上で圧倒的な兵力を誇るエラーニア地上軍が竜騎兵の支援を受けたこの状況は、まさに鬼に金棒という言葉がぴったりだった。市街地周縁部の陣地に籠るハバリア軍は、ハバリア人の意地と誇りにかけて全力を尽くして応戦した。だが、それも長くは続かなかつた。

エラーニア地上軍はほどなく周縁部陣地の突破を果たし、ドゥムホルク市街地へ侵入を開始した。ハバリア兵は市内各所で建物内に潜んでいまだ抵抗を続けていた。とはいえ、エラーニア兵の誰かがドゥムホルク宮殿にエラーニアの旗を掲げてしまえば、帝国は名実ともに消滅する。その時がもうすぐそこまで迫つていてことを予感していないう者は、もはや一人もいなかつた。

マヤたちファクトタイム竜騎兵隊は、すでにピムの背にルーミアを乗せて尖塔へ向けて飛行中だつた。

ラウラとオクタヴィイは、カラスたちが唐突に撤退してしまった理由をマヤから説明された。その説明にはこちらの世界の人間には難解なところがあつたため、一人とも完全には理解できなかつたが、マヤがたつた一人でエラーニア竜騎兵隊を窮地から救つたことだけはわかつた。二人はそんなとてつもないことをしでかす同僚とともにに戦えたことを、心から嬉しく思い、誇りに感じた。

二人は思った。マヤが異世界に帰れるよう自分たちが手を尽くすことに対して、マヤは何度も何度も感謝の言葉を口にした。けれども実際には、自分たちがマヤから得たもののほうが多いような気が

する。そんなマヤに報いるためにも、なんとしてもマヤを無事に尖塔の最上階に届けなければならない、と。

ラウラは目の前に迫りつつある不気味な尖塔を睨みつけながら、「マヤが異世界へ帰るその瞬間まで、油断は禁物だぞ」と、隊長らしい言葉を隊員たちにかけ、警戒を促した。

マヤたちは隊長に言われた通り、敵の残存竜騎兵が襲撃してこないかと、前後左右と上方と下方を見回してみた。上空にはエラーニア王国軍の紋章を付けた竜の姿しか見当たらなかつた。だが下方、ドゥムホルク宮殿前の広場に、黒い津波のようなものが押し寄せて来ているのが目に入った。どうやら、エラーニア兵の姿を見てようやくハバリア帝国の敗北を確信したドゥムホルクの民衆が、宮殿前広場に立つ皇帝の像を引き倒そうとしているらしい。

更に地上を見渡してみると、市街各所で民衆が街路に繰り出し、人だかりを作つていてるのが見えた。その中にはエラーニア軍の兵士の姿も見て取れた。もちろん戦闘している様子はない。民衆たちはエラーニア兵を解放者として迎え入れ、ともに喜びを分かち合つているのである。民衆とはしたたかなものである。こうすることで、この間までの民族対立はみんな皇帝のせいだ、俺たちは必ずしも賛成していなかつた、とでも主張しているつもりなのだろう。

中には喜び方を間違つている者たちもいた。金持ちの屋敷と思われる大きな建物から、金目の品を持ち出そうとしている。しかも悪のりした数人のエラーニア竜騎兵が、相棒の竜を使って屋敷の壁をぶちこわし、盗人たちの手助けをしている姿も見える。

ドゥホルク市内は今や完全に無秩序状態だった。さすがに盗みのよな明らかな悪事を働く者の数は多くはなかつたが、ドゥムホル

ク宮殿やその周辺の皇室関係とおぼしき建造物の破壊に手を貸すものはかなりの数に上つた。一般的のエラーニア兵は、敵の親玉の所有物を壊すことを犯罪とは見なしていないようだ。その親玉の起こした戦せいで今まで彼らがどんな苦労をしてきたかを思えば、無理からぬことではあった。

ラウラはしかし、「まずい」とつぶやいた。マヤもオクタヴィイも口では何も応えなかつたが、隊長の言葉の意味は理解していた。一部の民衆が、宮殿のど真ん中にそびえ立つ尖塔の根元にまで押し寄せ、破壊活動を開始したのである。しかも、「ご丁寧なことに」、数匹のエラーニア竜が「正義」の名のもとに行われているその活動に加わっていた。この尖塔がいくら巨大でも、数匹の竜が頭突きや体当たりを繰り返せば、いずれ壁に穴があく。そうなれば、尖塔は直立するためには必要な強度を失い、下手をしたら横倒しになつてしまつかもしれない。

民衆は今、狂乱状態にある。彼らに尖塔を破壊しないよう頼みに行くのは、時間の無駄なだけでなく、身の安全という観点からも無意味なことのように思えた。

「尖塔の中へ急げ！」

隊長が言った。マヤとオクタヴィイは力強く「ええ」と応えた。

彼女たちはもうすでに、尖塔のすぐそばまで到達していた。そこは地上から一百五十メートルほどの高さの場所だつた。彼女たちは念のため、尖塔の周りをぐるつと一周してみた。人間が中に入るための設備が見当たらないことを確認すると、ラウラは相棒の竜に、尖塔の壁に弱めの頭突きを加えるよう命じた。

幸いなことに、たった一回の頭突きで人ひとりが通れる穴をあけることができた。おそらく、尖塔全体が重くなりすぎると直立させることができ困難なことから、上に行くほど壁を薄くして軽量化を図っているのである。いずれにせよ、地上一百五十メートルのこの場所を選んだのは正解だった。これ以上高いところだとしたら、竜の頭突きによって壁に大穴があき、塔がそこから折れ曲がるようにな倒壊していくにちがいない。

隊長はすぐさま、穴の中に竜の頭を突っ込ませ、竜の長い首を伝つて穴の中に入った。彼女がまず塔の内部に侵入し、安全かどうか見極めるためである。しばらく後、彼女は穴から顔を出してマヤに手招きをし、それから相棒の竜に塔の付近を飛び回つて待つよう命じた。

ラウラの竜が飛び去つた後、マヤはピムを穴に近づけた。そして、ラウラがやつたのと同じようにピムに頭を穴へ入れさせ、まずルーミアに先に穴から中へ入るよう言つた。ルーミアは立ち上がり、万が一にも足を滑らせたりしないよう一歩一歩足取りを確かめながら、ピムの首を通つて尖塔にあいた穴のほうへ歩み寄つた。

と、その時。

ラウラの竜が穴をあけた場所より十メートルほど高いところで、突然、尖塔の壁に一メートル四方ほどの大きさの出口が開き、中から薄緑色の物体がピムの背中めがけて落下してきた。

マヤはびっくりして、自分の背後に落ちたその物体が何なのか確認すべく振り返つた。そこにはマヤと同じぐらいの歳の少女が、世にも恐ろしげな表情で立っていた。

「——ナ——」

マヤの上づた叫び声に、——ナは

「マヤ……貴様だけは……絶対に許さん」

と応えながら、腰から短剣を抜きはなつた。

下手にピムを動かすとルーミアが落下してしまったため、ピムを揺らぶつて——ナを振り落とすことはできない。しかもマヤは今、——ナに背中を向けて座つてている。腰の小剣を抜いて振り向く間に——ナに切り裂かれてしまつ。ラウラに助けを求めるよつこも、彼女はすでに尖塔の中に入っている。

——ナはにたにたと嫌らしい笑いを浮かべ、短剣を振りかざしながら、マヤににじり寄つてくる。万事は休したと思われた。

ところが、その次の瞬間。

上方から再び何かがピムのほうへ落下してきた。だが今度の落下物はピムの背中の上に乗っかりはしなかつた。その落下物は——ナを絡めどるかのようにまとわりつき、そのまま——ナともどもまつすぐ地上へ向かつて落ちて行つたのである。

マヤは一瞬、何が起つたのか理解できなかつた。首を後ろにひねつて視界の片隅に——ナを見ていたため、あまりはつきりとは見えなかつたからである。しかし、ピムの頭の上に立つて視界の正面で一部始終をつぶさに見つめていたルーミアには、いま起つたことが何だつたのかはつきりと理解できた。

ルーニアは顔面蒼白になつて「オクタヴィー！」と叫んだ。

マヤはピムの少し上方を飛んでいたはずのオクタヴィーの竜を見上げた。竜の背中にオクタヴィーの姿は見当たらなかつた。慌てて視線を下方へ移してみると、落下物はいままさに地上へ激突しようとしていた。

ルーニアの叫び声を聞きつけたラウラが、尖塔の壁の穴から顔を出した。彼女はマヤたちが地上を見て呆然としている様子と、オクタヴィーの竜に誰も乗っていないことから、すぐに状況を察し、

「何があつた！？」

と、声を張り上げた。

ルーニアが答えた。「オクタヴィーが……オクタヴィーが、敵の竜騎兵と一緒に地上へ……」

マヤはすぐに我に帰り、いま何をなさなければならぬか悟つた。「ルーニア、ピムの背中に乗つて！」

まだ茫然自失状態のルーニアは、姉の言葉の意味もわからぬまま、ただ命じられた通りピムの首元に背中の上へ戻ってきた。マヤは妹を自分の背後に座らせた後、ピムにオクタヴィーが墜落した地点に向かつて下降するよう命じようとした。

だがその時、ラウラが塔の壁の穴から這い出し、ピムの頭の上に飛び移ってきた。そして、首を大きく左右に振りながら、

「ためだ、マヤ」

と叫んだ。

マヤは隊長の行動の意味がわからなかつたが、とにかくオクタヴィイを助けに行きたかつたので

「ラウラ、ビィー

と乱暴に叫び返した。

ラウラは「オクタヴィイを助けに行つている暇なんかない。見ろ」と言つて、マヤに尖塔の根元あたりを注目するよう促した。

マヤは言われた通り、その場所に目をやつた。その周辺で破壊活動に従事している竜の数が先ほどの倍、五、六匹にまで増加しているのが見て取れた。

ラウラは続けた。「やつら、この尖塔を本気で横倒しにするつもりだ。急がないとおまえは異世界に帰れなくなつてしまふぞ

マヤは言い返した。「そんなこと、オクタヴィイの命に比べたら小さなことだわ。そこをどいて、ラウラ。ルーミアを連れて行つてオクタヴィイに白魔法をかけてもらつんだから

「落ち着け、マヤ。白魔道士はルーミア以外にもいる。エラーニアからたくさんの軍属白魔道士が来ているのは知つているだろう?それに、今ならハバリア人の白魔道士だつてエラーニア人を助けるのを拒んだりはしない

「だけど、こんな高さから落ちたら、オクタヴィイの体はひどい損傷

を受けて、魂がすぐにあの世に行ってしまうわ。あたし、マキナスの森に墜落したときそなりかけたもの。だから今すぐ、今すぐに助けに行かないと」

「だが、おまえはザエフで撃墜された時、こじよりもっと高いところから落ちた。その時、落ちた場所が敵の前線近くだったので、味方の白魔道士隊に救出されるまで一時間近くかかった。それでもおまえは死ななかつたじゃないか」

「でもオクタヴィは死ぬかもしれない」

するとラウラは、頑固親父のよつこマヤを怒鳴りつけた。「おまえはオクタヴィのことが信じられないのか！」

その語氣があまりに強かつたので、マヤは反論できなかつた。

ラウラは続けた。「オクタヴィは体つきはスレンダーだが、決してひ弱じやない。あいつが今までに体の不調を訴えたのを聞いたことがあるか？ な？ 信じてやろ？ あいつのことを。あいつの体力を、生命力を」

「ラウラ……」

「それにあいつは、おまえが異世界に帰れる可能性を放棄してまで自分を助けたと知られても、喜ばないどころか、逆に、信じてくれなかつたことに対して腹を立てるかもしれない。ザエフの温泉宿でもそういうことがあつただろ？ あいつはそういう奴だ。あいつを本気で怒らせたら怖いぜ。今度こそ、本当に結婚させられちまうんじゃないか」

ラウラはそう言って、マヤにウインクしてみせた。

しばらくの間、沈黙があつた。

不意に、ルーニアが背後からマヤの肩を叩いた。マヤは振り向いた。妹は小さくうなずいてみせた。

マヤは再び口を開いた。その表情は笑顔だった。「そうね。いくらなんでも結婚せられるのはごめんだわ。あたし、信じる。オクタヴィイを信じてあげることにする」

「ラウラは「そうだ。信じよう」と応えた。

「急ぎましょ、ラウラ。尖塔の最上階へ。異世界の門を開く装置のところへ

「よし、行くぞ」

隊長のその言葉は、ファクティム竜騎兵隊が進むべき方向を指示す矢印を、彼女たちの心の中にしっかりと刻み付けた。彼女たちはもう一度と迷うことはなかつた。

マヤは一応、ピムにこの周囲を飛び回つて待つよう命じ、ラウラとルーニアに先に壁の穴に入らせてから、自分も穴をくぐり抜け、尖塔内部へ侵入した。

見ると、内部は、不気味に黒光りしている外面とは対照的に、まぶしいほどに白で覆われていた。と言つても、その白色は清楚な美しさを醸し出すようなものではなく、むしろ冷たさ、無機質感を連想させた。外壁とは別の種類の不気味さ、妖しさを放つていたのだ

つた。

すぐさま、ラウラが「こっちだ」と言つて、付近の壁に埋め込まれている白い扉を指さした。彼女が扉を開いてその大きな体を扉口の中へ滑り込ませたのに引き続き、マヤとルーミアもその中へ踊り込んだ。

中は、白い壁に囲まれた白い螺旋階段になつていた。天井全体が鈍い白色光を放つて階段や壁を照らしていたため、白が強調されすぎて、より一層、無機質に見えた。

三人はラウラを先頭に、マヤを殿にして螺旋階段を早足で登り始めた。階段は上へ上へとどこまでも続いているかのように思えた。視界には白い壁と白い階段、耳に聞こえてくるのは自分たちの足音と呼吸音だけ。彼女たちは次第に、催眠術にでもかかつたような気分になつてきた。

数分後、彼女たちはようやく単調さという名の苦痛から解放された。解放してくれたのは目の前に立ちはだかる大きな黄色い物体だった。

「久しぶりだな、マヤ」

それは、黄色い派手な装束を身にまとつたアマゾネス、モーラの姿だつた。彼女は去年の冬、デインン皆近くの森でサハラカンを倒すのを手伝ってくれた時のようだ、優しい微笑みをマヤたちに投げかけていた。

「モーラー！」

「マヤは、ラウラとルーニアの背中越しにモーラを見上げながら、驚きの声を上げた。

モーラは応えた。「ナターシャがずいぶんと世話をなつたらしくな。天国の姉に成り代わつて感謝しておくれよ」

マヤは言った。「モーラ、お願ひ、あたしたちをこの塔の最上階に行かせて。時間があまりないの。あたしどうしても、どうしてもそこへ行かなきやいけないの」

「異世界への門を開くために、か?」

「そう。お願ひ」

モーラの目が、急に激しい光を放ち始めた。エラーニア王宮前でマヤと立ち合つた時のあの目の光と同じだった。「気の毒だが、それはできない」

マヤは「どうして?」と声を張り上げた

モーラは応えた「俺は近衛アマゾネス兵団の指揮官だ。たとえ部下を一人残らず失つてしまつたとしてもな。俺はこの戦いで、部下五百人の命と引き換えにたつた一万人のエラーニア兵しか血祭りに上げられなかつた。ハバリアで最も腕の立つアマゾネスたちを集めた部隊を任されていたというのに。だが、こんな情けない指揮官の俺でも、部下たちは慕つてくれていた。勝利を信じて戦い続けた彼女たちのためにも、俺は最後までエラーニアと戦い続けなければならぬ」

マヤは言ひ返した。「もう戦は終わつたわ!」

モーラは腰から短剣を抜きながら「俺にとつてはまだ終わっていない！」と叫んだ。そして短剣の切つ先を、彼女の目の前に立つているラウラに向けた。まずは手近な敵から片付けようといつのである。

ところがラウラは、何を思ったか余裕たっぷりに「ふふん」と鼻で笑い飛ばした。「ヤグソフ四姉妹のモーラか。相手にとつて不足はないな」

モーラはラウラを睨みつけた。「なに？」

「あたしはたまたま竜を操縦する能力があつたから竜騎兵隊に入つたが、本当は格闘術も得意なんだぜ」

「ほう。ハバリアグマを絞め殺したこともあるこの俺とやり合おうとこいつのか。おもしろい」

「得意の長槍を振り回せないこんな狭い階段を待ち伏せ場所に選んだのは間違いだつたな」

「まあけー」

モーラはそう叫びながら、渾身の力を込めて短剣を繰り出した。

するとラウラは、短剣を持つモーラの右腕を下から取り、彼女の突進していく勢いを利用して後方に投げ飛ばした。

マヤとルーミアは飛んでくるモーラの巨体をよけるために、その場にしゃがみ込んだ。ものすごい衝突音がマヤの後方から聞こえて

きた。マヤとルーミアが振り返ってみると、モーラはマヤより少し下の階段の上で大の字になっていた。

ラウラは得意げに「格闘戦は力が強いほうが必ずしも有利とは限らないんだぜ」と言つた。

しかし、モーラはすぐにその場で体を起こし、よろよろとではあつたが立ち上がり始めた。驚異的な体力だつた。普通の人間なら五メートルも投げ飛ばされて固い床に全身を強く打ち付ければ、脳しんとうぐらには起こすだろう。

それを見て、ラウラはこのアマゾネスはやはり一筋縄では行かない相手だと悟つた。彼女はマヤとルーミアに「先に行け」と命じた。モーラはすでに立ち上がり、マヤたちのまつへにじり寄つてきていた。

マヤは一瞬、躊躇した。ラウラがあのモーラと戦つて無事でいるのかどうか心配になつたからである。

だが、ラウラはマヤの心の声が聞こえたかのように「大丈夫だ。あたしを信じる」と声をかけてきた。

マヤは先ほど胸の奥に、進むべき方向を示した矢印が刻み付けられたことを思い出した。彼女はもうためらわなかつた。

「わかったわ、ラウラ」

彼女はそう言つて、ルーミアの手を引いて階段を駆け上がり始めた。そして、じょじょに下から格闘が再開された音が聞こえ始めた。

た時、足を止めずに後ろを振り返り

「あつがとう、ラウラ」

と叫んだ。

上へ進むにつれ格闘の音は聞こえなくなり、行く手は再び無機質さと単調さだけに支配された。

白い階段と白い壁の連続。

マヤとルーニアの感覚は半ば麻痺した。二人は次第に、自分たちがいま何をやつていてるのか忘れそうになつた。頭に浮かんでくるのは、ずっと前の楽しい思い出ばかりだった。平和に満ちたアヴィー村で本当の姉妹のように何気ない日常生活を送っていたあの一週間。たつた一週間だけだったにもかかわらず、今ではなぜか永遠の長さを持つ思い出のように感じられた。

二人は不思議な気分だった。彼女たちがいつしょに過ごしたのは、わずか一年あまりという短い期間にすぎない。なのに、本当の姉妹以上に強い姉妹の絆で結ばれている二人。しかも姉は異世界人で元は男である。そんな二人が今、手を取り合つて階段を上っているなぜ？姉が異世界に帰るため。お別れをするため。なぜお別れしなきやいけないの？なぜそんなに仲の良い姉妹が離ればなれにならなきやいけないの？それが姉の望みだから。それはおかしいんじやない？本当に強い絆で結ばれているならずっとといつしょにいてあげるべきじゃないの？

マヤはルーニアの手を強く握りしめた。ルーニアはマヤの手を握り返した。絆で結ばれているから、だからこそ別れられる。だが

「いや離ればなれでいられる。決して切れない絆だから

どこまでも続くかと思われた白い階段は、やがて一人の田の前で途絶えた。最後の一級は白い扉の前にあった。マヤはルーミアを一步下がらせてから、腰の小剣を抜き、ゆっくりと扉を開いた。

そこには十五メートル四方ほどの広さを持つ大きな部屋だった。

マヤはぐるりと辺りを見回してみた。この部屋も壁や床や天井が白で統一されている。床から天井へ向かって伸びている四本の柱も白色である。壁には大きな窓が付いており、そこからバルコニーへ出てゆけるようになつていて。今まで登ってきた螺旋階段が無機質で寒々しい感じだったのに対し、この部屋は壁や天井が白い美しい装飾品で飾られているため、少なくとも無機質さはなかつた。だが、それらの装飾品はあまりにも纖細すぎ、現実の世界のもののようにはないかのように見えた。

姉に引き続き、ルーミアもその部屋に足を踏み入れた。マヤは敵の気配はないと判断し、とりあえず小剣を腰の鞘に納めた。そして再びルーミアの手を引いて、部屋の中央へ進んだ。

そのうち一人は、部屋の片隅に白い大きな構造物が置いてあるのを目についた。近づいてみると、それは天蓋付きのベッドだった。二人は手をつないだまま、更にベッドのすぐそばまで歩み寄り、中を覗き込んだ。

ベッドには初老の男性が目を閉じて横たわっていた。豪華な装束に身を包み、手は宝石をちりばめた短い杖を握ったまま、胸の上に置いている。深い眠りについているのか、微動だしない。

「マヤはルーニアの顔に手をやつた。妹ならこれが誰なのか知つてゐるかと思ったからである。しかしルーニアは姉の言おうとしたことを察し、マヤが口を開く前に、ただ首を左右に振つてみせた。

すると、突然。

彼女たちの背後から

「ヤグソフ・ダカイ」

といふ女の声がした。

マヤとルーニアは慌て後ろを振り返つた。だがそこには誰の姿も見当たらなかつた。

女の声が再び聞こえてきた。

「それはヤグソフ・ダカイ。ハバリア皇帝付きの僧侶。そしてこの尖塔の本当の主」

声は、どうやら柱の陰から聞こえてきているらしい。マヤはその柱の向こうにいると思われる声の主に向かつて

「誰?」

と叫んだ。

ところが、声の主が次に発した言葉はマヤを驚嘆させずにはおかなかつた。

『久しぶりね、山矢君』

その言葉は日本語であるばかりでなく、こちらの世界ではルーニア以外、誰も知らないはずの名前を呼んでいたからである。

声の主はゆっくりと柱の陰から歩み出た。それは魔道士服を着た若い女だった。ただ、その魔道士服の色は、華美な色を避ける傾向のある魔道士たちの醜わしに反し、非常にナバナらしいピンク色だった。

マヤはその女の顔に見覚えがあると思つた。と言つても、バーバラ・スター・ゼンらアクロバット飛行パイロットとは違い、この女には直接、何度も会つて言葉を交わしたことがあるよつた気がした。それを証拠に、彼女の声にも聞き覚えがある。

女はまた日本語で

『あら、つれないわね。かつての恋人の顔を忘れてしまつなんて』
と言つた。

この鼻にかかつた甘つたるいしゃべり方、こんなしゃべり方をしていた人物と言えば、確か……

『といつても、あたしが勝手に恋人気取りであなたにつきまとつてただけだけどね』

マヤはようやく思い出した。

「ハ木沢……ハ木沢ソーニヤ！」

そう、山矢健太の通っていた高校の一年先輩で、スペイン人だがイタリア人だかのハーフと言っていた、大人っぽい女子高校生。なんだかんだと理由を付けては山矢につきまとっていた、あのハ木沢ソーニャ。この女の顔、この女の声、この女のしゃべり方、間違いなく彼女だ。

ソーニャは日本語で話しつづけた。《ようやく思い出してくれたのね、山矢君》

マヤはソーニャにつられて日本語で言葉を返した。もちろん男言葉である。マヤは日本語を使っていたとき男だったの、男言葉でしかしゃべり慣れていないのである。《そうか……おまえ、あのハ木沢……か》

《元気にしてた?》

《まあ……な》

《あら、あたしと話すときはやつぱりぶつきりぼうになるのね。それとも、日本語じゃうまくしゃべれない?》

《一年以上……話して……ない……から》

《無理しなくてもいいわよ》

《いや……大丈夫……だ》

《本当に?》

『ああ。だが……おまえ……なんぞ、J……JJなど……JNなど……い……るんだ?』

ソーニャは見るに見かねて、エラン語で「大丈夫じゃないみたいね。エラーニアの言葉で話しましょ?」と言つた。

マヤはすぐにアウスグ語で「でも、ソーニャ、あなた、どうしてこんなところにいるの?」と言つて直した。アウスグ語はエラン語とアクセントや一部の日常用語が異なつてゐるだけなので、ちゃんと通じる。

ソーニャは嬉しそうな顔をして「やっぱりそのしゃべり方のほうがいいわ。あなたみたいなかわいらしい女の子が男言葉で話すなんて、なんか変だもの」と言つた。

マヤはかわいらしいと言われたことにちょっと照れながら「あなたみたいに美人でスタイルのいい人にかわいいとか言われても嫌みにしか聞こえないわ」と言い返した。

「あら、エラーニアの言葉でなら、ちゃんと[冗談も言えるのね]

「冗談のつもりはないんだけどな。だけば、アウスグ語がちゃんとしゃべれるのには理由があるのよ。ルーミアに特訓してもらつたの。紹介するわ。これ、あたしの妹、ルーミア」

姉にそう言われ、ルーミアはソーニャに「はじめまして」と挨拶した。

ソーニャは「はじめまして、ルーミア」と応えた。

「マヤはここで、先ほどの質問を繰り返した。「さつきの質問だけ
ど、ソーニャ、あなた、どうしてここにいるの？あなたもこちらの
世界に引き込まれたの？」

ソーニャはしかし、妖しく微笑んだだけだった。

その時、マヤはふと疑問に思った。ソーニャはなぜ、女の姿をして
いる自分が山矢健太だとわかったのだろう。

ソーニャはいま一度、マヤに妖しい微笑みを投げかけてきた。

彼女の顔を見ていのちに、マヤはもう一つ、重要なことを思い
出した。山矢健太がこちらの世界に飛ばされたとき紫色の光を放つ
たあの怪しげなペンダント、あれは確か、ソーニャから手渡された
ものではなかつたか？

ソーニャはまた一段と妖しく微笑みながら、よつやく先ほどの質
問に答えた。「あたしがここにいるのは、ここがあたしの家だから
よ」

「家？ここが？」マヤはその微笑みの妖しさに圧倒されながらも、
おそるおそる尋ねた。「ソーニャ、あなた、こちらの世界の人間だ
つたの？」

「そうねえ、こっちの世界の人間かと訊かれていいえと答える理由
はないわね。ここ以外の場所を自分の家だと思ったことがないのは
確かだし」

「でも……さつきあなたは、ヤグソフ・ダカイって人がこの塔の主
だって言つたじやない」

ソーニャは答えた。「ええ、その通りよ。だつてヤグソフ・ダカイは、あなたたちが怪僧ヤグソフって呼んでいるあの人は、あたしの父だもの」

マヤは愕然となつた。「それって、まさか、まさか……」

ソーニャはマヤのその質問に直接は答えなかつた。「妹たちがいろいろお世話をなつたそつね」

「妹……。二ーナ、モーラ、ナターシャのことね。ソーニャ、あなたは……あなたはヤグソフ四姉妹の一人だつたのね。ソーニャ・ヤグソフだつたつてことなのね」

「ふふ。その呼び方は正しくないわ、山矢君。知つてゐるでしょ。ハバリアでは名字が先で名前があと、しかも、女は名字の最後に a をつける習慣があるって」

「ヤグソフ (Y a g u s o v) ……ヤグソワ (Y a g u s o v a) ? ヤグソワ・ソーニャ……。ハ木沢ソーニャー」

「あたしはずっと本名を名乗つてたのよ。まあ、漢字を並べてはめるためにちよつと変えたけど」

「そう……ひと……だつたの」

ソーニャの表情はもはや妖しさを通り越して恐ろじこと言つてよいほど不気味な微笑みになつていた。「そういうことよ、山矢君」

マヤはその恐怖の表情にほどんど打ちのめされていた。「じゃあ、

あたしをこの世界に呼び込んだのも……？」

「ええ、そう。あたしがその張本人」

「で、でもどうして」

「それは、あなたも薄々気づいてるはずよ。だからこそ、さつきの竜騎兵戦の時、目の前の敵をほつたらかにして、一一人のほうに攻撃をかけたんでしょう？あたし、ここから一部始終を見てたわ」

「あれは……あれは『カラス』たちが、あの黒い竜騎兵たちが、二一人に遠隔操作されてると思ったから」

「その通りよ。一一人の着てている竜騎兵服には、着てている者の思考を遠くにまで飛ばす力がある。そして遠隔操作される側の着てている服にはそれを受け取る力がある。あたしがそういう服を作つてあげたの。異呪の力でね」

「異呪？ソーニャ、あなたも異呪が使えるの？」

「ええ。あたしがあなたの住んでいた世界に飛んで行くことができるもの、あなたをこちらの世界に飛ばすことができたのも、みんな異呪のおかげ」

「バーバラ・スター・ゼンやアンドリュー・スター・ゼンやジュリオ・マルティニーをこちらの世界へ飛ばしたのも？」

「ええ。そういう異呪を封じた宝石をペンダントに付けて、プレゼントしたのはあたしよ」

「アンドリューやジュリオに女の肉体を『え』て竜に乗れるよつじたのも？」

「ええ」

「遠隔操作する時に彼らの意思が邪魔にならないよう、彼らの魂をあの世に飛ばして肉体だけで生きていけるようにしたのも？」

「ええ、そういう薬を作つて彼らに飲ませたのもあたし。もつとも、あなたにそれを飲ませたのはナターシャだけど」

「じゃあ、もしあたしがこちらの世界の飛ばされたとき、首からペンドントを外していなれば……」

「あなたは、異世界からの転送座標が狂つてアウスグント地方に墜落することなく、正確にこのドゥムホルクに転送されていた。そして魂を抜かれ、女の肉体を『えられ、二ーナの手足となつて大活躍していたでしょうね。そうなつていたらハバリアは、きっと今頃、エラーニアを滅ぼして次の国の侵略に着手していたかも、いいえ、あなたのその飛行技術がハバリア軍にあれば、もしかしたら他国をもう三つか四つは滅ぼしていたかもしれないわね」

マヤの隣でルーミアが「ひどい」とつぶやいた。マヤはルーミアの肩を抱いてなだめてあげながら「でも、でもどうしてそれがあたしやあたしたちの世界の住人でなければならなかつたの？どうしてわざわざ異世界の人間を連れてくる必要があつたの？」と尋ねた。

ソーニャは答えた。「ねえ、山矢君、あなた、こちらの世界に飛ばされて初めて竜に乗つたときのことを覚えてる？きっとあなたは何の苦労もなく、人よりもずっと上手に竜を乗りこなすことができ

たはずよ。なぜだと思う？それが、あなたたちの世界の人間がこちらの世界に飛ばされる時に得る能力だからよ」

「飛ばされる時に得る能力？」

「そう。理由はわからないんだけど、人は世界を超えるとき、いくつかの特殊な能力を得る。それは、どの世界の人間がどの世界へ飛びかによって決まっているの。あなたたちの世界の人間がこちらに飛びと、いま言つた、竜を巧みに操る能力を得る。そして、あたしやお父様が生まれた世界からこの世界へ飛んだ時は、不思議な魔力を身につけた。それが異呪」

「え？『あたしやお父様が生まれた世界』って、どういう意味？もしかして、ソーニャ、あなたやあなたのお父様は、この世界の人間でもあたしたちの世界の人間でもないの？」

「ええ、そうよ。あたしの父はね、あたしたちの世界にいた頃は考古学者だったの。父は新都地域　100年ほど前から都のおかれている地域　の出身だったけど、研究は主に、太古の遺跡や歴史的建造物の多い、旧都地域でおこなっていた。ところが二十一年前のある日、新都近くの遺跡で偶然、この世界に飛んでくることでのきる宝石を発見した。きっと、あたしがあなたに渡したペンダントと同じ力を持つた宝石だったんでしょう。そんなものを誰があたしたちの世界に持ちこんだのかは知りようもないけどね。父は宝石のことは秘密にする一方で、それが発掘された遺跡については、新都地域が歴史的にも旧都地域より優位だったことの根拠として学界に発表した。だけど父の論文は、学術的な説得力に乏しいと批判され、学界では全く相手にされなかつた。絶望した父は、故郷を捨て、まだ赤ん坊だったあたしを連れてこちらの世界へ移り住むことを決心した。そして異呪の力を利用してこの世界に自分の思い通りの「新

都」を作ろうと考へた。ドゥムホルクに政治、経済、生産、情報、文化、教育、すべての機能を集中させて、世界支配の中心地に仕立て上げるつもりだった。まだ若かつたハバリア候に取り入つてハバリア帝国をつくらせたのはそのため。民族紛争を利用してエラーニアに攻め込んだのは、その第一歩だった。

でも、父の野望はエラーニアの予想以上の抵抗により、停滞を余儀なくなれた。そんな中で『あなたたちの世界の人間がこちらの世界では竜を巧みに操れる』っていう事実を発見できたことは、一條の希望の光だった。ただ残念なことに、それは今から三年ほど前にすぎなかつた。あなたたちの世界の人たちに戦つてくれるよう頼んだり、脅して戦わせることも考えたけど、それではその人たちが裏切つてハバリアの脅威になる可能性があつた。ちょうど今の山矢君のように。だから肉体を生かしたまま魂を飛ばしてしまう薬や、思考を遠くまで飛ばす服を開発する必要があつた。それらの開発に成功したのは、一年ほど前。しかも、その服は大量生産のできない品だったから、ドゥムホルクが包囲されてしまつまでに十着ほどしか完成しなかつた。もしもつとずっと前にこれらのことを行われば、この世界はとつぐの昔にお父様のものになつていたわ

「それじゃあ、アクロバット飛行パイロットばかりをこいつらの世界に連れてきたのは……」

「ええ。どうせ連れてくるなら飛行技術に長けた人のほうがいい、つてこと。将来を嘱望されていた天才少年パイロットのあなたに目を付けたのもそのためよ」

「マヤもルーミニアも、受けた衝撃があまりにも大きかつたため、しばらく何の言葉も口から出でこなかつた。

ソーニャはそんな一人の様子を見て、またいつそう不気味に微笑んだ。「わかつた？山矢君。そういうわけだから、あたしはあなたのをやつつけなきやいけないの。あたしはあなたの敵だから。ヤグソフ四姉妹の長姉、ヤグソワ・ソーニャだから」

マヤは、ソーニャの発する恐怖のオーラに精一杯あらがいながら、応えた。「もう戦は終わったのよ。これ以上あたしたちが戦うことには何の意味があるって言うの？」

「意味ならあるわ。あなたはあたしたちの計画を台無しにした。あなたがペンドントを外さなければ、ドゥムホルクにたどり着いてさえいれば、あたしたちはこの戦に敗れることはなかつた。だから、だからあたしはあなたを倒さないと気がおさまらない」

「あたしがペンドントを外したのは單なる偶然よ。意図的にやつたことじやない。それに、もしあたしがドゥムホルクに飛ばされて二ーナの言いなりに戦つていたとしても、ハバリアが勝てたとは限らない。誰かが二ーナによる遠隔操作だつて気づいていたかもしれないし、エラーニア軍が他に何か対策を考え出来ていたかもしれない」

ソーニャの顔からついに笑みが消えた。「でも、ハバリアが一発逆転勝利できたかもしれないこのドゥムホルクの戦いで、ご丁寧に二ーナの邪魔をしてくれたのは、他ならぬあなたよ！死に行くお父様に、思い描いていた野望が瓦解するところをまざまざと見せつけてくれたのは、あなたなんだから！」

彼女は右手を前に突き出した。すると、その手のひらの上に直径五十センチほどの火の玉が発生した。何かの攻撃魔法を繰り出すつもりにちがいない。その大きさといい勢いといい、マヤが今まで見た同種の攻撃魔法に比べ、格段に強力な力を持っているのは明らか

かだった。

マヤは、竜騎兵たちが護身用に携帯することになっている防御魔法石を腰のポケットから取り出し、それを自分たちとソーニャの間の床に投げつけた。

ソーニャの放った火の玉が炸裂した。火の玉は、防御魔法石によつて作り出された魔法障壁をものとせず、マヤとルーミアを障壁ごと吹き飛ばした。

マヤとルーミアは三メートルほど離れた床に叩き付けられた。だが幸いにして、そこに柔らかい絨毯が敷かれていた。

マヤは妹に「大丈夫?」と声をかけた。ルーミアは「うん」と答えた。どうやら一人とも軽い打撲以上の怪我を負つことはなかつたようだ。

とはいって、ソーニャが次の攻撃魔法を放つのは時間の問題だつた。見ると、もうすでに手のひらの上に火の玉を乗せている。しかもそれは先ほどよりももつとずっと大きな火の玉である。マヤは、焼け石に水と知りつつも、再びポケットから同じ種類の魔法石を取り出し、それを床に投げつけようとした。

が、その時である。部屋の片隅にある、螺旋階段へと続く扉から、何か白いものが飛び出してきた。その白いものはソーニャめがけてまっすぐ突き進んでゆき、おそらく長剣と思われる細長い金属を振り回した。

ソーニャは巧みに身を翻してそれをかわすことはできたが、手のひらに生成されつつあつた火の玉を床に落としてしまつた。そのた

め、火の玉は炸裂することなくその場で消えた。

ソーニャに突進したその白いものはマヤたちのほうを振り返り、「マヤ、ルーミア！」と叫んだ。

マヤは「ジユート！」と叫び返した。もう一度と会えないと覚悟していた彼と再会できた喜びの気持ち。こんな場所に彼が現れたことを意外に思う気持ち。ソーニャに戦いを挑んだ彼の身を察する気持ち。その叫び声にはいろいろな気持ちが込められていた。

ソーニャは、またすぐに手のひらの上に火の玉を生成し始めた。ジユートも負けじと彼女に斬りつける。だが今度は、彼の剣はソーニャの体に到達する前に見えない壁のようなものにはばまれ、振り下ろすことができなかつた。ソーニャはいつの間にか、防御魔法を展開していたのだった。攻撃魔法と防御魔法を同時に使うとは、やはり彼女は並の魔道士ではなかつた。

火の玉はソーニャの手の上で膨張を始めた。ジユートはそれでも剣を振り回した。防御魔法はそんな彼の努力をあざ笑うかのように、剣を跳ね返した。火の玉はもう炸裂寸前である。マヤたちは、今度こそ絶体絶命だつた。

ところが。

火の玉は急に勢いを失い始め、やがて小さくしぶんで消えてしまつた。

マヤとルーミアとジユートは何が起こつたのか理解できず、啞然となつた。

ソーニャはその場でがっくりと膝をつくと、口に手を当て、激しく咳き込んだ。咳を一回すると、口に当たった手の指の間から床に向かつて鮮血が飛び散った。

やがて咳は収まった。だが、彼女は苦しそうに、ぜいぜいと呼吸をしたまま、その場から立ち上がろうとはしなかった。

マヤは腰から小剣を抜き、ゆっくりとソーニャのほうに歩み寄った。そして、ジユートのすぐそばに到達した時、立ち止まってソーニャの様子をじ一度、伺つた。ソーニャはやはり、苦しそうに、泣き声を漏らしながら、マヤに不思議そうな表情を見せるだけだった。

ジユートがマヤの肩を抱いた。マヤはジユートと顔を見合わせた。ソーニャがいつたいじりしてしまったのか、ジユートが知っているかと思ったからである。だがジユートのほうも、マヤに不思議そうな表情を見せるだけだった。

すると、ソーニャはまつむいたまま、「もう限界みたい」とつぶやいた。

マヤはおそれおそれ、「どうこう」と「うううう」と諷諭返した。

ソーニャは答えた。「異呪はね、術者の命を消費する魔法だったの。そのことが判明したのは半年ほど前、お父様が突然、血を吐いて倒れられた時のことよ。そのせいでお父様は異呪を満足に使えなくなつた。戦闘に耐えられるほど丈夫な龍をこの寒いハバリア地方で育てるには異呪の力が必要だったのに、それができなくなつてしまつた。それ以降、ハバリアの竜騎兵力は衰える一方だつた。山矢君も、きっとそう感じてたんじゃない? だけど、あたしはその頃、アンドリュー・スターゼン、バーバラ・スターゼン兄妹をこちらの

世界に引き込むために、彼らと親しくなるうと一生懸命だったので、こちらの世界で起こっていることを把握していなかつた。だから、じつに帰つてきて竜騎兵力を再建することができなかつた。

父はさつき死んだ。今まで使つた異呪が少しづつ生命力を蝕んでいたのね。最高級白魔道師たちも最後は匙を投げたわ。次はあたしの番」

マヤは「ソーニャ……」と声をかけるしかできなかつた。

ソーニャは尋ねた。「ねえ、山矢君。あなたが命の危険を冒してまでこの部屋にやつてきたのは、異世界への門を開くためでしょ？」

「え？ ええ」

「一つ質問させて。あなた、どうしてそこまでして異世界に帰りたいの？ あなたはこちらの世界で何不自由なく生活できるはず。確かに、こちらの世界は山矢君の世界ほど機械文明が発達していないから、不便な部分はある。でもその代わり、じつには魔法がある。白魔法のおかげで、じつちの世界の人たちはほとんどみんな天寿を全うできる。ガンなんて病気はとつぐの昔に撲滅されてる。体が不自由になつてもすぐに治してもらえる。決して住みにくい世界じゃないでしょ？」

それにあなたには、仲の良い妹さんがいる。アヴィー村に墜落したという東洋人の少女が本当は山矢君なんじやないかつていう疑念は、あたしたちも持つていないわけじやなかつた。最終的にそうでないと判断したのは、異呪を使わずに男の魂を女の魂として再生できる可能性があまりにも低かつたからだけど、それ以外にも、あなたがアヴィー村で妹さんといつしょに生活している様子がとても楽しそう

だつたからつていつのもあるのよ。ナターシャや他のスパイがしばらくあなたを監視して報告してくれてたの。異世界に飛ばされていきなり性転換された男の子なら、普通、もっとショックを受けるはずだつて。でも今は知つてる。みんな妹さんのおかげだつたでね。そんな大切な妹さんと別れることを、あなたはどうして選ぶの？

それだけじゃない。あなた、彼氏だつているんでしょ？あなたの肩を抱いているこちらの男の人、この人とはそういう関係なんですよ？どうして彼と別れてもかまわないので思つの？

マヤは、いつの間にカルーミアがすぐそばに立つていたのに気がつき、まず妹の顔を見、次に、かたわらに寄り添うジューートのにやけ顔を見上げた。それから、ソーニャのほうを向き直り、言つた。「理由は、いろいろあるよつた気もするけど、本当のところは、あたしにもよくわからない。ただ、あたし、元に戻さなきゃいけないっていう思いがずっと心の中にあるの。取り戻したい、復帰したい。そんな漠然とした思いがあるの。それが一番の理由かもしれない」

ソーニャは言つた。「できると思つて」

マヤは答えた。「わからない。でも、そうする。もう決めたの」

ソーニャはゆっくりと立ち上がつた。そして視線をルーミアとジューートのほうに一旦、やつてからマヤのほうに戻し、言つた。「あたしのこの体では異呪を使つことができるのはたぶんあと三回くらい。そのうちの一回はこの塔がもうしばらく倒壊しないよう支えるために、一回は異世界への門を開く装置を作動させるために、そしてあと一回は性転換の異呪をかけるために使つことにするわ。山矢君を男に戻してあげるためにね」

その言葉はあまりにも突然だったので、マヤは一瞬、我が耳を疑つた。「え？ 今、なんて言つたの？」

ソーニャは答えた。「異世界への門は異呪の力がないと動かないのよ。だからあたしが動かしてあげるの。あなたを異世界に帰すために。そして男にも戻してあげる。山矢君がそう望んでいるなら」

マヤはまだソーニャの言葉が信じられなかつた。「どうして……どうして急に、そんなこと……」

ソーニャは言つた。「あたしね、生まれた世界には一度も帰つたことがないの。お父様が自分はもう一度と帰らないつて決めてたから、あたしもそうしてあげようつて。でも一度だけ聞かされた話によると、山矢君の世界と似たような世界だつたみたい。それでも、あたし、何度か考えたことはあつたの。もしあたしがこちらの世界に移り住んでいなければ、あたしは元いた世界で今頃、どんな生活を送つていたんだろうつて。山矢君の高校に通つていた頃、日本の街を歩いていてあたしと同い年ぐらいの、二十代前半の女の子とすれば違うと、ああ、あたしは本当はこんな女の子になつているはずだつたのかな、なんて思うこともあつたわ。

「うまく言えないけど、あたし、今の山矢君の話を聞いて、山矢君に託してみようと思ったの。本来の自分を取り戻すつていう願望を」

「だけど、あたしがあなたのお父様の野望を破壊した元凶だつて、わざわざ言つたじゃない」

「お父様の野望がついた本当の理由は、いま言つたよつて、お父様が異呪を使えなくなつたからよ。最初から無理があつたの。異呪

の力だけで世界を征服するなんて。さつきあなたに言つたことは、
単なるハツ当たり。それはわかつてた。でもそうでもしないと気が
済まなかつたの。バカみたいね」

「ソーニャ……」

ソーニャの顔に微笑みが戻つた。「それにもうひとつ、向こうに
いた頃は山矢君、あたしがどれだけ頼んでもファーストネームで呼
んでくれなかつたのに、さつき再会してからは何度もあたしのこと
をファーストネームで呼んでくれてる。あなたを元に戻すのは、そ
のお礼」

マヤの顔も再び笑顔になつた。「わかつたわ、ソーニャ」

ソーニャは、何かの魔法をかけるために右手を振つた。まもなく
天井から、人ひとりがやつと通れるほどの幅しかない小さな階段が
降りてきた。「門を開く装置はこの上よ。来て。この塔がしばらく
倒壊しないようにする異呪はかけておくけど、こんな大きな塔だか
らあまり長くは持たないと思うわ」

マヤは「ちよつと待つて。すぐに行くから」と答えた。

ソーニャはそれを聞いて、先に小階段を登つていった。

すると、ルーミアとジユートが声をかけてきた。「良かつたわね、
お姉ちゃん」「良かつたな、マヤ」「

マヤは一人につなずき返してから、ジユートのまつを向き、ちょ
つとはにかみながら、言つた。

「今ソーニャの話、聞いてたでしょ」

ジュー^トは答えた。「ああ」

「じゃあ、あたしの正体もわかったわよね」

「ああ」

「怒った?」

「いいぜ」

「本当に?」

「ああ、だつて俺はもともと男のまつが好きだから」

「え? それって、ジュー^ト、あなた本当はホ……」

「本気にするなって」

「びっくりした。でも、そりゃね、あなたほどの女好きが、まさかね

「もうだとも」

「なに威張つてんの。あたしは皮肉を言ったのよ」

「とにかく、俺ことひひみやさま。男だと女だとか言つ以前に、おまえは俺の愛したソーニャを

ジューートはマヤの頬に手を添えた。マヤは一瞬、かたわらこいるはずのルーミアが気になつて、横目で彼女のほうを伺つた。だが、ルーミアは気を利かせて、先に小階段を登つて行くといひだつた。

一人はしづらぐの間、唇を重ねた。

唇を離したあと、マヤはジューートとともに、壁に付いている大窓を開けてバルコニーへ出た。ピムに最後の命令を言つて渡すためである。

マヤが呼ぶと、ピムはすぐに彼女のところへやつてきた。

マヤはバルコニーの欄干越しに言つた。「ピム、今までありがとうございました。もうしばらくしてあたしの存在感がこの世界から消えたり、あなたはここでルーミアを背中に乗せて、マキナスの森に帰るのよ。わかつたわね。あ、それと、この赤い装甲はもう必要ないから、アヴィー村の鍛冶屋のお爺さんにでもはずしてもらつてね」

ピムはもちろん何も答えない。しかし、マヤの耳にはピムがちゃんと承諾の返事をしたのが見えていた。

マヤはピムの鼻先に口づけをした。ピムは心なしか、照れくさうにしている。考えてみれば、ピムは人間で言えどマヤと同じくらいの歳、しかもオスなのである。

ピムはマヤのもとを飛び去つた。マヤはその後ろ姿に一度、ありがとうと言つた。

バルローーから部屋へ戻つて行こうとした時、マヤははたと気づいた。「そりいえば、ジューート、あなたどうやって地上へ戻るの？あなたは男だから竜には乗れないし、今からあの長い螺旋階段を駆け下りても倒壊してしまった前に地上にたどり着けるかどうか…」

…

ジューートは「抜かりはない。ほら、見り」と言つて、騎士装束のマントをはね上げた。

マヤはジューートが背中に背負つているものを見てびっくりした。
「パラシユート？」

「ああ、俺はわざと情報部の上司に、この塔に潜入して破壊される前にできるだけ情報を集めて来る任務に就かせてくれつて掛け合つたんだ。マヤたちの竜がこの塔に近づこうとしているのを見て、きっとマヤたちは塔で何かするつもりだって思ったからな。潜入してみると、この塔にはいろいろ珍しい物があつてな。あの螺旋階段、途中まではひとりでに動いて人を運んでくれる高速自動階段だつたんだぜ。途中で止まつたのは、たぶん下の連中の破壊活動せいだと思う。とにかく、あの自動階段がなければ、俺はとても最上階まで登つて行く気になんかならなかつたよ。それで、ここへ来るまでにちょっと塔内を物色してみたら、このパラシユートってやつを見つけてわけさ。おそらく、おまえたちの世界から呼ばれたパイロットたちの所持品だつたんだるう。」丁寧に使い方の説明図まで置いてあつた

「そりなの。でも使う時は気をつけてね

「ああ。それと、マヤに知らせておきたいことがある。俺がこの塔に登り始めた時、上からオクタヴィイともう一人、敵の竜騎兵服を着

た奴が落ちてきた。だが、たまたまそばにいた女性白魔道士が、すぐには一人に再生魔法をかけ始めてたよ。あれだけ処置が迅速なら、死ぬことはまずない。魂はじきに戻つてくるだろ。心配してたんだろ？ 彼女の」と

「ええ。 それなら助かりそうね。 安心したわ

「もう一つ、螺旋階段を登つてくる途中、体のでつかい女が一人、階段の上で伸びてた

「それって、ラウラとモーラ？」

「ああ。二人とも殴り合つて足腰立たなくなつてへばつてた。でも、俺が『ハバリア皇帝がさつき、正式に降伏文書に署名した』って話をしたら、モーラは戦つのをやめたよ。ラウラの竜と一緒にこを脱出するつて言つてた

「そう、よかつた。ラウラを信じて、本当によかつた

ジューートは不意にマヤを抱きしめた。マヤもジューートの胸にすがりついた。

マヤは言った。『ルーミアのこと、お願ひ

ジューートは応えた。『わかった。おまえが姉として彼女にしてやつたほどのことは到底、できないが、俺は俺なりのやり方で、彼女のお兄さん代わりをしてあげるつもりだ

「ありがとう

ジュー^トは更に強くマヤを抱きしめた。

「……お別れだ、マヤ。残りの時間はルーニアに譲るよ」

マヤは言った。「でも、あたしが異世界に帰つてしまつても本当にいいの?ずっと前、ザヒフで言つてたじやない。あたしを異世界には帰さないって」

ジュー^トは言った。「さつき、おまえがあのソーニヤつて女に帰りたい理由を話してくるのを聞いてしまつたからな。あんなの聞かされたら、引き止めるわけにはいかないだろ」

「うれしい。わかってくれて」

「お前のことは死ぬまで忘れない。いや、死んだって忘れるもんか」

マヤは「あたしもよ」と言つて、ジュー^トの胸に顔をうづめた。やがてジュー^トの胸は涙で濡れ始めた。

一人は最後に、もう一度キスをした。

キスを終えた途端、マヤは「さよなら」言い残し、振り返る」となく上の階へ続く小階段を駆け上がつていった。

小階段を駆け上つて行く途中、マヤは塔全体がほんの少しだがグラグラと揺れ始めているのを感じた。

上の階へ登つてみると、まず田に入つたのは、高さ一メートルほどの白い卵形の構造物だつた。それは正面の壁に半ば埋まるように備え付けられており、その根元からいまヤの立つている場所までは傾斜のゆるいスロープが伸びてきていた。

マヤは更にぐるりと辺りを見回してみた。その部屋は、一辺が五メートルほどの四角い部屋で、階下の大きな部屋同様、壁や床が全体的に白で統一されているが、窓はなく、天井全体が鈍い白色光を放つて部屋全体を照らすことで内部を明るく見せていた。

ソーニャは、橜円形の構造物の横にある操作パネルのよつな物を操作するのに余念がない。ピンク色の魔道士服をひるがえして行つたり来たりしている。一方、マヤより一足先にここに登つてきいたルーミアは、階段を上り詰めたところに立つて、やや不安げな面持ちでマヤの到来を迎えてくれた。ルーミアはやはり、ソーニャへの恐怖が拭いきれず、少し心細かつたのだろう。

マヤはルーミアに「塔が倒壊する前にピムの背中に乗つてこいを脱出してね。ピムに頼んでおいたから」と言った。

ルーミアは「わかった」と応えた。

マヤはそこで苦笑いし、「それと、ジユートがね、あなたのお兄さん代わりになつてくれるつて」と言った。

ルーニアは表情をほほえませた。「ええっ、ジコートが、お兄さん？」

「頼りなこの兄さんだな、よくしてお願いね。つてあたしが頼むのは変かな」

「ううん、そんなことない。だつて、もしあ姉ちゃんが元の世界に帰らなければ、こすれそつなるだるうつて思つてたから」

「それつて、あたしがジコートの奥さんになるつてこと? ほんとよ。あたし、まだ十七なの?」

「でも、まんざりでもなかつたでしょ」

「実を語つと、一度、ザ・H・Fの温泉宿でひきこつ意味のことばを語われたわ」

「ほら、やつぱつ」

「だけどあたし、それに對して何の返事もしていないものだつた?」

「じゃあ、もし元の世界へ帰れなかつたらどうこつ返事をするつもじ帰れないつてことになつてたら、たぶん……」

ルーニアは嬉しそうに呟いた。「ええ。それじゃあ、あたしがジ

コートのことを義理のお兄さんとして認めてあげることにする

「ありがとう。でも、あたしとしてはちょっと心配かな。ルーミアはいつも優しくていい妹だったけど、たまに厳しいこともあったから。あんまり彼のことじめないでね」

「もひ。あたしがいつも姉ちゃんに厳しくしたって言ひのよ

「あたしがザエフの野戦病院に入院してた時、あたしの媚の売り方が下手だつて言つたじゃな」

「だつて、あれば本当に下手だつたんだもん」

一人はそれからしばらくの間、楽しそうに笑い合つた。自分たちの置かれた状況のことなど忘れてしまつたかのようだ。

やがて、作業を終えたソーニャが一人のほうに歩み寄ってきた。やや表情が硬い。彼女は先ほど、異呪のかけ過ぎで血を吐いた。やはりその影響なのだろう。

「装置の準備はできたわ。次は、山矢君を男の子に戻す異呪をかけるわね」

マヤはちょっと困惑した面持ちで「今? こりで?」と尋ねた。ルーミアに男に戻った姿を見られるのが恥ずかしかつたからである。

ソーニャは言った。「ええ。と言つても、異呪が効果を現すのは五時間ぐらい先よ。他の異呪と違つて、性転換の異呪は魂に直接影響を与える魔法だから、さすがに即効つていつわけにはいかないのよ

マヤは胸をなで下ろしながら「そり」と応えた。

ソーニャは続けた。「それで、念のために訊くけど、山矢君、誰かに防護魔法とか、何かの封印をかけてもらってる、なんてことはないわよね？」

「何もかけてもらっていないけど」

「そういう魔法や封印は、異呪の効果の妨げになるから」

「ええ、大丈夫よ」

ソーニャはマヤが首にかけている鎖を指さし、言った。「そのネックレスは？」

マヤはネックレスを取り、「これはルーミアが誕生日にくれた普通のネックレス。魔力はないわ」と答えた。

「わかったわ。それじゃあ、異呪をかけるわね。ルーミア、そこを離れて」

ルーミアは言われた通り、マヤの立っている場所から数歩退いた。ソーニャはそれを確認した後、目を閉じ、両腕を大きく広げた。すると、マヤの体が青白い光のベールのようなもので包み込まれた。時間が経つにつれ、その光の色は次第に青みを増し、ベールの中にいるマヤの体を見えてくれた。

マヤは不安そうな表情で光のベールの中にじっと立っている。ルーミアはそんな姉の様子を、当事者である姉以上に不安げに見守つ

た。姉の体自体には何の変化も見られない。ただ、姉の魂に対して、無理矢理に性別を変えようとする力が働いているのはわかる。ルーミアほどの白魔道士であれば、そのようなことを見通すのはさほど困難なことではなかった。ビリヤリの異呪は、以前、山矢健太がマキナスの森に墜落した際、彼を女と思い込んだルーミアが誤って施してしまった処置、つまり男の魂を女の魂として再生し、そうすることで肉体をも女のものに再生しようとしたあの一連の処置を、意図的に行える術に違いなかった。もつとも、アグニ村のケースでは、一度、肉体が失われてそこから女性の肉体が再生されたので、マヤは完全な女性としてよみがえることとなつた。この異呪の場合、おそらく、肉体の消滅、および再生を一瞬にして、しかもリスクを伴わざ行えるのではないかと推測される。それがどのような原理に基づいているのかは、異呪の使えないルーミアには想像もつかなかつたが。

数分後、姉の体を覆つていた光のベールは消滅した。もちろん、姉の体には見かけ上、変化は全くない。

ルーミアはすぐさま姉のもとに駆け寄り、「ビリヤ・具合は」と尋ねた。

マヤは「全然平気。つていうか、手応えがなさすぎて、逆に心配だわ」

ソーニャは閉じていた目を開き、広げていた腕を下ろした後、言った。「大丈夫よ。性転換の異呪はちゃんとかかったはずから

マヤは「ありがとう、ソーニャ」と応えた。

ソーニャは首を振った。「お礼を言うのは筋違いよ、山矢君。こ

れは、あなたがあたしたちのせいで受けた被害を復旧しておるだけ、元に戻しておるだけなんだから」

「そうね。そうだったわね」マヤはちょっと微笑んでから「ところで、ソーニャ、あなたはこの後、どうするの?」この塔を脱出するならルーニアと一緒にピムの背中にに乗つて行けばいいと思つた」と言った。

ソーニャは静かに「あたしは脱出しないわ」と応えた。

マヤは驚いて「どうして?」と尋ねた。

「あたしはお父様との塔と運命をともにする

「どうして、そんな……」

「あたしの命はどうせ死へはもたない。それに脱出したといひで、あたしはこの戦^{じかた}を指揮した者の一人として、捕まり次第、処刑されるだけだもの。あなたの世界の戦争のようにわざわざ戦争犯罪人を裁判にかけてなどくれないわ」

「じゃあ、モーラやーナも……」

「ええ。でも彼女たちは生まれつきの戦士。お父様にそういうふうに育てられたから。だからそういうことも覚悟の上よ。それにね、あたし思うの。異世界に関わりのある者は、この戦^{じかた}が終わると同時にこの世界からは消滅すべきだつて。本来、この世界にあるべきでないものは、やはり消え去らなければならぬって」

マヤは向と応えてよいかわからなかつた。

ソーニャは無理に笑顔を作つて、言った。「だけどあたし、後悔はしていない。たつた二十三年の人生だつたけど、普通の人が経験できないようなことをたくさんさせてもらつたんだから。それに、元に戻れるなら戻りたいつていう願望は、ちゃんと山矢君に託したもの。だから、今は安心してあの世に行ける」

「ソーニャ……」

「お願ひね、山矢君」

不意に、ルーミアの手がマヤの手を握りしめた。マヤはルーミアのほうを振り返らずに手だけを握り返した。

マヤは妹の励ましに勇気づけられ、ソーニャに力強く
「わかったわ」

と応えた。すると、ソーニャは嬉しそうな顔でマヤにうなずいてみせた。

その時、尖塔全体がまたグラグラと揺れているのが感じられた。
マヤとルーミアはまずお互いに顔を見合わせ、次にソーニャの顔を伺つた。

ソーニャは一人に促されるように

「じゃあ、異世界への門を開くわね」

と言った。そして、その場でくるりと背を向け、橢円形の構造物の横についている操作パネルのほうへ歩いて行こうとした。

ところが足を一步踏み出した途端、彼女は急にその場に崩れ落ちるようにならずくまり、口を手で覆つて「ホンホン」と苦しそうに咳き込み始めた。

マヤはすぐに彼女のところに駆け寄り、「ソーニャ、大丈夫なの？」と尋ねた。

ソーニャは戸口戸口と立ち上がり、「大丈夫よ。でも、もう時間があまりないかもしねー」と応えてから、また操作パネルのほうに向かって歩き出した。

マヤはそれを見届けた後、ゆっくりとルーニアのほうを向き直つた。

姉妹の別れの時が近づきつつあった。マヤの心の中には、悲しさ、寂しさ、心細さ、そういうた種類の感情が渦巻いていた。

「ルーニア……」

彼女は妹の名前を呼んであげるだけで胸が一杯だった。

ルーニアは、普段と変わらない微笑み顔を姉に向け

「お別れね、お姉ちゃん」

と応えた。

「マヤはいりえきれず、涙を流した。

「ルーミア……。いろいろとありがとつ」

ルーミアはそれでも笑顔のまま応えた。「ありがとうございます」。

マヤは首にかけているネックレスを再び手に取り、言つた。「ルーミアがくれたこのネックレス、大切にするわね」

ルーミアは耳たぶにぶら下がっているイヤリングを指先でつまみながら答えた。「あたしも、お姉ちゃんがくれたこのイヤリング、お姉ちゃんだと思って一生、大事にする」

「お義父さんにようじく言つとこてね。命を救つてくれてありがとひ、お仕事がんばってください、あたしは向こうの世界に帰つてもずっとお義父さんの娘です、遠くから励ましますつて」

「わかつたわ」

「ルーミアも、これからも白魔道士の仕事、がんばってね。でもできれば、もう戦場には行かないで。やっぱりあなたに戦場は似合わない」

「うう。お姉ちゃんがそう言つない、いつも。お姉ちゃんのほうも、帰つたらまた『ひりひわ』の操縦士をやるんでしょ? がんばつてね。体に気をつけて」

「ええ」

一人はお互いの手を取り合つた。

「マヤは妹の手をぎゅっと握りしめ、

「あたし、ルーミアのこと好きだった。大好きだった。だからルーミアのことほとんどことがあっても絶対に忘れないからー。」

と言つた。

すると

ルーミアは笑顔のまま、ぽろぽろと涙を流し始めたのだった。

「あれ、おかしいな」彼女はいかにも不思議そうな顔をしてつぶやいた。「あれ、どうしてだろ？ おかしいな。あたし、お姉ちゃんを見送る時は絶対に笑顔でいようって決めてたのに。あれ？ あれ？」

マヤは驚いた。考えてみれば、マヤは妹の泣き顔を一度も見たことがない。シユラースでナターシャの薬により魂を飛ばされた自分を妹が救つてくれた時は、妹が泣いていたらしいとあとで聞かされはしたが、実際に泣いているところは見なかつた。それ以外の場面でも、どんな悲しいこと、どんなつらいことがあっても妹は決して涙を見せなかつた。そんな妹が今、自分のために涙を流している。

「ルーミアー。」

マヤはたまらなくなつて、ルーミアを胸の中に抱きしめた。

「お姉ちゃん！」ルーミアは、遂にマヤの胸にすがりついた。「あたしも、お姉ちゃんのこと、大好き！ 絶対、絶対忘れないからー。」

一人の心の中でいま一瞬、時が止まつた。その永遠の時間の中で二人は手をつなぎ、アヴィニ村を、マキナスの森を、そしてクフルツ診療院を巡り歩いている。そこには村人やクフルツ先生の笑顔がある。ピムの背に乗つて飛び立てば、すぐに彼女たちのもとにラウラとオクタヴィの乗つた竜が寄り添つてくる。そしてピムを地上に降ろすと、そこは教会堂の前。白いタキシードを着たジュートがウェディングドレス姿のマヤを抱きとめる。そしてルーミアやラウラたちやそのほか多くの人たちが祝福の拍手でそれを迎える。

しかし、それは一瞬の夢にすぎなかつた。一人はもう現実に帰らなければならぬ。

姉妹はどちらからともなくお互いの体を引き離した。

マヤは最後に

「さよなら。ありがとう」

と言つて、橢円形の構造物のほうへ走り去つた。

構造物の横で待機していたソーニャは、パネルを操作して構造物のこちら側の一面を開放した。ちょうど卵の殻の一側面をそつくり除去したような形になつた。

ソーニャは「中に入つて」と言つた。「向こうの世界に着くには半日ぐらいかかるわ。その間、山矢君は気を失つけど、大丈夫、向こうの世界ではちゃんと安全なところに到着するようになつていてるから」

マヤは構造物の中に入り込み、ルーミアのほうを向いて立つた。

見ると、ルーニアは涙を流しながらも、なんとかして笑顔を作ろうと必死になつた。マヤも涙をこらえ、最後の笑顔を妹に見てもらおうと努力した。

突然、マヤの視界は白い霧のようなもので包まれた。

数秒後、マヤは体がふわっと浮き上がったような気がした。そしてそのまま、構造物を突き抜けて、ゆっくりと上昇し始めたのだった。彼女は驚いて、自分の体がどうなつてしまつたのか確かめるために視線を下にやつた。ところがそこに自分の体はなかつた。つまり彼女は魂だけの存在になつて上へ上へと浮かび上がりつつあったのである。もしかしたら、この異世界への門は、魂だけを別の世界に転送して肉体は目的の世界で分子レベルから再構成するのかもしない。何にせよ、この異呪の原理など、今となつては知りようもなかつた。

マヤの魂は、尖塔の頂上を通り越した後もゆっくりと天高くへと登り続けた。十分ほどしてもう一度、下を見下ろすと、塔がぐらりと倒壊を始めた。その直前、塔の最上階から、ルーニアを背に乗せたピムと、ジユートのぶら下がつているパラシユートが降下してゆくのが見えた。

マヤは眼下に広がる世界に向かつて

「さよなら、異世界」

とつぶやいた。

その後、マヤの意識はだんだんと遠のいていった。そして更にその十分後、彼女は気を失つた。

*

街の上空を丸一日覆い続けた雨雲は、昼過ぎに東の空へ移動し始めた。

傘をさして街を歩いていた人々が次第に傘をたたみ始めたのを見て、本多智美はようやく、雨がやみつつあることに気づいた。彼女は手のひらを上にして右手を前へ差し出し、雨粒が手に当たらないことをじゅうぶん確認してから、傘をたたんだ。

空を見上げると、東半分はまだ厚い雲に覆われているが、西の方はもうすでに雲の切れ間から断片的に秋の青空が覗いている。このまま太陽が西に傾けば、それらの切れ間から陽も差し込むことだろう。もしかしたら、きれいな夕焼けが見られるかもしれない。智美はかつて学校で「夕焼けが見えた日の翌日は晴れになる」と教わったことを思い出しながら、濡れた路面を踏みしめ、再び歩き始めた。

彼女の向かった先は、一軒の喫茶店だった。ごく普通の喫茶店である。彼女はこの店に今までに何度も来たことがある。高校時代の友人、川名理恵が久々に集まつと言いく出る時は必ずこの店を待ち合わせ場所に指定するからである。この店は市内の某駅付近にある。

鉄道網の関係上、この駅付近でみんなが集まるのが一番都合がよく、しかも、理恵の通う大学からほど近いため、理恵自身は比較的樂にこの店に来れる。それが彼女がこの店を指定する理由なのだといふ。

智美は店のドアを開き、店内を見回した。案の定、理恵は先に来ていつもの席にたたずんでいる。ああ見えて、理恵は時間にだけはバカがつくほど正確なのである。

「お久しぶり、理恵」

理恵は智美にさう声をかけられて初めて智美の存在に気づき、読んでいた雑誌から目を上げて、応えた。

「あ、智美。おひさ」

智美は理恵の向かい側の席に腰掛け、「待った?」と尋ねた。

背の低い理恵は背の高い智美の顔を見上げるようにしながら「いまちょうど約束の時間ね?なら、あたしが待った時間は十分。あたしは待ち合わせの時はいつも、ちょうど十分前に待ち合わせ場所に来ることにしてるから」と言った。

智美は嬉しそうに「そうだったわね。ふふ、理恵、昔と全然、変わらない」と言った。

理恵は応えた。「変わったわよ。だつてもつ一十歳よ、一十歳。二十歳って言つたら、親の許可を得ないで結婚ができる歳よ。これつてもうおばさんじやない」

智美は、親の許可を得ないで結婚ができる「おばさん」である

」とがどう関係しているのか疑問に思いつつも、敢えて口にはせず、代わりに「でも、二十歳って言われても、なんか実感わかないわね」と応えた。

理恵は言った。「あんたは来年、もう就職だしね」

智美は、注文を取りにきたウェイトレスに紅茶を注文した後、応えた。「短大つてホント、あつという間に終わっちゃうのね。変化の早さに我ながらちよつと戸惑つてる感じはまする」

理恵は西洋人が呆れたときによくやるような仕草を、大げさに真似してみせた。「もつとも、もつちよつと変わってほしい人も、約一名いるけどね」

智美はその仕草がおかしかったのか、軽く笑いながら「美玖のことね」と言った。

「ええ、そうよ。あの娘には、いい加減に約束の時間を守ることを覚えさせないと」

「理恵つたら、まだ美玖の『保護者』をやつてるの」

「あんたもよ、智美。あの娘がお嫁に行くまではあたしたちがちゃんと保護してあげるつて決めたでしょ」

「そうね。そうだったわ」

「そうよ」

智美はちよつと表情を曇らせて「だけど……」と言つた。

「何よ

「あたしたち、本当に美玖を『保護』してあげることができたのかな。美玖のためにしてあげられたことを、みんなしてあげられたのかな」

理恵は眞面目な顔をして「たぶん、できたと思つ。だつて、あの後、あの娘はちゃんと部活にも顔を出すようになつたし、そのおかげで地区大会で入賞もできたんだし。それに、一浪はしたけど大学にも入れたんだし」と応えた。

「だけど……あたし、思つて。美玖が部活や受験勉強に打ち込んでいたのは、ただ田の前に突きつけられた現実から逃れたかったからじゃないから。忘れたからじゃないから」

「たとえそうだとしてもよ。あたしたちはしてあげられることをした。美玖も精一杯、立ち直りつと努力した。お互い、ベストをつくした結果よ」

「そりなのかな。でもあの娘、あれから一度も男の子とつきあつたことないでしょ。何人か告白してきた男の子がいたって話なのに」

「男なんて、できるときもあるしできないときもあるわよ。あたしなんか、自慢じゃないけど彼氏いない歴二十年なんだから」

「それはそうだけど」

理恵はそこで、先ほどまで読んでいた雑誌を、智美的ほうへ差し出した。「今、そのことと関連があるかも知れない記事をこの雑誌

で読んでいたところよ。ほら、見て

智美は理恵から差し出された逆さ向けの雑誌を受け取り、自分のほうへ向けてから、その記事に目をやった。そこには

「四年目の真実??あの『アクロバット飛行パイロット連続行方不明事件』は一体、何だつたのか・不明になつた十人はどこに・いまだ手がかりはゼロ・くすぶる某国の某略説・JFOの説を唱える識者も」

と書かれていた。

理恵は言った。「ホント、なんだつたんだろうね」

しかし智美は、喫茶店の入口のほうを横目でうかがいながら「ち、ちょっと、理恵、美玖がもうすぐここへ来るのよ。あの娘がこんな記事を見たら……」と言つた。彼女の心配症は昔のままである。

「大丈夫よ。すぐにしまえばいいだけのことじゃない」理恵はあつけらかんと応えた。「それにしても、こんな大事件の被害者のうちの一人が自分の彼氏だつたら、普通、一度と立ち直れないぐらいのショックを受けるわよねえ。やっぱり、立派に立ち直れたあの娘と、立ち直らせたあたしたち自身ををほめてあげるべきよね」

ちょうどその時、智美の注文した紅茶がウェイタレスによつて運ばれてきた。だが智美は、紅茶よりも、理恵の話よりも、美玖がもうこの店にやつて来るかもしれないことが気がかりで仕方がなかつた。

すると。

喫茶店の入口の扉が開いた。

智美はそこから誰が出入りしたのか、しなかつたのか、確認するよりも前に、ただ慌てて雑誌を閉じた。

理恵は扉のほうに目をやつた。智美も、雑誌を閉じ終わつた後でそちらを注目した。

そこには、髪を肩よりも少し長く伸ばし、いかにも今風の女子大生っぽい服を着、ほんのりと化粧をした美玖の姿があつた。

理恵と智美はいささか驚いた。美玖の雰囲気が以前に会つた時に比べ、全体的にあか抜けた感じになつていたからである。

美玖はすぐに理恵たちの存在に気づき、彼女たちの陣取るテーブルに歩み寄ってきた。

「ごめん、待つた？」

理恵は美玖のその言葉に対し、また大げさに呆れてみせた。「ええ、じゅうぶん待つたわよ。あのね、美玖、もうそろそろ時間を守ることを覚えなさい。遅れるなら遅れるで携帯に連絡ぐらい入れなさい」

智美は「まあまあ。たつた数分遅れただけなのに、そんな大げさな」となだめたが、声があまりにも小さく、理恵の耳にも美玖の耳にもほとんど届かなかつた。

美玖はからからと陽気に笑いながら「ごめん、ごめん。あと十分

遅くなるよつなら連絡しよつと思つたんだけど」と応えた。

理恵は保護者さながらに「まつたぐ、あんたつて娘は」と言つた。

美玖は智美的隣の席に腰を下ろした。ほどなくウーハイトレスが注文を取りにきた。美玖はホットカフェオーレを注文した。

智美はそんな美玖の様子をまじまじと見つめながら「ねえ、美玖、あなた、髪の毛伸ばし始めたの?」と尋ねた。本当は、化粧もしてるので、着ている服の感じも変わったわね、何かいいことでもあつたの、と訊きたかったのだが、智美にはもちろんそんなことをあからざりめに訊く勇気はない。

美玖は「うん。最近、伸ばし始めた」と答えた。

理恵はしかし、智美が訊きたかったことよりも一歩進んだことを美玖に訊いた。「男でもできた?」

理恵のこの口調に、智美は今まで何度もはらはらせられたことか。これは高校時代、いやその前の中学時代、小学生時代から何年たつても変わつていないことの一つなのである。

当の美玖はといつと、智美的そんな心配をよそに、無邪氣に明るく「うん、できた」と答えた。

わきほどの店に美玖が現れた時に理恵と智美が感じた小さな驚きは、次第に大きくなり始めていた。美玖は外見の雰囲気だけでなく、態度や振る舞いまでもが、前回に会つたときよりも明るく、はつらつとしたものになつてゐるよつに感じられたからである。

理恵はしたり顔で「やつぱりね」と言つた。

智美は率直に「それはおめでとひ」と言つた。

理恵は更に「どんな男?」と尋ねた。

「あ、また理恵お得意の『保護者モード』ね」美玖は親友におせつかいを焼いてもらえたことが嬉しくてたまらない、と言つた顔をして、答えた。「大学のサークルの学際活動で知り合つた、大の男の子。あたしと同い年で、学年も、一浪してるからあたしと同じ。一年生」

智美は独り言のよつこ「へえ、大生なんて、すうじい」とつぶやいた。

理恵は「つきあい始めて、どれくらい経つの?」と尋ねた。

「まだひと月経つか経たないかつてどい」

「そひ

美玖はいつもそう嬉しそうな顔をして「どうせまた『保護者のおたしたちにちゃんと紹介しない』とかなんとか言つつもりなんですよ」と言つた。

理恵は「わかつてるじゃない」と言つた。

美玖は「もう少し落ち着いたら、ね」と応えた。

理恵と智美の驚きはますます大きくなつた。美玖のこの態度、単

に前回に比べ明るくなつたというより、彼女が今まででもつとも幸せだった時期の明るさ、あの最高の明るさを取り戻したかのよう見える。そう、まるで山矢健太と知り合つたあの時期の明るさを取り戻したかのよう見えるのである。

その時、美玖のカバンの中から着信音が聞こえてきた。

美玖は「あ、メールだ」と言いながら、カバンの中から「ごぞごぞ」と携帯電話を取り出し、携帯の画面に映る文字を見た。その途端、彼女は今日、理恵たちと再会してから今までに見せた中でもつとも嬉しそうな笑顔で微笑んだ。

理恵は美玖の笑顔を見ていると、自分まで嬉しい気分になつてきた。「噂の彼からのメールね」

しかし美玖は「ううん。これは友達から。もちろん女のね」と答えた。

理恵は美玖のその答えにやや拍子抜けした。もし彼氏からのメールなら、その内容についてまたおせつかいを焼いてやろうと思つていたからである。だが考えてみれば、美玖が彼氏からのメールに対してだけでなく女友達からのメールに対してさえこのように明るい態度を取れるのは、現在の彼女の精神状態がよほど良好だからだとも言える。

智美が理恵のほうへ視線を移してきた。彼女も理恵と同じことを感じている、と言いたげである。

二人は思った。美玖のこの変化は彼氏ができたことに原因があるのかもしれない、ないのかもしれない。理恵はおせつかいを焼くのは

好きだが、それは詮索好きと同義語ではない。だから、美玖が態度や言葉で表した以上のことを根掘り葉掘り訊くつもりは毛頭、ない。美玖はいざれこの変化の理由を話してくれることもあるだろう。ただ、いま重要なのは理由ではなく、その結果として美玖が明るさを取り戻せたことである。美玖は山矢健太が行方不明になつて以来ずっと、表面上は普通に振る舞つていても、どこかしら寂しげな雰囲気を漂わせていた。そんな美玖の顔に、高校一年の時に見せたあの太陽のような輝きが戻ってきたのである。二人にとつては、それでじゅうぶんだつた。

「さて」美玖は返信メールを打ち終わつた後、顔を上げ、言つた。
「あたしの話はここまで。次は智美的番ね」

智美は「え？」と言つた。

「その後、彼氏とはどう？」

「うん、それなりに……」

理恵が口を挟んだ。「この間、双方の両親公認のもとで、二人きりの一泊旅行に行つてきたり。いわゆる婚前旅行つてやつ？」

智美は赤くなつて「その言い方はちょっと気が早いんじゃ……」と言つた。

美玖はウェイトレスが運んできたホットカフェオーレを受け取つた後、今度は理恵に向かつて「そういうあんたは？」と尋ねた。

理恵は「あたしは、今は学業が恋人だもん」と答えた。

智美は「司法試験つてすつ」へ難しいんじょ？」と言つた。

美玖が言つた。「がんばつて立派な悪徳弁護士になつてね」

理恵が言つた。「あたしが目指すのは検事よ。司法試験の合格者は、弁護士以外にも、検事や裁判官になることもできるのよ」

美玖が言つた。「理恵が検事ねえ」

理恵は負けじと「見てなさい。あたしが検事になつた暁には、世の悪人どもを一人残らず有罪にしてみせるんだから」と高らかに宣言した。

美玖は半ばあきれ顔で「ま、そう言われてみれば、理恵は検事に向いてないってことはないかもね。あんたのその弁舌能力と、おせっかい能力があればね」と言つた。

理恵は「そうでしょ。そうでしょ」と言つた。

智美は小声で「おせっかいはこの際、あまり関係ないと思つんだけど……」と言つた。

三人はそれから何十分もの間、昔話や現在の話や将来の話に花を咲かせた。

翌日は智美の予想通りの快晴だった。空気中を漂う汚れた成分が

雨で流されてしまったため、都会の真ん中では滅多に見ることのできない本当の青空が広がっている。できることならこの空に飛び込んで体中にその青い空気を感じ取りたい。そんな気分にさせるほど の心地よい秋空だった。

美玖は昨日、喫茶店で女友達からメールを受け取った。それは今日、その女友達と一緒に出かけることを約束する内容のメールだつた。美玖は今、その約束通り、ターミナル駅の待ち合わせスポットでその友達を待っているところだった。美玖が約束の時間前に待ち合わせ場所に現れるのは珍しいことである。実際のところ、携帯電話の普及した今となつては待ち合わせ時間を守ることにそれほど意味はない。いや、場合によつては待ち合わせそのものにあまり意味がないこともある。にもかかわらず彼女がこのように約束時間を厳守したのは、単に昨日、理恵に時間を守るよう言われたからではなく、彼女にぜひそうしたいと思わせるほどのが、今日のこの約束にあつたからである。

しばらくして女友達が現れた。今の美玖同様、どこにでもいそうな、じく普通の女子大学生だった。

一人はお決まりの挨拶を一言、二言、交わしてから、待ち合わせスポットを後にし、電車に乗り込んだ。

彼女たちは電車が駅を発つた後もとりとめのない雑談を続けた。電車の中で彼女たちに目を止めた者のはとんどは、おそらく、彼女たちのことをいわゆる「何の悩みもない」お気楽極楽な女子学生だと思ったことだろう。美玖が心の中にどんな大きな傷を持っているかなど、その外見から知るすべはないのだから無理からぬことである。

やがて、美玖は思に出したよつに「そつこねば、ねえ、」のあとだ言つてたこと、どうなつた?」と、女友達に尋ねた。

女友達は「それつて、あのことよね?」と話を返した。

「うん。あなたが両親に会つていつた話

女友達は美玖のその言葉に対し、ためらひながらいつなずいて見せただけだった。

だが、美玖にはそれだけでじゅうぶん通じていた。「やつ。よかつたわね」

女友達は微笑みながら「うん、よかつた」と答えた。

美玖は「『産むより産むが易し』ってことね」と言つた。

女友達は「相良さんの言つ通りって間違いはなかつた。ありがとうね」と言つた。

美玖は「何よ、改まつて」と、照れくさみを吹き飛ばすよつに言つた。

女友達は「でも、相良さんのおかげだつてのは、本当だもの」と言つた。

美玖は照れ隠しに、話題を変えることにした。「ねえ、古津さん

女友達は「何?」と言つた。

「――お願いがあるんだけれど」

「どんな?」

「古津さんのこと、名前じゃなくて名前で呼び捨てにしちゃダメ?」

「別にここけだる」

「でも、あたしのことも名前で呼んでほしいな」

「うふ。わかった」

「あたし、ずっと前からあなたには名前で呼び捨てにしてもらっていた
かったんだ」

「やつだつたの?」

「ねえ、呼んでみて」

「今?」

「うふ。あたしもあなたの名前を呼んであげるから」

「わかった。じゃあ、呼ぶね」

「うふ」

「美玖」

「なあに、麻弥^{まや}」

その途端、女友達？？古津麻弥は吹き出した。「なんかあたした
ちつてバカみたいじゃない？」

美玖もたまらず笑い出した。「バカまるだし」

一人のけたたましい笑い声は車両の中に響き渡つた。その様子を見ていた乗客たちは、改めて彼女たちを「今時の女子学生」だと断定した。

まもなく、電車はとある郊外の駅に到着した。二人はそこで電車を降り、バスに乗り換えた。

バスに揺られている間、無尽蔵かと思われた一人の話題もさすがに尽き、ふと会話が途切れた。古津麻弥はバスの小さな窓から、抜けるように青い秋空を見上げながら、この四年の間に自分の身に起こった数々の出来事を、もう一度、思い返してみた。

麻弥、すなわちマヤが異世界への門を通る途中に氣を失い再び目覚めた時、彼女は六畳ほどの広さの部屋に置かれたベッドの上に仰向けになっていた。彼女はまず自分の体を点検したが、男に戻った様子はなかつた。もしかしたら性転換の異呪の効果がまだ現れていないのかと思い、とりあえずその部屋の様子など調べながら、効果の現れるのを待つことにした。どうやらその部屋はワンルームマンションの一室らしかつた。更によく調べてみると、片隅に置かれたテーブルの上に、未記入の戸籍謄本、本籍地移転届、住民票、住民票移転届、とある女子高への転学届けなど数通が広げられているのが目に入った。

彼女は丸一日、その部屋で男に戻るのをじつと待つた。だが、性

転換の異呪は遂に効果を現さなかつた。その頃にはすでに、彼女は性転換の異呪が効かなかつた理由に気づき始めていた。この異呪をかける時、ソーニャは防御魔法や封印が異呪の妨げになると言つた。よく思い出してみれば、マヤはドゥムホルク攻略戦の直前、ルーミアに生理を遅らせる魔法をかけてもらつた。そのときラウラが言つていたように、ルーミアの魔力は普通の魔道士より強力である。きっとその魔法が卵胞ホルモンや黄体ホルモンといった女性特有のホルモンの分泌を促す活動を行つたことが、魂と肉体を男に戻そうとする異呪に対して防御魔法のようになつたのである。

マヤの受けた衝撃は大きかつた。彼女はもとより、元の世界に帰れたとしても、男に戻れるとは思つていなかつた。女のまま元の世界に帰つてもなんとかなると思っていた。それが、ドゥムホルクの尖塔の最上階でいきなりソーニャに男に戻してあげると言われたため、完全に元の自分を取り戻せるという過剰な期待を抱いてしまつた。そのことが却つて、男に戻れなかつた衝撃を大きく感じさせたのだった。

マヤはそれでもなんとか自分を奮い立たせ、両親のもとに帰ろうとした。だが、どうしてもその勇気が湧いてこなかつた。もし両親に自分が山矢健太だとつて信じてもらえなかつたら、彼女は国籍のない不法入国者のような存在となる。それはすなわち、彼女がこの世界で、文字通り天涯孤独、本当のひとりぼっちになつてしまつことを意味する。

しかも彼女には、自分が山矢健太であることを両親に信じてもらえる自信が全くなかった。彼女は部屋の壁についている大きな鏡に自分の姿を映し出してみた。誰がどう見ても十七歳の女の子だつた。この子は実は男だなどといい出す者は、心を病んでいると見なされかねないとも思えた。

もしここにルーミアがいたとしたら、きっとマヤのことを励ましてくれたに違いない。だが妹はもういない。マヤは妹の存在の大きさを改めて実感した。同時に、向こうの世界でいきなり女として暮らすことを余儀なくされながら精神に異常を来すこともなく生きてこれたのは、みんなルーミアのおかげだったことを思い知った。

マヤはそれから数日間、飲まず食わずでただ部屋にじっとしていた。次第に混濁してゆく意識の中で、彼女は何度かルーミアの幻を見、その度に「あたしを励ましにきて。お願ひ」と話しかけた。無論、ルーミアが現実に姿を現すことなどあろうはずもない。絶望したマヤはやがて、妹に会える最も簡単な方法は、先に天国に行つて待つことだと思つようになつた。もともと向こうの世界に飛ばされた時点で失われていたはずの命である、惜しくはないとも思えた。天国に行けばナターシャに再会できるのだからそれも悪くはない。このまま何も食べずにじっとしていれば、いずれ自分は天に召される。そうすれば……

そんなマヤを救つたのは、そのワンルームマンションの一階の住人でありオーナーでもある老婆だつた。彼女は「あなたはソーニャさんのお友達ね？ソーニャさんにはずいぶん優しくしてもらつたわ。私が心臓発作で死にかけている時に、救急車を呼んで助けてもらつたこともあるのよ。ソーニャさんはもうここには帰つてこないんでしょう？なら、せめてあなたに恩返しをさせてちょうだいね」と言つて、マヤが栄養失調から回復するまで看病してくれ、更にその後も、料理を作つて持つてきてくれたりと、いろいろ世話を焼いてくれた。後で聞いた話では、老婆は旧華族の出身で、かつては広大な不動産を所有していたのが、生活費やら税金やらで消費されて徐々に減つてゆき、今では市内にあるこのマンションだけになつてしまつたのだという。老婆はソーニャがこちらの世界の人間でないことも、

何らかの悪事を働くための拠点としてこの部屋を使っていたことも薄々感づいていたらしい。それなのに老婆がソーニャに協力するのをやめなかつたのは、もしかしたら、自分をこんな境遇に陥れた世間に対しささやかながら仕返しをしてやろう、とでも思つていたからなのかもしれない。

マヤは決心した。自分は山矢健太に戻れなかつた。もちろんマヤ・クフルツに戻ることもできない。ならば新しい人間としてやり直すしかないのではないか。驚いたことに、部屋に置かれていた戸籍、住民票、転学届けなどの書類を手に取つた途端、その氏名欄にひとりでに「古津麻弥」という文字が浮かび上がつた。もちろん氏名だけではない、空白だつたその他の欄すべてに、つじつまが合ひょうな適切な文言が自動的に浮かび上がつてきたのだった。ソーニャは言つていた。人は世界を超えるとき、特殊な能力を得ると。ソーニャやその父親は、ルーミアたちの世界に飛んだ時、異呪を手に入れた。とすれば、ソーニャがこちらの世界に飛んだ時には、何か別の能力を手に入れたはず。このようにして書類にひとりでに文字が浮かび上がつたのは、たぶんこれがソーニャの得た「偽造能力」によつて作られた文書だからなのだろう。そしておそらく、ソーニャが山矢健太の高校に帰国子女として入学できたのも、この偽造文書のおかげだったのだろう。

一旦、新しい人間としてやり直すことを決心すると、マヤは気持ちが軽くなつたような気がした。「自分は山矢健太だ、なのに実の両親にさえそのことをわかつてもらえず、理不尽に孤独な立場に置かれる」と考えるのはつらいことである。だが「自分は天涯孤独の古津麻弥という女の子、ずっと一人で生きてきた、だから全然、寂しくない」と思い込めば、不思議とつらいと感じずに済んだ。

マヤは、まず近所の市役所に戸籍、住民票移転届などを提出した。

彼女はなぜか某県の山間部の町から移転したことになっていたが、市役所の職員が町役場に転籍確認をとっても、全く怪しまれることはなかつた。

次に彼女は転学届ほか必要書類を転入先となつてゐる女子高に提出した。時期的にも、ちょうど三月になつたばかりで、転入するはもつてこいのタイミングだつた。但し、一年半異世界にいて学力が不足していることを自覚していただため、本来の学年より一年下に転入させてもらうことにした。もちろん、書類がそろつてゐるからと言つて、それだけで転入させてもらえるわけではない。彼女が未成年である限り、後見人が必要だつたし、学費などの経済的裏付けも必要だつた。後見人のほうはマンションのオーナーが快く引き受けてくれた、というよりオーナー自身が、学校など行かずに働くと言い張るマヤに入学を勧めた張本人だつた。その際、オーナーが旧華族の出身であることが学校側の信頼を得る上で大きな役割を果たした。経済的な面に関しては、もちろんアルバイトも始めたが、ソーニヤがこちらの世界で活動するために用意したと思われる銀行預金が、かなりの額、残つていたため、それでまかなく部分のほうが大きかつた。合法的な手段で得られたお金だとは思えなかつたが、マヤにはそれを使わせてもらう以外、ほかに手だてがなかつた。

マヤは四月から女子高の一年生、古津麻弥としての生活を始めた。意外なことに、友達はすぐにできた。彼女は男っぽい、不思議な魅力を持つた女の子として、クラスのみんなから注目を集めの存在となつたからである。女の生活を異世界で一年ほど経験したぐらいでは、それ以前に身につけていた仕草や振る舞いの男っぽさはそう簡単に消えるものではない。それに、彼女は日本語の女言葉をしゃべり慣れていないため、どうしても口ごもつてしまふ。そういう中性的でクールな感じが、女子校の生徒たちの目には魅力的に映つたのである。更に、彼女がワンルームマンションで一人暮らしをしてい

ることが知れると、彼女の友人たちは、毎日のように彼女の部屋に集まってきた。たまにその部屋で無断外泊をする生徒もいたため学校側に問題視されてしまうこともあったが、麻弥自身は、そうやっていつもいつも友人に囲まれていることで過去の自分を思い出す暇もないことを、ありがたいと思った。

とは言え、何度も述べたように、マヤはアヴィー村でルーニアについて「再生」された時、魂のレベルで女性化された。そのため、毎日、女子高生の友達に囲まれて平凡な女子高生としての生活を送っているうちに、少しずつ女っぽい言葉遣いや仕草が身に付いてしまった。また、彼女自身も自分がそうやって変化してゆくことを特に拒もうともしなかった。二年後、高校を卒業する頃には、彼女はごく普通の女子高生と化していた。少なくとも、表面的にはそのように見えた。友人たちの中には彼女のそういう変化を残念がる者も少しあったが、大部分の者は自然の成り行きと受け止めた。

卒業後、彼女は近郊の私立女子大に入学した。もちろん選学生としてである。その頃にはソーニャの置いて行つたお金も残りが少なくなり、またいろいろ面倒を見てくれていたマンションのオーナーも高齢のため健康を害し、入院しがちだつたからである。

オーナーの老婆は間もなく死んだ。麻弥は今度こそ身寄りがなくなってしまった。だが、今や彼女の周りにはたくさんの友人がいた。彼女はもう寂しいと思うことはなかつた。学業にアルバイト、そしてその合間を縫つて大学の福祉サークルの活動にまで精を出し、彼女は日々、女子大生として充実した生活を送つていた。山矢健太としての記憶も、マヤ・クフルツとしての記憶も次第に薄れ始めた。彼女はこのまま古津麻弥という女性として一生を終えることに対し、何の疑問も持たなくなつていた。

しかし、運命の女神は、麻弥をもてあそぶのがよほど楽しいのか、彼女に更なる試練を与えたもうた。

福祉サークルの活動の一環として、麻弥はひと月前のある日、都心の一流ホテルで開かれる福祉関係の団体の会合に出席することになつた。会場がホテルである以上、それなりの格好をしてゆく必要があつたので、彼女は一張羅を着込んだうえ、滅多に使わないためタンスの奥にしまい込んであつたアクセサリーを引っ張り出してきて身に付けた後、いそいそと会場へ向かつた。会場となつているホテルの入口の扉を開いた時、向こうから扉を開けようとした人物と鉢合わせするかつこうになつた。その人物が、なんと美玖だったのである。美玖はよその大学の福祉サークルのメンバーとしてたまたま同じホテルに来ていたのだった。

麻弥の意識はそこで、過去の回想シーンから、バスの窓の向こうに見える青空へと引き戻された。バスのアナウンスが彼女が降車すべき停留所の名前を告げたからである。

麻弥と美玖が降り立つた場所は、小さな飛行場の前だつた。もつぱら個人および小企業の所有するプロペラ機やヘリコプターが離着陸するためのこの施設は、アクロバット飛行パイロットだった山矢健太が四年前まで毎日のように通いつめた場所である。

二人はしかし、飛行場の表玄関には足を踏み入れなかつた。美玖は麻弥の手を取つて彼女を滑走路の端つこのほうへと導いた。更にそこからぐるつと回つて滑走路の向こう側に出ると、そこはだだつ広い原っぱだつた。川と滑走路の間にあとのスペースは、飛行場への離着陸コースから外れているため、上空でアクロバット飛行をするのには最適の場所なのである。

美玖は原っぱの上に腰を下ろし、空を見上げながら、言った。「ねえ、麻弥、覚えてる？四年前にも、ちょうど今みたいに、真っ青な秋空の広がる日があつたよね？」

麻弥も美玖の横に座り込み、天を仰いだ。「うん、よく覚えてる。確か、相良さ……美玖が友達をつれて、あたしのアクロバット飛行の練習を見に来た日だよね？」

「そう。今だから言つたけど、あたし、あの時、山矢君にお弁当を渡そうとしてたんだよ」

「え？ あたしに？ 全然、知らなかつた」

「渡そうとした直前にハ木沢さんに割り込まれちゃつて」

「そうだったんだ」

「そのあと、山矢君とハ木沢さんの関係を勝手にあれこれ想像して落ち込んだり、理恵や智美に励まされたり、なんてこともあつたんだよ。青春の一ページって感じだよね。あたしも若かつたんだね」

「その言い方、なんかすこく年寄りくさい」

「年寄りだよ。もう二十歳だもん」

二人は顔を見合わせ、意味もなく微笑み合つた。

麻弥は視線を青空のほうへ戻し、言った。「ねえ、前から訊こうと思つてたんだけど」

美玖は両手を背後の地面につき、体重を後方に預けながら「何？」と言った。

麻弥は続けた。「ひと月前、ホテルのホールであたしたちが再会したとき、美玖はどうしてあたしが山矢健太だつてすぐにわかつたの？」

美玖は嬉しそうな顔をして、答えた。「一目瞭然だよ。だつて麻弥の仕草、山矢君だつた頃と全然、変わつてなかつたもん」

「え？ ほんと？」

「それに顔立ちにだつて山矢君の面影があつたし」

「そりなの？」

「そりだよ。確かに仕草も容姿も全体的には女っぽくなつてた。でも、部分的には昔と変わつていないとこもたくさんあつた。それにあたし、山矢君と同じクラスだつた時、授業中も休み時間もずっと山矢君のこと見てた。山矢君の一拳手一投足を目に焼き付けようとしてたんだよ。だから、あたしには自信があつたんだ。ただ山矢君に似てるだけの人と、山矢君本人を見分ける自信がね」

「そう、そういうことだつたんだ。あたし、美玖の前で、山矢健太しか知らないようなことを間違つてしゃべつちゃつたのかなつて、ちよつと反省したりとか、もしかしたらいままでにも他の人の前で言つちやいけないことを言つちゃつたことがあるのかなつて、不安になつたりもしてたんだ。それを聞いて安心した」

「麻弥はそんなに口の軽い娘じやないでしょ。まあ、高校一年の頃

の山矢君みたいに『口が重い』ってわけでもないけど」

麻弥は「だけど、あのあと美玖にひとけのない」と「ひりこ」呼び出されて『やつぱり山矢君はUFOに拉致されてたのね。そして性転換実験の被験者にされた挙げ句に放り出されたのね』って言われた時は、びっくりした」と言つて、おかしさをこらえるようにくすぐす笑つた。

美玖は口を尖らせて「何がそんなにおかしいのよ。麻弥は異世界に拉致されてたんでしょう。当たらずとも言へども遠からずじやない」と言つた。

「『めん、『めん。確かにそうだよね』

「あたしは大真面目だつたんだからね。そのうち警察に通報しようか、NASAに真相の解明を要求しようかって思つてた。もし麻弥が本当のことを打ち明けてくれなかつたら、もう実行に移すところだつたんだよ」

「美玖つたら、あたしのあとをつけて家の場所を探り出して、毎日、マンションの前で待ち伏せしてるんだもん。最後には根負けしたわよ。そんなにあたしの正体を暴きたかったの？」

「暴きたかつたつていうより」美玖は目を伏せ、言つた。「『山矢君』に会わせてほしかつたから。『古津麻弥』とじやなくて、もう一度と会えないかもしれないって覚悟していた彼と、山矢君ともう一度、話ができるなら、してみたいくて思つたから」

「やつだつたんだ……」

麻弥が美玖のこんな表情を見たのは、高校生時代を含めても初めてのことだった。

だが、美玖はすぐに目を上げ、またいつも表情に戻った。「ねえ、異世界のことは、やっぱり公表するつもりはないの？」

「うん。したって誰も信じてくれないだろうし、信じてもらおうと思つても何の証拠もないし。まあ、あたし以外の九人の行方不明パイロットの家族の人たちに氣の毒だとは思うけど。異世界に引き込まれて魂を抜かれたつてことを知らされない限り、無事の帰還を信じていつまでも待ち続けるんでしょうね」

「じゃあ、異世界のことを知つてるのは、麻弥とあたしだけってことね」

「それとあたしの両親」

「ああ、そうか。打ち明けたって、さつき電車の中で言つたよね」

「美玖に『『』両親なら絶対にわかつてくれるから』って勧められた時には、正直、不安で一杯だつたんだけど、家を訪ねてみたら、一眼見てすぐに気づいてくれた。いま美玖が言つたみたいに、やっぱり仕草とか顔立ちに昔の面影があるんでしょうね」

「それで、麻弥は『これからどうするの？』両親のもとに帰る？」

「ううん。山矢家にある日突然、女の子が住み着いたら、近所の人間に変に思われるかもしれないからね。あたしは今まで通り、古津麻弥として暮らすことにする。それで、もし戸籍とかが偽造だつてばれそうになつたら、その時には『健太は実は女性半陰陽だった』と

でも近所の人に説明して、山矢家に帰るわ」

「やつ」

今、二人の間を涼やかな秋風が吹き抜けていった。心地よい風だつた。

ふと滑走路のほうに田をやると、オレンジ色とクリーム色のツートーンカラーのプロペラ機がちょうど離陸しようとしているところだつた。

麻弥はプロペラ機が滑走路を飛び立つていったのを見届けた後、再び口を開いた。「本当にうとね、このひと田の間、すつごくつらかつたんだ」

美玖は意外そうに「え? どうして?」と言つた。

「あたし、一年半前にこっちの世界に帰つてきてからずっと、自分は古津麻弥だつて思い込むことで、苦しさから逃れようとしてきた。男に戻れなかつた苦しさとか、両親に自分のことをわかつてもらえないかもしれない苦しさとかからね。実際、昔のことは思い出さないようにもしてきたし、頭に浮かんできそうになつてもすぐに沈めてしまえるようになつてた。そのおかげで大学生としてそれなりに充実した日々が送ることもできた。

なのに、そこへ美玖が現れた。そんなバカなつて思つた。たくさんの人間が住むこの街で、どうしてあたしと美玖が同じ時に同じ場所にいなきやいけないの、そんな偶然あり?つて思つた。あたし、運命の女神様によほど嫌われてるのかなつて思つたりもした。今から考えたらとんでもない話だつて思うけど、あたし、美玖のことを

逆恨みしてた時期もあつたんだ。あなたさえ現れなければ、あたしの平穏な大学生活がかき乱されることもなかつたのにって

「知らなかつた」

「あ、でも、今は違うよ。むしろ感謝してる。美玖があたしの殻を破つてくれたつて。あたしがこの一年半の間、ずっとまとい続けた偽りの殻を破つてくれたんだってね」

「偽りの殻?」

「うん。あたし、このひと月の間に、ずっと封印していた異世界での記憶をもう一度、呼び起こしてみたんだ。いま思い返してみると、あたし、あの頃、異世界から帰つてくれれば、ただ帰つて来さえすれば、それだけで元に戻れるような気がしてた。元の自分を取り戻せるような気がしてた。でもね、考えてみたら、最初から元に戻れるはずなんてなかつたんだ」

「どういふこと?」

「あたしが異世界で過ごした一年半の間にだつて、異世界は少しずつ変化していたし、こっちの世界だつて変化してた。街にだつて、あたしの知らない店ができたり、あたしの知らない音楽が流れたりもしてた。あたし自身だつて成長した。女になつたばかりのころAカップだつた胸も、こっちに戻つてくる頃には寄せて上げればBカップのブラが付けられなくもないぐらいにはなつてたしね」

麻弥はそう言つてきょとおどけたように微笑んでみせた。

美玖は相づち代わりに「ははは」と軽く笑つた。

麻弥は続けた。「うまく言えないけど、人は立ち止まることができない存在なんだって、立ち止まっちゃいけない存在なんだって思つたんだ。もちろん、いつまでも変わらない良い物だつてあるし、そういうものを守つていかなきやいけないのも確かだけど、でもそれは、立ち止まれないからこそ守る必要がある、前に進むためにこそ守るのであって、立ち止まるために守るんじゃない」

「うん」

「あたし間違つてた。」うちの世界に帰ることで、元の自分に戻ろうとした。それができないってわかつたらすべてをゼロにしてやり直そうとした。テレビゲームでもプレイしてゐつもりだつたのかもね。うまくいかないなら、セーブポイントまで戻るか、最初からプレイを始めるかすればそれでいいんだ、ってね。でも、現実はそうじゃない。いつも『今、この場所』が出発点なんだよね。昨日まで積み重ねてきたもの之上にあるスタート地点から明日に向かって飛び立つ。あたしたちにはそれしかできないんだよね」

「そうだね」

「あたし決めたんだ。もう一度、操縦桿を握ろつ、もう一度、アクロバット飛行パイロットを目指すうつて」

「ほんと?」

「うん。それが、あたしにとつての『今』のスタートだから」

「そつか」

「今日、美玖を誘つたのはそれが言いたかったら。美玖には真っ先に報告しなきやつて思つてね」

「じゃあ、また山矢君のあの華麗なアクロバット飛行が見られるんだね。がんばつてね」

「うん、ありがとう」

「練習の時には、またお弁当作つて持つてくれ。あ、でも、麻弥はずつと一人暮らししだつたから、あたしなんかよりずっとお料理が上手だよね。それなら持つてゆく必要ないか」

「ううん、あたし、料理はそんなに上手じやないよ。それに美玖のお弁当、食べてみたいから。ぜひ持つてきて」

「わかった。じゃあ、練習の時だけじゃなく競技会の時にも持つてくれ」

「競技会にいつ出られるかわからないけど、その時はお願ひ」

「でも、また八木沢さんみたいな人と麻弥を取り合つことになつたらどうしよう……つて、あ、そつか。麻弥は今、女の子だった」

「わからないわよ。もしかしたら、女のあたしにそういうことを想う娘が現れるかもしれない。つていうか、女子高に通つてた頃、実際にいたような気もするけど」

「それじゃあ、その娘がまた麻弥に怪しげなペンドントを渡すかもしないね」

「あたし、また異世界に飛ばされちゃうの？よしよしよ

「大丈夫、今度はもづちゅうと早く『ペンドントをはずして』って祈つてあげるから」

「え？」

麻弥は美玖のその言葉を聞いて驚きを禁じ得なかつた。山矢健太が異世界に引き込まれそうになつた時、彼は複葉機の操縦席で確かに「ペンドントをはずして」という声を聞いた。その声に命じられるままペンドントをはずしたおかげで、山矢はドゥムホルクではなくマキナスの森に落ち、その結果、こつして命を長らえている。あの声、命をつなぎ止めてくれたあの声は美玖の声だつたのか？まさか。

美玖は麻弥が急に口ごもつたことを不審に思い、「どうしたの？」と尋ねた。

麻弥は「ううん、何でもない」とだけ応えた。あの声が本当に美玖の声だつたのかどうかを詮索しても意味はないし、また証明のしようもないと思つたからである。ただ、麻弥は実際、異世界に飛ばされたり、そこで魔法を操る者たちと出会つたりした。こちらの世界でそんな魔法じみたことが起きたとしても不思議はないだろう。だとすれば、麻弥と美玖が偶然、再会できたのも、実は、山矢に会いたいという美玖の強い想いのなせる技だつたのかもしれない。あるいは……

ふと麻弥の頭にルーミアの笑顔が浮かんできた。ドゥムホルクでの別れ際、「ルーミアのことは絶対に忘れない」と約束したにもかかわらず、麻弥は忘れないどころか、この一年半の間、忘れようと

努力さえした。麻弥と美玖をひき会わせたのは、あるいはもしかしたら、ルーミアの想いだつたのかもしれない。姉が偽りの殻に閉じこもつてゐるのを感じ取り、叱咤激励するために美玖と会わせようとしたのかもしれない。それを証拠に、麻弥は美玖とホテルで再会した日の朝、正装すべく、タンスの奥にしまい込んであつたアクセサリーを身に付けたが、後でよく考えてみると、そのとき首にかけたネックレスが、実は、異世界にいたころルーミアがプレゼントしてくれた、あのネックレスだつたのである。こちらの世界に帰つてきながら一度も付けたことのなかつたそのネックレスを初めて身に付けたまさにその日に美玖と再会するなど、単なる偶然だと言われてもにわかには納得しがたい。きっと、そのネックレスがルーミアの想いをこちらの世界に届けてくれたに違いない。そんなふうに思えてならない。

？？あたしは最低の姉だ？？麻弥は、今日も首にかけてきたそのネックレスを握りしめ、心の中でつぶやいた？？ルーミアはこんなあたしを許してくれるだろうか？許してくれなかつたとしてもしかたがない。でも今のあたしにできる罪滅ぼしといえば、ルーミアも望んでいたように飛行機の操縦桿を再び握ること、それと、ルーミアを一度と忘れないようにすることだけだ。ごめんね、ルーミア。遠く離ればなれになつていても、やっぱりあなたはあたしの大切な妹？？

彼女はその時、もう一つ、別のことと思い出した。異世界から帰る直前、マヤはソーニャに「元の自分を取り戻す」という願望を託された。しかし、麻弥は現在、その願望を現実のものにしてあげたと言えるのだろうか。

？？たぶん、取り戻したとは言えない。だけあたしは今、単に以前の自分を取り戻すのではなく、それ以上のことをしてみせよう

としている。美玖や両親にとつては少年パイロット、友人たちにとつては女子大生のあたしが、これから女性パイロットという新たな古津麻弥に変わってゆこうとしている。こんなあたしの想いを、きっと天国のソーラヤもわかつてくれるはず??

不意に美玖が立ち上がった。西のほうから、先ほど飛び立つたプロペラ機が飛んでくるのを見て、きっとアクロバットを始めるのだろうと予想し、立つことで視界を広げようと思つたのである。

麻弥も彼女につられて立ち上がった。

予想通り、プロペラ機は空中で複雑な模様を描き始めた。以前の山矢の操縦ほどではなかつたが、それでも、見るものの目を釘付けにするほどのはばらうしい操縦テクニックを披露してくれた。

しばらくそれを見つめていた麻弥が、ふと口を開いた。「そういうえば、美玖に伝言があつたんだ」

美玖はプロペラ機から目を離すことなく応えた。「誰から?」

「四年前の山矢健太から」

「どんな?」

「『俺は美玖のことが好き』つていつの」

「そり」

「うん」

「実はあたしも、 麻弥に伝言があるんだ」

「誰かいる？」

「四年前のあたしかり」

「どんな？」

「『あたしも山矢君のことが好き』」

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1505p/>

紅の装甲竜騎兵

2010年11月26日14時16分発行